
許されない罪、救われる心

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

許されない罪、救われる心

【Nコード】

N8322N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

部活で先輩からいじめを受けている城崎如月達は今度は自分達が転校生椎葉神無をいじめようになる。だがそれを邪悪な糾弾者岩清水健也に見つかり地獄の糾弾を受けていく。その地獄の闇の果てにあるものは。いじめをテーマにした作品です。作中かなり酷い場面が多々あります。

第一話 辛い気持ちその一

許されない罪、救われる

心

第一話 辛い気持ち

薄くやや上にあがった眉に黒い髪を前を下げたボブにしている。白い肌やや切れ長気味の丸く見える目をしている。制服は白いセーラーにえんじ色のリボンである。赤いストライプのスカートでブラウスはピンクだ。背は一六〇程だ。

城崎如月は今学校廊下を俯いて歩いてきた。その彼女に眼鏡に口グヘアの女の子が声をかけてきた。青いブラウスに白いベストである。リボンは青である。

「また先輩に？」

「うん」

その眼鏡の少女今村弥生に悲しい顔で頷く。

「そうなの」

「あの先輩もきついのね」

「とても厳しいっていつか」

如月はその俯いた顔で答える。

「いじめられてるから」

「折角ラクロス部に入ったのに」

「あんな人いるなんて思わなかったから」

「そうよね。私も話は聞いてるわ」

弥生も暗い顔で頷く。

「山崎先輩よね、三年よ」

「ええ、山崎水無先輩」

如月はその先輩の名前も言った。

「その人」

「物凄く怖い人って」

「何かあると凄く怒るの」
「そういう人だというのだ。」
「それでとんでもないトレーニング言ったり雑用とかやらせたり」
「今日もだったの？」
「今日は言われたの」
「そうだったというのである。」
「死ねとかもう辞めるとか。それで」
「それで？まだ何かあったの？」
「一人で部屋掃除させられて。大変だったの」
「そういうことがあったの」
「あんな先輩いるなんて思わなかったから」
「また言う如月だった。」
「そんなこと」
「そうね。けれどもう少しよね」
「弥生はここで如月を励ましてきた。」
「だって。部活はもう三年生引退するじゃない」
「そうなの。もうすぐだから」
「頑張つてね。それで」
「それで？」
「何かあったら私にすぐに言って」
「こう言って励ますのだった。」
「そうして」
「有り難う」
「御礼はいいわよ。それよりもね」
「ええ」
「もう帰りましょう」
「今度はこう如月に話すのだった。もう校舎の中もすっかり暗くなつてしまっている。その中で彼女に対してこう言ったのである。」
「いても仕方ないしね」
「そうね。それじゃあ」

「帰り何処かに寄る？」

今度はこんなことを尋ねた。

「それで何処がいいの？」

「本屋さん行かない」

如月は弥生の励ましの言葉にその気を幾分かよくさせた。それで少しだけ微笑んで、であった。彼女に対してこう返したのだった。

「本屋さん」

「何か買いたい本あるの？」

「あつ、本屋さんっていつでもね」

「ええ」

「ブックオフよ」

そこだというのである。青と黄色のイメージカラーがすぐに目につく古本屋のチェーン店だ。色々な街にあり様々な本が置かれている。

「そこでどう？」

「ブックオフね」

「そう、そこに行かない？」

また言うのだった。

第一話 辛い気持ちその二

「これから」

「そうね。それだったら」

「そこにしよう」

その少しだけ取り戻した微笑みでの言葉だった。

「行くのならね」

「わかったわ。それじゃあね」

こうしてだった。二人は今はブックオフで本を探して買って気持ちを紛らわせた。そして次の日にはだった。如月は教室の端で眼鏡をかけて黒い髪を前だけ伸ばした背の高いすらりとした男子学生と弥生を交えて話をしていた。彼は白いブラウスに黒いズボン、それにえんじ色のストライプのネクタイである。

「あの先輩だよね」

「ええ、山崎先輩」

如月はその先輩のことを彼、室生葉月にも話した。

「知ってる？」

「聞いたことあるよ。結構有名な人みたいだね」

「そうだったの」

「うん、三年生の先輩から聞いたんだ」

葉月はこう話す。三人は今教室の端の方に立って話をしている。

「ラクロス部だね。一年の時はいじめられていてね」

「それで今は」

「そう、後輩に対してそうしているらしいね」

「よくある話よね」

ここで弥生が少し俯いて苦い顔をして述べた。

「そういう話って」

「そうだね。いじめられっ子がいじめっ子になるってね」

それは葉月も言った。

「よくあることだよね」

「そうなの」

「自分がいじめられていたから自分も誰かをいじめる」

葉月は今度は如月に対して言う。

「そういうのってあるよ」

「そうなのかしら」

「如月はそんなこと絶対しないでね」

弥生は心配する顔になって如月に告げてきた。

「そんなことは」

「ええ」

如月は弥生のその言葉にこくりと頷いた。そのうえで言うのだった。

「わかったわ。っていうか絶対にしたくない」

「そう言えるのね」

「だって。いじめられるのって辛いから」

だからだというのだ。

「それは絶対にしない」

「そうだよ、そんなことしたら駄目だよ」

それは葉月も言う。

「絶対にね」

「うん」

「いじめられる辛さわかってるよね」

葉月はこくりと頷いた如月に対してさらに言った。

「そうだよね」

「わかってるつもり」

如月の声は今は弱々しいものになっていた。

「それは皆同じだと思う」

「そうよね。うちのクラスってラクロス部のメンバー多いし」

「四人だからね」

「皆先輩に目をつけられてるから」

三年のその先輩にだというのだ。

「だから」

「なら。わかるね」

「それは絶対にしたらいけないわよ」

「絶対にしないわ」

如月は二人の言葉にも頷いた。葉月の言葉に対してだけでなく。暗くなってしまうているがそれでも確かに頷いてみせたのである。

「私も」

「そうよ。それでだけれど」

弥生はここで話を変えてきた。

「今度転校生が来るらしいわね」

「ああ、そうらしいね」

葉月は弥生のその言葉に対して応えた。

「うちのクラスにだったよね」

「そうよ。何か女の子らしいけれど」

「ふうん、そうなんだ」

「凄い優等生なんだって」

弥生は人から聞いたその話を如月と葉月に話した。

第一話 辛い気持ちその三

「何でもね。転学のテストあるじゃない」
「ええ」

弥生の今の言葉には如月が頷いた。

「あれ殆ど満点だったらしいわよ」

「それはまた凄いね」

葉月はそれを聞いて素直に驚きの言葉をあげた。

「殆どなんだ」

「一学期の期末テストも兼ねてたけれど」

「それが満点だったんだ」

「そう、殆どね」

こう葉月だけでなく如月にも話す。

「二学期からうちの学校に来るらしいけれど」

「じゃあ暫く先なのね」

如月はそれを聞いて静かに述べた。

「そうなるのね」

「そうね。成績以外はどんな娘かわからないけれど」

弥生もそこまでは知らなかった。どんな娘までかはだ。

「ただ。頭はいいらしいよ」

「成程ね。仲良くできたらいいね」

「そうね」

如月は今度は葉月の言葉に頷いた。

「本当に」

「お兄さんがいるそうだし」

弥生がここでまた話す。このことも聞いていたようである。

「どんな人かしらね」

「それは来てからのお楽しみだね」

最後に葉月が言った。こんな話をしていた。

そして次の休み時間にはだ。如月はそのラクロス部の仲間達と話をしていた。場所は変わらず自分の教室の中だ。そこで教室の真ん中の席に集まって話をしていた。

「それで山崎先輩だけれどな」

「もうすぐ引退よね」

背の高い黒いショートヘアの女の子が黒く長い髪を後ろで束ねた少し吊り目のアーモンドに似た形の目の女の子の言葉に応えていた。ショートヘアの女の子はすらりとした身体で足も長い。長い髪の女の子も同じだが背は相手よりも何センチか低い。

服は二人共えんじのストライプのスカートでありどちらもブラウスはピンクだ。そしてリボンもどちらもピンクだ。しかしショート女の子はカーディガンを腰に巻いていてそれは黒である。長い髪の女の子は肩にかけている。色は白だ。そこがそれぞれ異なっていた。

その二人がだ。今話していた。

「やっと」

「うちも随分やられたしな」

「私もよ」

二人はこのことをそれぞれ言い合った。

「本当にね」

「だよなあ。何かっていったら秋山って呼んでな」

「そうそう、神崎！ってね」

二人の名は髪の長い方は秋山長月、短い方は神崎霜月という。どちらもラクロス部に所属していてそうしてその先輩にいじめられてきているのだ。

「雑用ばっか押し付けてな」

「お昼もパシリとかやらされて」

「やってやれねえよ」

「全く」

「そうそう」

今度は茶色に染めた髪を肩まで伸ばした胸の大きい女の子が頷いた。顔は少しふつくらとしていて垂れ目である。そして白いカーデイガンを着ている。やはりブラウスはピンクでありリボンは一色のピンクだった。名前を夕月文月という。この四人と如月がラクロス部である。

「あんな意地悪い人いないわよね」

「いないわよ」

霜月がむっとした顔で言う。

「あんな人って」

「そうよね。ラクロスは好きだけれど」

文月はそれは言った。

「けれど。あの人はね」

「早く引退して欲しいよなあ」

長月はそれを言うのだった。

「全くな」

「そうよね」

ここで如月も言った。四人共自分の椅子を持って来てそのうえで座って話している。

「あんな人は本当に」

「もう少しだけれどね」

文月はここでこう言った。

第一話 辛い気持ちその四

「いなくなるのは」

「そうね。それはね」

霜月も文月のその言葉に頷いた。

「やっとな。いなくなるのよね」

「もう少しだな。まあ先輩でよかったんじゃない？」

長月はここでこう言うのだった。

「だってよ。顧問とかだったらな」

「ずっといる」

「だからなのね」

「ああ、だからまだ先輩でよかったと思うよ、うち」

霜月と文月にもこう話す。

「それだけはな」

「顧問も酷いのいるらしいからね」

如月はここでこんなことを話した。

「ほら、斉宮が言ってたじゃない」

「ああ、八条高校に行った」

「あいつね」

「あいつがどうかしたのかよ」

実は四人は中学も同じだ。ここで中学時代の男友達から聞いた話が出たのだ。

「あいつが言ってたじゃない。体育の平谷は酷いって」

「っていうかあいつそのままやくざでしょ」

「ねえ」

文月と霜月が如月のその言葉に突っ込みを入れる。

「どう見てもね」

「実際に暴力沙汰で学校追い出されたじゃない」

「そのあいつの話してたから」

だから話すと。如月は言うのだった。

「それでなんだけれど」

「あいつは確かに有り得なかったよな」

このことは長月も話す。

「普通の社会なら懲戒免職じゃね？」

「そうよね。教師が生徒いじめてどうするのって話よね」

「全くね」

文月と霜月は長月の言葉にも頷く。

「いじめて何でするんだろうね」

「いじめてる方って楽しいのかな」

「どうなんだろうね、全然わからないわよね」

「そうよね」

二人はそのことはまだわからなかった。何一つとして。

そしてだ。二人のその言葉に長月も頷くのだった。

「うちもそう思うよ」

「いじめられるのもう嫌よ」

如月は目を暗くさせてそのうえで伏せながら呟いた。

「本当にね」

「全く。あの先輩いなくなって欲しいよね」

「そうよね」

こんな話をしていた。四人は今は今心からそう思っていた。そんな一学期だった。

そしてその先輩がいなくなった。夏休み直前に引退したのである。

それを受けて如月はほっとした。そのうえで弥生に言うのだった。

「やっとよ」

「もういじめられないのね」

「二年の人は皆いい人だから」

「そう、よかったね」

「うん、もういじめられないで済むから」

また話す如月だった。ほっとした笑顔で弥生に話す。

「有り難いわ。いじめられないってだけで」

「天国？」

「うん、天国よ」

まさにそうだというのだ。

「本当にね」

「いじめられないっていうことだけで」

「弥生もそうした経験あるでしょ」

「うん、まあ」

そう尋ねられるとだった。弥生も心当たりがあった。幼い頃のことを思い出してだ。そのうえで如月に対して話をするのだった。

「小学校の一年の時にね」

「ああ、あんたそういえばその時って」

長月達とは中学校からだ。弥生とはだ。幼稚園の頃からの友人同士なのだ。それだけに二人の絆はかなり強いものである。

第一話 辛い気持ちその五

「あれよね」

「うん、男の子で一人酷いのいたじゃない」

「ええと、転校したあいつよね」

「名前は確か久米だったわね」

「そう、久米俊太郎」

それが弥生をいじめていた相手の名前だというのだ。

「あいつがね」

「そうだったわよね、とんでもない奴だったわね」

「殴ったり蹴ったり。それに意地悪もしたし」

「その時にだったわね」

「私もいじめられるのは嫌」

弥生も俯いた顔になっていた。二人でマクドナルドに入りその白い店の中でバナシエイクを飲みながら。そのうえで向かい合って話をしていた。

「あの時みたいには」

「ええ、私も」

そして如月もまた言った。

「いじめられるのはもう嫌だから」

「いじめる人つてどんな気持ちなのかしらね」

それは二人には全くわからないことだった。

「本当に」

「わからないわよね、それは」

「ただ。思うのはね」

「ここだ。弥生は静かに言うのだった。

「人はいじめたくないわね」

「ええ、本当に」

「それはね」

このことは如月も同じだった。

「絶対にそれは」

「何があってもね」

「私絶対に人をいじめたりしない」

如月は俯いてそのうえで。決意したのだった。

「いじめられるのが辛いから」

「絶対にね。若し如月が誰かをいじめたらね」

「うん、私が誰かをいじめたら」

「きつととんでもないことになるわ」

「こう言うのだった。」

「絶対にね」

「とんでもないことって？」

「悪いことをしたら絶対に報いがあるから」

「報いが」

「世の中っていいことも悪いことも絶対に自分に返ってくるじゃない」

「そう言われるわね」

弥生に顔を向けて話す。

「因果応報よね」

「そう、だからね」

「人をいじめたら絶対に駄目」

如月は考える顔になってそのうえで言った。バニラシェイクを飲むその動作も止まっている。

「絶対になのね」

「それは御願い」

心から話す弥生だった。

「本当にね」

「わかったわ」

そんな話をしていた。如月は夏休みはのびのびと部活を楽しんだ。顧問の先生もよく何の悩みもなかった。それで楽しくやれたのだっ

た。

そして二学期になるとだ。その転校生が来た。

「はじめまして」

始業式が終わりその直後のホームルームでだ。小柄で黒いショートヘアの女の子が教壇の側に立ってそれで挨拶をしていた。

ピンクのブラウスにえんじ色のストライプのスカート、それに男もののえんじのストライプのリボンをしている。目は大きく黒い。それがきらきらとしていた。顔立ちは全体としてかなり整っている。

その少女がだ。名乗るのだった。

「椎葉神無です」

「皆の新しいクラスメイトだ」

担任の先生が笑顔で彼女の左隣に立って話す。

「宜しくな」

「おい、可愛いな」

「そうよね」

男子も女子もその神無を見て話す。

第一話 辛い気持ちその六

「頭は凄くいいって聞いたけれど」

「顔もって」

「才色兼備？」

「だよな」

しかしであった。ここで面白く思わない者も出るのだった。

それが誰かというのだ。長月達だった。

そのホームルームの後の休憩時間だ。いきなり男子達に囲まれてちやほやされている神無を見てだ。頬を膨らませて言ったのである。

「何だよ、あれ」

「そうよね、ちょっと顔がいいからって」

長月の言葉に文月が応える。長月と同じ顔になっている。

「もてていい気になって」

「何か嫌な奴じゃない？」

霜月も言う。

「あの転校生って」

「だよな、何かいけ好かないよな」

長月はまた言った。

「ああいう奴ってな」

「私も。好きになれない」

「私もよ」

文月と霜月も話す。

「男に媚びてる感じ？」

「可愛いからってね」

「なあ、如月」

長月はここで如月に顔を向けてきた。

「どう思うよ、あいつ」

「そうね」

三人の話を聞いてだ。如月もそう思いはじめていたのだ。

「何か嫌な奴っぽいよね」

「そうそう、頭がよくて顔がいい」

「それを鼻にかけてるよね」

ここでまた文月と霜月が話す。

「嫌な奴が来たわね」

「これはね」

「あいつ何よ」

如月もその目に嫌悪の色を漂わせている。

「何だっというのよ」

「本当にね」

「嫌な奴っぽいな」

最初からそうした感情を持ったのである。そしてであった。如月はこのことを家でも離れた。テーブルに座って夕食を食べながら両親に言うのである。

「本当に嫌な奴なのよ」

「あら、初日でもう何かあったの」

「私には何もなかったけれどね」

自分と同じ顔の母に対して話す。母は彼女の正面に座っている。

「けれど男に媚びて嫌な感じ」

「そんな娘なの？」

「そうなのよ、嫌な奴なのよ」

御飯を箸で食べながらむくれた声で話す。

「はじめて会ってこんなに嫌に思うなんてはじめてよ」

「そうだな」

ここで如月から見て右手に座っている父が言ってきた。眼鏡をかけて黒髪を七三にして痩せた顔と身体をしている。サラリーマン風である。

「如月がそんなに嫌うなんてないからな」

「そうでしょ？頭がよくて顔もいいからって
それは認めたのである。」

「それでもよ。嫌な奴なのよ」

「そういう奴っているよね」

黒髪の前を切り揃えた男の子が言ってきた。顔は如月に似ている。
まだ小学校高学年程の様である。

「何処にでも」

「あなたのところにもいるの」

「いるよ、頭と顔を鼻にかけてる奴」

こう如月に話してきた。

「皆から無視されてるよ」

「睦月のところにもいるのね」

「うん、いるよ」

彼はこう母の問いに答える。答えながらそのおかずを食べている。
おかずはほうれん草のひたしに鮭のムニエル、そして大根の味噌汁
だった。

第一話 辛い気持ちその七

「嫌な奴だよ」

「そういう奴が私のクラスに来るなんて」

如月はかなり嫌な顔になっていた。

「何でなのよ」

「そういう娘は相手にしないの」

ここで母が彼女に言ってきた。

「いいわね」

「相手にしないのね」

「だってお互い嫌な気持ちになるじゃない」

だからだというのである。

「そうでしょ。だったら相手にしない方がいいわよ」

「そうなの」

「そう、それよ」

また話すのだった。

「わかったわね」

「そうね」

如月は母のその言葉に頷いた。

「そうした方がいいわね」

「あんたは人と喧嘩したりいじめたりする娘じゃないし」

少なくともこの時点ではそうだった。誰もがそう思っていた。

「だからね」

「それじゃあ」

ここまで話してであった。そのうえでこれからのことを決めるのだった。そしてその次の日は。今度は弥生や葉月と話をしたのだった。

「どう思うっ？」

「どう思うっ？」

「あの転校生よ」

今度は長月達以外のクラスの女子に囲まれて穏やかに笑っている神無を忌々しげに見てそのうえで弥生に対して言っていた。

「何か嫌な奴じゃない？」

「そう？」

弥生は目を二回程しばたかせてから如月のその言葉に応えた。

「私は別に」

「そう思わないの？」

「まだ転校してきて二日目でしかも話もしていないしだからだというのがあった。」

「わからないわよ」

「そうなの」

「実際に話さないとわからないわよ」

弥生はまた言った。

「どういう娘かね」

「そうだね」

弥生の言葉に葉月も賛成してきた。

「俺もあの娘とはまだ話もしてないしね」

「わからないわよね」

「そうそう」

「何でわからないのよ」

しかし如月はむっとした顔で二人に返す。

「そんなことが」

「そんなことって言うけれど」

弥生はそんな彼女に釈然としない顔で言葉を返す。

「私あの娘とまだ何も話してないし」

「だからわからないっていうの？」

「そうよ。それでわかる筈ないじゃない」

こう落ち着いた言葉で答えるのだった。

「それじゃあね」

「そうだよ、今の城崎さんおかしいよ」

「そうよ、いつもの如月じゃないわ」

「いつもじゃないって」

そう言われてもだった。如月にはわからない。それできょとんとさえなっていた。

「私が？」

「ええ、だからおかしいわよ」

「どうしたの？」

「私は別におかしくないわよ」

自覚のないことなのでこう答えるのだった。

「そんなの」

「本当に？」

「そう言えるの？」

「ええ、そうよ」

きょとんとした顔でまた答えた。

第一話 辛い気持ちその八

「つていうか何処がおかしい？」

「あの、あの娘もう一度見てみたら？」

「絶対にそうした方がいいよ」

「あの娘って」

「だから。椎葉さんよ」

弥生はその名前を具体的に出してみせた。

「椎葉さん。見てみたらいいわよ」

「うん、僕もそう思うよ」

葉月も言う。

「その方がいいよ」

「別に。そんな」

如月は戸惑いながら二人の言葉に返す。

「私、ただあの娘が」

「気に入らないっていうの？」

「そうよ。本当に何かいけ好かない感じじゃない」

「だから。実際に会って話をしてみればいいじゃない」

「それでわかることじゃない」

「う、うん」

二人の言葉に今は頷いた。

「そうしろっていうのね」

「そうよ。それからいい人かどうか見極めればいいじゃない」

「僕もそう思うよ」

「そうなの」

そう言われてだった。如月は少し弱い顔になった。

そのうえでだった。彼女は言った。

「それじゃあ」

「ええ、お話してみて」

「人に対する好き嫌いってどうしてもあるけれどね」

葉月はこのことは認めた。人が人である限り好き嫌いはどうしても存在する。そのことは認めるしかないことだとわかっているのである。

「けれど。それでもね」

「じっくりと話してから、なのね」

「うん、無闇に嫌ったらよくないよ」

注意するその目での言葉だった。

「それはね」

「わかったわ。それじゃあ」

ここまで聞いてだった。如月も遂に頷いた。

「そうするわ」

「絶対によ」

「そうしてね」

「わかったわ。それじゃあ」

如月はその言葉に頷いた。そうしてであった。

彼女はその転校生椎葉神無と一度話をすることにきめた。しかしだった。

「ここだ。また長月達が神無を忌々しげに見ながら言っていたのだ。」

「何かあいつラクロス部に入るらしいぜ」

「えっ、それマジ!？」

「洒落にならないわよ」

長月の言葉を聞いた文月と霜月がすぐに言う。

「あいつが何でラクロス部に来るのよ」

「それ誰から聞いたの？」

「昨日の部活の帰りあつただろ」

長月はこう二人に話す。そこには如月もいる。

「その時に先輩が話してるの聞いたんだよ」

「そうだったの」

「私達先に帰ったから知らなかったわ」

「一年の転校生が入部届けを出してきたってな
こう話すのだった。」

「それでなんだよ」

「本当なのね、それって」

「嘘じゃないのね」

「ああ、嘘じゃねえよ」

長月はまた話した。

「それはな」

「何よ、それむかつく」

「冗談じゃないわよ」

二人は長月のその話を聞いて眉を歪ませた。その結果どちらも醜い顔になっていた。それは長月も同じだった。三人は意識しないうちにそうなっていた。

「何であいつがラクロス部なのよ」

「私達と一緒にわけ？」

「なあ」

長月はここで二人に声をかけてきた。

「それでな」

「ええ、それで」

「どうするの？」

「あいつどうするよ」

真剣な顔で問うてきたのだった。

「あいつラクロス部に入るんだけれどよ」

「決まってるじゃない、シカトよ」

「そうよ、シカトよ」

そうするというのがあった。

「冗談じゃないわよ、本当に」

「何であんな奴と一緒に部活なのよ」

「だよな。やっぱりシカトだよな」

長月も文月と霜月のその言葉を受けて頷いた。

「あんな奴はな」

「そうそう、無視してやろうよ」

「ちよつと頭と顔がいいからって何よ」

「如月もそれでいいよな」

長月は二人の言葉を受けたうえで彼女にも声をかけてきた。

「あんたもそれでいいよな」

「私も？」

「ああ、それでよくな？」

こう如月に言ってきたのだ。

「それでな」

「そうね」

弥生達に約束した言葉が脳裏によぎった。しかしだった。

長月達との付き合いもある。それに彼女はやはり神無が好きにはなれなかった。その結果長月のその言葉に頷いてしまったのだ。

「わかったわ、じゃあ私も」

「あいつは無視だよ、無視」

「そうね、シカトね」

「あんな奴知らないわよ」

三人は口々に言った。

そしてだ。如月もだった。

「そうね」

「何があっても知らないわよ」

「何でラクロス部に来るのよ」

文月と霜月も言う。彼女達は気付かないうちに入ってはならない道に入ってしまった。しかしそれに気付く時は今ではなかった。

2
0
1
0
·
6
·
1
9

第二話 部活からその一

第二話 部活から

如月はラクロス部である。それで今部活の練習の為に部室に入っていた。そこではもう一年の他のクラスメイト達が陽気な顔で話をしていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

如月はその彼女達に挨拶をした。それから自分のロッカーに向かい着替えにかかるがここで彼女はその彼女達の話の聞くのだった。

「何か凄い娘が入って来たわね」

「そうね」

「確か」

そしてだった。如月に顔を向けて言ってきた。その彼女にだ。

「ねえ、あなたのクラスだっけ」

「そうだったわよね」

「確かね」

「えっ……」

声をかけられてだった。如月は無意識のうちに嫌な顔をした。

そのうえでだ。こう彼女達に返した。

「何？」

「何って。ほら、転校生の娘来たでしょ」

「そうでしょ？」

「こう彼女に言ってきた。」

「ほら、あなたのクラスにね」

「何とか言っただじゃない」

「椎葉のこと？」

無意識のうちに暗い顔になって彼女達に返した。如月は今普段の部活で着るジャージに着替えている。彼女達はもう既にジャージを

着ている。

「あいつのことよね」

「ああ、椎葉つていったの」

「あの転校生つて」

「そうよ。それがどうかしたの？」

「あの娘凄く頭いいんだって？」

「そうだったわよね」

「そうみたいね」

声も自然に慥然としたものになっていた。

「聞いた話だと」

「入学テスト殆ど満点だったらしいじゃない」

「それって凄くない？」

「凄いわよね」

「ねえ」

こう話してだった。彼女達はまた言う。

「ラクロスも頭使うしね」

「そうそう」

「参謀が入ったってやつ？」

「そんなのわからないわよ」

ジャージに着替え終えた。そのうえで彼女達に返す。

「まだね」

「わからないっていうの？」

「そうなの？」

「そうよ」

如月はまた彼女達に話した。部室の中は真ん中にプラスチックの机と椅子があり壁には縦長のロッカーが並んでいる。如月達はその中で話をしている。

「そんなの。わからないわよ」

「わからないって」

「そうかしら」

「あんたが一番わかると思うけれど」

「ねえ」

「だから。知らないわよ」

何故知らないのかはあえて言わなかった。

「そんなのは」

「転校してすぐだからよく知らないのかしら」

「そうよね」

「それってね」

彼女達はそれを聞いてだ。今はこう思ったのである。

そのうえで再び如月に言った。

「じゃあ何かわかったらね」

「教えてくれるかしら」

「いいかしら」

「わかったらね」

返答は慥然としたままだった。

「その時はね」

「何かわからないけれど」

「その時は御願いするわね」

「ええ」

「何でも今日から来るらしいし」

「そうね」

このことも話される。

第二話 部活からその二

「それで入部の挨拶するんだって」

「どんな感じかしらね」

「可愛い娘らしいし」

「あっ、そうなんだ」

如月とは正反対にであった。彼女達の顔も声も明るい。

「頭がよくて顔もいいって」

「いい感じよね」

「そうよね」

こう話してだった。そのうえで部活に向かうのだった。如月はそんな彼女達を見送ってだ。一人部室で面白くない顔をしていた。

「何だっというのよ、本当に」

「こう呟いてだ。そのうえで行くのだった。」

無然としながら部活をするグラウンドに向かう。するともう長月達が待っていた。

「ああ、来たな」

「聞いている？」

「あいつ今日かららしいわよ」

「ええ、聞いているわ」

如月は嫌な顔で三人に返した。

「さつき。聞いたから」

「ちっ、嫌な奴が来るよな」

「そうよね」

「本当にね」

そんな話をしながらはじまりを待っていた。そうして。

部活のはじまりにだ。まず部長が声をかけた。

「皆集まって」

「はい」

「わかりました」

皆それに頷いてだった。そのうえでグラウンドの片隅に集まる。皆の前に立つ部長はだ。その横に神無を置いていたのだった。

「やっぱりいるわね」

「そうね」

文月と霜月はその神無を見て顔を顰めさせる。

「本当に入部するのね」

「だから何でうちに来るのよ」

「全くだよ」

それに長月も頷く。

「何であいつがよ」

「けれどね。今はな」

「どうしようもないわね」

「だからシカトしようぜ」

長月は二人に言った。

「あいつはな」

「そうね、そうしてやりましょう」

「何があってもね」

二人も長月のその言葉に頷く。そうしてだった。

神無は部長から紹介されていた。その横でここにこうしている。

「一年生で転校してきたばかりの椎葉神無さんよ」

「はじめまして」

転校初日のクラスでのそれと同じ挨拶だった。

「椎葉神無です」

「ちえっ」

「本当に嫌な奴」

文月は霜月は聞こえないようにしてだが言った。

「何だっっていうのよ」

「全く」

「頭が凄くいいらしいから」

「いえ、そんな」

神無は部長のその言葉に謙遜で返す。

「別に」

「謙遜しなくていいのよ。とりあえずはね」

「はい」

「初心者よね」

「はい、そうです」

にこのことしている部長の問いに答えていた。

「本当に今までのことは」

「なかったわね。それでもね」

「それでも、ですか」

「ええ、気にすることはないから」

神無に優しい笑顔で言うのだった。部長は温厚でしかも優しい人柄で知られている。間違っても意地悪やいじめをしない人間だ。

第二話 部活からその三

「それはね」

「そうですね」

「そうですね、楽しんで」

「こう神無に言うのである。

是非ね」

「わかりました」

神無も部長のその言葉に頷いた。

「それじゃあ」

「それじゃあ早速練習をはじめましょう。皆いいわね」

「はい」

「わかりました」

皆部長のその言葉に頷いた。そして神無もまた練習をはじめた。しかし彼女はお世辞にも運動神経はよくなかった。足は遅いし瞬発力もなかった。

ボールが来ても中々受け取れない。長月達はそれを見てくすくすと笑う。

「おいおい、何だよあれ」

「そうですね」

「全然駄目じゃない」

文月と霜月もそれを見て笑っている。

「うち等の最初よりずっと悪いよな」

「ってというか運動神経ゼロ？」

「あれでラクロスやるなんてね」

「そうですね」

如月も三人のその言葉に頷いた。

「全然駄目よね」

「ってというか運動なんてするなよ」

「そうよ、運動音痴なんだったら」

「そんなことしない」

「そうよね」

しかしだった。部長はだ。その神無に対して言うのだった。

「最初は誰だっつてそうだから」

「すいません、私」

「だからいいのよ」

神無に対して微笑んで述べていた。

「それでね」

「いいんですか」

「だから。最初から上手って天才じゃない。天才なんてそうはいないわよ」

「はあ」

「それだけけれど」

ここぞだ。部長はこんなことも言ってきた。

「今マネージャーいないんだけれど」

「マネージャーですか」

「そう、今マネージャーがいないのよ」

また神無に対して話す。

「だから。よかつたら」

「私が、ですか？」

「どう？」

微笑んでの言葉だった。

「マネージャー。やってみる？」

「私でよかつたら」

神無は少し謙遜して返した。

「御願います」

「よし、その頭脳期待してるわよ」

入学テストのことだった。それは部長にも伝わっているのである。
「うちの部活の為にね」

「わかりました」

こうしてだった。彼女はラクロス部のマネージャーにもなった。しかしこれもまた如月達の反感を買うことになってしまったのである。

「おい、聞いたよな」

「ええ、聞いたわよ」

「マネージャー！？何よそれ」

傍から見ていた三人が顔を顰めさせて言う。

「入って初日でってな」

「えこひいきよね」

「絶対ごますつたのよ」

初日だからそれは少し考えればないことがわかる。しかし今の三人にはそうしたことわからなくなってしまうのであったのである。

「嫌な奴だな、想像以上に」

「うんうん、もう絶対に許さない」

「徹底的にやっつけてやるうよ」

「そうね」

それに如月も加わって頷く。

第二話 部活からその四

「こうなったらね」

「徹底的にシカトするからな」

「そうよ、あいつが何を言ってもね」

「絶対にこつちから話しかけない」

「そうしよう」

如月も頷いていた。四人はとにかく神無を無視することに決めた。そしてそのうえでだ。部活の帰りだ。

四人が制服に着替えて部室を出たところだ。その神無が声をかけてきたのである。

「あの」

「来たな」

「そうね」

「まさかここで来るなんて思わなかったけれどね」

「けれどね」

四人は彼女の言葉を受けてだ。そのうえで四人だけでひそひそと話してだ。そうしてそのうえで囁き合うのだった。

「絶対に何があってもだぜ」

「ええ、わかってるわよ」

「こんな奴もう絶対に」

「無視よ」

こうしてだった。彼女達は取り返しのつかない選択をしてしまったのだった。彼女達が意識しないうちにだ。

そうしてそのうえでだ。自分達に話し掛けてきたその神無にだつた。

無視することにした。彼女は四人の後ろにいた。そうしてだ。神無はまた四人に声を掛けてきた。

「あの」

「・・・・・・・・・・」

返事はしない。振り向きもしなかった。

「聞こえてる？貴女達同じクラスよね」

おずおずとした声だった。何処か気弱そうな、そうした感じの声だった。

その声で四人に声をかける。しかし四人はあくまで無視するのだった。

「だから聞きたいことがあるけれど」

「なあ」

ここぞだ。長月が三人に問うた。神無のその言葉には全く気付かないふりをしてである。

「これから何処行く？」

「マクド行く？」

文月がそれに応える。マクドナルドのことである。

「そこどう？」

「ああ、いいわね」

霜月も笑顔で文月の提案に頷く。しかし神無に対しては相変わらず気付かないふりをしている。

「それでね。四人で行きましょう」

「そうね」

それに如月も続いた。

「それじゃあ今から行きましょう」

「うちマックシェイク好きなんだ」

長月はわざと笑顔で話した。

「あれ飲むと何か一日が終わったって気がしね？」

「するする」

「まあ後でお風呂入って晩御飯食べてそれから勉強あるけれどね」

「それでもね」

如月も含めて三人でわざと明るくしてみせて応える。

「飲んだらそうした気持ちになれるわよね」

「だからだよ。マックにするか」

「そうね。じゃあ」

「今からね」

「ええと、いいかしら」

ここでまた神無の声がしてきた。

「あの、よかつたらただけれど色々」と

「行くぜ」

「そうね」

「今からね」

こうして神無を無視してだ。四人はそのまま学校から帰った。これをはじめりだった。

そしてそのマクドナルドでだ。四人はマックシェイクのバナナをそれぞれストローで飲みながらだ。そのうえで楽しく話をしていた。

「ざまあ見るだよ」

「そうね」

「その通りね」

長月の言葉に文月と霜月が笑顔で応えていた。四人の席に四人で座っている。店の端の席に座ってそこでだべりながらの話であった。

「あいつ唾然つてしてたよな」

「そうね、無視されたって気付いてないかも」

「けれどいい気味よ」

最初にこう言ったのは霜月だった。

第二話 部活からその五

「本当にね」

「いい気味か」

「そういえばそうよね」

長月と文月は霜月のその言葉にストローを少し止めてそのうえで言った。

「何か無視してやったらな」

「すかってしたわよね」

「そうよね。如月もそうよね」

「ええ」

如月もだった。霜月のその言葉に頷いた。実際にそう思えたのである。

「何かね。すつきりしたわ」

「頭がよくて可愛いからってな」

「クラスの男子や部長に媚びてね」

「何だっっていうのよ」

「こつ忌々しげに言うのである。」

「そんな奴無視してやるわよ」

「知らないから」

「そうよね」

如月は文月と霜月のその言葉に頷いたのだ。

「本当にね」

「絶対に許さねえからな」

長月が一番強気だった。

「あいつだけはな」

「ええ、それじゃあね」

「これからもよね」

「当たり前だよ」

長月は当然といった口調で文月と霜月に返した。

「これからずっとだよ。いいよな」

「勿論よ」

「許さないから」

二人もそれに続く。

「さて、それじゃあね」

「これからも」

「徹底的にやるのね」

今言ったのは如月だった。

「向こうがもう参るまで無視するのね」

「ああ、そうだよ」

長月は右手の肘をついてその手にマックシェイクを持ちながらだ。そのうえでそれをストローで飲みながら答えた。

「やってやるんだよ」

「それなら」

ここまで聞いてだった。如月は頷いた。

「部活だけじゃなくてクラスでもね」

「当然だろ、そんなの」

「もう何処でもね」

「あいつはいないの」

文月と霜月も言う。

「だからよ、いないからね」

「知らない。無視する」

「それで行こう、本当にね」

最後に如月が言った。これで決まりだった。

そしてだ。四人は部活でもクラスでも神無を無視した。声をかけてもだ。全く気付かないふりをして自分達だけで話した。それは彼女達がそれぞれ一人の時も一緒だった。

それを見てだ。弥生が怪訝な顔で如月に声をかけたのだった。

「ねえ」

「何？」

「椎葉さんと何かあったの？」

無視していることに気付いての言葉である。

「ひょっとして」

「別に何もないわよ」

如月は憮然として弥生の言葉に返した。

「別にね」

「それで無視とかする？」

「無視してないわよ」

「してるじゃない」

弥生の顔が咎めるものになった。

「誰がどう見てもね」

「だからしてないわよ」

「じゃあ何で椎葉さんのこと嫌ってるの？」

全とお見通しだった。言葉もまた咎めるものだった。

「どうしてなのよ、あれは」

「だって。嫌な奴じゃない」

あまりかねた調子でだ。自分でも認めただった。

第二話 部活からその六

「あいつ。そうでしょ？」

「嫌な奴って？」

「そうよ、先輩や男子に媚売ってさ」

見れば神無は自分の席でクラスの男子生徒達と話をしていた。内気な彼女だが容姿のせいかな男子には人気があるのである。

「あんな風に」

「人気があるだけでしょ」

「わざと媚売ってるのよ」

「そう？私にはそうは見えないけれど」

「じゃあ弥生にはどう見えるのよ」

「だから人気があるだけよ」

弥生にはそう見えていた。そしてそれは真実でもあった。

「それだけじゃない」

「弥生は何もわかってないのよ。いい？」

如月は口を尖らせてだ。弥生に対して話した。

「あいつね、同じラクロス部だけれど」

「ええ」

「それでも部長にいきなり気に入れられてね。マネージャーやってるのよ」

「マネージャーは部活には絶対に必要じゃない」

「違うわよ。媚を売ってなったのよ」

またこう主張するのだった。

「それでなのよ」

「媚、媚っていうけれど」

弥生は如月の今の棘のある言葉に違和感を感じていた。そうして怪訝な目になってそのうえで彼女に対して言うのであった。

「あのね」

「あのねって？」

「あんた椎葉さんと話したことないわよね」「言うのはこのことだった。」

「そうよね」

「そうだけれど」

「それで何でそう言えるのよ。話したことない相手をそう悪く言うのってよくないわよ」

「だって本当に嫌な奴なのよ」

あくまでこう主張するのだった。

「本当にね。見てればわかるわよ」

「私だって見てるわよ。ただね」

「ただ？」

「話したこともない、しかも知ってすぐの相手にそういう無視とかするのって絶対によくないわ」

また咎める顔になった。目もそうなっている。そのうえでの言葉だった。

「いじめじゃないの、それって」

「いじめじゃないわよ」

いじめと言われるとだった。如月も反論した。自分が先輩にいじめられていたから、それでその言葉にはついつい無意識のうちに反応してしまったのである。

「そんなこと絶対に」

「じゃあ無視とか止めたら？」

弥生の目が怒ったものになった。

「そんなことは」

「それは」

「止めた方がいいわよ」

また咎める目になった。

「絶対にね」

「けれどあいつ本当に嫌な奴だから」

「じゃあ聞くわ。本当に嫌な奴だったとするわ」

弥生は如月があくまで聞こうともしないのを見てだ。仮定の話をした。そうしてそのうえで彼女に対して問い返したのである。話術の一つだ。

「それでいじめたり無視していいの？」

「それは、その」

「あんたいじめられて苦しかったんじゃない」

言葉は自然に強いものになっていた。

「そうよね、辛かったわよね」

「それはそうだけれど」

「じゃあ止めなさい」

その強い言葉で告げた。

「そんなことは」

「けれど」

「同じになつたら終わりよ」

弥生はこころも言った。

「自分を苦しめていた相手とね」

「苦しめていた相手と」

「わかったわね。如月そんなことする娘じゃないじゃない」

弥生の言葉が優しいものになった。親友を気遣ってである。

第二話 部活からその七

「だからね。そんなこと止めよう」

「う、うん」

「ほら、長月達もわかってないだけよ」

誰がそうしているのかもわかっていた。そのうえでの言葉だった。
「だからね」

「無視はってことね」

「そうよ。そういうことって自分に絶対返ってくるし」
弥生はこの話もした。

「悪いことをしたら自分に絶対に返って来るのよ」

「因果応報？」

「そう、それよ」

まさにそれだというのだった。

「絶対に返って来るのよ」

「よく言われることね」

「人は見てるから」

どうしてそうなるかという理由もだ。弥生は如月に話すのだった。

「よくね。特に悪い行いは」

「それで悪い感情を持つから」

「返って来るのよ。悪く思われるのも嫌よね」

「ええ」

その通りだった。弥生のその言葉にも頷いた。

「そんなのは」

「だったらね。止めておくのよ」

また優しい声をかけたのだった。

「いいわね、それで」

「ええ、じゃあ」

「部活の時にでも仲直りして」

弥生の言葉は切実なものになっていた。

「長月達にも言う？」

「いえ、それはいいわ」

如月はそれはいいと返した。

「私から言うから」

「そう、言うのね」

「やっぱり。よくないよね」

顔を俯けさせてだ。そのうえでの言葉だった。

「無視とかって」

「そうよ、絶対によくないから」

弥生は何度もだった。こう言うのだった。

「いじめだから」

「えっ……」

そう言われてだった。如月の動きが止まった。顔も強張ってしま
った。

「いじめって」

「そうよ。何人で一人を無視してるんでしょ？」

「ええ」

「それはもう立派ないじめよ。それはもう止めて」

「私、いじめしていたの……」

今の弥生の言葉には顔を強張らせてしまった。そう言われるとは思
ってもいなかった。そして自分がしているということにもだ。

しかし言われてだった。如月は愕然となってしまうた。

それだ。青くさえなっ顔で言うのだった。

「私、そんなつもりじゃ」

「わかってるわ。如月はそんな娘じゃないから」

「止める」

その青くなっ顔で言った。

「もう絶対に。私いじめなんか絶対にしないから」

「約束よ」

「うん、約束するわ」

何とかだった。気を取り直しての言葉だった。

「私それは絶対にしないから」

「そうよ。約束したからね」

「うん」

「仲直りしてね」

「そうするわ」

そのことを誓った。この時は本気だった。実際に部室でだ。長月達三人に弥生から言われたことをそのまま告げたのである。

それを聞いてだ。三人も着替えている途中で愕然となってしまうた。そうしてそのうえで顔を俯けさせて言うのだった。

「いじめか」

「そんなつもりなかったけれど」

「そうしていたのね」

「うん、弥生に言われたから」

そのまま弥生の名前も出した。

「だからね」

「あいつが言うんだっいたらな」

「そうよね、私達やつぱり」

「してたのね、いじめ」

三人もそのことに気付かさされた。そのうえで愕然となったのである。

そしてだ。如月は三人に対してまた言った。

「だからね」

「あ、ああ」

「そうよね」

「止めよう」

「そうよ、止めよう」

如月は部室の中で三人に真剣な顔で述べた。

第二話 部活からその八

「もうね。こんなこと」

「いじめとかしてるつもりじゃなかったんだよ」

「私も。ただ嫌な奴だから」

「それで無視したただけなのに」

「それがいじめなんだって」

「そうだったとだ。また三人に話した。」

「だから。もう止めようね」

「そうだな。あいつに声かけような」

「そうしよう、仲直りというかね」

「無視したりするの。止めようね」

「四人で言い合った。そうしてだ。」

「ジャージに着替えてそのうえで部活に出る。しかし」

「あんだ達ね」

「えっ、部長」

「何かあつたんですか？」

「何かも何も無いわよ。あのね」

「怒った顔でだ。四人に対して言ってきたのだ。普段は温厚で曲がったことはしない人格者として知られる部長がだ。怒ってきたのだ。」

「椎葉さんに何も教えてないの？」

「何もって」

「一体」

「どうしたんですか？」

「ラクロス部とかラクロスのこと何も教えてないのよね」

「こうだ。四人に対して言ってきたのである。」

「何してるのよ」

「ええと、何って」

「転校してきてすぐですし」

「ですから」

「そういう問題じゃないでしょ。同じクラスで同じ部だったら何でも細かく教える」

部長はあくまで常識から話していた。しかしであった。

それは今の四人にはだ。素直にそう聞こえないものだった。

そうしてだ。啞然としながら部長の話を聞いていた。

「それが友達でしょ。クラスメイトじゃないの？」

「す、すいません」

「つい」

「ついじゃないわよ」

温厚な部長だがこうしたことには厳しい。だからこそ怒っているのだ。

「いい？ちゃんと教えてあげるのよ」

「はあ」

「クラスメイトで同じ部活の人なら余計に大切にする。ラクロスはね」

ここからは部長の持論だった。

「一人でするものじゃないでしょ」

「はい」

「その通りです」

「皆でするものよ。しかもグラウンドに出ている人間だけじゃなくて」

ここからも部長の持論だった。

「全員でするものよ。控え選手も応援も全部でね」

それでなのだった。四人が神無に対して何も教えていなかったことを怒ったのだ。だが部長は四人が彼女を無視していたことは知らなかった。

しかしだ。四人はそれは知っていた。当時者だからこそだ。それが必要な、かつ絶対の違いとなつて大きな歪みとなつてしまつたのだ。

「そうでしょ。わかったらラクロスのこともうちの部活のことも詳しく教えてあげて。あの娘がうちの部活のマネージャーだから余計にね」

ここまで言っただけで四人から離れた。しかしだった。

叱られた四人はだ。仲直りやいじめへの嫌悪とかいった感情は消し飛んでしまっていた。そしてだ。如月が唇を滲ませて言った。

「まさか」

「そうよね、あいつよね」

「あいつちくつたのよ」

文月と霜月がすぐに如月のその言葉に続いた。

「絶対ね」

「そうよ、間違いないわ」

「そうじゃないと部長だって絶対に言わないし」

「そうよね」

部長が気付いたとは考えないのだった。今の彼女達は周りが見えなくなっていた。そしてその為にそう考えられなかったのである。

「折角仲直りしてやるうって思ったのに」

「声かけてやるうと思ったのに」

二人は口を歪ませて言った。

第二話 部活からその九

「もうさ、そんな奴だったらさ」

「容赦する必要ないんじゃないの？」

二人はこう如月と長月に対して提案してきた。

「それならね」

「どう？」

「ああ、そっだよな」

長月が先に頷いた。

「あいつがそんなことするんならな」

「如月はどう？」

「どう考えてるの？」

如月はもう怒りで弥生の言葉と彼女にした約束を忘れてしまっていた。彼女もまた神無が部長に告げ口したと考えたからである。

「徹底的にやってやらない？」

「こっぴごなったら」

「そっね」

そしてだった。目を怒らせて頷いたのだった。

「それだったら徹底的にね」

「向こうがその気ならね」

「遠慮することないし」

「ああ、そんな奴だったらな」

二人に長月も続いた。

「もう何でもやってやるっぜ」

「それでどうするの？」

「何してやる？」

二人は早速何をするかを長月に問うた。

「もう無視だけじゃなくて色々としない？」

「効果のあるやつね」

「それだつたらよ」

そしてだ。長月は言うのだった。

「あいつの机に花瓶置いてやるとかな」

「あっ、それいいね」

「かなり効くよね」

文月と霜月は長月のその提案に笑顔で応えた。

「それじゃあそれやってやる？」

「朝早くか放課後遅くに教室に行つてね」

「それなら私お花と花瓶用意するから」

如月は自分から言った。三人の話を聞いているうちに気が乗ってきたのである。

「それでどうかしら」

「ああ、それじゃあ私達もね」

「一緒にね」

「やってやるうぜ。ただしな」

長月は笑いながら話してきた。

「これで終わりじゃないからな」

「そうよね。花瓶だけじゃなくてね」

「もつとやってやるうね」

「色々とな」

彼女達は楽しそうに話す。しかし気付いてはいなかった。その顔が醜く歪もうとしてしていることにだ。鏡があっても気付かないことだった。

「じゃあ部活が終わつたら教室に戻つて」

「それでお花と花瓶用意してね」

「あいつの机の上に置いて」

「明日の朝が楽しみよね」

醜くなっていたのは如月も同じだった。その笑みは彼女が今まで浮かべたことのない、そうした見るに値しないまでに醜いものだった。

「明日がね」

「そうね、どんな顔するかしら」

「楽しみよね」

「まずはそれからだからな」

長月も醜い笑顔で言った。どす黒くなり禍々しくねじれたその笑顔でだ。

「花瓶の次は何する？」

「そうね。ロッカーとか下駄箱とかね」

「色々あるわね」

そんな話をしながら部活の練習をしていた。そして次の日の朝だった。

朝教室でだ。神無は自分の席の前で愕然となっていた。机の上に花瓶が置かれていたのである。そしてその花瓶には白い花がさしてあった。

「おい、誰だよこんなことしたの」

「夕子悪いだろ」

「ねえ」

クラスの面々もそれを見てひそひそと話す。

第二話 部活からその十

「誰がこんなことしたんだ？」

「一体」

「そつだよ、御前か？」

「俺がこんなことする筈ないだろ」

「じゃあ誰なんだよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ」

ここで葉月が出て来てクラスメイト達に話した。

「こんなの。早く直さないよ」

「そつよ。ねえ椎葉さん」

弥生も出て来た。そして神無に声をかけるのだった。

「気にしないで。悪戯だから」

「う、うん」

「なおそつ。こんなの」

こうしてだった。葉月と弥生は神無を優しく慰めながらそのうえで花瓶も花もなおしたのだった。話はこれで一旦終わった。しかし四人はそれをクラスの端で見ながらほくそ笑んでいた。

「見たかよ、あいつの顔」

「見た見た」

「啞然つてしてたわよね」

「もう何が起こったのかわからない顔だったわね」

三人に続いてだった。如月も歪んだ笑みで言った。

「いい気味よ」

「誰がやったかわかってないみたいだしな」

長月は笑いながらまた話す。

「それで次は部活でやってやろうぜ」

「そつね。ロッカーとかね」

「部活の時にやるのもいいわね」

長月の提案に文月と霜月が応える。

「じゃあ。ジャージとか隠す？」

「ロッカー滅茶苦茶にするとかね」

「いいわね。それじゃあロッカー滅茶苦茶にしてやろう」

如月はロッカーを提案した。

「何なら今から行く？」

「いいな、部室の窓の鍵壊れてるしな」

彼女達にとって都合のいいことだ。長月は如月のその提案に笑って応えた。

「じゃあやっつてやろうぜ」

「そうね」

「それじゃあね」

文月と霜月も頷いてだった。そのうえで四人でこっそりと部室に向かいだ。何食わぬ顔で教室に戻ってそのうえで授業を受けた。

部活の時間になるとだ。まず部長が怒った。

「何、これ」

「何って」

「どうしたんですか、これ」

「一体誰がやったの!？」

本気で怒った顔で部員達に対して問う。今彼女達は部室にいた。

神無のロッカーが荒らされゴミが入れられ落書きがされていたのだ。

その落書きの文字が実に汚い。明らかに彼女を罵倒し中傷するものだった。それが実にあからさまに書かれていたのである。

「こんなことを」

「私じゃないですよ」

「違いますよ」

皆強張った顔で否定する。

「誰がこんなことするんですか」

「悪戯にしては酷いですよね」

「そうよ、こんなことする人はね」

部長は目を怒らせて言った。

「退部にするから。誰でもね」

「退部ですか」

「そこまでなんですか」

「当然でしょ」

部長はそれを当然と断言した。

「こんなことをする娘がスポーツマンだと思う？絶対に許さないから」

「そうですね、本当に」

「これはあんまりですよ」

「とにかく」

こう話してからだった。部長は神無に顔を向けて言った。

「椎葉さん」

「は、はい」

神無もそこにいた。そして変わり果てた自分のロッカーを見て蒼白になっていたのだ。何故こんなことになったのか自分でもわからなかったのだ。

第二話 部活からその十一

「気にしないで」

「気に、ですか」

「犯人は絶対に探すわ。後は私がやっておくから」

「部長がですか」

「だから安心して」

こう彼女に言うのだった。

「何も気にしなくていいから」

「は、はい」

「いい？皆もよ」

部長は他の部員達にも顔を向けた。

「犯人は絶対に探す。それにこんなことは絶対にしない」

「はい、わかりました」

「絶対に」

部員達も彼女のその言葉に頷く。

「こんなこと絶対に許せませんよね」

「本当に」

「そうよ。だからね」

部長はまた言う。

「犯人を探すわよ。そしてこんなことは二度とさせない」

「はい」

「それじゃあ」

こう話してだった。ロッカーは部長が生徒会に新しいロッカーを
発注しそのロッカーは廃棄された。部長は神無を気遣いこのことは
内密に処理し部員達にも口止めをした。その中には当然ながら如月
達もいた。

四人は部活の後でだ。喫茶店の中でこのことを楽しげに話してい
た。喫茶店はダークブラウンの色彩のアンティークな内装である。

落ち着いた店であり四人はその窓際の席に座ってそのうえで話していた。

「見た？あいつの顔」

「見た見た」

文月が霜月の言葉に笑って返す。

「もう御通夜みたいな顔だったわよね」

「何があつたのかわからない感じよね」

「そうよ、いい気味よ」

「全く」

「ざま見ろってんだ」

長月は右手にコーヒークップを持ち席にもたれかかり右で脚を組んでいる。その姿勢でやはり笑いながら話をするのであった。

「ちよつと可愛くて頭がいいからってな」

「図に乗るからよね」

「ねえ」

文月と霜月も言う。三人共同じ笑顔になっている。

「あいつ本当に弱ってたし」

「何か胸がすつとしたね」

「けれどこれで終わらせないわよ」

「ここぞだ。如月が言った。」

「皆これで終わりじゃないわよね」

「当たり前だろ、これからだよ」

「そうそう、何かあいつのあの顔見てたらね」

「もっとやってやりたくなつたわよ」

三人は如月の言葉にすぐに応えた。

「ただ。部室のロッカーはもう部長がマークしてるわよ」

「見つかったら退部よ」

文月と霜月は少し警戒する顔になって述べた。

「だからそれは止めた方がいいわよ」

「まずいから」

「だよな。じゃあロッカーは止めておこうな」

長月も二人のその言葉に頷いた。

「じゃあクラスでやるか」

「他の人間に見つからないようにね」

如月の言葉だ。

「それでね」

「つまり見つからないといい」

「そういうことね」

二人は如月の言葉からこう言った。

「見つからないようにしてそのうえでやっていく」

「そういうことね」

「だからロッカーのあれはよかったわ」

如月はここでは冷静に分析して述べた。

「ああして。見つからないようにするのはね」

「だよな。じゃあ教室でも同じようにすっか」

長月が如月の言葉から言った。

「そうすっか」

「そうしましょう。同じことしましょう」

如月はこう提案した。

第二話 部活からその十二

「あいつの机と椅子にね」

「よし、じゃあ明日朝早く行ってね」

「それか放課後にやってね」

文月と霜月が時間を言ってきた。

「それでいきましょう」

「今度は教室でね」

「よし、じゃあ決まりだな」

長月が笑顔でまとめた。

「明日朝早く行ってな」

「ええ、そうね」

「そうしましょう」

これで話が決まった。翌朝如月はいつもより早く家を出た。あんまり早いので母親が少し驚いていた。

「もう行くの？」

「そうだけれど？」

「早過ぎない？」

「早いつて？」

「そうよ、普段より早いじゃない」

こつ娘に言うのだった。

「どうしてこんなに早いのか？今日は」

「ああ、ちよつとね」

理由を言える筈もない。だから頭の中で辻褃を合わせて言うのだった。

「友達と待ち合わせしてて」

「弥生ちゃんか？」

「部活違うから」

弥生は美術部にいる。彼女は文科系なのだ。体育会系の彼女とは

そこが違うのである。

「そうじゃないわよ」

「じゃあ誰となのよ」

「長月達とよ」

「ここでは本当のことを話した。これ位なら問題はないと思ったからだ。」

「ちょっとね。朝のうちにコンビニに行ってね」

「何か買うの？」

「そうなの、限定のお菓子をね」

母の問いに乗ってだ。こう述べたのであった。

「買いに行くのよ」

「そうだったの。ならいいわ」

「ええ。それじゃあね」

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

こう挨拶をして学校に向かう。そのうえで長月達と合流して朝練の前に急いでだった。やることをやってそのうえで部活に向かった。

そして部活が終わって教室に入ると。四人の予想通りだった。

「おい、誰だよ」

「誰がこんなことやっただよ」

「酷過ぎるだろ」

滅茶苦茶に落書きされた神無の机があった。それに黒板にも彼女を中傷する言葉や落書きがこれでもかと書き殴られていた。そのうえだった。

机の中にはゴミ箱にあったゴミが放り込まれていた。何もかもが滅茶苦茶だった。

「これっていじめか？」

「そうだよな」

「いじめだよな」

男子生徒達が険しい顔で言っていた。

「それにしてもこれ酷過ぎるよな」

「ああ、ないぜこれって」

「ちよつとな」

「そうよね」

「こんなことする人がいるって信じられない」

女子生徒達もだった。呆然としながら話す。

「酷過ぎるわよ」

「こんなことするって」

「一体誰が」

「そんなことは今は問題じゃないよ」

「そうよ」

ここぞで。葉月と弥生が出て来て皆に言う。

「こんなのこのままにしてはおけないからね」

「何とかしよう、すぐに」

「それでいい？」

葉月が自分の机の前で呆然となっている神無に対して話した。

「椎葉さんは」

「う、うん」

神無はまだ。呆然となったまま彼の言葉に頷いた。

第二話 部活からその十三

「私がやるから」

「ああ、それはいいよ」

「こんなの一人じゃできないわよね」

葉月だけでなく弥生も彼女に言ってきた。

「だからね。ここはさ」

「私達も手伝うから」

「有り難う」

蒼白になったままの顔だった。しかしそれでも頷くことはできた。

「それじゃあ今から」

「皆も手伝ってくれるかな」

「よかつたら」

二人はクラスメイト達にも声をかけた。

「こんなのこのままにしておけないしね」

「だからね」

「ああ、そうだな」

「それじゃあ」

クラスメイト達もだ。二人の言葉に頷いた。

そのうえで黒板を消して机の中のゴミを処理する。そして机の上の落書きも消そうとする。

だがここでだ。それを消そうとする弥生が困った顔になった。

「これ、油性よ」

「そうね、これって」

「油性よ」

彼女を手伝う女子生徒達もここでそのことに気付いた。

「これ、どうしようかしら」

「シンナーかベンゼンあればいいけれど」

「ああ、それだったらな」

男子生徒の一人が言ってきた。

「俺が倉庫から取って来るからな」

「それで御願いできる？」

「ああ、任せておいてくれよ」

こう弥生達に言うのである。

「是非な」

「ええ、じゃあ御願いね」

弥生はすぐに彼の言葉を受けて言葉を返した。

「それじゃあ」

すぐにその消すものが持って来られる。その中でだ。

ふと弥生はクラスの端にいる如月達に気付いた。そしてだった。

「ねえ如月」

「何？」

「よかつたら手伝って」

こう彼女達に言うのだった。

「机の周り掃除してね」

「掃除？」

「ええ、それを御願い」

こう言うのであった。

「椎葉さんの為にね」

「ああ、御免」

しかしだった。如月はその申し出を断るのだった。

「今無理だから」

「無理って何もしてないじゃない、今」

「それがなのよ」

言い繕いだった。もっと言えば嘘になる。

「これがね」

「これが？」

「今から行く場所があるのよ」

こう言っただけを事実にしてしまう。

「ちょっとね」

「何処になの？」

「先輩のところだね」

そこだというのである。

「今から行かないといけないのよ」

「ラクロス部の？」

「ええ、そうなの」

そういうことにした。嘘に嘘を重ねていた。

「だからね」

「そう、それでなの」

「だから御免ね」

あくまでそういうことにするのだった。

第二話 部活からその十四

「今から行くから」

「うち等もな」

長月も弥生に対して答える。

「今から行って来るわ」

「そう。じゃあまたね」

「ええ、ホームルームまでには戻るから」

こう話してだった。四人はクラスを後にした。そのうえで教室を出てトイレに向かう。そしてその中で誰もいないのを確かめてから大笑いするのだった。

「ねえ、見た？」

「見た見た」

文月が霜月の言葉に対して笑いながら頷く。

「あいつの顔」

「もうこの世の終わりみたいな顔してたわよね」

「ざま見ろつての」

二人で笑いながら話す。

「いい気味よ、全く」

「そうね。ざまを見ろよ」

こう二人で言い合う。そうしてだった。

長月もそれは同じだった。彼女にしても笑いながら言う。

「なあ、うち等だってばれてないしな」

「そうね。それだったらね」

「今度は何をしてやる？」

文月と霜月が長月に対して言う。

「落書きの他には」

「何がいいかしら」

「そうね。それだったら」

如月もであった。やはり笑っている。そのうえでの言葉だった。

「教室のロッカーの中にゴミを入れてやるのもいいし」

「ああ、それもいいな」

「確かにね」

「それも」

こう話してだった。そうしてだ。如月はさらに言うのだった。

「後は。色々あるしね」

「色々か」

「そうよ、あるじゃない」

長月に対しても言う。

「だからゆっくりとやりましょう」

「ゆっくりとかよ」

「とにかくこれだけで終わらせないわよ」

このことはしつかりと言うのだった。

「あいつがこの学校にいられなくなるまでね」

「だよな。何で転校してきたんだよ」

長月は顔を顰めさせてこんなことを言った。

「この学校に来なかつたらいいのにな」

「そうよね、本当にね」

「全く」

それに文月と霜月も応えて頷く。

「鬱陶しいわよね」

「部長にちくつたりして」

「部長も部長よ」

「そうよ、あんな奴にたぶらかされてね」

こう話すのだった。部長よりも神無に対して嫌悪感を向けている。

そしてそれは話せば話す程増幅していくものであった。本人達が意

識する以上にだ。

「せめてラクロス部から消えてもらわないとね」

「そうそう」

「こんなことも言われた。」

「さて、どうしてやる？」

「今度は」

「任せて。色々と考えてるから」

如月が応えた。歪んだ笑みで。

「これからのことはね」

「そう、色々だね」

「考えてくれてるの」

「何かよくわからないけれど考えつくのよ」

これは自分でも不思議だった。如月自身でもわからないがそれでもやることは次から次にと頭の中に思い浮かんできているのだ。

そしてだ。如月はこんなことも言った。

「部長や弥生達にはばれないようにね」

「ああ、それはね」

「絶対に気をつけないとね」

「そうだよな」

三人も彼女のその言葉にはすぐに頷いた。

「部長も弥生もそういうのに五月蠅いしね」

「さつきだつてすぐに動いたし」

「あの二人は特にだよな」

「あと葉月もね」

如月は彼もだというのだった。

「注意しないとね」

「そうそう、何かと障害は多いわね」

「見つからない為には」

「けれどさ、注意してやればいいじゃん」

長月がこう言った。

「見つからないようにな」

「そうよ。絶対に見つからない」

如月もこれは強く言った。

「それに注意してね」

「やっていきましよう」

「今はね」

「ああ、それじゃあな」

またそれぞれの口で言う三人だった。

「今度もまたね」

「どんどん追い詰めてやろう」

「こうなったらね」

こう話をしてだ。今はそのトイレから出て何食わぬ顔で教室に戻った。四人は気付いていなかった。彼女達の行いがどうなってしまうのか。わかってもらいなかった。

第二話 完

2010・6・27

第三話 歪んでいく心その一

第三話 歪んでいく心

今度はだ。下駄箱の中だった。

「そんな……」

神無は自分の下駄箱を開けてだ。またしても蒼白になった。

「本当に誰？こんなことするのって」

「ねえ」

「うん」

丁度そこにいた弥生と葉月がだった。彼女の後ろから険しい顔で頷き合うのだった。

「ここはね」

「すぐになおそう」

こう言っただ。その蒼白になり震えてしまっている神無の横に来てだ。そうしてそのうえでその下駄箱からすぐにゴミの山を出したのだった。

「えっ……」

「困った時はお互い様だから」

「そういうこと」

こう言っただった。ゴミを捨てるのだった。葉月が言ってきた。

「僕シンナーかベンゼン取って来るよ」

「御願いできる？」

「うん、すぐに行つて来るよ」

ロッカーにも落書きがあった。それをなおそうというのである。

それでだ。葉月が行った後でだ。弥生は神無に対して話す。

「ねえ」

「何？」

「ゴミはなおしたし落書きは消えたけれど」

「う、うん」

「それでも。これはちよつとね」

見ればだった。何かで激しく叩いたりした後もあった。それも見たのだ。

「すぐにはなおせないから」

「どうしたら」

「生徒会に扉の交換言えばいいわ」

「それでいいの」

「そう、それで済むから」

それだけでいいと神無に話すのだった。

「安心してね」

「有り難う」

「お礼はいいのよ」

「いいの？」

「だから困った時はお互い様よ」

「ここでも微笑んで言うのであった。」

「そういうことだから」

「それでなの」

「そういうことよ。気にしないで」

「こう言ってまた微笑みを向ける。」

「わかったわね」

「うん、それじゃあ」

「じゃあ落書きを消して教室に行こう」

神無を護る様に斜め後ろに位置してそつと声をかけた。

「それでいいわよね」

「ええ」

こうして厄介ごとを終わらせてそのうえで教室に入った。教室では今日は何もなかった。だが弥生はすぐに怒った顔でだ。シンナーを戻してそのうえで来た葉月と一緒に怒った顔で如月に対して話した。

如月は何食わぬ顔で二人の話を聞いている。自分達がやったとは

全く言わない。そうしたことを全て隠してそのうえで応じていたのだ。

「誰がやったと思う?」

「悪質過ぎるね」

その弥生と葉月が如月に言う。

「今度は下駄箱だし」

「明らかにいじめだしね」

「そう?いじめかしら」

しかしだった。ここで如月は何も知らないふりを装ってこう返した。

「あれって」

「それ以外の何なのよ」

「あれは絶対にいじめだよ」

二人は怒った顔で話す。

「それ以外の何でもないわよ」

「そうだよね」

「いじめね。というよりは」

「というよりは?」

「何かあるの?」

「あの娘が嫌われてるとか?」

何気に自分自身のことを話した。当然二人はそれに気付かない。

「それでやられてるんじゃないかしら」

「それはあるかも知れないね」

葉月はそのことは認めはした。

第三話 歪んでいく心その二

「それでもね」

「それでも？」

「やっていいことと悪いことがあるから」

咎める顔であった。しかしそれは犯人に対してである。そうした意味では如月に対してだがそれでも彼女が犯人とは気付いていない。「教室のこともロッカーのことも絶対にやってはいけないことだよ」「絶対になのね」

「そう、絶対にね」

その通りだというのである。

「相手が誰でも絶対に許さないから」

「私もよ」

弥生もだった。怒った顔である。

「こんなこと絶対に」

「二人共敵し過ぎない？」

如月は自分がしていることなので眉を顰めさせてこう返した。

「それって」

「じゃあ聞くわよ」

弥生はむっとした顔でまた如月に言ってみせた。

「如月は自分がそうしたことをされたらどう思うの？」

「どうって？」

「前先輩にいじめられていたでしょ」

「う、うん」

その話をされると内心ぎくりとなった。実際に今でも嫌な思い出である。できることなら思い出したくはない、そうしたものであるのだ。

「それで。嫌だって思ったのよね」

「それはそうだけれど」

「じゃあわかる筈よ。あんなこと絶対にしたら駄目よ」
「絶対に許せないよ」

葉月も言う。

「何があってもね」

「だから。あいつにも問題があるかも知れないし」

「嫌ってもいいけれどやったら駄目なことがあるのよ」

「今の城崎の主張はちょっとおかしいよ」

二人はすぐに言った。

「何でそんなこと言うのよ」

「この前までいじめは絶対に駄目だって言ってたじゃない」

「それはそうだけれど」

二人にそう言われると弱かった。無意識のうちに顔を下にやっってしまう。実際のところ気は弱いままで何も変わっていないのだ。

「それでも」

「とにかくね。いじめられていた時のことを忘れないで」

「それを他の人にしたら絶対に駄目なんだよ」

「う、うん」

俯き加減のまま頷きはした。

「そうなの」

「そう。だからね」

「あんなことをしている奴は誰か絶対に突き止めてやる」

葉月の方が強気で怒っていた。

「何があってもね」

「そうよね、本当にね」

二人は完全に怒っていた。如月にもそれはわかった。だがそれでももう彼女は自分をコントロールできなくなっていた。そしてそれに気付いてもいなかった。

それだ。また三人と話すのだった。

「そうか、弥生と葉月がな」

「あの二人には絶対に見つからないようにしよう」

四人で屋上にいる。そこで話をしているのである。

「見つかったら絶対にまずいことになるよ」

「そうよね。先生にチクられたりしたら大変だし」

「それは止めておく？」

「おおっぴらにやるのはね」

それは、というのだった。文月と霜月の言葉だ。

「もっと陰に隠れた。二人に見つからないのでいきましよう」

「具体的に何をするんだよ」

「靴を隠すとかね」

まずはそれであった。

「鞆の中に何か入れるとか教科書に落書きすつとかね」

「そうするの」

「それでいくの」

「そう、それでどう？」

こう三人に対して話す。

第三話 歪んでいく心その三

「靴の中に画鋲入れるのもいいし」

「そうだな。それいいよな」

それにだ。最初に長月が頷いた。

「じゃあまずは靴の中に残飯でも入れてやろうぜ」

「あっ、いいねそれ」

「腐った蜜柑とかね」

文月と霜月も笑顔で続く。

「それじゃあ。そういつのでいく?」

「これからは」

「暫くはね。二人に見つかつたら本当にまずいから」

如月が気にしているのはそのことだった。とにかく見つからないことを意識しているのだ。それもかなり強く意識していた。

「それじゃあね」

「よし、じゃあそれでな」

長月がまた頷いてみせた。

「そういつのでいくか」

「うん、それじゃあ」

こうしてだった。四人はまた動いた。早速部活の時間の後だ。

「そんな・・・」

「どうしたの?」

着替えを出そうと自分のロッカーの靴を開けた神無が愕然とした時にだ。部長の若藤皐月が来て声をかけた。彼女も一緒に部屋にいたのだ。

「何かあつたの?」

「靴の中に」

沈んだ顔での言葉だった。

「生ゴミが」

「えっ、今度は鞆の中になの!？」

「はい………」

こう臯月に話すのだった。

「ゴミが入れられてました」

「酷過ぎるわね」

臯月はそれを聞いて目を完全に怒らせた。

「それはまた」

「どうしたら」

「まずはゴミを捨てて」

怒ってはいたが冷静だった。すぐに落ち込んでいる神無に対して話す。

「そうして」

「ゴミをですか」

「そう、それで気になるようだったらアルコールかオキシドールで拭いて消毒してね」

こうしたことと言った。

「そうするといいわ」

「わかりました」

「問題はこんなことを誰がしたかよ」

臯月は腕を組んだ。そしてそのうえでまた言ったのだった。

「それだけねど」

「悪戯ですか？」

「ラクロス部にこんなことをする娘はいないし」

この時は彼女もこう思っていた。

「とてもね。他の部の人かしら」

「他の部ですか」

「女の子だけとは限らないわね」

臯月は話を決め付けなかった。しかもかなり広く考えていた。

「これはね」

「女の子だけとはですか」

「変質者は色々いるじゃない」

「変質者はですか」

「そうよ、色々いるわ」

こう神無に対して話す。

「だから。男の子が忍び込んでね」

「奏してこんなことをするんですか」

「あくまで可能性だけだね。そういうケースもあるわ」

皐月は真剣に考えていた。自分のことではない。しかしそれでも自然と神無の立場に立ってそのうで考えていたのだ。彼女の為にである。

「本当に誰なのかしら」

「凄く怖いです」

「そうよね、こんな酷いことをする人間が何処かにいる」

「はい」

「それで椎葉さんにこんなことをする。それはね」

「何か教室でも起こってまして」

「クラスでもなのね」

それを聞いた皐月の目が動いた。

「そうなの」

「誰かが私を」

「できたら証拠とか欲しいけれど」

皐月はさらに行った。

第三話 歪んでいく心その四

「ここはね」

「証拠ですか」

「手掛かりになるから」

「だからだというのである。」

「それでだけれど」

「それはもう」

「消したり捨てたのね」

「はい」

弱々しい声で頷く。それはまさにその通りだった。

「そうです」

「そう。だったらいいわ」

それなら仕方ないとした。内心いささか残念ではあったがだ。

「それじゃあね」

「すみません」

「謝る必要はないわ。けれどね」

それでもだというのであった。皐月はさらに真剣な顔で述べた。

「こんなこと絶対に許さない。見つけ出して絶対に懲らしめてやるわ」

「部長……」

「椎葉さん、安心して」

その真剣な顔で神無を見ての言葉だった。

「私がいる限り。絶対に犯人を見つけて出すから」

「有り難うございます」

「そしてこんなことは絶対にさせないわ」

明らかにこうした悪質な行動を嫌悪していた。それがよくわかる言葉だった。

「本当にね」

そしてだった。部活の前に部員達を集めてこの話をするのだった。そしてこう言い切った。

「いい？私はこうしたことは絶対に許せないから」

「宣戦布告の如き口調であった。」

「犯人は絶対に見つけ出して懲らしめるから」

「っていつか悪質過ぎますよね」

「そんなことって」

四人以外の部員達はだ。彼女の言葉を聞いて顔を見合わせて話す。臯月が立っているその前に体育座りをして集まっているのだ。

「誰がやったのかしら」

「うちの部員？」

「そうかも」

「決め付けるのはよくないわ」

「臯月は疑いの言葉はすぐに否定した。」

「それは止めて」

「は、はい」

「わかりました」

彼女の嗜めを受けてそれはすぐに止められた。しかしそれでも話は続く。

「それは」

「そういうことよ。それでね」

「手掛かりですよね」

「私達で」

「そうよ、探して」

それを言うのだった。

「それで犯人を絶対に探し出すから」

「わかりました」

「私達もこんなこと絶対に許せませんし」

「本当に」

四人以外の部員達はその言葉に頷いた。四人もいるのだが彼女達

は今何も言わない。そしてそこには表情すら見られなかった。

「絶対に見つけ出します」

「そうですね」

「御願ひ。ただしね」

ここであった。皐月は縛りをしてしまった。

「内密にね。話を大袈裟にしないで」

「大袈裟にですか」

「そうしないんですか」

「椎葉さんのことを考えて」

その被害者である神無のことをというのだ。

「考えてあげて。皆もこうしたことをされてたら人に知られたくな

いでしょ」

「はい、それは」

「確かに」

「私に約束して。このことは絶対に部員以外の誰にも話さない」

このことを念押しさせた。

「いいわね、約束できない人は今後このことに対して何もしない」

「何も、ですか」

「それに関わるな、ですね」

「そうよ。関わらないで」

こうまで言うのであった。

第三話 歪んでいく心その五

「だから約束して。ラクロス部だけの話にするって」

「わかりました」

「それで」

それを受けた部員達はだ。その多くが言った。

「絶対に他の人に喋りません」

「それ、約束します」

「有り難う」

皐月は彼女達の言葉を聞いてだ。満足した顔で頷いたのだった。

「それじゃあ」

「はい、それじゃあ」

「絶対に見つけ出して」

「秘密にします」

「御願いますわね」

こんな話をしてから部活に入る。如月達はこの時は何も言わず静かにしていた。そして部活が終わってからだ。マクドナルドで知り合いがいらないのを見計らってから。そのうえで小声でこそこそと話をするのであった。

「どうする？」

「どうするって？」

如月が霜月の言葉に応えた。それぞれチキンナゲットやハンバーガー、コーラにマックシェイクといったものを楽しみながら話している。

「いじめのこと？」

「そうよ。部長本気になっちゃったじゃない」

霜月は危惧する顔でこう言った。

「若し見つかったら」

「大丈夫よ」

如月はその霜月を安心させるように言った。

「それはね」

「見つからないってどういうの？」

「そう、部活ではもうおおっぴらなのは止めてね」

そうするとうのだった。

「それでいけばいいから」

「けれどそれでもよ」

今度は文月が言ってきた。霜月と同じ顔になっている。

「クラスでも弥生とか怒ってるじゃない」

「だよな。あいつああいうこと嫌いだしな」

それを長月も指摘する。

「絶対に見つけようとするぜ」

「弥生の性格はあんたが一番よくわかってるでしょ？」

文月はその如月を見ながら話す。彼女は長月と並んでその文月、そして霜月と向かい合う形で席について話をしているのである。

「ずっと一緒にいるんだから」

「勿論よ。よくわかってるわ」

その通りだと答える如月だった。

「それはね」

「じゃあわかってるんだったら」

「どうすればいいのよ、弥生には」

文月と霜月はその怪訝な顔で如月に問うた。

「見つかったら絶対に怒るわよ」

「室生だっているし」

「葉月ね」

如月は室生と聞いて言った。

「あいつもいるわね」

「二人がいるから」

「二人に見つからないようにしないと」

「だよなあ」

長月は如月の横で腕を組んでいた。

「続けるんだろ？ いじめ」

「勿論よ」

如月は長月の今の問いにすぐに返した。

「止める筈ないじゃない。絶対に許さないわよ」

「それじゃあ余計に見つかからないようにしないとな」

「おおっぴらじゃないといいのよ」

ここで如月は言った。

「そんなゴミとか入れたり落書きとかしなかったらね」

「じゃあどうするのよ」

「一体」

「落書きにしてもね」

まずはそこから話すのだった。

「机とか下駄箱とかロッカーじゃなくてね」

「ええ」

「何処にするのよ」

「教科書とかノートとかね」

そこだというのである。

「他には。最近よくあるネットに書くとか」

「ああ、それいいな」

長月もそれを聞いて言った。

「あれ目立たないうえに効くらしいな」

「そうよ、おおっぴらにやらなくても色々あるのよ」

如月はどす黒くなっているその笑みで話を続ける。

第三話 歪んでいく心その六

「本当に幾らでもね」

「じゃあネットに書いて」

「それと教科書に落書きね」

文月と霜月はまずはこの二つを言った。

「それでいけばいいね」

「確かにね」

「じゃあ暫くそついうのでいくか」

長月もここで頷いた。

「そつした隠れるのでな」

「そつよ。それで部長や弥生達が警戒を解いたらね」

「また派手にやるのね」

「そつするのね」

「そつよ、やってやるわ」

如月はこう話すのだった。

「それでいいわよね」

「ええ、そつね」

「それじゃあね」

文月と霜月が醜い笑顔で応える。そつしてであった。

長月がいじめとは違うことを言ってきた。

「そついえばな」

「どうしたの？」

「クラスにまた転校生来るんだつてな」

こつ三人に話すのだった。

「何でもな」

「ああ、また来るの」

「うちのクラスに」

「そつらしいぜ。今度は男らしいな」

長月は三人に対して話す。
「また椎葉みたいな奴じゃねえかな」
「どうかしらね。見てみないとわからないわね」
如月は長月に対してこう返した。
「まあ気にしなくていいじゃない。男だったら」
「格好いいのだったらいいけれどね」
「それか頭がいいかね」
文月と霜月は笑いながら話した。
「そういうのだったらいいけれどね」
「ヲタクだったらちよつとね」
「ヲタクって最近多いしな」
長月も笑いながら話す。
「室生にしても結構ヲタクに見えるしな」
「ああ、そういえばそうね」
如月は長月のその言葉に頷いた。
「けれど中身は結構熱いのよね」
「だよなあ。文科系なのにな」
長月はここで首を捻った。
「あれでな」
「そうそう、喧嘩は強そうじゃないけれどね」
「それでもね」
文月と霜月も話す。
「あれでかなりね」
「熱いからね」
「外見じゃわからないからね」
如月は葉月のことを頭の中で考えながら述べた。
「だからあいつは要注意」
「そうなるよな」
長月は如月のその言葉に頷いて応えた。
「弥生もなあ」

「そつよね」

「結構見つかつたらやばい奴多いし」

文月と霜月は長月のその言葉にも頷いて述べた。

「そこは気をつけないとね」

「面倒なことになるし」

「弥生が一番厄介よ」

如月はとりわけ彼女のことを気にしていた。

「あの娘鋭いし。口うるさいところがあるから」

「こつちにとつちや鬱陶しい話だよな」

長月は今度はうんざりとした顔になっていた。そのうえでの言葉であつた。

「あいつがむかつくのが悪いつてのによ」

「全くよ。あんな嫌な奴いないわよ」

如月の顔がここで歪んだ。だが彼女自身はそのことに気付いてはいない。

「頭がいいことを鼻にかけて。部活でも部長に取り入ってね」

「全く。転校生の癖にね」

「全然遠慮ないし」

文月も霜月もであつた。自分達の誤解には気付いていなかった。

誤解は時として確信となる。だがそれは誤った確信でしかないのだ。がそれに気付かないのだ。

第三話 歪んでいく心その七

「そんな奴だから何をしてもいいじゃない」

「そうそう」

「だよな。そういえばよ」

長月がここで言った。

「転校生っていえばな」

「ああ、また一人来るんだって？」

「確かそうよね」

文月と霜月は今度は長月の言葉に応えた。

「一体誰かしら」

「男？女？」

「確か男らしいぜ」

長月はこう二人に答えた。

「何か名前はな」

「うん、何ていうの？」

「名前は」

「岩清水とかいったけれどな」

長月は二人の問いに首を傾げさせて考える顔で返した。

「何かそういう名前だったな」

「岩清水？」

「下の名前は？」

「それはわからないんだけどな」

首は傾げさせたままだった。考える顔でもある。

「そろそろ学校にも来るらしいぜ」

「どんな奴かしらね」

「格好よかつたらいいけれどね」

二人の表情は今普通の女子高生のものだった。少なくとも歪んだものはなく至って明るく日常的なものであった。だがそれにも彼

女達は気付いていなかった。

「そうよね」

「私達今フリーだし」

「彼氏ねえ」

如月は二人の話に入って目を数回しばたかせた。

「私は今はちよつと」

「いない？」

「あんたも？」

「うん、中学の時に別れてね」

こう三人に答えたのだった。

「それつきりよ」

「そういえば二年の時にはいたよな」

「ええ、あの時はね」

長月の問いに対しても返した。彼女もまた考える顔になっている。

「キスもしていなかったけれどね」

「何だ、プラトニックだったのね」

「彼とは」

「うん、同じ陸上部が縁で」

それで付き合っていたというのである。

「卒業してそれで終わりだったわ」

「高校変わったらね。それで終わりになるわよね」

「みたいね。一緒のところじゃないと」

文月と霜月は今一つ実感できていない顔であった。二人はまだ交際相手やそういったものを持っていないからこそその言葉と顔であった。

そしてであった。二人はさらに話すのだった。

「それで自然消滅しちゃうのね」

「あっけなくって感じで？」

「うん、そうなのよね」

如月は首を捻りながら述べた。

「やっぱり」

「自然消滅ねえ」

「それで終るのね」

「うちもそうしたことは知らないけれどな」

長月もこうした意味では二人と同じであった。交際したことはなかった。

「ちょっとな」

「けれど如月もキスとかしていないっていうし」

「結局何もなしてことなのね」

「ううん、キスとかはね」

如月の顔は晴れないものになっていた。彼女はそうしたことにはまだまだ疎かった。

第三話 歪んでいく心その八

「まだ早いとかって思ってたし」

「中学生じゃね。どうしてもね」

「そうよね」

「だからよ。それで」

如月はまた二人に答えた。

「友達みたいなものだったわ」

「友達ねえ」

「それじゃあ私達と同じ感じだったの？」

「うん、そうなの」

実際にそうだと答えた如月だった。

「付き合ってるって言えるものじゃなかったかも」

「そうだったの」

「やっぱり」

「中学校の時はよかったわよね」

「こんなことも言う如月だった。」

「皆一緒に楽しかったし」

「気楽だったしね」

「本当に」

「陸上部よかったよな」

実は四人は中学の時も同じ部活だったのだ。陸上部にいてそこで楽しい時間を過ごしていたのである。彼女達の青春はこの頃まであったのだ。

「あの時に戻れたらな」

「本当にね」

如月は長月のその言葉に頷いた。

「そう思うわ」

「今はあいつがいるし」

「むかつくわよね」

「あの頃は本当によかったけれど」

「一人いるだけでね」

四人は口々に言っていていく。

「こんなに気分が違うなんてね」

「そう、だからね」

文月が歪みきった顔で話す。

「あいつがもういられないようにしようよ」

「いられないって?」

「だから。いられないようにまでしてやるのよ」

こう霜月に対しても言う。

「学校にね」

「学校になの」

「転校させるまで追い詰めてやるのよ」

その歪みはさらに続く。

「そしてやるのよ」

「ああ、それいいわね」

霜月もであった。歪んだ顔で頷いた。

「あいつがいなくなれば中学校の時みたいになるからね」

「だよな。あいつさえいなければな」

長月も二人に続いて頷く。

「うち等また楽しくやっていけるしな」

「そうよね。それじゃあもつともつとやってやるっ」

如月も同じだった。やはりその顔は歪みきっている。しかも自分達ではその歪みには気付かない。何一つとして気付くことはなかった。

「あいつにね」

「明日からね」

「そうしてやるっよ」

「絶対にな」

三人は如月のその言葉に頷いた。そうしてであった。

「それで楽しい高校生活にするのよ」

「あいつを追い出してね」

「やってやるうぜ」

こんな話をして歪みきった顔で頷き合う。それがこの時の彼女達だった。

本人達は気付かない。そうして次の日の朝。

如月は学校に向かおうとする。その時だった。

「さて、と」

「ああ、また見るのね」

「うん」

明るい顔で母の言葉に頷く。彼女は制服に着替え身支度を整えた後で家のリビングに向かった。そしてそこで多くの賞状や写真を見るのだった。

見ればその賞状はどれも彼女の名前が書かれている。幼稚園の頃から中学校に至るまで絵や書道のコンクールでの入賞、それに陸上部でのものもある。それに彼女と家族や友人達が映っている写真もであった。

第三話 歪んでいく心その九

そうしたものを見ながらだ。彼女は微笑んでいた。それは実に満ち足りた笑みだった。

「この賞状とか写真を見ないとね」

「一日がはじまらないっていうのね」

「そうなの」

台所にいる母に対して言う。

「お母さんとの写真もあるわよ」

「それもいつも見てるのね」

「そうよ、毎日ね」

実際に見ていた。今日もだ。

「見ないとはじまらないから」

「幼稚園の頃からね」

「お母さんだけじゃなくてお父さんも」

写真の中のまだ若い父も見る。

「それに睦月もね」

弟もだった。彼女は写真から見ていた。

「こうして一緒にいる写真を見ているとね」

「それにお友達もよね」

「うん」

見れば弥生もいる。それに長月達もだ。写真の中の彼女達は今の如月と同じく満ち足りた笑みを浮かべてそのうえで映っているのだ。つた。

その写真を見ながらだ。如月はまた言った。

「学校に行く時と寝る前には絶対だね」

「見ないと、っていうのね」

「そうなの」

まさにその通りだった。

「だから。これからね」
「学校に行くのね」
「行って来るわ」
「また母に告げる。」
「これからね」
「行ってらっしゃい」
母の明るく優しい声が聞こえてきた。
「車に気をつけてね」
「うん、じゃあ」
「お姉ちゃん」
「ここだった。弟の睦月の声も聞こえてきた。」
「行ってらっしゃい」
「行って来るよ」
「今日も遅いの？」
「部活があるからね」
弟に対しても明るい声で返す。
「だからね」
「そうなんだ」
「また早く帰る時があるから」
「寂しそうな声を出す弟に対しても言葉だ。」
「その時にまたね」
「ゲームしようね」
「弟は姉に対して言った。」
「新作のゲーム、またね」
「そうね。野球ゲームにする？」
「パワプロもいいけれど」
「パワプロじゃなくて？」
「野球ゲーム以外がいいな」
「それだというのである。」
「他のがいいよ」

「他のつていつたら？」

「桃鉄がいいよ」

こう姉に話す。所謂双六系のゲームである。

「あれの新作、二人でしようよ」

「そうね。桃鉄ね」

桃鉄と聞いてだった。如月も笑みで応える。

「いいわね」

「そうでしょ？だから二人でね」

「やりましょう、今度ね」

「約束だよ」

弟の声は今度は切実なものになっていた。見れば台所のところのテーブルに小柄な可愛らしい顔立ちの男の子がいる。まだ小学生である。

「二人でね」

「いいわよ。それにしてもね」

「それにしても？」

「あんたも好きね」

笑顔でまた弟に言ったのだった。

「そんなにお姉ちゃんとゲームしたいの？」

「うん」

返答は簡潔だった。

第三話 歪んでいく心その十

「そうだよ」

「どうしてなの？それは」

「だってお姉ちゃん優しいから」

実際に彼女は弟にとっては優しくいい姉である。これまで怒ったこともいじめたことも泣かしたこともない。いつも優しくしているのだ。

「お勉強だつて教えてくれるじゃない」

「そんなの当たり前じゃない」

これは実際に彼女が思っていることだ。

「それは」

「当たり前なんだ」

「そうよ、当たり前よ」

また弟に対して話した。

「それはね」

「そうかなあ」

「だって。弟じゃない」

その彼への言葉だ。

「だったらね。優しくするのはね」

「当たり前なんだ」

「そうよ。それじゃあ本当にね」

「約束だよ」

「指きりげんまん」

実際にそれはしていない。しかし心でそれをするのだった。

「嘘ついたら」

「あつ、それはいいよ」

弟の声がそこから先を遮った。

「それはね」

「針千本はいいの？」

「だってお姉ちゃん嘘つかないから」

その姉への言葉だ。

「昔からね」

「そうかしら」

「そうだよ。お姉ちゃん嘘言わないじゃない」

「それはそうね」

弟だけでなく母の言葉も来た。

「如月は嘘つかないからね」

「だったらいいけれど」

二人の言葉にまんざらでもないがいささか気恥ずかしい顔で返した。

「けれど私だって」

「だって僕に嘘ついたことある？」

睦月が今言うのはこのことだった。

「ないよね」

「だって睦月は弟じゃない」

理由はそれだけで充分だと。そういうのだった。

「だからね」

「弟だからなんだ」

「たった一人の弟でしょ。だからよ」

「大事に思ってるのね、睦月よ」

「ええ」

また母の言葉に対して答える。

「だからだけれど」

「けれどあんたは子供の頃から素直だったじゃない」

母は彼女を全肯定してみせた。これは親の身贔屓ではなかった。

実際に如月という娘を見てそのうえでこう言ったのである。

「だからね」

「だったらいいけれどね、本当にね」

如月はここでも気恥ずかしい顔を見せる。

「私が嘘をつかない娘なら」

「そうよ。それじゃあ見たわね」

「うん」

満面の笑顔で頷く。写真も賞状も今丁度見たところだ。

「今から行くから」

「行つてらっしゃい」

またこの言葉が出される。今度は母だけでなく弟の睦月からもだ。

「車に気をつけてね」

「それだけはなのね」

「そうよ。交通事故にだけは気をつけて」

それはだというのだ。絶対にだ。

「それじゃあね」

「行つてきます」

こうして気分よく家を出る。笑顔は賞状や写真から離れた。

その時だった。如月が弥生や長月達と笑顔で映っている写真のケ

ースがだ。

端にヒビが入った。それは老巧化からだった。

第三話 歪んでいく心その十一

だがそれでもだ。ヒビが入ってしまった。しかしそのことには如月が気付くことはなかった。

そのうえで学校に向かうとだ。最初に弥生に会った。

「あれっ、早いよね」

「ちよっと寄るところがあつてね」

登校中の朝の道でだ。笑顔で話をするのだった。

「それでなの」

「寄るところって？」

「朝限定で売ってるものがあるのよ」

「朝限定っていったら」

そう聞いてだ。如月が連想したものは。

「お豆腐？」

「そう思うの？」

「だって朝早くっていったらお豆腐じゃない」

これは豆腐屋のことである。豆腐屋の朝が早いことは如月も知っている。実は彼女は豆腐が好きで何かという食べているのである。

「それじゃないの？」

「まあお豆腐は使ってるわね」

「やっぱり」

「けれどお豆腐じゃないの」

「どういうこと？それって」

「豆腐のお菓子なの」

弥生はこう如月に話した。

「それなのよ」

「お豆腐のって」

「お豆腐屋さんがお菓子を作りだしたのよ」

「何か変わってるわね」

如月は弥生のその話を聞いて思わず首を傾げさせてしまった。彼女にとつては今一つどころか何が何なのか見当のつかない話だった。

「それって」

「やっぱりそう思うっ？」

「っていか何でそうなるのよ」

「最近多いけれどね」

「多いの」

「お豆腐を使ったお菓子はね」

それはだというのだ。

「増えてきているわよ」

「そうなの」

「ほら、豆乳あるじゃない」

今度話に出て来たのはそれだった。

「それから作るのよ」

「豆乳ねえ」

「それから作ったアイスね」

「今から買いに行くのはそれ？」

「そう、それ」

まさにそれだというのだった。

「それを買うに行くのよ」

「豆乳アイスって」

「これが結構美味しいらしいのよ」

「会つもの？それって」

「話を聞くとね」

会つというのだ。少なくとも弥生はそう述べている。

「美味しいらしいわ」

「うっん、何か頭の中でつながらないけれど」

「けれどお豆腐って癖ないじゃない」

豆腐の特徴である。淡泊で食べやすい。そのうえ栄養があるといふ非常に優れた食品である。だから昔から食べられているのだ。

「豆乳だってね」

「だからお菓子にもなの」

「まずは食べてからよ」

弥生の今度の言葉はこれだった。

「食べればわかるわ」

「食べれば、ね」

「だから買ってみるのよ。如月もどう？」

「そうね。アイス好きだし」

彼女はアイスクリームも好物なのだ。豆腐と同じ位である。

「いいかも」

「じゃあお金出してくれたらね」

「買ってきてくれるの」

「如月の分もね。それでどう？」

「それじゃあ」

それを聞いてだった。動きはすぐだった。

「御願い」

「ええ」

弥生は微笑んで彼女のその言葉に応えてくれた。

第三話 歪んでいく心その十二

「それじゃあね。お金は？」

「はい」

如月も早速出てきた。五百円であった。

「これだけあればいいよね」

「うん、充分よ」

弥生は優しい微笑みで彼女のその言葉に応えた。いつもの笑顔だ。そしてだった。五百円を受け取った。それからまた話すのだった。

「おつりは帰って来るから」

「五百円で充分なの」

「アイスよ。そんなに高い筈ないじゃない」

如月にこつても言ってきた。

「だから安心して」

「わかったわ。じゃあおつりでね」

「どうするの？」

「おつりは取っておいていて」

そうしてからというのだった。

「後でそのお店の場所とか教えて欲しいけれど」

「お豆腐屋さんの？」

「弟にも買ってあげたいから」

「ああ、睦月君に」

「そう、美味しいものは一人で食べるものじゃないじゃない」

これは彼女の考えだ。美味しいものは自分で独占しては駄目だというのだ。皆で食べてこそいいものだ。昔からこう考えているのである。

「だからね」

「昔からそうよね」

「そうかしら」

「如月のいいところよ」

褒め言葉であった。それを今言うのだった。

「そこはね」

「私の、なのね」

「だって。いつも弟さんとか私達のことを気にかけてるじゃない」

これは本当のことだ。如月は弟思いで友達思いの女の子なのだ。

だから弥生もいつも彼女の傍にいてそのうえで笑顔を向けているのである。

その彼女にだ。弥生はまた声をかけた。

「それじゃあね」

「後で教えてね」

「うん、それで弟さんになのね」

「買ってあげるわ。けれど」

ふとだ。気付いたのだった。

「お豆腐屋さんよね」

「ええ」

「じゃあ。朝早くでないと駄目よね」

気付いたのはこのことだった。豆腐屋である。豆腐屋はとにかく朝が早い。如月は今このことに気付いたのである。思い出したと言つてもいい。

「やっぱり」

「そうよ、だから私も今から行くのよ」

「それじゃあ。放課後とかは」

「お店開いてないと思うわ」

「そうよね、やっぱり」

このことにまた話すのだった。

「それって」

「けれど土曜とか日曜もお店は開いてるから」

「そうなの」

「だから安心していいわ」

買うことについてはというのだ。

「ちゃんと買えるから」

「それじゃあ」

「さて、じゃあ今から行くから」

弥生は微笑んで如月に述べた。

「また教室でね」

「うん、それじゃあね」

「またね」

こう話してであった。如月は今は弥生と別れた。そのうえで部活の朝の練習に参加する。本来の彼女の顔に戻っていた。一時であっても。

第三話 完

2010・7・28

第四話 岩清水健也その一

第四話 岩清水健也

「これ美味しい」
「そうでしょ？」

教室でだ。如月と弥生は向かい合って座っていた。そうしてそのうえで豆乳のアイスを食べていた。それは雪の様に白い綺麗なアイスであった。

「これ人気あるのよ」
「癖、ないわね」

如月はそのアイスを食べながら述べた。
「本当に」

「豆乳だからね」
「豆乳だから癖がないのね」

「そうよ。それにね」
「それに？」

「身体にもいいのよ」
弥生はにこりとして今度はこのことについて言ってきた。

「そちらもね」
「いいの」

「そう、いいの」
「そうだといいのだ。」

「身体にもね」
「ああ、豆乳だからね」

「お豆腐は身体にいいから。そうした意味でもね」
「このアイスっていいのね」

「そうよ。味だけじゃないの」
弥生はこのことを強調する。

「だからね」

「いいのね」

「そういうこと。アイスだけじゃないし」
「ここであった。弥生はこんなことも言ってきた。」

「それだけじゃね」

「アイスの他にも売ってるの」

「クッキーとかもあるわよ」

豆乳のクッキーだというのだ。

「他にもケーキとかタルトとかね」

「あれっ、そんなのも作られるの？」

「そうなのよ。何でもお店に嫁いできた若奥さんが元々お菓子屋さんの娘さんでね」

そうした経緯だというのだ。

「それでなのよ」

「ふうん、そうなの」

「面白いでしょ、お豆腐とお菓子が一緒になるなんて」

「最初はびっくりしたけれど食べてみると」

美味い。舌は嘘を吐かない。

「成程ねえ」

「どう？クッキーとかケーキも好きよね」

「うん、大好き」

如月の好物である。女の子なら大抵そうだが彼女もお菓子好きなのだ。それもかなりである。おやつは欠かさない程である。

「じゃあそういうのも」

「買うといいわ。美味しいからね」

「うん、そうするわ」

「何度も言うけれど身体にもいいから」

「だから余計になのね」

「そう、いいのよ」

豆腐について強く勧めるのだった。

「だからね」

「うっん、それにしてもね」

「やっぱり違和感あるのね」

「あるわね。お豆腐のお菓子なんて」

「しかもスイーツだしね」

「せめて和菓子だったら納得できたかも」

自分でこう話す如月だった。話すその間も首を傾げさせ続けている。

「けれどね。スイーツだから」

「ちよつと……なのね」

「世の中何が出来るかわからないわね」

「そういうものよ、世の中って」

「そうなのね」

「まあそれでだけれど」

弥生はいぶかしむ如月に対してだ。ここでさらに言ってきた。話の主導権は彼女が握っていることは間違いなかった。これはいつものことだ。

「皆で食べてね」

「このアイスも他のもね」

「そういうこと。いいわね」

「わかったわ」

如月は弥生の今の言葉に頷いた。

「それじゃあね」

「そうしてね。じゃあ残り食べましょう」

「ええ」

こんな話をしながら朝のその豆乳アイスを食べる。そしてそれから。如月は机を移ってだ。今度は長月達と四人でこのアイスやお菓子のことを話した。

第四話 岩清水健也その二

「へえ、弥生やるなあ」

「そうよね。お豆腐のお菓子なんてね」

「面白いの見つけてきたじゃない」

長月だけでなく文月と霜月もそのお菓子に対して笑顔になる。

「そんなのがあったらな」

「私達も食べようか」

「そうする？」

三人も笑顔で話す。

「そのお豆腐のお菓子ね」

「お店の場所聞いてね」

「ああ、それはね」

如月は三人に対してすぐに答えた。

「もうわかってるから」

「えっ、わかってるの」

「それも」

「ええ、わかってるわ」

笑顔でそうだというのだった。

「もうちゃんとね」

「ああ、弥生からだな」

長月は彼女がどうしてそれを知っているのかすぐに察した。

「それでだな」

「ええ、そうよ」

如月もその通りだと答える。

「それでなの」

「成程ね。それじゃあ」

「私達もすぐにそこに行けるわよね」

「そうよね」

今度は文月と霜月が笑顔で言ってきた。四人は同じ机を囲んでそのうえで笑顔でいる。「ごく普通の学園生活を満喫していると言っ
よかった。

「それじゃあ土曜か日曜にでもね」

「部活の前にね」

「行くか」

「そうしよう」

如月も三人のその言葉に頷いた。

「今度の土曜にでもね」

「だよな。何か美味しそうだよな」

長月はもう今から期待に胸を震わせていた。顔にもそれが出ている。
る。

「お豆腐のケーキとかな」

「お豆腐って癖ないしね」

文月も期待している顔になっていた。

「あっさりしているしね」

「食べやすいし」

霜月も続く。

「何かどんどん食べられそう」

「そうよね。私弟にも買うつもりよ」

如月は弟である睦月のことを忘れてはいなかった。

「ちゃんとね」

「おっ、出たな弟思い」

霜月は彼女の今の言葉を受けて笑顔で述べた。

「相変わらずね」

「相変わらずって」

「弟さん好きよね、如月って」

「昔からよね」

文月も言ってきた。何しろ子供の頃からの付き合いなのでそうしたことによく知っているのです。彼女のいい部分についてはとりわ

けそうだった。

「弟さん大事にしてるわよね」
「だって」

弥生はここでいつものことを言った。

「この世でたった一人の弟だし」

「だから大事なの」

「そういうこと」

まさにそうだといいのうだ。

「それでだけれど。駄目？」

「駄目じゃないわよ」

「むしろかなりいいことよ」 84

文月と霜月はそうだと返すのだった。

「それってね」

「じゃあいいのね」

「悪い筈ないだろ」

長月も言ってきた。

第四話 岩清水健也その三

「弟さん大事にするのはよ」

「ただねえ。如月の場合はね」

「そうよね」

ここで三人は少し苦笑いになって述べた。

「少しブラコンの気があるけれど」

「それがね」

「そうかしら」

本人はあまり自覚していない顔で言葉を返した。

「そこまでいかないけれど」

「いや、いつてるし」

「そうよね」

文月と霜月がすぐにそれを否定した。

「もう充分にね」

「いつてるから」

「そうかな」

如月は二人の返答に首を捻らせた。

「やっぱりそこまでは」

「だからいつてるから」

「まあ極端じゃないからいいけれどね」

「弟は弟よ」

線引きする言葉だった。

「大切なね」

「大切か」

「そう来るのね」

「そうよ、この世でたった一人じゃない」

このことを強調してやまない。如月にとってはそうなのだ。

「だからね」

「弟ってそんなに大事かな」

「如月にとつてはそうなのよね」

文月と霜月は顔を見合わせて話す。その彼女と睦月のことをだ。

「前からだし」

「そうそう」

「ずっと前からな」

「生まれた時からよ」

如月は三人の言葉に返して述べた。

「それはね」

「言うよな。まあとにかくな」

長月はその彼女の言葉を聞いてまた言った。

「そのお菓子買つか」

「そうよね。弥生もいっていうし」

「それならね」

こんな話をして朝の時間を過ごした。その後のホームルームである。その時に一人の男子生徒が入って来た。

やや小柄で黒縁眼鏡をかけている。黒い髪を七三にしており何処か神経質な感じを受ける。この学校の制服を律儀に着こなしている。

その彼がだ。自分から名乗ってきた。

「岩清水健也です」

「岩清水かあ」

「宜しくな」

クラスメイト達はその彼をまずは迎えた。

「席はね」

「あそこですね」

「そうよ、あそこよ」

先生がその彼に空いている席を勧めた。そこに座ろうと向かう。

しかしここでだ。彼はふと如月達に目をやったのだった。

「？」

「何？」

如月だけでなく長月達も見る。四人はその視線を感じ取ってふと目をやった。

「何かあるのかしら」

「さあ」

四人にはわからない。岩清水はその間に自分に用意された席に座った。

彼はこの時は何もしなかった。少なくとも如月達は気付かなかった。

だがこの日の放課後だ。彼は自分の従兄である岩清水健一郎と話していた。話をする場所は従兄の部屋だった。パソコンがある。

そのパソコンを前にしてだ。二人は話をしていた。

「怪しい奴はいたかな」

「いたよ」

岩清水はこう従兄に述べた。

「四人ね」

「そうか、いたんだ」

「お兄さんの言った通りだね。気配でわかるよ」

彼はこうも話した。

「何か違うね」

「そうだろ？注意して見ればわかるんだよ」

従兄は穏やかな笑顔で彼に話していた。

第四話 岩清水健也その四

「それでね」

「そうだね。何かおかしな気配がするよね」

「悪いことをしていると出て来るんだ」

従兄はこんなふうにも話した。

「それでね」

「それじゃあ後は」

「証拠を掴むんだ」

従兄の言葉がここで強いものになった。

「いいね、証拠をね」

「証拠をだね」

「盗聴器はもう用意してあるね」

「うん」

岩清水の返答は即座だった。

「勿論だよ」

「あと隠しカメラは」

「用意してあるよ」

それもだというのだ。かなり物騒な話になっている。

「もうね」

「よし、じゃあ後はわかるね」

「その連中を監視してね」

「証拠を掴むんだ」

そうしろというのだった。

「わかったね」

「うん、それじゃあ」

「それからはわかるね」

従兄の言葉が強いものになる。まるでやることなすこと全て頭の中に入っていてそれを確認し合うような。そうした感じであった。

「もう」

「わかるよ。僕もやるよ」

「前にも何度も経験あるし楽勝だと思うけれど」

「今度も徹底的にやってやるよ」

彼は意気込んだ声で言い切った。

「絶対に許さないでね」

「そう、許したらいけないんだ」

「容赦なくね」

「そう、容赦なくだよね」

このことも確認される。さながら死刑の方法を確認するかの様に。

「死ぬまで、いや」

「そう、死ぬまでじゃない」

「死んで墓場に落ちてからもだよね」

それからだというのだ。二人は笑っていた。かなり酷薄な笑みで

あった。

「それからも」

「そう、悪党に墓場はいらないんだ」

従兄の笑みに邪悪な歪んだものが入ってきていた。

「何もかもいらない」

「家族も幸せも何もかも」

「そういうものを全て徹底的に叩き潰してやるんだ」

「いつも通りね」

「そう、いつも通りね」

酷薄なだけでなく邪悪なものがさらに増してきていた。

「そうするんだよね」

「その通り。君もわかってるね」

「わかるよ。お兄さんに教えてもらったから」

「よし、じゃあ見せてもらおうよ」

「うん、見ていてね」

彼等はその部屋の中で邪な笑顔を浮かべ合っていた。それはさな

がら悪鬼の集会の様子であった。何かが決定的に歪んでいるのだっ
た。

次の日。如月達は昨日とは違う顔になっていた。

歪んだ顔でだ。教室の片隅でこそそそと話をしていた。

「今度は何してやる？」

「そうね、今度はね」

「またあれやってやろうよ」

如月に対して文月と霜月が言っていた。

「あいつの机とロッカーにね」

「ゴミ入れてやろうよ」

「落書きもしてやろうぜ」

長月も言ってきた。

「そろそろほとぼりも冷めてきたしな」

「そうよね。周りが忘れたその時によね」

如月も長月のその言葉に頷いた。

「仕掛けるのが基本よね」

「だろ？だからここはな」

長月は歪んだ笑みで如月のその言葉に応えた。

第四話 岩清水健也その五

「そうしてやるうぜ」

「よし、それならね」

「そうしてやりましょう」

文月と霜月も歪んだ笑顔で頷く。だが彼女達は気付いていなかった。そんな彼女達を一人の男が見ていたことにだ。そしてその傍に仕掛けられているものがあることも。気付いていなかった。

そしてだった。その次の日。また起こった。

「ちよつと、またなの」

「これはかなり酷いね」

教室に入っただ。弥生と葉月は神無の席を見て顔を顰めさせていた。

「ここまでするなんて」

「誰がこんなことを」

見ればだ。神無の机は徹底的に荒らされていた。周りにもその中にもゴミがぶちまけられ詰められておりそして落書きだらけだった。その落書きも醜い罵倒ばかりだった。

それを見てだ。二人もクラスの面々も顔を顰めさせているのだ。

「これはもうね」

「いじめだよね」

葉月は顰めさせた顔で弥生に話した。

「間違いなくね」

「しかもここだけじゃないんでしょ？」

「うん」

葉月は弥生の言葉にこくりと頷いてから述べた。

「そうだよ。下駄箱もね」

「そこもこんな感じなのね」

「暫くないと思ったら」

それでも今は、なのだった。

「こんなことをするなんて」

「誰かしら」

弥生はその相手が誰なのか真剣に考えだしていた。

「それが問題だけれど」

「クラスの誰かかな」

「それはないと思いたいけれど」

彼女にしてはだ。クラスメイトがこんなことをしないと聞いたか
つた。だが心の中でその可能性を否定できない自分にも気付いてい
た。

「それでも。これは」

「とりあえずなおそう」

こう弥生に告げた。

「こんなの放っておけないし」

「ええ、じゃあ」

「椎葉さんもそれでいい？」

葉月はここでこの日はじめて神無に声をかけた。彼女は二人の後
ろで顔を青くさせてそのうで立ちすくんでいた。何も言えなかつ
たのだ。

「なおして」

「う、うん」

その青い顔でこくりと頷く。

「それじゃあ」

「私達も手伝うからね」

「それでね」

「有り難う」

二人に対して礼を述べた。

「それじゃあ今から」

「そうしよう、ホームルームがはじまる前にね」

「すぐに」

「僕も手伝うよ」

そしてだった。岩清水もここで出て名乗り出た。

「三人じゃ手が足りないだろうし」

「あつ、岩清水君」

「手伝つてくれるの」

二人は彼の顔を見て少し驚いた顔になって言葉を返した。

「大変だけれど」

「それでもいいの？」

「いいよ」

穏やかな笑みを作つての言葉だ。

「それじゃあすぐにね」

「ええ、シンナーも借りたし」

「消毒もしてね」

「下駄箱もね」

岩清水は下駄箱についても忘れていなかった。

「そつちも何とかしないとね」

「じゃあそつち御願いできる？」

「下駄箱は岩清水君が」

二人は下駄箱と聞いて彼に頼むことにした。

第四話 岩清水健也その六

「こつちは私達がやるから」

「下駄箱の方をね」

「うん、わかったよ」

岩清水は温和な笑みを作って述べた。

「それじゃあね」

「早く元に戻さないかね」

「ホームルームがはじまる前にね」

他のクラスメイト達も手伝い神無の机を元に戻しはじめた。それは壊れたロッカーにしても同じだった。まさにクラス総出だった。

しかしその中でだ。如月達は動こうとはしなかった。ただクラスの端にいてそこで見ているだけだった。

そして笑っていた。ほくそ笑んでいた。

「見た？」

「見たわ」

如月が霜月の言葉に頷いていた。

「あいつのあの顔」

「もう何があつたかわからないって顔でね」

「いい気味よ」

これは文月の言葉である。

「困った顔してね」

「そうそう。もっと苦しんだらいいんだよ」

長月も言う。

「ああして苦しんでるのがお似合いなんだよ」

「けれどね」

ここであった。如月が三人に言った。

「ばれてないのね」

「そうよね、全然ね」

「誰がやったかわかってないし」

文月と霜月は皆が神無の机をなおしているのを見ながら話した。

「それじゃあこのままやっていってもいいよね」

「そうよね。ばれないんだし」

そう思えるからこそだった。

「じゃあもつと強気にね」

「派手にいこうよ」

「そうね、それじゃあね」

如月も頷く。

「まずは部室でね」

「やってやるうぜ」

長月が頷いて、であった。これで決まった。

そうしてである。部室でもだった。

神無のロッカーが荒らされていた。外も中も酷い有様になっていてジャージも引き裂かれ汚されていた。部長の皐月はそれを見てこれ以上はない程の静かな怒りを見せていた。

「うちの部員だったら承知しないわよ」

「そんな筈ないでしょ」

「それはね」

彼女と同学年の二年生達がその彼女に言う。

「うちの部でこんなことする娘なんて」

「いないわよ」

「そう思いたいわね」

皐月もまた弥生と同じ顔であった。

「本当に」

「気にし過ぎよ」

「少なくともラクロス部の娘じゃないわよ」

「けれどそれはそれで問題よね」

その徹底的に汚され壊され落書きされた神無のロッカーを見てだ。皐月は怒った目で話した。彼女は完全に本気で怒ってしまっていた。

「うちの部室に忍び込んでるんだし」

「じゃあうちの学校の生徒？」

「そうなるかしら」

二年生達はこう泉月に話す。

「そうでないところまでね」

「しつこくできないし」

「そうね」

泉月も同級生達の言葉に頷いた。

「そう考えるのが普通ね」

「問題はうちの学校の誰かだけれどね」

「そこまではね」

二年生の話はここで歯切れの悪いものになった。

そうしてそのうえで。こうも言うのだった。「

「わからないから」

「調べ出すのも難しいわよ」

「そうなのよね。参ったわね」

泉月は腕を組んで考える顔になって述べはじめた。

第四話 岩清水健也その七

「元をどうにかしないといけないけれど」

「犯人を探そうにもね」

「学校中探し回ることになるし」

「けれどそれしかないかしら」

皐月は同級生達の言葉からこう答えを出した。

「結果としてね」

「そうよね、それじゃあだけれど」

「私達のルート使いましろう」

二年生達の提案はこれだった。

「仕方ないからね」

「ここはね」

「そうね。それじゃあ皆」

皐月は今度は部室に集まっている部員達に顔を向けた。神無のその荒れ果てたロッカーを見てだ。そこで集まってしまうていたのだ。

「いい？それぞれで何気なく探して」

「何気なくですか」

「そうしてですか」

「怪しい奴がいたら私に教えて」

つまりは部員を使つての情報収集だった。

「そこから調べるから」

「はい、わかりました」

「それじゃあそうして」

「いじめは絶対に許さないわ」

皐月は強い決意と共に言い切つてみせた。

「そう、何があつてもね」

「その通りよ。いじめは最低の人間のやることよ」

「それ、わかつてるわよね」

「いいわね」

皐月の周りの二年生達が一年生達に言う。

「そんなことする奴は絶対に許さないわよ」

「ましてやいじめられているのはうちの部員よ」

ラクロス部である、それが大きな理由だった。

「だからよ。見つけ出すわよ」

「何があってもね」

「はい、わかりました」

「それじゃあ私達も」

「御願いな。さて」

皐月は一年生の誓いの言葉を受けてまずは頷いてみせた。そうしてそのうえであらためてこんなことを言うのだった。

「それでだけれど」

「はい、一体」

「どうされるんですか？」

「部活の前にロッカーを何とかしましょう」

神無のそのロッカーを見ての言葉である。

「椎葉さんのね。いいわね」

「そうですね。これを何とかしないと」

「あんまりですし」

一年生の殆どは彼女のその言葉に頷いた。

「じゃあすぐに」

「そうしましょう」

「ええ、部活はその後よ」

皐月はまた告げた。

「いいわね」

「それじゃあ」

「かかります」

こうしてだった。神無のロッカーはまたしても元に戻された。この時如月達はあえて動いているように見せて実は動いていなかった。

そのうえでだ。部活の時にひそひそとこづつ話していた。

「今度も上手くいったわね」

「そう？まずいんじゃない」

「部長本気で怒ってるわよ」

如月の言葉に文月と霜月は複雑な顔になっていた。校庭でランニングをしながらそのうえでひそひそと話をしているのだ。

「若し見つかったらその時は」

「只じゃ済まないかも」

「そうだよな」

長月もだ。ジャージ姿でランニングをしながら不安な顔になっていた。

「ばれたら退部じゃねえのか？」

「そんなの洒落にならないわよ」

「そうよね」

文月も霜月も退部という言葉にすぐに反応を見せた。

「そんなことになったら」

「どうしよう」

「そうだよ。洒落にならねえよ」

このことを最初に話した長月もさらに不安な顔になっていた。

「ばれないか？本当に」

「ばれないわよ」

だがここぞだ。如月が言った。

第四話 岩清水健也その八

「それは安心していいわ」

「何で？」

「どうしてそう言えるのよ」

文月も霜月もすぐに如月のその言葉に問い返した。

「部長あんなに怒ってるのに」

「見つからないなんて」

「あのね、部長はね」

如月はいつもより冴えていた。その冴えは落ち着きから来るものだった。彼女は今は迷いがなかったと言っている。

「言ってたわよね」

「何をだよ」

長月がその言葉に問い返す。

「何言ってたんだよ」

「だからよ。うちの部員じゃないって」

指摘するのはこのことだった。

「そうでしょ。言ってたわよね」

「あっ、確かに」

「そういえば」

二人も如月のその言葉に頷いた。気付いたのである。

「最初は疑ってたけれどね」

「先輩達の話聞いてね」

「だからよ」

またそのことを指摘する如月だった。

「校内にいるとは思っていてもね」

「私達とは思っていない」

「身近にいるとはなのね」

「このこと、大きいわよ」

如月は走りながら微笑んでいた。

「クラスでもそうだったしね」

「そう、それじゃあ」

「ここは」

「どっしりと構えていればいいのよ」

「こう言うのだった。」

「ここはね」

「どっしりか」

長月はその言葉に顔を向けた。

「落ち着いていけばいいってことだよな」

「その通りよ。ばれてないんだし」

如月はこのことには絶対の自信があった。

「それならね」

「気にしなくていいのね」

「このままやっていけば」

「そうよ、いいわよ」

自信に満ちていてかつ邪悪な笑みになっていた。その笑みで話す。

「このままやっていきましよう」

「じゃあどんどんやっていこうぜ」

長月は如月のその言葉に乗った。

「ばれてないんだったらな」

「そうよ。今まではあいつにも誰がやったのかわからないようにや

ってきたじゃない」

「ええ、そうね」

「それはね」

文月も霜月も如月の今の邪悪な笑みに応えて頷いた。

「やっぱりね。ちくられたらやばいし」

「私達がやったってわかったら」

「それはもう止めましよう」

「止める？」

「止めるって？」

「要は周りにはれなかつたらいいのよ」「
ここで言うのはこのことだった。」

「あいつ以外にね」

「ってことは」

「もうおおっぴらにやるの」

「これまでの悪戯みたいなんじゃないの？」

「あいつに対して直接ね」

「そうよ、直接やってやりましょうよ」

如月の顔は完全に変わっていた。ドス黒いものになっていた。だが彼女は自分のその顔に気付かずに話を続けるのだった。

「あいつに直接ね」

「そこまで言うのなら」

「ばれないならね」

「やってやるか」

三人は如月のその言葉に頷いた。

「それじゃあ次は」

「問題は何をするかだけれど」

「やることは色々あるわよ」

ドス黒い笑みはそのままだ。

第四話 岩清水健也その九

「まあ面白くやってやりましょう」

「やるからには楽しくなのね」

「そうしてやるのね」

「そうよ。何か物凄く楽しくなってきたくない？」

いじめることがだというのだ。如月の笑顔のドス黒さはさらに増してきていた。そしてそれは他の三人も同じであった。

「考えるだけで」

「だよな」

長月も同じ笑顔で如月の言葉に応えた。

「じゃあ次はな」

「何をするか考えよう」

こんな話をしてだった。四人で次にすることを考えるのだった。そしてそれは早速次の日に実行に移されたのであった。

その次の日だ。神無は一人廊下を歩いていた。四人はその彼女を後ろからこっさりつけてだ。何気なくを装って彼女に声をかけた。

「ねえ、椎葉」

「ちよつといい？」

「えっ？」

「話したいことがあるのよ」

何気なくを装って彼女に声をかけるのだった。

「だからね」

「ちよつと来て」

「ちよつとって？」

「いいから」

如月は「ここではわざとにこりと笑ってみせた。

「来てよ」

「ええと、何かあるの？」

神無は当然彼女達が今自分をいじめている相手だとは気付いていない。それが一体誰なのか気にはなっていたがだ。

「どうかしたの？」

「いいからいいから」

「ちよつと来てよ」

四人は彼女の手を掴んでそのうえでトイレに連れ込んだ。トイレに入れたその瞬間にだった。如月が最初にやった。

「きゃっ！」

神無の背中をその右足で思いきり蹴った。蹴られた神無はそのままトイレの壁に倒れ込んだ。それからだった。

如月は倒れた神無の背中を思いきり踏みつけた。そのうえで踏み蹴る。歪んだ黒い感情をそのままむき出しにしていた。

「な、何？」

「何もこれもないわよ」

「あんだ生意気なのよ」

文月と霜月がその神無を見下ろして告げた。

「だからヤキ入れてやるのよ」

「覚悟しなさい」

「覚悟つて」

「ねえ長月」

如月がだった。隣りにいる長月に声をかけた。

「モップあるわよね」

「ああ、あるぜ」

長月はすぐに掃除用具を入れている場所の扉を開いてだ。早速それを出してきた。それも四人分しっかりとである。

「これ、使っただよな」

「あと水ね」

如月はそれもいると告げた。

「それも御願いね」

「水もかよ」

「ええ、ホースがいいわね」

如月は中に青いホースがあるのを見つけてだ。あらためて告げた。「それでこいつの汚い性根奇麗にしてやりましようよ」

「いいな、そうするか」

こうしてだった。ホースが付けられてだ。如月がそれを握ってまだ踏み躪っている神無の頭から思いきりかけてみせたのである。

「ど、どうして？」

「だからどうしてもこうしてもないのよ」

如月は頭だけでなく身体全体にかけてきた。ブラウスもスカートも忽ちのうちに水びたしになる。そうしてそこにモップを叩き込むのだった。

そうしながらだ。また神無に告げた。

「あんたむかつくのよ」

「むかつくつて……」

「転校生なのに生意気なのよ」

これが理由だというのだ。

「ちょっと頭がいいからつて調子に乗らないことね」

「そんな、私そんな……」

「調子に乗つてんだよ」

長月は倒れたままの神無のショートヘアの上に洗剤をかけた。トイレ掃除に使うその洗剤をかけてきたのである。

「手前よ。部長にゴマすつてよ」

「見るだけでむかつくのよ」

「そうよ」

文月と霜月もここで神無にモップをつきつけた。そうしてそのモップを神無の顔にも身体にもなすりつけるのだった。

第四話 岩清水健也その十

「汚い性根がね」

「だからこうしてやるのよ」

「ほら、何か言いなさいよ」

如月はまた神無の背中を踏み躪りながら言った。足が背中にめり込んでいる。

「何か。言いなさい」

「だからどうして？」

神無はまだわからなかった。どうして自分が今こんな目に遭うのかをだ。自分には心当たりのないことだったのだ。

「私貴女達には何も」

「だから言ってるでしょ。むかつくのよ」

「これが如月の返答だった。

「だからよ。こうしてやるのよ」

「そんな……」

「ほら、綺麗にしてやるよ」

「感謝しなさいよ」

三人は神無のあちこちに水をかけ洗剤をかけてだ。そうしてモップをなすりつける。時には蹴りさえ入っていた。

そして遂にはだ。ラクロスというよりはホツケーの要領でそのモップで神無を転がしはじめた。そうしてだった。

「そーそーれ！」

「ぶつけてやるわよ！」

トイレの壁に転がしてぶつけたのである。神無は背中から壁に叩きつけられた。

「痛っ！」

「痛いじゃないわよ」

その顔に如月のモップが来た。顔にまとも当たった。

「これで終わりじゃないからね」

「言っとくれどな」

長月はもがき苦しむ神無にすこんでみせてきた。

「親とか先生に言ったらもっと酷いことになるからね」

「覚悟しなさい」

「いいわね」

文月と霜月も言う。そうしてそのホースや洗剤やモップを神無に叩きつけてだ。それからこんなことも言うのだった。

「なおしておきなさいよ」

「自分でね」

もう倒れて動けない神無に言い捨ててだ。自分達はトイレを後にするのだった。

そしてそのうえでだ。四人でげらげらと笑うのだった。

「ああ、すつきりした」

「見た？あいつの顔」

「見た見た」

四人で実に楽しげに話す。誰もいない屋上にわざわざ出てである。

「見られたものじゃなかったわよね」

「もういい気味」

「ざまみろってんだ」

「そうよね。楽しかったわね」

如月も三人に対して言う。

「胸がすうつとしたっていうか」

「けれどな。もつとな」

「もっとやりたくなるわよね」

「もっともつとね」

三人はこんなことを言う。そして如月も。

「そうよね」

三人のその言葉に頷いてだった。

「それじゃあ今度は何してやる？」

「先輩達や弥生に見つからないといいしな」

「うん、そうよね」

「見つからないように徹底的にやって」

そうして、というのだった。四人はそのまま墮ちていこうとする。しかしそれはだ。岩清水に撮られていた。彼はその撮ったものを従兄に対して見せた。すると従兄はこう彼に言った。

「いいね、いい映像だよ」

「最高の証拠だね」

「これをどうするかはわかるね」

「うん」

彼は従兄の言葉にすぐに頷いた。

「わかってるよ、勿論だよ」

「そうだね。わかってるよね」

「何度もやってきたからね」

岩清水は従兄に対して笑って述べた。その笑みは何故か邪悪なものだった。企み誰かを陥れる笑みに他ならなかった。

「勿論だよ」

「それじゃあ。任せるよ」

「任せて。流す場所もわかってるし」

「僕のサイトにも載せるね」

「いつも通りね」

全てがわかつているやり取りだった。

「やっていくよ」

「よし、だったらその時は言ってね」

「うん、その時はね」

こう話してだ。そのうえで今は伏せていた。だがそれた機会を見て伏せていた。明らかな企みがだ。そこにはあったのだ。

2
0
1
0
·
8
·
3

第五話 エスカレーターその一

第五話 エスカレーター

神無は学校に来た。そして部室に入るとだ。

「おはよう」

「元気？」

如月達がもう部室にいる先輩達に見えるようにわざとらしく彼女に挨拶をしてきた。そうしてそのうえで彼女を取り囲む。

「今日も頑張ろうね」

「楽しくやろうね」

「う、うん」

神無はだ。自分を取り囲んだ彼女達に顔を青くさせながら応えた。昨日のことは忘れられる筈のないものだ。当然如月達もわかってやっている。

「それじゃあ」

「そうそう、仲良くやろうよ」

「私達友達だしね」

「ねえ」

「あら、仲いいのね」

何も知らない先輩の一人がそんな彼女達を見て言った。

「同じクラスだからね」

「はい、そうなんです」

「クラスメイトですから」

「当然じゃないですか」

四人は作り笑いを浮かべて先輩にこう返す。

「ですから」

「それでなんです」

「仲がいいことはいいことだしね」

やはり先輩は何も知らないまま言った。

「椎葉さんってまだ転校して日が浅いし。色々教えてあげてね」

「わかってますよ」

「ですからね」

「仲良くしますから」

青くなり小さくなっている神無のその肩に手やり肩を抱き合っ
てさえている。しかし足を踏み脇を殴っている。そんな有様だった。

そしてだ。部活ではだ。他の部員達が気付かないようにだ。

殴り蹴る。そして突き飛ばす。足を引っかけて転ばせた。

「ちよつと椎葉さん」

「どうしたの？」

転んだ彼女にだ。皐月と二年生の一人が来て助け起こして問う。

「急に転んで」

「貧血？」

「いえ、それは」

「無理はしないでね」

皐月がその彼女を助け起こして言う。

「本当にね」

「はい、すみません」

「謝ることはないから」

皐月は彼女を気遣う顔で返した。

「そんなことよりね」

「はい」

「本当に無理はしないでね」

言うのはこのことだった。

「とりあえず。休んでいいから」

「休んで。ですか」

「どっちにしても朝練はこれで終わりだし」

それもまた皐月が彼女に休むように言った理由の一つだ。

「わかったわね」

「わかりました」

こうして神無は今ほ部活を終えてクラスに向かった。だがその下駄箱も荒らされ靴の裏にはだ。これでもかと画鋲が刺されていた。しかもだ。机はだ。またしても落書きがこれでもかと書かれていた。

「これ、絶対同じ人間がやってるわよね」

「間違いないね」

弥生と葉月の顔はいよいよ深刻なものだった。

「こんなことして何が面白いのかしら」

「そうだね。これは完全にいじめだよ」

二人は立ちすくむ神無を宥めながらそのうえでベンゼンで落書きを消していた。神無が動けなくなってしまうているからである。

「こんなことする人絶対に」

「許せないね」

「椎葉さん、安心して」

弥生はその蒼白になっている神無に対して言った。

「私達が絶対に犯人を見つけから」

「そうするからね」

「え、ええ」

神無はその青い顔で彼女の言葉に応える。

第五話 エスカレートその二

「有り難う」

「心当たりあるなら教えて」

「心当たり？」

「ええ、あるかしら」

こう神無に問うのだった。

「それは。あるの？」

「それは」

ついた。今の状況から抜け出たくて言おうとした。しかし「」で、
だった。

「椎葉、来て」

「面白い漫画見つけたのよ」

「ほらほら」

四人がすぐに来てた。そのうえで彼女の左手を掴んだ。そうして
そのまま何処かに連れ去ろうというのだ。その彼女達にだ。

弥生がだ。すぐに声をかけた。

「ちよつと。何してるのよ」

「何って？」

「椎葉さん何処に連れて行くのよ」

こう如月達に問うのだった。

「一体。何処によ」

「何処につて。同じラクロス部じゃない」

「だからよ」

「ちよつと付き合いでね」

「付き合いってどういうのなら」

弥生は目を顰めさせて四人にまた問うた。

「この落書き。消して」

「そつだよ。下駄箱も酷いことになってるっていつし」

「そつちは岩清水君が行ってくれたけれど」

尚岩清水は最初机のところにいた。そこでこっそりと携帯でその机の有様を撮っておいた。そうしたことは忘れないのだ。

「ここも酷いし」

「手伝ってくれたら有り難いけれど」

「御免ね」

如月は軽い声で笑って返した。

「それが無理だから」

「また今度ね」

「悪いわね」

文月も霜月も笑顔で笑って誤魔化す。そうしてだった。神無を連れて行く。その連れて来た場所はだ。

今度は体育館裏だった。そこに連れ込んだのだ。

「来いよ」

「こっちよ」

無理矢理連れて来た。そうして誰もいないのを見計らってからだ。

「何ちくろつとしてんだよ」

「言っただわよね」

長月と如月が神無の身体を押す。それからだった。

「こいつまだわかってないな」

「言ったら酷いって」

「ねえ。もう一度やってやろうよ」

「そつよね」

ここで文月と霜月が提案する。四人で神無を囲んでいる。

「それで何する？」

「ここだと」

「そつね」

まず如月が応えた。ふとゴミ捨て場が目に入った。

そのゴミ捨て場を見てだ。歪んだ、醜い笑みになって三人に告げた。

「いいこと思いついたわ」

「どうするの?」

「それで」

「ゴミはゴミ捨て場よね」

また三人に告げる。

「だからね」

「ああ、そうか」

長月もここでわかった。

「こいつ捨てるんだな」

「そういうこと。ゴミ捨てよう」

如月は神無の髪の毛を掴んでいた。そうしてそのうえで激しく振り回したり引つ張ったりしながらそのうえで三人に話していた。

「それでどう?」

「賛成」

「そうしよう」

文月と霜月は笑顔で如月の提案に賛成した。

「それじゃあね」

「捨てようね」

言いながらその足で神無を蹴っている。上着やスカートに靴型がついていく。

第五話 エスカレーターその三

そしてだ。そのまま神無を連れて行ってだ。ゴミ捨て場に蹴り倒した。

それからだ。ゴミを彼女の上にぶつまける。それも次々と。

「ほらほら、ゴミはゴミと仲良くしなさいよ」

「楽しいだろ？友達と一緒にだよ」

「周りは友達ばかりよ」

「嬉しいでしょ」

神無の上に次々とゴミを放り込みながら言うのだった。

そしてだ。何とか起き上がってきた神無をだ。ゴミを入れる小屋の中にさらに蹴り込んだ。如月が後ろから思いきり蹴った。

「きゃっ！」

「そこで暫く反省してなさい」

如月は彼女が朝に弥生に見せた態度を言った。

「そのうち誰か来るから」

「それまでお友達と仲良くしてる」

「ずっとね」

「そこにいなさい」

三人もそれに続いた。そうして扉を閉めて神無を閉じ込めた。

そのうえで何食わぬ顔で教室に戻る。もうすぐホームルームの間であり机は何か奇麗になっていたのである。

「ああ、戻ったのね」

「うん、話終わったから」

「待たせたな」

その何食わぬ顔で弥生の言葉に応える。弥生は机を何とか奇麗にできてほっとした顔になっていた。それが四人にもわかった。

その彼女にだ。その顔で言うのだった。

「それでそっちは終わったのね」

「よかったわね」

「ええ。ただ」

ここぞだ。弥生はいぶかしむ顔を見せた。そのうえで如月に対して問うた。

「ねえ。椎葉さんは？」

「ちょっとね」

「何か用事があるらしくて」

「それでね」

いないというのである。

「私達と別れたのよ」

「だから今はいないわ」

「そういうことだから」

「そうなの」

弥生はいぶかしむ顔のまま三人の言葉を聞いた。

「何時戻って来るの？」

「ちょっとわからないのよ」

如月が答えた。

「それはね」

「そう。仕方ないわね」

弥生はそれを聞いてまずは頷いた。

「じゃあ何時戻って来てもいいようにね」

「しておいたから」

葉月も言った。彼は何とか処理を終えてほっとした顔になっている。

「全く。悪質だよ」

「そうだね」

そしてここで岩清水も戻ってきた。

「これは絶対に特定の個人かグループの行動だね」

「そう思うんだ」

「うん、僕はそう思うよ」

彼は何気なくを装って葉月に対して述べた。その時に微かに、誰にも気付かれないうようにして如月達を見た。

「こんなことするのってもうね」

「最低よ」

「全くだね」

弥生と葉月は純粹に怒りの感情を見せた。

「絶対に許さないから」

「そうだよ、許したらいけないよ」

「全くだよ。とにかく椎葉さんが戻って来たらね」

こう二人に話す。

「全部終わったって言うておこう」

「ええ、その時は」

「そうしましょう」

彼等はそう話した。そしてだ。

ホームルームから一時間目に入った。それが終わっても椎葉は戻って来ない。それを見て弥生はいよいよ不安な顔になってきていた。

「おかしいわよね」

「そうだね」

葉月が彼女の言葉に頷く。

「まだ戻って来ないって」

「何かあったのかしら」

「僕、見て来るよ」

ここでまた岩清水が名乗り出てきた。

第五話 エスカレーターその四

「ちよつとね」

「私も行くわ」

「僕も」

「それじゃあだけれど」

二人の名乗り出を受けてだ。岩清水はこう言うのだった。

「それぞれで探そう」

「それぞれで？」

「探すんだ」

「うん、そうしよう」

何気なくを装ってこう返す。こうして三人でそれぞれ分かれて探しに出た。

そしてだ。岩清水はすぐにゴミ捨て場に向かった。その小屋の鍵をこつそりと開けてだ。声色を使って言った。

「誰かな、鍵なんか閉めたの。開けたけれど」

わざと神無に聞こえるようにして言うて姿を消した。向かった先は体育館裏だった。神無が如月達に連れ込まれたその場所だ。

そこに向かった。周りを見回す。するとだった。

見れば茂みの中や木の上にだ。隠しカメラが置かれていた。彼はその幾つもの隠しカメラを見て一人ほくそ笑むのだった。

「いじめってこういう場所で行われるからね」

こう言うって笑う。

「いやあ、仕掛けておいてよかったよ。いい映像が撮れたかな」

神無は小屋から出て泣きながら何処かに行く。その日彼女はジャージだった。弥生はその彼女を心配して声をかけた。

「何かあったの？」

「ううん、別に」

怯えた顔で弥生に返す。

「何も」

「何も無いの」

「うん、だから」

そしてだ。こう言うのだった。

「気にしないで」

「だったらいいけれど」

「とにかくね」

葉月も神無を気遣って声をかけてきた。

「ジャージだと目立つけれど。仕方ないか」

「そうね。制服どうしたの？」

「洗おうかと思ってるけれど」

「あっ、それだったらさ」

ここでだ。葉月は気を利かして言った。

「いい場所があるよ」

「いい場所って？」

「用務員さんが洗濯機と乾燥機持つてるから借りたらいいよ」

こう話すのだった。

「そこを使えば学校の授業が終わるまでには確実に洗い終わって乾いてるから」

「ああ、そうよね」

弥生も葉月のその言葉に頷いた。

「汚れ酷いの？」

「ちよつと」

力ない顔で答える。

「それは」

「けれど大丈夫だから」

葉月は暗い顔の神無にまた話した。

「あの洗濯機新しいのだから。本当にどんな汚れでも落ちるから」

「そうなの」

「だから安心して」

また話す葉月だった。

「用務員さんに言っただけ使わせてもらったらいいよ」
「それじゃあ」

こうしてだった。神無はその洗濯機と乾燥機を使わせてもらった。それで今は何とかことが収まった。少なくとも外見はである。

如月達はそんな彼女を見てまた嘲笑っていた。顔は歪んだ笑みの仮面になっており目は蔑みに満ちていた。そんな顔でだ。

「見た？ジャージでね」

「いい気味」

「そうよね」

こう話してだ。今度はだ。

また如月が言うのだった。

「ねえ、学校のサイトあるじゃない」

「ああ、裏サイトね」

「それあるの？」

「なかったら作ればいいし」

こんなことをだ。三人に話すのだった。

第五話 エスカレートその五

「それかあいつの名前を使ってね」

「そう、ブログでも何でも立ち上げて」

「それを使ってやるのね」

「面と向かってやるだけじゃ面白くないから」

「こつその醜い笑顔で話すのだった。」

「だからね。今度はブログでね」

「よし、それじゃあまずは裏サイト探すな」

長月が言った。

「そんなの携帯で探せるしな」

「そうよね。あいつのブログも作るっ」

「そうしよう。名前騙ってね」

「それを使ってよ」

如月はさらに言う。

「あいつの悪口書いたりあいつの名義であることないこと書いてね」

「ネットを使ったらかなり効果があるっていうし」

「そうしてやりましょう」

こつ話してだった。四人はまたはじめた。それはすぐに行われた。

その学校の裏サイトにだ。すぐに神無を誹謗中傷する書き込みが書かれていった。四人で夥しい量を書きサイトはそれで埋め尽くされた。

同時にブログのリンクも貼られた。そのブログは神無とすぐにかるように書かれており男を募集やそうしたことが次々と書かれていたのだ。

それが目に入ってだ。学校、特に部活で問題になった。

「ねえ、まさかと思うけれど」

「そうよね」

「あの書き込みって」

「本当かしら」

疑う目で神無を見だしたのである。その間もちよつとすれば彼女の机やロッカー、それに下駄箱といったものが荒らされた。それに体育の前には体操服が隠される。そんな中だった。

「椎葉さんって中学校の時から」

「男何人も騙して誘惑して」

「手玉に取ってたって」

「そんな人だったの？」

その書き込みのことは瞬く間に広がった。そしてクラスでもだ。

「ねえ、そんな娘だったなんてね」

「そうよね、思わなかったし」

「じゃああれ？今ロッカーとか荒らしてるって」

「彼氏取られた人なのかな」

こんな話をするのだった。それは自然と神無本人の耳にも入る。彼女は恒常的に行われる如月達の直接的ないじめとこのことによつて打ちのめされていった。

しかしである。ここでまた弥生が出て来た。そうしてだった。

「それが事実だと思うの？」

「事実って」

「だから書かれるんじゃない」

「誰もそういう場面とか事実とか見てないじゃない」

咎める顔でだった。クラスメイト達に言うのである。

「そうでしょ？それに」

「それに？」

「それについて」

「憶測で言うのよくないわよ」

「こつ言つのだった。」

「そうでしょ。誰かの誹謗中傷よ、これって」

「誹謗中傷って」

「そうなのかしら」

「誰がどう見てもそうじゃない」

弥生の言葉は強い。

「こんなことする人がいるなんて」

「けれどさ」

「これ、凄いことになってるよ」

「皆見てるし」

クラスメイト達は彼女に自分達の携帯を見せて話す。そこにはその裏サイト、それにブログがあった。そこに書かれているのである。

「匿名でさ。色々書いてるし」

「死ねとかいう言葉も」

「セフレ募集とか遊んだ話とか」

「死ねってというのは罵倒よ」

それだというのだった。

「ネットで。匿名じゃない」

「けれど書いてるしね」

「ねえ」

「椎葉さんも見てるし」

「わかってるわよ。それで椎葉さんは？」

「ええと、今は」

クラスを見回す。しかしそこにはいなかった。いるのは如月達である。四人は相変わらずクラスの端にいて何かを書いていたのである。

第五話 エスカレートその六

「いないわ」

「何処に行ったのかしら」

「まさか」

「ここだ。弥生は不吉なものを感じた。」

「椎葉さんこのサイト見たって言ってたわよね」

「そうよ、ブログもね」

「両方ね」

「まずいわよ、それ」

弥生はここで顔を青くさせた。

「椎葉さんも見たって」

「皆があれこれ言ってるし」

「ひそひそとね」

「傷ついてるなんてものじゃないわよ」

弥生の顔は青から白になった。

「危ないわ、ちよつと私探してくる」

「何処に行くの？それで」

「探すって」

「いそうなところ。それじゃあ」

こつ話してだった。すぐにクラスを後にする。そのうえで神無を探す。

そして見つけたのはだ。学校の屋上だった。神無はそこにいて下を見下ろしていた。そのうえで涙を流していたのである。

「ちよつと、椎葉さん」

弥生はその彼女を見て慌てて声をかけた。

「大丈夫……. じゃないわよね」

「もう、我慢できない…….」

下を向いて泣いていた。そうしながらの言葉だった。

「何で私が。こんな目に」

「ねえ」

弥生はその彼女の横に来てだ。両肩を左から抱いて問うた。

「これ、誰がやったの？」

「それは」

「言えない？」

彼女の顔を覗き込んでさらに問うた。

「どうしても。言えないの？誰かわからないの？」

「御免なさい、それは」

「そう、言えないの」

何故言えないかまではある程度は察していた。しかし問わなかった。あえてそうして彼女を気遣ったのである。弥生の優しさだ。

「そうなのね」

「うん……」

「わかったわ。それでもね」

しかしだ。ここで弥生は神無に告げた。

「気にしないで、サイトのことは」

「けれど皆」

「言ってるわよね、物凄い勢いで書かれてるし」

そしてだ。このことも言った。

「もう何十人もね」

「学校の皆が、私を」

「皆じゃないわ」

弥生はそれは否定した。

「皆じゃないから」

「皆じゃないって。嘘よ」

「いえ、嘘じゃないわ」

強い顔になつての言葉だった。

「それは違うわ」

「何でそう言えるの？実際に皆私を見てあれこれ言うし。もう避け

るし」

「私は違うから」

自分はというのだ。

「こんなこと許さないから。私は違うから」

「違うの？」

「そう、違うわ」

また言う弥生だった。

「だから信じて。私はこんなこと絶対にしないから」

「そうなの」

「それに。私だけじゃないから」

弥生はさらに言った。

「葉月君もいるし」

「あの眼鏡をかけた」

「そうよ、彼もいるし。他にはいない？」

「部長が」

ラクロス部のだ。皐月のことだ。

第五話 エスカレートその七

「いてくれるけれど」

「ラクロス部の部長さんね」

神無の所属している部活のことは知っていた。それで言ったのだ。

「あの人ね」

「ええ」

「それじゃあその人にも言って。力になってくれるから」

「そうすればいいのね」

「とにかく。皆じゃないし」

このことはことさら強調した。神無を落ち着かせ励ます為だ。

「私達がいるからね」

「いてくれるのね」

「絶対によ。だって」

そしてだ。弥生は言い切った。

「友達じゃない」

「友達？」

「そう、友達よ」

こう神無に告げる。

「頼りにして。何があってもね」

「うん、じゃあ」

「言えないことがあっても」

「それもわかっての言葉だ。」

「それでもね。力になるから」

「じゃあ」

「とりあえず裏サイトやブログは通報するわ。そうすれば閉鎖させられるから」

「そういうことできるの？」

「できるから。だって酷過ぎるし」

それでできるといふのだ。これは弥生が知っている事実だ。

「暫くしたら収まるから」

「だったら」

「このことは任せて。いいわね」

「うん」

神無は弥生のその言葉にこくりと頷いた。そのうえで応えた。

「それじゃあ」

「任せてね。じゃあ帰ろう」

「何処に？」

「クラスによ」

そこだといふのだ。

「誰が何言っても気にしないで。私が傍にいるから」

「いてくれるのね」

「何度も言うから絶対にいるから」

また告げた。

「だから泣いたりしないでね」

「わかったわ」

何とか頷いた神無だった。そのうえで自分のクラスに戻る。

その日はずっと弥生が彼女の傍にいた。如月はそれを見てだ。自分でも意識しないうちに嫉妬した。そしてまた三人に対して言ったのだ。

「何かむかついたからさ」

「またやるのね」

「もつとしてやるのね」

「そうよ、今度はね」

止まらなかつた。嗜虐性が自分でも気付かないうちに膨れ上がっていた。嫉妬がそれをさらに大きくさせていまっていたことにも気付いていなかった。

「もう二度と立ち直れないようなことしてやりましょう」

「二度とね」

「そうしてやるのね」

「そうよ、それはね」

そうしてそのことを三人にも話す。次の日だった。昼の時間になると神無にだ。声をかけるのだった。

「ねえ椎葉」

「食べに行かない？」

こうだ。何気なくを装って声をかける。

「いい場所見つけたからね」

「だからね」

「えっ……」

四人の声を聞いて青ざめる神無を囲んでだ。さらに言うのであった。

「私達友達じゃない」

「だからね」

「お昼一緒に食べようよ」

「いいでしょ？」

「あの」

その四人にだ。弥生が声をかけた。

「私も一緒に行つていいかな」

「弥生も？」

「うん、一緒にね」

こう言うようになった。神無は弥生の顔を見て生き返ったようになった。だがそれは一瞬で終わってしまうことになってしまったのだ。

第五話 エスカレートその八

「ああ、悪いけれどね」

「今は駄目だよ」

「御免ね」

四人がだ。こう彼女に言ったのである。

「ラクロス部の集まりだから」

「同じ部活で水いららずでいきたいのよ」

「だから、ここは」

「悪いな」

「そうなの」

それを聞いてだ。寂しそうだが納得した弥生だった。その時神無の顔はこの世の終わりのようになってしまった。だがそれに気付いていたのは岩清水だけだった。彼は一人教室の端にいた。そこから様子を見ていたのである。

「それじゃあ仕方ないわね」

「そういうこと」

「だからね」

「またな」

四人は神無を取り囲んだまま作り笑顔で応えた。そのうえで彼女を連れて教室に出る。教室を出て扉を閉めるとだ。如月がいきなり彼女の足を踏んだ。

「痛っ……」

「痛いじゃないわよ」

痛がる神無の顔を覗き込んでごんごんでみせる。

「これからもっともっと楽しいことしてあげるんだからさ」

「ほら、来いよ」

長月は彼女の背中を蹴った。

「こっちだよ」

「言っておくけれどね」

「誰かに言ったらね」

文月は髪を引つ張り霜月は耳を引つ張っていた。

「承知しないからね」

「こんなものじゃないからね」

「わかった？」

如月は今度はだ。彼女の脛を思いきりつけた。痛がることをわかっていてである。

「これ位じゃ済まないからね」

「う、うん」

痛くて泣きそうになるがだ。必死に堪えて頷いたのだった。

「わかったらこっち来なさいよ」

「ほら、こっちだよ」

「来なさい、家畜以下の立場なんだからね」

「言うこと聞きなさいよ」

そのまま神無をまたトイレに連れ込んだ。そうしてだった。

「ほら、飲みなさいよ」

「食えよ」

ホースから水をかけトイレのゴミ箱のゴミを無理矢理口の中に入れる。そうしたのだった。

ゴミを口の中に入れられた神無はだ。思わず吐き出した。だがここで如月はその彼女の腹を自分の右足で思いきり蹴飛ばしたのだった。

「あぐっ………!!」

「何吐いてるのよ」

醜い顔で彼女を見下ろしながら言っ。

「折角私達が食べさせてあげてるのに」

「そうよ、それで吐くの？」

「失礼な奴よね」

「そんなに私達の御馳走が嫌だったらね」

「ここだ。如月がだ。神無が持っていた弁当箱を取り出してきてだ。その中身をトイレの床にぶちまけたのである。」

そのうえでだ。また彼女に言った。

「これ食べなさいよ」

「そんな……」

「私達の御馳走が食べられないんでしょう？じゃあ自分の御飯食べなさいよ」

「そうだよ、食べよ」

長月は倒れ伏す神無を散々蹴り回しながら言った。

「自分の弁当よ。食べよ」

「そんな、こんなの」

「こんなのじゃないでしょ」

「自分のお弁当じゃない」

文月と霜月も追い打ちをかけてきた。

「食べたらいいじゃない」

「それとも食欲がないっていつのかしら」

「それはよくないわね」

如月は霜月の言葉に続いてだ。また醜悪な笑みを浮かべた。

そのうえでだ。こんなことを言うのだった。

「それじゃあ食べさせてあげましょうよ」

「食べさせるの？」

「さっきのゴミみたいに」

「そうよ。食べさせてあげましょうよ」

腹を蹴られ今も長月に蹴られ踏まれている痛みで泣き崩れている神無を見下ろしてだ。残忍に笑っていた。そのうえでの言葉だった。

第五話 エスカレートその九

「それでどう?」

「よし、じゃあそうするか」

「そうね」

「それがいいわね」

三人も如月と同じ顔で頷いた。そうしてだった。

そのうえでだ。文月と霜月が神無の両腕をそれぞれ掴んで動けなくさせた。そのうえで長月は彼女の鼻をその手で思いきりつねるようにして掴んだ。

そしてだ。如月がそのトイレの床に落ちている弁当だったものを手に取ってだ。開かざるを得なかったその口にねじ込むのだった。

「あぐつ、ぐつ……」

「ほら、食べなさいよ」

「食べよ」

如月と長月が言う。

「食べないならね」

「もつとしてやるぞ」

「もつさ、このまま詰め込んでやるつよ」

「そうしよう」

二人に文月と霜月が言った。

「もつともつとよ」

「そうしてやるつよ」

「そうね。そうしようかしら」

如月は蔑んだ顔で神無を見下ろしながら二人の言葉に応えた。そうしてだった。

彼女もまた神無の鼻に指をやった。それで思いきりねじってから言う。

「食べないとこんなものじゃないわよ」

「うっ……」

「食べなさいよ」

今度は髪の毛を掴んで頭を振り回し引っ張って告げる。

「さっさとね」

「あぐっ、うっ……」

「食べないんならね」

どうしても口を動かさずだ。泣くばかりの神無の顎に手をやった。そのうで無理矢理上下に動かして噛ませた。それから口を塞ぐのだった。

そうして無理に飲み込ませた。神無の目からまた涙が落ちた。

「ほら、食べられたじゃない」

如月はその彼女を見て嘲笑った。

「トイレの床に落ちたの。食べられたじゃない」

「きつたねえ奴だな」

「全く」

長月と霜月がそれに続く。

「こんな不潔な奴見たことねえぜ」

「ばい菌みたいな奴ね」

「ほら、まだあるわよ」

文月はさらに追い打ちをかけた。

「御飯、全部食べなさいよ」

「残すとバチが当たるわよ」

如月が神無の頭を掴んだ。そうして床に落ちているその弁当だったものに顔を近付けさせてだ。やはり無理矢理食べさせようとする。

「豚みたいだね。屈んで食べなさいよ」

「さっさとね」

「全部食べなさいよ」

「一回食べられたんだから平気だろ？」

如月に三人が続く。

「ほら、さっさとね」

「何ならまた食べさせてやるわよ」

「どうするんだよ」

「そんな……」

「なら食べさせてやるわ、またね」

如月が最後通告を突きつけてきた。

「ほら、食べさせてあげましょう」

「そうね、それじゃあ」

「ごうしてね」

「ほら、食べよ」

三人が上から神無の背中を踏みつけた。そのうえではさらにはいつくばらせた。その姿はもう豚やそうしたものでなくなっていた。

「みっともない姿」

「何、もう人間じゃないじゃない」

「もうゴミね」

ここまで言っていた。

また如月が動いてた。神無の髪の毛を再度掴んでそのうえで弁当だったものにぶつけた。床からそれが飛び散り鈍い音まで聞こえてきた。

「ゴミはゴミらしく一緒になったら？」

「ほら、友達だよ」

「仲良くしなさいよ」

「たった一人の友達だからね」

「弥生があんたの友達だと思ってるの？」

如月はふとだ。こんなことも言った。

第五話 エスカレートその十

「そんな訳ないでしょ」

「そうだよな、それはないよな」

「絶対にね」

「ないない」

三人はここでも如月に続いた。

「若しあの娘にこれ以上近付いたら」

無意識のうちに嫉妬を感じていた。その心のまま神無を罵る。

「こんなものじゃ済まないからね」

「人間の友達なんて持つんじゃないよ」

「ゴミなのにね」

「偉そうなことするんじゃないわよ」

最後はトイレの便器の水をわざわざ和風便器の水を出してそれをバケツですくって頭からかけてた。そのうえでバケツを投げつけてから帰る。

その時にだ。如月が倒れ崩れたままの彼女に告げた。

「掃除しておきなさいよ」

「ゴミがゴミ掃除かよ。それはいいな」

「そうよね」

「おあつらえ向きよね」

また三人が続いてた。そのうえでトイレを後にする。その後には動けなくなった神無が弁当だったものと一緒に倒れていた。

これで終わりではなかった。翌朝また起こった。

まず弥生と葉月が神無の机を見た。この朝は安心することができた。

「とりあえず落書きはないわね」

「ゴミもぶちまけられていないし」

二人共それを見てまずは安心した。

「それじゃあ椎葉さん」

「大丈夫だよ」

「うん……」

神無は何とかといった感じで学校に来た。この日は朝から隣に弥生がいた。自分から離れるように言ってもだ。弥生は彼女を気遣ってそれで隣にいたのである。

「言ったわよね、友達だって」

「友達だから」

「そうよ、友達だからよ」

だからだというのである。

「それに今の椎葉さんって」

「私が」

「目を離してられないわ」

彼女を心から心配しての言葉だった。

「とてもね」

「とてもなの」

「本当に大丈夫なの？」

俯き蒼白になった彼女の顔を見てだった。弥生は心から心配する顔で問うた。

「昨日よりもまだ顔色悪いけれど」

「何でもない」

「如月達に相談してみたら？」

事実を知らないからこそその言葉だった。だがその名前を聞いてだ。神無は無意識のうちにビクリ、となって震えてしまった。だが弥生はそれには気付かなかった。

「同じラクロス部よね」

「う、うん」

「あの娘だったら色々と相談に乗ってくれるわよ」

これは弥生が知っている如月だった。

「だからね」

「そうなの」

「だから話してみたら？」

何も知らないが故の言葉だった。

「それでね」

「いえ、それは」

当然ながらだ。神無にはそれはできない。青い顔で断る。

「無理だから」

「無理？」

「御免なさい、ちょっと」

「？何かあるの？」

弥生は神無のその言葉に首を捻った。

「一体何が」

「いえ、別に」

「それじゃあ大丈夫なんじゃ？」

やはり何も知らないまま言う。気付くこともない。

第五話 エスカレートその十一

「如月って優しいし面倒見がいいし。話せると思っけれど」

「御免なさい」

また謝るだけだった。

「だから」

「何かわからないけれど」

本当にわかっていない言葉だった。

「それじゃあ仕方ないわね」

「うん……」

神無はまた力なく頷いた。

「けれど一人にならない方がいいわ」

「一人は」

「幾ら何でも最近酷過ぎるし」

気付いていなくともこうは考えていたのだ。弥生にしても許せないことだった。

だが今は何もなかった。机には落書きもゴミもない。それで弥生は安心していた。しかしここで、であった。それは裏切られた。

神無が安心して座るとだ。何とだ。

「えっ……」

「嘘っ、何これ」

神無だけでなくだ。弥生も驚くことになった。

何と机と椅子には接着剤がこれでもかと塗られていた。それで座った神無は動けなくなった。そして机に着けた手にもべったりと貼り付いた。

「接着剤!？」

「そんな、こんな……」

「ちょ、ちょっと待って」

さしもの弥生もこれには我を失っていた。

「これは」

「私、やっぱり」

「椎葉さん、落ち着いて」

また落ち込もうとする神無をまずは宥めた。

「早く。何とかしないと」

「何があつたの？」

ここぞだ。葉月も登校してきた。

「また椎葉さんに？」

「大変なのよ、接着剤が」

「接着剤？」

「そう、それなのよ」

まさにそれだというのである。ここで葉月も今の神無を見た。

そしてだ。酷い憤りを見せるのだった。

「こんなことまでするなんてね」

「どうしたらいいの、これ」

「大丈夫だよ。何とかなるから」

しかし葉月は冷静だった。

「接着剤もね」

「何とかなるの？」

「引き離す薬があるから」

「それでなの」

「うん、安心していいよ」

こう弥生と当の神無に話す。

「とにかく落ち着いてね」

「うん……」

励ましの言葉だ。だがそれでも神無の言葉は力ない。

「すぐにそれを持って来るから」

「有り難う」

「とにかく今は落ち着いて」

またこう告げる神無だった。

「すぐ取って来るから」

「それにしても。間違はなく同じ人よね」

弥生は落書きをしていた人間と今の接着剤を塗った人間は同じだと察した。そのうえでその顔を顰めさせていた。そうなっていた。

「これって」

「そうだね」

いいタイミングでだ。岩清水も来た。

「これはね」

「岩清水君もそう思う?」

「間違いないよ。しかもね」

「しかも?」

「これは椎葉さんをかなり嫌っている人のやったことだね」

「何で椎葉さんを嫌うの?」

弥生にはこれがわからなかった。だがこれも彼女からの主観ではない。

第五話 エスカレートその十二

「性格も悪くないし。頭もいいのに」

「さてね。それはわからないけれど」

今はあえてこう言う岩清水だった。

「けれどこれはね」

「放ってはおけないわ、相手を見つけないと」

「そのうち見つかるんじゃないかな」

今度もわざとこう言ったのだった。

「だから安心していいよ」

「そうだといいけれど」

「とにかくね」

岩清水はさらに話した。

「今は接着剤を何とかしないとね」

「ええ、じゃあ今はまずは」

「それからだね」

こんな話をしてだった。今はその接着剤をはがした。全て弥生と葉月がやった。如月達はここでも見ているだけだった。

そしてだ。苦しみ悲しむ神無を見てだ。今回もほくそ笑んでいた。

「まんまと引っ掛かってね」

「いい気味」

「何もしてない訳ないじゃない」

「趣向を変えたのよ」

そして誰にも聞こえないようにクラスの端に立ってそこで話すのだった。

「落書きから接着剤にね」

「落書きは見えるけれど接着剤は見えないしな」

「いい感じで成功したし」

「如月の作戦成功ね」

「言ったでしょ？これは絶対に成功するって」

言いだしつぺらしく最も醜い笑みを浮かべて泣きそうな顔になる神無を見ていた。その横には弥生がいて必死に慰めている。

「見えないのは効くのよ」

「見えないとね」

「それがなのね」

文月と霜月もそれを見て話す。

「じゃあまたする？」

「そうする？」

「勿論よ」

如月はまた醜い笑みを浮かべて答えた。

「それとあいつにも直接ね」

「やっぱりそれも続けてくんだな」

長月も同じく醜い笑みを浮かべていた。そのうえで如月に応じる。

「そっちも」

「そうよ。やり方は色々あるしね」

「色々ね」

「あるっていろいろのね」

「そう、あるわよ」

今度は文月と霜月に返した。

「まあ見ている。アイテムもあるし」

「アイテムって？」

「後で渡すから。場所は部屋だけじゃないし」

場所についても話したのだった。

「だからね。落ち着いてね」

「落ち着いて」

「それでやってくと」

「そういうこと。あいつ絶対に許さない」

神無への激しい憎悪もだ。同時に見せた。

「こうなったら死ぬまで追い詰めてやるから」

「ああ、もうそうしようぜ」

長月もだった。憎悪を見せた。

「あいつ、何か見てるだけでむかつくしな」

「部活に何でまだ来るのよ」

「学校自体に」

憎しみは自然に伝染していた。文月も霜月もだった。やはり憎し
みを見せている。それは四人を完全に取り込み歪ませていた。

「この世から消してやるから」

「死ねばいいのに」

「自殺するまでやってやるわよ」

話す如月の顔はこれまで以上に歪んでいた。

「それでいいわよね」

「ああ」

「それじゃあね」

こんな話をしてだ。四人はさらにエスカレートしていった。そし
てそれに自分達では気付かない。また自分達を見ている目にもだ。
気付かなかった。

第五話 完

第六話 暴かれた時その一

第六話 暴かれた時

体育の授業の後でだ。女子は更衣室で着替えていた。ロッカーと壁、それとプラスチックの青い机と白い椅子があるだけの無機質な部屋の中である。ジャージから制服に着替えていた。しかしその時だった。

神無がだ。自分が制服を入れていたロッカーを開けて。暗澹たる顔になった。

「どうしたの？」

その彼女に隣にいる弥生が尋ねた。

「まさかまた」

「ええ」

弥生に対してその暗鬱な顔で応える。

「制服が」

「ないのね」

「うん……」

頷く。見ればロッカーの中には何もなかった。

「何処なのかしら」

「探しましょう」

弥生はすぐに彼女に話した。

「いいわね」

「うん、じゃあ」

「今度は制服なのね」

いよいよだった。弥生はその顔に明らかな義憤を見せていた。

「それもこの時間にするなんて」

「何かあるの？」

「うちのクラスの誰かかしら」

こう考えだしたのである。

「まさかと思うけれど」
「同じクラスの」
「そうじゃないとおかしいわ」
神無に対しても話す。
「だって。体育の時間を狙ってしたじゃない」
「うん……」
「間違いなくうちのクラスよ。こうなったらね」
「こうなったら？」
「誰か探し出してそれで」
「考えるものもだった。自分の顔に見せていた。」
「許さない、徹底的にやっつけてやるわ」
「徹底的に」
「いじめは許さない」
正義感の強い彼女らしい言葉だった。
「だからよ」
「それでなの」
「椎葉さん、本当にね」
ここまで話したうえであらためて神無に問うてきた。
「心当たりはない？誰がやったのか」
「誰がって？」
「そう、誰がこんなことをするのか」
問うのはこのことだった。
「心当たりない？」
「それは」
「なかったら仕方ないけれど」
弥生はまた失態を犯してしまった。気付かないうちに今の言葉で神無の言葉を塞いでしまった。元々言えないことであってもだ。
「とにかく制服ね」
「うん、探さないと」
「行きましよう」

こうしてだった。弥生は自分も着替えもよそに神無を連れてそのうえで彼女の制服を探しに向かった。制服自体はすぐに見つかった。しかしである。その制服はだ。ゴミ捨て場にあった。

おまけにずたずたに切り裂かれ落書きまみれだった。そのうえで礫の様に掲げられゴミ捨て場に晒されていたのだ。二人もそれを見た。

その無惨な有様を見てだ。弥生は呆然とした。神無は泣きそうな顔で俯いた。

「酷過ぎる、何よこれ」

「私の服が……」

「ねえ」

そしてだ。ここで弥生は神無に顔を向けてここでも問うた。

「本当に心当たりない？誰が一体ここまでするの？」

「それは」

言いたかった。だが言えなかった。それだけ神無のいじめへの恐怖が強くなっていったからだ。それはもう絶対のものにさえなっていた。

それで言えなかった。口ごもる彼女を見てだ。弥生はここでも誤解した。

「なかつたらいいけれど」

「うん……」

「けれどもうこれ犯罪よ」

弥生の怒りはさらに高まったのは確かだった。

第六話 暴かれた時その二

「誰なの？ここまでするなんて」

しかしこの場はどうしようもなかった。結果として神無はこの日ジャージで過ごすしかなかった。そして部活の時はだ。

またしてもロツカーが荒らされ誹謗中傷の落書きで覆われていた。誰がやったのかは最早明白だった。おまけに鞆の中にはだ。

「ここまでする人間いるのかしらね」

それを見た皐月がだ。こう言うまでのものがあつた。そこにはだ。何と腐つた肉があつた。しかもヘドロまでぶち込められていたのだ。

「もうこの鞆使えないわよね」

「使えませんか」

「残念だけれどね」

皐月は苦い顔で神無に述べた。

「もう無理よ」

「この鞆は……」

その神無がこれ以上はなく項垂れた様子で言った。

「私が子供の頃に」

「子供の頃に？」

「お婆ちゃんに買ってもらったものなんです。お婆ちゃんが死ぬその時に私につて」

「そんな大事なものだつたのね」

「はい」

その項垂れた様子での返事である。

「そうなんです」

「じゃあ捨てる訳にはいかないのね」

「はい、何とかしてまた使いたいんですけど」

「わかつたわ。それじゃあね」

それを聞いてだった。皐月はすぐに言うのだった。

「中をじっくり洗ってね。それでまた使いましょう」
「それじゃあすぐに洗って」
「私も一緒に洗うから」
「それでだというのだった。」
「それでね」
「部長もですか」
「ええ、それでいいかしら」
「臯月はにこりと笑って神無に対して話すのだった。」
「一人でやるより二人でやる方が確実にできるじゃない」
「けれどこれは私のですから」
「こつ戸惑いながら話す神無だった。」
「それは」
「駄目だっというの？」
「そんなこと。部長に迷惑がかかります」
「だからだというのである。それが神無の言うことだった。」
「ですから」
「じゃあ迷惑じゃなかったらいいのね」
「えっ!？」
「迷惑じゃなかったらいいのね」
「臯月は微笑んだ。その顔で神無に対して告げてみせたのだ。」
「それでいいのね」
「それでって」
「私は迷惑じゃないから」
「また言う臯月だった。」
「そういうことでね」
「それでって」
「それじゃあすぐにこの鞆洗ってまた使えるようにしましょう」
「臯月はにこりと笑ってだ。実際にその鞆を手を取っていた。」
「いいわね」
「いいんですか、それで」

「いいわよ。大切な鞆なのよね」

「はい」

そのことは否定できなかった。神無自身が最もよく感じていることだった。

「それじゃあ」

「二人でね」

こうして鞆はすぐに洗われなおされた。皐月のお陰でそれだった。

神無にとってこのことは非常に有り難かった。しかしだった。

それを見てだ。四人が忌々しげに話していた。グラウンドの隅でだ。そこで顔を顰めさせてそのうえで苦い言葉をそれぞれ出していた。

「何よ、部長」

「ああ、あんなことしてな」

「全く。何考えてるのよ」

「あんな奴の鞆元に戻してね」

こう話すのだった。

「あれだけやった意味ないじゃない」

「そうそう、折角鞆滅茶苦茶にしてやったのにね」

「そうね。腹が立つわね」

如月が文月と霜月の言葉に応えた。

第六話 暴かれた時その三

「それじゃあ」

「それじゃあつて？」

「また考えたのね」

「そうよ、今度はね」

また言う彼女だった。

「鞆が駄目なら中身よ」

「中身ね」

「そつちななのね」

「そうよ、中身よ」

そこだというのだった。

「鞆が駄目なら中身よ。やってやるわよ」

「よし、じゃああいつの鞆取つてな」

長月がそのやり方を提案した。

「それでやってやるか」

「ううん、もつといい方法があるわよ」

しかしだった。如月はここでこんなことを言うのだった。

「それがね」

「もつといい方法がかよ」

長月はそれを言われて少しきよとんとした顔になった。

「それつてどんなのなんだよ」

「うん、まずはあいつ捕まえてね」

如月は悪意に満ちた笑みで話したのであった。そして四人はすぐに如月が話したそのことを実行に移したのであった。それは確かに早かった。

学校から帰るその時にだ。神無を捕まえてだ。またゴミ捨て場のところに連れ込んだ。その間ずっと髪を引っ張ったり服の中に土を入れたりした。

そしてゴミ捨て場に着くとだ。まずは如月が彼女の鞆をひったくった。

「あっ……」

「この鞆には何もしないわよ」

如月は一応はこう言った。だが地面に叩き付けその上から踏み躪ることは忘れなかった。今の彼女にそれは何でもないことだったのだ。

そしてだ。鞆を踏み躪りながらまた言うのだった。

「中身よ」

「それじゃあ中出そう」

「そうしよう」

文月と霜月が話す。そしてだった。

鞆のチャックを開いて逆さにして中身を出した。教科書や筆箱やノートがだ。どさどさと地面に落とされていく。

そしてだった。長月が教科書の一冊を出してだった。それを焼却炉の中に放り込んでしまった。

「こうするんだよな」

「そうよ」

如月は邪な、悪鬼を思わせる笑みで長月の言葉に応えた。

「そうして」

「それじゃあね」

「どんどん入れましょう」

「そうよ。ほら、どうよ」

教科書を焼却炉の中に入れられて呆然となる神無に手に取ったゴミをぶっつけながらだ。如月は彼女に対して問うのであった。

「自分のものを焼かれる気持ちは」

「火点けるぜ」

長月が実際にマッチを焼却炉の中に入れようとする。しかしそれは如月が名乗り出たのだった。

「待って、私がするわ」

「ああ、如月がかよ」

「こいつ本当にむかつくのよ」

言いながらだった。自分でマツチを摺ってそれを焼却炉の中に入れた。火は忽ちのうちに燃え上がりだ。教科書を焼いてしまった。

そこにさらに他の教科書やノートが放り込まれていく。神無の前でそういったものがだ。次々と燃やされていくのだった。

神無はその光景を唾然としながら見ている。しかしそれだけではなかった。

「これで終わりじゃないわよ」

「はい、これ」

「今度はこれね」

文月と霜月がスプレーを出してきた。缶のスプレーである。

「今日はこれで最後にしてあげるわよ」

「感謝しなさい」

「それじゃあね」

また言う四人だった。そしてだ。

四人で神無の頭にスプレーをかけた。それで赤く染める。それから顔にマジックで赤や黒で落書きしていく。最後にその頭を如月が横から蹴った。

蹴られてそれで吹き飛び頭からゴミ捨て場へ突っ込む。神無はそれで動かなくなった。

「いい気味だよな」

「そうね」

如月はそんな神無を見ながら長月の言葉に頷いた。

第六話 暴かれた時その四

「よかつたじゃない。お友達に守ってもらってね」

「だよな。そのままずっとそこにいろよ」

「もう学校に来なくていいから」

「っていつか辞めたら？」

文月と霜月も馬鹿にした顔で言った。

「じゃあ帰ろう」

「今日はこれでね」

何はともあれこれで帰った四人だった。しかし誰かに見られているということには全く気付いていなかった。そしてそれが終わろうとしていることもだ。

岩清水はまた従兄と話していた。彼はパソコンに映像をあげてそれを従兄に見せてだ。そのうえであれこれと話しているのだった。

「どうかね」

「いいね、よく撮れてるよ」

「そう思う？」

「トイレにゴミ捨て場に。部室だね」

「それとグラウンドね」

見ればだ。映像は如月達が神無をいじめている場面ばかりだった。その全てがだ。その映像には完璧に映し出されていたのである。

二人はパソコンに出ているその画面を見てだ。そのうえで話していた。

「そういうことをしそうな場所にカメラ置いておいたから」

「いいねえ、それもそれぞれ幾つも置いてたんだね」

「健一郎兄ちゃんに教えてもらった通りね」

「そう、それだけね」

「あと裏サイトだよ」

「魚拓は取ったよ」

「従兄は彼にこのことを尋ねた。」

「若し消えた時にも」

「取ってるよ」

「抜かりはないというのである。」

「もうね」

「さらにいいね。それじゃあ」

「もうそろそろかな」

「彼はまた従兄に問うた。」

「そろそろ仕掛けるべきかな」

「うん、そうだね」

「従兄も彼のその言葉に頷いた。」

「もういいね」

「これだけの材料があつたら後はいけるね」

「充分ね。糾弾できるよ」

「従兄は笑って応えた。何故かそこには邪悪さが満ちていた。」

「確実にね」

「そう。じゃあもうこれでね」

「はじめたらいいよ。それからわかるね」

「うん、徹底的にやるんだね」

「そう、徹底的にね」

「従兄はこのことを強調して彼に告げた。」

「もう容赦することはないから」

「いつも通りだね」

「そうだよ。君がこれまでやってきた通りね」

「兄ちゃんがいつもしているように」

「そう、徹底的にやるんだ」

「従兄はまた言った。」

「いじめは最低の行為だよ。それをする奴は悪なんだ」

「だからどれだけ糾弾して攻撃してもいい」

「そう、それこそ手段を選ばなくていいんだ」

また従兄の顔に邪悪なものが宿る。そしてそれは岩清水も同じだった。

「何一つとしてね」

「何一つとしてだよね」

「相手を破滅させるんだ」

従兄はこうまで言った。

「完全に。死んでもそれでも」

「これもいつも通りだね」

岩清水は邪悪さに満ちた笑みを浮かべていた。平凡な筈の顔がだ。まるで悪鬼の様に変貌していた。その顔で話すのだった。

「死んでも墓場までね」

「いじめている奴には何をしてもいいんだ」

「うん、本当にね」

「だから。いいね」

「僕やるからね」

二人はまた言い合った。

「今度もね」

「最後まで見させてもらおうよ」

こう話してだった。そのうえでだった。岩清水は次の日にだった。動いたのだった。

第六話 暴かれた時その五

その日の朝は神無の机が外に投げ出されていた。椅子もである。しかもこの日も落書きがあった。そしてそれだけではなかった。

昼にだ。神無に対してだ。また四人が囲んできた。

「じゃあお昼行こう」

「ねえ、何処がいい？」

「トイレ？それともゴミ捨て場？」

神無を抓ったり引つ張ったりししながら囲んで問う。

「友達だし。一緒に食べようよ」

「楽しくね」

「う、うん」

神無は蒼白になってそのうえで四人に頷いた。

「それじゃあ」

「今日も楽しく食べようよ」

「そうしよう」

こうしてだった。そのまま神無を連れて行こうとする。しかしだつた。

岩清水が来た。そうしてだ。神無しの手を掴んで引き戻してから言うのだった。

「いいじゃない、こっちで食べようよ」

「えっ!？」

このことに驚いたのは神無だけではなかった。四人もである。四人はその啞然とした顔で岩清水に対して言うのだった。

「ちよつと、何よ」

「うち等これから同じラクロス部で昼行くんだけ」

「そうよ。仲間内で楽しくね」

「これから行くだけじゃない」

「そういえばだけれどさ」

岩清水は四人に対して言うだけではなかった。今クラスにいる他の面々にも聞こえるようにしてだ。こう言ってみせたのだった。

何気なくを装って。しかし周到な計算のうえでだ。彼は言った。「ずっと前から不思議に思ってたんだけれど」

「何よ」

「何なんだよ」

「椎葉さんに何かある時四人共何かした？」

こう四人に問うのだった。何気なくを装って。

「困っていた時に何かした？同じラクロス部だっというけれど」

「そういえば」

彼の言葉に最初に気付いたのは弥生だった。

「如月達そういう時いつも教室の端にいるわよね」

「そうだね」

葉月もそれに続く。

「確かにね」

「同じラクロス部よね」

弥生は四人にこう言ったのだった。

「それだったら普通真っ先に助けない？」

「同じ部活だったら付き合っても深いんじゃないかな」

また言う葉月だった。

「そういうの考えたら」

「どうしてなのかな」

「そ、それは」

「その……」

二人のいぶかしむ声にだ。四人は口ごもってしまった。言葉がなくなつた。

「それはね」

「ま、まあ何ていうか」

「ちよつと」

「ねえ」

「どうしたの？焦ってない？」

弥生はそんな四人の態度にさらにいぶかしんだ。

「私の気のせい？」

「どうしたの？」

葉月も怪訝な顔になって四人に問うた。

「本当にさ。おかしいよ」

「そ、そうかしら」

「別にそんなことはないけれど」

如月も焦っていたし霜月の言葉はおかしなものになってきていた。

「私は別に」

「私も。特にないわよ」

「うち等だってラクロス部だしさ」

「そうよそうよ」

文月は長月の咄嗟の言葉にすがりついた。

第六話 暴かれた時その六

「だからやっぱりさ」

「心配なのは心配よ」

「だったらいいけれど」

「それじゃあ今度こんなことがあったら」

弥生と葉月は気付かないまま四人に告げた。

「力、貸してね」

「一緒におかしなことは止めさせようね」

「わかったわ」

如月は全身から冷や汗を流しながら答えた。

「それじゃあね」

「ええ、御願いな」

弥生は如月のその返答に頷いて返した。

「それで誰がやったのか突き止めないと」

「そうだよ。何かもう許せなくなってきたしね」

ここでこんなことも言う弥生と葉月だった。

「それで止めさせて」

「そうしよう」

「そうだね」

岩清水はタイミングを見計らって二人のその言葉に頷いた。

「それじゃあそれはね」

「それは？」

「どうかしたの？」

「僕に任せて」

善良そのものを装っての申し出だった。

「僕にね」

「岩清水君何か考えがあるの？」

「だとしたらそれって何なの？」

「うん、ちよつとね」

無意識を演じて四人を見る。だが四人も今はその視線に気付かなかった。

「やってみるよ。それじゃあ任せてくれるかな」

「犯人がわかるなら」

「御願いでできるかな」

二人は少し考えてから岩清水に返した。

「私達もいい加減頭にきてるし」

「是非ね」

「うん、わかつたよ」

その言葉に頷く岩清水だった。

「それじゃあやってみるから」

「ええ、御願いするわ」

「それじゃあね」

「そういうことで。ねえ」

岩清水は今度は四人に顔を向けた。

「君達もさ」

「うち等か？」

「私達もなの」

「うん、そうだよ」

こうその何も知らないふりをした仮面で述べた。

「力を貸してね」

「力って」

「そう言われても」

「一体何？」

「何をするの？」

「犯人を探すのに力を貸して欲しいんだ」

わかっているが気付いてもないふりをしていた。

「それをね」

「犯人をなの」

「それを」
「今から見つける？」
「そうするのね」
「そうだよ。だからね」
「また言う岩清水だった。」
「協力を御願いますよ」
「え、ええ」
「頷いたのは如月だった。」
「じゃあそれでね」
「御願いましたよ。それで約束して欲しいんだけど」
「岩清水はさらに話してみせてきた。」
「いいかな」
「約束って」
「今度は一体何？」
「この場合の約束って」
「一体」
「若し椎葉さんにしてきた人を見つけたら」
「四人を見ての言葉だった。」

第六話 暴かれた時その七

「人達を見つけたら」

「うっ……」

「ど、どうするの？」

それこそが他ならぬ自分達のことである。四人は岩清水のその言葉のトーンが低くなってきているのにも反応してしまい怯えてだ。いささか引いて言葉を返したのだった。

「それじゃあ約束って」

「ここでは一体」

「何なの？」

「何すればいいのよ」

「その人にしても人達も絶対に許さない……
強い言葉だった。

「このことを誓って欲しいんだ」

「そのことをなの」

「そうなの」

「そうだったの」

四人はここでやっと岩清水の今の言葉の意味がわかった。そのうえで応える。

「犯人を見つけてね」

「そのうえで引き出すっていうのね」

「うん、そのつもりだよ」

岩清水はあえてはつきりと言い切ってみせた。

「そうだけれどね」

「う、うん」

「わかったよ」

ここで四人はやや俯いて応えた。

「じゃあ私達もね」

「協力させてもらうから」

「それに」

「頼んだよ」

あくまで善人を装って言う岩清水だった。その裏にあるものは見せない。

「それじゃあまずだけれど」

「何をするの？」

「僕に考えがあるから」

今度は弥生に返した岩清水だった。

「ちよつとやってみるよ」

「じゃあ僕達は何をすればいいのかな」

「今は何もなくていいよ」

これは葉月への言葉だった。

「僕の方でやるから」

「そうなんだ」

「うん、だからいいよ」

岩清水はまた言ってみせた。

「それじゃあ。ちよつとやってみるよ」

「うん、それじゃあね」

「頼んだよ」

二人は彼に任せることにした。四人は何しろ自分達がやってきたことなのでバツの悪い思いをしていた。しかし今は何もできなかった。

何はともあれこれだった。四人は神無には表立って何もできなかった。そしてそれは部活においても同じことになっていたのだ。泉月がだ。岩清水に言われてそれで言うのだった。

「やっぱりいじめはあったみたいなのよ」

「椎葉さんにですよね」

「そうですよね」

「ええ、そうよ」

「こう部員達にも答える臯月だった。部室の中で真剣に話をしている。」

「だからね」

「そのいじめっ子が誰かよね」

「見つけ出す」

「そうするのね」

「そうよ」

臯月は二年生の言葉に答えていた。自分達と同じ二年生のだ。

「そうするから。どうもね」

「どうも？」

「何かわかったの？」

「聞いた話だと若しかしたらラクロス部にもいるかもって」

「こう不吉な顔で言うのだった。この言葉を聞いて四人も顔を曇らせた。」

「ひょっとしたらだけれど」

「ラクロス部に？」

「まさか」

「そんな筈はないけれど」

「私も今まではそう思っていたわよ」

臯月は真剣な顔で話を続ける。

第六話 暴かれた時その八

「けれどね。そうじゃないとおかしくない？」

「おかしいって」

「どういうこと、それって」

「つまりは」

「だから。部員以外にはこの部室に入ったりしないじゃない」

皇月が言うのはこのことだった。実は彼女は岩清水に会っていた。

そして彼からこのことを言われてそれで考えを変えたのである。

「そうでしょ、だからね」

「そうは考えたくないけれど」

「同じ部員を疑うのはね」

「ねえ」

「ちょっとね」

「私だってそうよ」

ここで皇月もこう言った。

「それでもよ。おかしいでしょ、今まで」

「確かにね。どう考えてもね」

「ラクロス部じゃないと部室には入れられないし」

「そうそういつもは」

「男子生徒だったらね」

皇月はまた岩清水から聞いたことを話した。

「それこそ下着とか取っていくじゃない。泥棒なら皆の財布を狙うわよね」

「椎葉さんだけを狙わない」

「確かにそうね」

「そうなるわね」

「そしてよ」

皇月は岩清水から聞いてだった。色々なことがわかってきた。だ

がそのわかつてきたことは彼が多分に吹き込んだものであることは気付いていない。

「椎葉さんって転校生よね」

「ええ」

「そうよね」

「そうなるわよね」

「それだったらよ」

皐月はさらに話す。

「やっぱり。ラクロス部の部員になるわ」

「まだ他の部には知られてる娘じゃないし」

「それだったら」

「つまりは」

「ここだ。部員達もわかってきたのである。

そのうえでだ。皐月の話をさらに聞くのだった。

「ラクロス部の娘の可能性が強い」

「じゃあ誰？」

「誰なの？」

「それを調べていくわ」

皐月は真剣な顔で言った。

「もうね。容赦しないから」

「そうよね。今までやってきたこと酷過ぎるし」

「こんなことする娘いるんだったら」

「絶対に許さないわ」

「そうよ、本当によ」

四人以外の部員以外も話す。四人はこの話をバツが悪い顔で聞いていた。そしてだ。ここでその四人にだ。皐月が声をかけてきたのだった。

「ねえ」

「あつ、はい」

「何ですか？」

「それで」

「貴女達椎葉さんと同じクラスだから
彼女が言うのはこのことからだった。」

「だからね」

「はい、だから」

「何かありますか?」

「あるわ。探し出して」

真剣な顔で四人に告げた言葉だった。

「いいわね、絶対にね」

「絶対に、ですか」

「そうしろっていうんですね」

「つまりは」

「私達に」

「貴女達が一番近いから」

だからこそだ。皐月はそれで四人に告げたに過ぎない。しかしであつた。

その言葉はだ。四人を追い詰めるものだった。彼女達は皐月のその言葉を受けてだ。かなり狼狽を見せた。皐月もまたその狼狽を見た。

第六話 暴かれた時その九

「どうかしたの？」

「どうかって」

「何が」

「急に慌てだしたけれど」

少しきよとんとなった顔で四人に問う。

「どうかしたの？」

「い、いえ別に」

「何でもないです」

「本当に」

必死に取り繕う四人だった。そして何とか演技に入った。

「じゃあ私達がですよね」

「その。椎葉さんをいじめていた相手を探す」

「そうするんですね」

「ええ、御願い」

こつ話す臯月だった。

「もう許せないから」

「あの」

ここぞだ。如月がその臯月に問うた。

「それでなんですけれど」

「どうしたの？」

「その犯人を見つけたらどうするんですか？」

気になってだ。ついつい問うたのである。

「いじめていたその相手は」

「勿論容赦しないわ」

強い顔での返答だった。

「もうね。何があっても許さないから」

「そうなんですか」

「若し。こんなこと本当に考えたくないけれど」

「こう前置きしてからまた言うのだった。」

「ラクロス部だったらね」

「その場合はどうするんですか？」

「退部よ」

本気だった。言葉にそれがはつきりと出ていた。

「辞めさせるわ、絶対にね」

「退部、ですか」

「当たり前でしょ。そんなことする娘許せないから」

その本気の言葉をまた言ってみせたのであった。

「だからよ。誰であろうとも退部させるわ」

「そうよね、そうじゃないとね」

「ここは厳しくしないとね」

「絶対に許したらいけないわよ」

臯月以外の二年生の面々もだ。口々に言うのだった。

「そういうことね」

「犯人はラクロス部が総力を挙げて見つけ出して」

「それで徹底的にやってね」

「部員だったら退部」

「もうこれ決定ね」

「そうよ、決めたわ」

臯月は同級生達の言葉に頷いた。このラクロス部では二年生同士、一年生同士のつながりが深い。所謂横のつながりが強いのである。

「犯人には。とことんまでやってやるわ」

「ええ。それで問題は」

二年の一人がまた話してきた。

「誰かだけれどね」

「そうよね、誰かしら」

「それがわからないし」

「ねえ、椎葉さん」

二年生達はやがてだ。その場にいた神無に対して問うた。彼女も当事者、しかも被害者としてだ。今のミーティングに参加しているのである。

「本当に誰か知らない？」

「よかつたら言って」

「御願いますわ」

「いえ、私は」

目だけで少しだけ如月達を見てから。怯える顔で言うのだった。

「何も」

「相手は本当に見てないの？」

「すみません」

皐月の問いにもこう答えるだけだった。

「本当に誰なのか」

「そうなの。仕方ないわね」

皐月は当事者からの証言がないことに落胆を覚えた。

第六話 暴かれた時その十

「それじゃあね」

「こつちで調べるしかないわね」

「ええ、そうね」

「結局のところは」

二年生は二年生で話していく。そしてそのうえで皐月が最後に全員に話してきた。

「じゃあわかつたわね」

「はい、犯人を絶対に見つけます」

「何があってもそうします」

「そういうことですよね」

「そうよ。御願いな」

また話してだった。これで話を終えたのだった。このミーティングと部活が終わってからだ。四人は学校から帰りながら。そのうえで話をしていた。

「ねえ」

「まずいんじゃないの？」

まずは文月と霜月が言ったのだった。

「この状況って」

「部長も二年の先輩達も本気よ」

「だよな」

長月は暗い顔で二人のその言葉に頷いた。

「マジでやばいんじゃない？」

「それにクラスはクラスだよ」

「弥生本気になったし」

「葉月君もね」

「しかもあいつがいるよな」

長月はここである人間の名前を出した。

「あいつがな」

「ああ、岩清水」

「あいつよね」

二人は今の長月の言葉にさらに悩み苦しむ顔になっていた。

「あいつ何なの？」

「何か急に出て来たけれど」

「あいつって一体」

「何なんだよ」

「そうよね。若しあいつが何かしたら」

「ここで如月も言ってきた。

「それだけでね」

「まずいよな、やっぱり」

長月は顔を顰めさせながら述べた。

「この状況ってよ」

「若しもよ。若しもだけれど」

「うん」

「どうなの？」

文月と霜月はその如月の言葉を聞いた。長月もだ。

「あいつがいじめのことを知ったら」

「いや、あいつだけじゃなくてよ」

「弥生にしても皐月部長が知っても」

「まずいだろ」

「そうよね」

四人で話していく。

「部長本気よね」

「絶対に本気よ」

霜月が踏みつきに真剣な顔で話す。

「あの顔だとね。本気で退部させるわよ」

「ばれたら」

「大丈夫だよな」

長月も普段の強気さはなかった。

「うち等、ばれないよな」

「そうよね。何か皆言いだしてるし」

「部活でもクラスでも」

「下手したら」

「止めよう」

そしてだ。ここで如月が三人に言った。

「もう止めよう、いじめるの」

「うん、これ以上やったら絶対ばれるわよ」

「ばれたら私達終わりよ」

文月と霜月は焦り怯えた顔になっている。

第六話 暴かれた時その十一

「クラスでは爪弾きにされて」

「部活は退部させられて」

「そうになったら終わりじゃない」

「学校にいられないわよ」

「止めよう、本当にな」

長月もその細い眉を顰めさせて言う。

「このままやってたらマジやばいからな」

「うん、確かに椎葉はむかつくけれど」

「これ以上やったらこっちが終わるから」

「だからもう」

「そうよ。もう止めよう」

如月も怯えていた。彼女にとっては皐月の言葉が一番怖かった。

「これ以上やったら本当にはれるからね」

「うん、止めよう」

「これでね」

四人はこれで本気で止めるつもりだった。実際にこれ以降彼女達は神無に対しては無視はするが何もしようとしなかった。しかしである。

その声をかえたりもしない四人を見たふりをしてだ。岩清水がまた言った。

「どうしたの？」

「えっ？」

「どうしたって？」

「確か君達同じ部活だよな」

「ここから話すのだった。気付いたように演じて。」

「そっだよな」

「そっだけれど」

「それがどうかしたの？」

「どうして挨拶しないのかな」

こう言うのだった。

「声をかけたり話すこともしないし。何かあったの？」

「別に」

最初に否定したのは如月だった。

「何もないけれど」

「本当に？」

岩清水はここでも何も知らないふりをして如月のその言葉に問うた。

「本当に何もないんだ」

「そうだよ、何もないよ」

長月が少しいらいらしたものを感じて言い返した。

「別によ」

「そうかな。本当かな」

「何が言いたいんだよ」

ただでさえ不安になっている時だ。今の言葉に苛立ちを覚えた。

そしてそれは長月だけではなかった。

「そうよ。言いたいことあるんなら言いなさいよ」

「何が言いたいなのよ」

「だから。どうして挨拶とかしないのかな」

再びこのことをシンプルに問うてみせた。

「それはどうしてかな」

「だから別に何も無いわよ」

「さっきから言ってるじゃない」

文月と霜月も眉を顰めさせていた。

「何かつつかかるけれど」

「何も無いって言ってるじゃない」

「本当に？」

今言ったのは岩清水ではなかった。弥生である。四人と岩清水が

話をしているのを聞いてだ。それで五人のところに来たのである。

「それ本当に？」

「えっ、ええ」

弥生が出るとだ。如月は急に弱くなった。

「そうだけれど」

「そうなの。何も無いのね」

「そうよ。何も無いわ」

少し焦った顔で言い繕う。

「だから気にしないで」

「だったらいいけれど」

「そうだね」

岩清水は今度は弥生に対して言った。

「じゃあいいよ、それでね」

「訳わからないけれど」

如月はまだ不安な面持ちだった。

第六話 暴かれた時その十二

「あの、岩清水」

「何かな」

「あんた何がしたいのよ」

その不安な面持ちで彼を見ての言葉である。

「本当に」

「別に」

岩清水は温和そのものの仮面を被って述べた。

「何も無いよ」

「何も？」

「うん、何もね」

口ではこう言う。仮面を被ったまま。

「そうなんだ。君達仲いいんだね」

「え、ええ」

「そうよ」

「そうに決まってるだろ」

三人も必死に言い繕う。

「同じラクロス部だし」

「それだったらよ」

「仲悪い筈ないだろ」

「そうだね。ラクロス部だよね」

岩清水は今度はこのポイントを指摘した。

「同じね」

「そうよ、同じラクロス部よ」

今度は如月が応えた。

「だから別に。そういうことは」

「そういえば。椎葉さんに起こったことだけねど」

岩清水の今度の言葉はふと気付いた感じであった。やはりこれも

わかっていて出している。彼は周到に計算して話しているのである。

「あれって同じラクロス部の娘じゃないとできないのかもね」

「えっ……」

皇月と同じ言葉だった。だがそれは四人の心に突き刺さった。

「それはどうなのかな」

「さ、さあね」

「どうかしらね」

「わからないわよね」

「ちよつとね」

四人はまた焦りながら言葉を返した。

「まあ。誰が犯人かっていったらね」

「私達知らないし」

「知ってればいいんだけど」

「知っていたらね」

岩清水は隠したままである。

「また教えてよ」

「わかったわ」

如月が頷いて返した。

「それじゃあね」

「そうしてよ。それじゃあだけれど」

「それじゃあ？」

「僕は僕で動くから」

岩清水はこう言つて四人の前から去ろうとする。

「そういうことだね。何かあつたら教えてね」

「うん、それじゃあ」

「頑張つてね」

四人は焦りを隠せないまま岩清水を見送った。だが四人の心は彼の言葉を受けてだ。その不安と狼狽をさらに深めさせ強くさせていた。

それでだ。如月はその場で言うのだった。

「ねえ」

「何だよ」

長月も不安に満ちた顔で返した。

「一体」

「まさかと思うけれど。ばれないよね」

「大丈夫だよ」

今言ったのはその長月である。

「それは」

「大丈夫なの？」

「本当に？」

「だってよ。誰も見てないだろ？」

長月は文月と霜月の言葉に一応返しはした。

第六話 暴かれた時その十三

「それでどうやってわかるんだよ」

「そうよね」

文月は長月のその言葉に頷きはした。だがその顔は不安に満ちていた。

「誰も見てないし」

「あいつも何も言わないし」

霜月は自分達がいじめた相手について言及した。

「それではれる筈ないよね」

「口止めする？」

如月はふと言った。

「あいつに」

「椎葉にか？」

「うん、後はあいつが黙ってれば絶対にはれないじゃない
だからだというのだった。」

「だからね。どうかしら」

「そうよね。そうする？」

霜月が最初に如月のその提案に頷いた。

「あいつさえ黙っていればね。いいから」

「じゃあそうするか」

長月も霜月に続いた。

「ここは」

「うん、それじゃあね」

最後に文月だった。

「あいつを黙らせてね」

「よし、そうしよう」

また話す如月だった。こうして四人は神無のところまで来てそれで言おうとした。

「ねえ椎葉」

「いいか？」

不安と狼狽に満ちたその顔にはいじめていた時の高压なものは何もなかった。立場はもう完全に変わっていた。少なくともいじめる人間のものではなかった。

「あのことだけけれど」

「ああ、椎葉さん」

しかしだった。ここでまた岩清水が出て来た。まるで見計らった様なタイミングだった。

「いいかな」

「はい？」

「ちよつとこつちに来て」

「こつちつて？」

「聞きたいことがあるから」

こう言つて神無のところに来て四人を寄せ付けないのだった。

「来て欲しいんだけど」

「そうなの」

「うん、だからこつちに来て」

また言つ岩清水だった。

「いいかな」

「わかつたわ。それじゃあ」

こうしてだった。神無を四人から引き離して何も言わせなかった。口止めすることができなかった四人はこれでさらに不安と狼狽を高めさせることになった。

「どうしよう・・・・・・」

「話せなかつたけれど」

「どうする？」

四人は屋上に出てそこで話す。空は今雲に満ちて青いものはなかった。

「次に言う？」

「次の機会を見つけて」

「そうする？」

「そうするしかないよ」

如月が三人に告げた。彼女もそうだが四人共俯いてしまっている。

「やっぱりね」

「黙らせないと駄目だよね」

文月も俯いたまま言う。

「何とかして」

「捕まえよう、何とかして」

霜月が一番狼狽していた。不安で不安で仕方ないといった顔である。

「それで口止めしないと」

「ああ、あいつが喋ったらうち等終わりだよ」

長月もこれまでの粗暴な強気さはなくなっていた。ただひたすら狼狽してそのうえで仲間達に対して言うてそれがさらに不安を高めさせていた。

「だからな。ここはな」

「椎葉捕まえよう」

また言う如月だった。

「絶対にね」

「うん、本当にね」

「そうしないと」

こんな話をしてそのうえだった。次の日の昼にだった。四人は昼食前にその神無を屋上に呼んだ。

「ちよつと来てくれるかな」

「いいよな」

こつは言うつがもう顔にはこれまでの邪悪さはなかった。高圧的なものもなく焦っているばかりだった。攻撃性は完全に消えていた。

第六話 暴かれた時その十四

「屋上にね」

「そこで話あるから」

「話って……」

椎葉は四人を前にして顔を蒼白にさせた。ここ数日いじめられなくなったとはいえまだ恐怖は彼女を支配したままだった。それなのだ。

「何もしないから」

「そうよ、話があるだけだから」

文月と霜月が言うのだった。

「だからね」

「来てよ」

「う、うん」

これだった。四人は神無を連れて屋上に向かう。しかしここであった。

「ねえ、皆」

「んっ？」

「何かあったの？」

「お昼前で悪いけれど」

やはり岩清水だった。クラスの皆に声をかけたのだ。

「ちょっと行かない？」

「行くって何処に？」

「何処になんだよ」

「いいから。ちょっと来て」

あえて場所は今は言わないのだった。

「今からね」

「？何なの？」

「何かあるの？」

その中には当然弥生と葉月もいる。二人は怪訝な顔になって岩清水に問うた。

「これから」

「一体何が」

「すぐにわかるよ」

やはり今は何も言わない岩清水だった。あえてである。

「だから。来て」

「何かわからないけれど」

「若しかしてだけれど」

ここで葉月が言った。

「いじめのことかな」

「いじめの?」

「そう、いじめのね」

こう弥生に話すのだった。

「そのことかな」

「まさか。それに如月達が関係あるっていつの?」

「僕もそれはないと思うけれど」

葉月もだ。如月達がそんなことをするとは思っていなかった。弥生はさらにである。それだけ彼女達のことをわかっているつもりだったのである。

だがそんな彼等にだ。岩清水はさらに言うのであった。

「とにかく行くこう」

「どうする?」

葉月は彼の言葉を受けて弥生に問うた。

「ここは」

「行く?」

弥生はいぶかしむ顔で彼に返した。

「やっぱり」

「そうだね。とにかく行ってみよう」

「何かあるかも知れないしね」

「それで何処なのかな」

クラスメイトの一人が岩清水に問うた。

「それは」

「来てみればわかるよ」

今はとにかく話さない彼だった。

「それでね」

「そうなの。わかったわ」

「それじゃあね」

弥生と葉月が頷いてだった。二人だけでなくクラスメイト達も向かう。そうしてであった。岩清水に案内されてだ。そこに向かうのであった。

「どう考えても如月達よね」

「そうだよね」

彼女達がいなくなっすてすぐに言ってきたのだ。それならすぐにかることだった。

「いなくなっすてすぐだから」

「本当にまさかと思うけれど」

「如月達はそんなことしないわよ」

弥生はいじめの可能性は否定した。

「だって。いじめられてきたんだし」

「部活の先輩にだよね」

「そうなの。だからそんなことは」

しないと信じていた。そうしてだった。

第六話 暴かれた時その十五

屋上に向かう。岩清水はそこに皆を案内していった。

そしてその屋上ではだ。如月達が神無に対して話していた。四人と一人に別れてだ。雲が次第に増えていく空の下で話していた。

「あのさ」

「わかってるわよね」

四人は眉を顰めさせて神無に言う。

「あのこと言わないでよ」

「誰にもね」

「誰にもなの」

「そうよ、もうあなたには何もしないから」

如月が強張った顔で彼女に告げる。

「だからね。あなたも言わない」

「いいよな、それで」

長月も神無に言ってきた。

「机に落書きしたりトイレでボコったこともな」

「絶対に言わないでよ」

「他のこともね」

文月と霜月もだ。強張った顔で神無に言ってきた。

「わかってるんでしょうね」

「本当にもうあなたには何もしないから」

「そういうことよ」

如月が最後に言った。

「だからよ、あなたも言わない」

「いいよな、それで」

「そういうことだね」

四人で言うのだった。神無し口止めして何とかばれないようにしたかった。しかしである。彼女達は自分達しか見えていなかった。

そしてであつた。屋上の扉のところだ。岩清水がいたのである。そしてそこには彼が連れて来たクラスメイト達もいたのである。

彼等は話の一部始終を扉の陰から聞いていた。それもしかとだ。

岩清水はその彼等にだ。四人に聞こえないように小声で問うた。

「聞いたよね」

「え、ええ」

「確かにね」

弥生と葉月が強張つた顔で話す。

「こんなことつて」

「まさか。彼女達が」

「僕も信じられないけれどね」

岩清水は仮面を被つてそのうえで話していた。

「こういうことだったんだね」

「あれは全部あの娘達がやったの」

「嘘じゃないんだ」

「本人達が言つてるからね」

岩清水はまだ信じたくはない彼等に告げた。

「間違いないよ」

「如月はそんな娘じゃないのよ」

「他の三人もだよ」

それでもだつた。彼等はまだ言つた。

「それが。何だよ」

「何でそんなことを」

「それはわからないよ」

岩清水はここではこう言つただけだつた。

「けれど事実は事実だよ」

「それはないって思つてたのに」

弥生は唇を噛みながら呟いた。

「如月、許せない」

「そつだね、許せないね」

弥生の目に怒りの炎が宿り葉月のそれも鋭いものがあつた。

「そんな娘だつたなんて」

「許したらいけないね」

「そうだね。それじゃあだけれど」

岩清水の仮面は善人の仮面である。その仮面を着けたまま話す。

「これからはね」

「これからは」

「どうするっていうんだい？」

「いじめは許したらいけないよ」

彼は素つ氣無くこの世の摂理を話した。

「そういうことだよ」

「ええ、こうなつたらもう友達じゃないわ」

「絶交だよ」

まずは二人が言った。そして他のクラスメイト達もだ。

「道理で四人だけ動かなかつた筈だね」

「本当にね」

「こうなつたら私達も」

「絶交よ」

「もうクラスメイトでも何でもないよ」

「おっと」

皆の怒りが沸点に達したところでだつた。岩清水はわざと、だが偶然を装つてそのうえで扉を開けてみせた。そうするとだ。

扉の一番傍にいた弥生は四人をまともに見た。見ればもうそれで制御が効かなくなった。彼女はすぐに如月のところに来てだ。右手を思いきり横に振つた。

第六話 暴かれた時その十六

平手打ちだった。それを気配に気付いて振り向いた如月の左頬に浴びせた。呆気に取られた彼女は、その頬を自分の手で覆うしかできなかった。

そしてその呆然とした顔でだ。弥生を見て言った。

「えっ、弥生………」

「全部聞いたわよ」

弥生は怒りに満ちた目で如月を見据えて告げた。目だけでなく顔にも身体にも怒りが満ちていた。

「全部ね」

「まさか。それじゃあ」

「絶交よ」

この言葉を面と向かって告げたのだった。

「もうあんたなんか友達でも何でもないわ」

「そんな、どうして………」

「自分の胸に聞いてみたらいいよ」

ここで葉月も来た。彼の後ろにはクラスメイト達が続く。誰もが怒りと蔑みに満ちた目で四人を見ていた。

「あれだけのことをやって被害者に口止めをさせていたんだね」

岩清水はその皆の中でぽつりと呟いた。

「そっだったんだね」

「最低だな」

「何て卑怯な奴等だ」

「そんなことして恥ずかしくないのかしら」

皆も岩清水の言葉に煽られて次々に言う。

「こんな奴等だったんだな」

「こんな連中がクラスメイトだったなんて」

「ずっといじめやってたんだ」

「あんなことを」

「そうだね。本当に酷い話だよ」

ここでまた皆に聞こえるようにして呟いた岩清水だった。

「どうなのかな、これって」

「私もう絶対に許さない」

弥生が言った。

「如月、本当に絶交だから」

「絶交って……」

「もう友達でも何でも無い。何があっても知らない」

「そんな、私達って……」

如月は弥生のその言葉に愕然となった。彼女にとって弥生は幼い頃からいつも一緒にいてくれてそのうえで支えて励ましてくれる無二の存在だったのだ。だがその彼女にだ。絶交を突きつけられては当然だった。

「友達なんじゃ……」

「それも終わりよ」

また言う弥生だった。

「あんなことをするなんて。最低よ」

「そんな……」

「もう話し掛けたりしないでね」

葉月も嫌悪感に満ちた声で言ってきた。

「見損なつたよ、四人共ね」

「それに何でなんだよ」

長月も愕然としている。その中で言うのだった。

「何で皆ここにいるんだよ」

「悪いことはばれるものだよ」

その長月に冷たく言う岩清水だった。

「だからだよ」

「まさか、それじゃあ」

「皆全部聞いてたの」

「そうよ、全部よ」

弥生は文月と霜月にも話した。

「だから四人共もう知らない」

「御前等もうクラスメイトじゃないから」

「絶対に話し掛けたりしないでね」

「いいわね」

皆にまた宣告される。そうしてだった。

弥生はだ。如月から顔を背けてそのうえでだ。神無に対して言うのだった。

「椎葉さん」

「う、うん」

「行こう」

こう彼女に告げるのだった。

「一緒にお昼食べよう」

「お昼ね」

「どうせお昼御飯も酷いことされてたのよね」
大体察していた弥生の言葉だった。

「もうこれからはそんなことないから」

「ないの」

「そうよ。だから一緒に食べよう」

優しい声で彼女に告げるのだった。

「食堂でね」

「うん、それじゃあ」

「そうだよ。行こう」

葉月も神無に微笑んで優しい声をかける。

「それで美味しいもの食べようよ」

「わかったわ」

神無もここで微笑んで言うのだった。

第六話 暴かれた時その十七

「皆とね」

「よし、じゃあ皆で食べるか」

「そうしよう」

「皆でね」

クラスメイト達も口々に言う。そうしてだった。

四人をあえて無視して屋上から立ち去る。それで残ったのは。

「そんな……………」

「弥生……………」

「皆も……………」

四人だけだった。四人は愕然としながらその皆が立ち去る姿を見るしかなかった。

その日の夕方岩清水は従兄に対して報告していた。今日のことをだ。

「どうかな、これで」

「うん、いいよ」

従兄は微笑んで彼の言葉をよしとした。

そしてそのうえでだ。彼に対してさらに話すのだった。

「これからはわかるよね」

「本格的に攻撃を仕掛けるんだね」

「そうだよ。やり方は考えてるかな」

「勿論だよ。徹底的にやるよ」

「そうだよ。徹底的にね」

従兄はどす黒い微笑みを浮かべて従弟に話す。

「いつも通りやるといいよ」

「いつも通りだね」

「ほら」

ここであった。従兄はパソコンの画面を開いた。そこには赤く大

きなバツが描かれた人間の顔写真が何枚もあつた。彼はそれを見ながら従弟に話すのだった。

「君が今まで成敗した人間達だよ」

「これまで六人だったね」

「そう、君は六人のいじめっ子を成敗したんだ」

「こう従弟に話すのだった。」

「全員追い詰めて破滅させてそして墓場まで壊したね」

「悪党には墓場も不要だよ」

「そう、いじめっ子は悪党だ」

従兄は言つた。

「その悪党は社会的にも精神的にも完全に破滅させるべきなんだよ」

「お兄さんいつも僕に教えてくれるね」

「僕はもう三十五人のいじめっ子を完全に破滅させたよ」

「そうだよ。けれど僕はまだ六人しかいないね」

「これで十人かな」

従兄は今回のことを考えながら述べた。

「四人だったよね、確か」

「そうだよ、四人だよ」

「ならその四人を何一つできないまでに壊して死に追いやるんだ」

「それもいつも通りだよ」

岩清水はさらりと話す。その言葉には邪悪なものがあった。

「死なせてそのうえで墓場まで」

「そう、壊す。周りの家族も何でもね」

「相手を破壊する為にだね」

「そう、徹底的にやるんだ」

とにかくそうしろというのである。

「わかつたね」

「わかつてるよ。じゃあ今から」

「やるんだよ」

「明日から早速仕掛けるよ」

岩清水はまた話した。

「派手にやっつていいよね」

「それもいつも通りにするといいいよ」

「いつも通り。そうだね」

そんな話をしていた。そうしてだった。岩清水は本格的に動きだした。それは如月達にとって地獄のはじまりであった。最悪の地獄の。

第六話 完

2010・8・20

第七話 地獄のはじまりその一

第七話 地獄のはじまり

弥生達に絶交を突きつけられた次の日の朝。如月は暗鬱な顔で朝を過ごした。毎朝見る写真にはその弥生達もいる。しかしであった。

「もう、本当に」

暗く沈んだ顔でその奇麗に並べて額縁に入れている数々の写真を見ながら呟く。

「絶交なの？」

鏡の中の弥生に問う。そこには葉月もいれば他のクラスメイト達もいる。寂しがりなところがある彼女はよく写真やプリクラを撮っていた。無論弥生と一緒にのプリクラも多い。

今はプリクラは見えていない。しかし写真を見てだ。そのうえで弥生に問うのだった。

「もう、これで」

だが写真の中の弥生は答えない。笑っているだけだ。写真の中の彼女はまだ如月と仲がいい。だがそれはだ。もう写真の中だけのことになってしまった。

そのことに悲しみを感じて仕方がない。その日の午後はクラスの誰もが彼女を、そして長月達から顔を背けていた。このうえなく冷たいものだった。

その冷たさに辛いものを感じずにはいられなかった。だが彼女は今はどうしてそうなったのかわかっていなかった。ただ弥生に絶交を告げられクラスメイトに冷たい目で見られていることが悲しくて仕方なかった。ただそれだけだった。

そのまま写真を見ていた。するとだった。

「ねえ如月」

「えっ!？」

「もうそろそろ行かなくていいの？」

母の声がしてきたのである。

「もうそろそろ」

「あっ、学校よね」

「そうよ、学校よ」

そのことを言ってきたのである。

「部活の朝練もあるのよね」

「え、ええ」

リビングから聞こえてくる母の言葉に頷く。

「そうなの」

「じゃあもう行きなさい」

優しい声であった。母親らしく。

「部活に遅れたら嫌でしょ」

「ええ、それじゃあ」

「行ってらっしゃい」

最後にこう言っただけで娘を送り出すのだった。そうして学校に行き部屋に入る。もう神無のロッカーにも鞆にも何もしていないしできなかった。しかしであった。

部屋に霜月が入って来た。暗く、そして沈んだ顔であった。

その顔でだ。如月に言ってきたのである。

「ねえ」

「あのことよね」

「部活にはばれてないわよね」

「こう如月に言ってきたのである。」

「それは」

「大丈夫だと思う」

如月も暗い顔で霜月に対して答える。

「多分だけれど」

「多分なのね」

「うちのクラスでラクロス部って私達しかいないから」

「そうよね、それじゃあ」

「とりあえずは大丈夫だと思う」

また言う如月だった。この言葉は霜月を安心させるよりもだ。何よりも彼女自身を安心させる為の言葉だった。そうしたものだ。今のは

「今のところは」

「今のところはなのね」

霜月は如月のその言葉にかえって不安を感じたようであった。その言葉に感情が出てしまっていた。

「そうなの」

「もうクラスはどうしようもないけれど」

皆に知られてしまった。それではだった。

「とりあえず部活は」

「わかったわ。じゃあ部活頑張ろう」

「そうね。暫くはここが私達の学校の居場所になるから」

もうクラスでは。そうした意味だった。

「だからね」

「クラスはもう駄目なのね」

「弥生の言葉聞いたよね」

あの平手打ちと共に思い出す。あの言葉をだ。

「だから」

「そうよね。だからもう」

「暫く我慢しよう」

それしかない、そう思ったのだ。そうした意味では如月は樂觀していた。耐えればそれで終わる、そう思っていたからである。

「そうしないと」

「わかったわ。もうすぐしたら長月と文月も来るから」

「学校に来るのね」

「部活にもね」

それにもだという。

第七話 地獄のはじまりその二

「ちゃんと来るから」

「そう。来るの」

「何か文月は元気がなかったけれど」

霜月は如月にこのことも話してきた。

「どうもね」

「元気ないの」

「けれど何とか引つ張って来たから」

そうしたと。霜月は言った。

「部活で気分転換しないとね」

「そうよね。さもないと我慢できないわ」

「とにかく今は我慢するしかないのね」

霜月は如月に言われたことをそのまま彼女に返した。

「それしかないのね」

「そう思う。皆そのうち忘れるし」

「そうよね。人の噂も七十五日っていうわよね」

「だからね」

二人はこの言葉に希望を見出していた。何時かこんな冷たい視線を浴びせられるのは終わると。まだ樂觀することができたのである。

「今は辛抱しよう」

「七十五日。長いわね」

「けれど何時か終わるから」

やはりまだ希望を持っていた如月だった。

「だから今はね」

「わかったわ」

霜月は少し気を取り直した顔になって応えた。

「それじゃあ今は我慢するわ」

「そうして。とにかくね」

「ええ、それじゃあ」

こんな話をした朝だった。すぐに長月と文月も来て部活の朝練に参加した。神無もいたが彼女はあえて無視した。そのうえでクラスに入ると。

やはり冷たかった。誰もが目を背ける。顔もだ。そして中にはだ。弥生と葉月もいた。とりわけ弥生は神無の傍にいてだ。彼女から離れようとしぬい。

四人は仕方なくクラスの端に位置した。しかしである。クラスに岩清水が入って来てだ。そのうえでこう言い出したのである。

「ねえ皆」

「んっ？」

「どうしたの？」

「これ見て」

こう言っただ。皆に見せたものはだ。

あの裏サイトだった。携帯を通して皆に見せているのである。

「これってどう思う？」

「答えは一つしかないわよね」

「そうよね」

皆ここぞだ。四人を嫌悪に満ちた目で見るのであった。

「やっぱりあの連中だったのね」

「この話は」

「怪しいと思っっていたけれど」

「そうだったんだ」

「またこの連中が」

「本当に最低ね」

その敵意と憎悪に満ちた視線にだ。四人は俯くしかできなかった。そうしてであった。岩清水はここでまた言ってみせたのであった。

「まあ犯人はわかったしね」

「そうね」

「それはだよね」

皆彼のその言葉に頷いた。

「何となくわかっていたけれど」

「真犯人よね」

「ふざけやがって」

「このことはすぐに対処できるよ」

岩清水は素っ気無く皆に告げた。

「まずこの裏サイトは閉鎖してもらって」

「サイトを提供しているその会社に通報してだよね」

「それですぐだったわね」

「確か」

「うん、そうしよう」

ここぞだ。岩清水は自分の携帯をこっそりと動かした。そうしてそのうえで従兄に今観ているその裏サイトの魚拓を取ってくれようメールをした。だがこのことは誰にも言わなかった。

第七話 地獄のはじまりその三

そのうえでだ。善人の仮面を被って話すのであった。

「僕がすぐに通報するからね」

「この連中がやったっていうのもよね」

「それもよね」

「勿論だよ」

それはもう当然だというのだった。

「二度とこんなことが起きないようにね」

「よし、それじゃあ」

「すぐに」

「そうしよう」

「それでね」

ここでさらに話すのだった。

「もう四人はサイトを立ち上げることはできないから」

「ネットでの工作はできないのね」

「これで」

「それだけでけれど」

岩清水は徹底していた。何処までもだ。

「2ちゃんねるとかにも掲示板があるじゃない」

「そっちはどうするの？」

「あつちは大きいから普通に通報しても駄目なんじゃ」

「うん、そうなんだ」

皆にこのことも話した。

「ただ。やり方はあるから」

「どうやって？」

「それって」

「どうするの？」

「まずいじめだったことをはっきりと書いておく」

そうするというのである。

「それでスレの削除を願い出るから」

「ああ、荒らしを理由にしてね」

「それでなの」

「僕に任せて」

岩清水はまた皆に自ら名乗り出た。

「それでいいかな」

「何か岩清水頑張るよな」

「そうね」

彼のそうした続けての申し出にだ。皆いい感情を持った。

「じゃあ俺達もな」

「しつかりとしないとね」

「いじめは正さないと」

「絶対に」

「だからだよ。いじめは絶対に許しちやいけない」

皆が自分に視線を集中させているのを見てだ。わざと四人を見たとすると皆の目は自然と四人に向かう。岩清水への賞賛の目はそのまま四人にたいする嫌悪と侮蔑、そして憎悪と糾弾のものになった。

「そういうことだからね」

「だよ。絶対に許さないからな」

「今度何かしたらもうね」

「この学校にいられなくしてやる」

言葉は本気だった。最早クラスメイト達は誰もが敵になっていた。

「ネットでのいじめはもうできないんだ」

「ブログだって通報したらいいよな」

「もう何もかも」

「うん、当然そうするよ」

岩清水は善人の仮面を着けたまま皆の言葉にまた頷く。

「いじめは許せないから」

「ああ、いじめは許さないからな」

「御前等、これで済むと思うなよ」

「もう何があってもね」

「許さない」

クラスメイト達と四人の絆なぞもうなくなっていた。あるのは糾弾だけであった。そうしてである。岩清水が仕掛けたのはネットだけではなかった。

次の日の朝にはだ。何と校門のところに朝早くからいた。そうしてだった。

「何だ、ありや」

「一年の転校生？」

「そつだよな」

「何をするのかしら」

皆登校しながら彼を見ていぶかしんでいた。するとだ。

彼は校門の前で拡声器を取り出してだ。やにわに叫ぶのだった。

「僕のクラスでいじめがありました！」

「何っ!？」

「いじめ!？」

「そんなことがあったの!？」

「それはかなり悪質ないじめだったそうです」

こう話すのだった。

第七話 地獄のはじまりその四

「それは今は終わっています。しかし」

「しかし？」

「しかしって？」

「いじめは許してはなりません！」

拡声器を右手に持って大声で叫ぶ。

「そう、何があるうともです」

「っていつかいじめがあつたのか」

「またそれは酷いな」

「そうよね」

「恥ずかしいことです」

善人の仮面はここでも被っている。

「僕のクラスでそんなことがあつたとは」

「それでどうしたいんだよ」

「問題はそれだけね」

「ねえ」

皆ここで話すのだった。

「一体何がしたいんだよ」

「校門で怒鳴っているだけ？」

「それじゃあ何もならないけれど」

「何がしたいのかな」

「僕はいじめは許しません！」

周りの声に応えるようにして出した言葉だった。

「だからこそ今訴えます！いじめを撲滅しましょう！」

「そういえばこいつ一年の？」

「ああ、転校生だったよな」

「そうだよな」

ここで皆彼の経歴を思い出して話した。

「あのクラスか」

「あのクラスでいじめがあったって？」

「あっ、そういえば」

「ここで気付いたのはだ。ラクロス部の部員だった。」

「ラクロス部でもそうした話あったのよ」

「えっ、ラクロス部でも？」

「そうなの？」

「この人と同じクラスの娘で。マネージャーやってる」

「ああ、一年の椎葉」

「あの娘ね」

「あの娘が被害者なの」

彼等は口々に話していく。岩清水はそうしたことは言っていないが少しづつだ。彼等が自然と話の確信に近付いていっていたのだ。

「じゃあラクロス部のいじめとクラスでのいじめって」

「一緒？」

「そうよね」

「同じだったんだ」

「皆さん、いじめている人間は必ずいます！」

また言う岩清水だった。

「許してはなりません、いじめを！」

「そうだよなあ。そんなことする奴最低だよな」

「いじめなんてね」

「する奴は」

普通の人間はいじめを忌み嫌う。それならばであった。それを行う人間を忌み嫌うのも当然の流れであった。そうしてである。

岩清水は話を続けていく。だがここで校門に先生の一人が来た。

「あの、岩清水君」

「何ですか？」

「あまりそうしたことはしない方が」

若い男の先生である。その先生が彼を注意しに来たのだ。

「いいんじゃないかな」

「どうしてですか？」

「朝だし。校門で騒ぐのは」

「いじめについて皆に知ってもらいたいだけですけれど」

「それならクラスや部活の問題じゃないかな」

その若い先生は常識の範囲で彼に注意する。

「だから。ここで朝から言うのは」

「いえ、それは違います」

岩清水はあえて毅然としてその先生に言い返した。

「そうではありません」

「違うって言うのかい？」

「いじめは見て見ぬふりをして解決しますか？そして小さな問題として扱っていいものですか？それは違うのではないのですか？」

ここでやったのはだ。あえて周りにいる生徒達に聞こえるように言った。

第七話 地獄のはじまりその五

「そうじゃないんですか？」

「それは」

「いじめはそう簡単には解決しません」

正論を先生だけでなく周りにも言う。

「ですから僕はここで皆に訴えるんです」

「いじめをなくす為に」

「先生はいじめは嫌いですか？」

岩清水は先生のその顔を見て問う。見れば整った顔をして澄んだ目をしている。この先生が生真面目な善人であることを見抜いたのだ。

「それはどうなのですか？」

「勿論だよ」

先生はその真面目な声で答えた。

「いじめは絶対に許しちゃいけないよ」

「そうですね。ですから僕は」

「訴えるんだね」

「それはいけませんか？いじめを解決する為に」

ここで周囲の反応を目だけでちらりと見る。するとだった。

周囲もだ。彼の考えに賛同していた。そうしてであった。

「先生、ここはこいつの言う通りですよ」

「ですからここは」

「彼の好きにさせましょう」

「いじめをなくす為に」

生徒達の善意の言葉を受けるとだった。善意の人である先生も頷いた。そうしてそのうえでだ。先生は岩清水に対して告げたのだ。た。

「わかった、それじゃあ」

「止めるべきですか？」

「いや、続けるんだ」

岩清水の顔をじつと見据えての言葉だった。

「僕が間違っていたな。いじめは徹底的に根絶すべきだ」

「そうですね。それじゃあ」

「岩清水君、続けてくれ」

先生は彼をまっすぐに見ていた。

「そしていじめを根絶する為に」

「する為に？」

「僕も力になりたい」

先生も協力するというのがのである。

「そうさせてもらおうよ」

「有り難うございます」

「そうだよな。生徒も先生も協力してな」

「いじめを根絶しないとね」

「その通りね」

皆頷いてだった。そのうえで岩清水に賛同していく。彼は学校全体を味方につけてきていた。そうしてであった。

学校の先生や生徒達の間でだ。自然に犯人探しが行われだしていった。

「あのクラスでラクロス部っていったら」

「そうよね」

「他に四人いるけれど」

「あの連中怪しくない？」

「っていうかあいつ等しかないんじゃない」

「そうだよな」

学校全体で如月達を疑惑の目で見てだ。怪しみだした。そしてそこでだった。彼女達がいるそのクラスの生徒の話を書く者が出て来た。

「えっ、やっぱりそうなの」

「あの連中だったの」
「ああ、そうだよ」
「あいつ等よ」
「クラスの面々がだ。尋ねてきた者に話した。」
「あいつ等がいじめていたから」
「あいつ等が犯人よ」
「裏サイトに書き込みもしてたし」
「口止めしようとしたし」
「こつ嫌悪感に満ちた顔で話していくのだった。そうしてだ。」
「あいつ等が全部やってたから」
「ロッカーのことも机のことも」
「ゴミを入れたり落書きしたりね」
「教科書だってジャージだってね」
「机や椅子に接着剤も塗ってたし」
「そこまでやったのか!？」
「皆ここぞでだ。本気で怒った。」

第七話 地獄のはじまりその六

「あの連中、そんなことしてたのかよ」

「何それ、最低」

「とんでもない奴等だよな」

「全くだ」

そしてその怒りはだ。自然に四人に向かった。話は忽ちのうちに学校中に広がりだ。四人は学校の何処にいても人と擦れ違えばだ。嫌悪に満ちた目で見られるようになった。クラスでの孤立に加えてだ。

そして部活でもだ。同じ部員達に言われた。

「あんた達が犯人だったのね」

「何も知らない顔してね」

「あんなことしてたの」

「最低ね」

部室の中で他の部員達に取り囲まれて言われていた。四人は今はいささくなっていた。

「椎葉さんにあそこまでしてどういっつもりなのよ」

「何とか言いなさいよ」

俯いて黙ってしまっている四人への言葉だ。

「それで平気で部活に来てるわけ？」

「信じられないわ」

「私言っただわね」

そしてここでだ。臯月が出て来た。その横に神無がいる。俯いている彼女を守るようにしてだ。そのうえで四人に対して言うのであった。

「いじめをしている娘は許さないって」

「はい……」

四人は彼女の怒りに満ちた言葉に頷いて答えた。小さい頷きだっ

た。

「それで退部にさせるって。言ってたわよね」

「はい、そうです」

「確かに言っていました」

「退部よ」

静かな怒りに満ちた声での宣告だった。

「二度とラクロス部に近付かないことよ」

「さっさと出て行きなさいよ」

「もう来ないでよね」

「私達の前に顔を見せないでよね」

「そんな……」

退部を告げられてだ。四人は愕然となった。彼女達にとって部活とはだ。もう生活の一部だったのだ。それを失うことになってしまったのだ。

「あの、私達もう」

「その、してません」

「ですから」

「駄目よ」

皐月の言葉はいつもと全く違っていた。厳しかった。

「貴女達のしたことは絶対に許されないことだから」

「そんな娘達うちに置いていけないから」

「もう駄目よ」

「出て行ってよね」

二年生達が次々と告げてきた。

「はい、荷物持ってね」

「ロッカーから名前取って」

「さっさと出て行って」

「もう名簿から名前消しておくから」

最後に皐月がまた告げてきた。

「ラクロス部には来ないこと」

「来たら許さないからね」

「二度と私達の前に出て来ないで」

「そんな……」

四人は絶望の中に叩き込まれてしまった。もう何も言えなかった。荷物を投げ渡され名前の札も投げ付けられた。そのうえで部室から叩き出された。四人は部室の閉じられた扉の前にいた。

「どうしよう」

「そうよね、どうしたらいいの？」

文月が長月の言葉に問うた。

「私達、これから」

「もう部活できないのよね」

霜月も俯き沈んだ顔で言う。

「追い出されたから」

「どうするんだよ、うち等」

長月もまた言ってきた。

「もう学校に居場所は」

「ないって」

「じゃあずっとこのままなの？」

「このまま責められ続けるの？」

「そんなの嫌よ」

「そうよ、絶対に嫌よ」

文月と霜月は今の自分達の現実を何とか認めまいとした。逃げたかった。だがそれはどうしてもできなくなっていたのであった。

第七話 地獄のはじまりその七

「けれど。これじゃあ」

「味方誰もいないし」

「弥生も……」

如月も俯いていた。そのうえで言うのだった。

「絶交って言ったし」

「もう学校来たくねえよ」

長月がこの言葉を出した。

「このままじゃよ。学校に来ても」

「けれど学校には行くしかないし」

「そうよ。登校拒否とかしても」

文月と霜月が長月の弱音に対して言った。

「何にもならないし」

「仕方ないわよ」

「うん、学校には通うしかないから」

如月も二人の意見に賛成した。

「通おう、このまま」

「それしかないか」

「ええ、ないわ」

如月は長月にも告げた。

「だから通おう。それしかないと思うから」

「それしかないってのかよ」

長月は俯いたまま如月の言葉を聞いていた。

「今は」

「うん、誰もいないけれど」

それでもだというのだった。

「学校だけだし、辛いのは」

「そうよね、格好出たらね」

「私達のこと知ってる人いないし」

文月と霜月はそこに希望を見出していた。

「だから学校では我慢しよう」

「そのうち何とかなるかも知れないし」

「そういうことだから」

また話す如月だった。

「今は我慢しよう」

「それじゃあ今は」

「何とか」

こんな話をしてだった。四人は耐えることを選択したのだった。辛いのは学校だけだと信じて。しかしその信じたものはまたしても裏切られた。

「えっ、何……」

「あいつ、何やってるのよ」

「どうしてあそこにいるんだよ」

四人は一緒に下校していた。高校の最寄の駅の前でだ。岩清水がいたのだ。そうしてそこでだ。また拡声器を持って叫んでいたのだ。

「僕の学校で嘆かわしいことがありました！」

「何だ？」

「何があつたんだ？」

行き交う学生や社会人、主婦に子供に老人が彼に顔を向けた。

四人はそれを見てだ。嫌なものを感じていた。

「まさかと思うけれど」

「ここでもまた？」

「言うの？」

そのことに恐怖を覚えていた。そこから少しでも立ち去りたかった。しかしである。足がすくんでしまい動けなくなってしまうっていったのだ。

「何処か行こうよ」

「そ、そうだよな」

「何処かに。けれど」

文月の言葉に長月と霜月が応える。しかしだった。

「足が……」

「足、動けないから」

「えっ、二人もって……」

実はそれは文月もだった。そして如月もだ。恐怖のあまり動けなくなってしまうていたのだ。己の過去が公にされるといふ恐怖の前にだ。

「どうしよう、動けない……」

足だけでなく身体がガタガタと震えている。岩清水はその四人の前でさらに言う。見ればその後ろには立て板があり四人の写真があった。

「あの写真、誰のだ？」

「高校生の女の子達みただけけれど」

「誰？あれ」

「誰なのかしら」

「この四人がです」

ここでまた言う岩清水だった。

第七話 地獄のはじまりその八

「その犯人達です。僕の学校の、そして僕のクラスでいじめをしていました」

「へえ、その連中がが」

「その連中がいじめっ子か」

「何か性格悪そうだよな」

「そうだよな」

岩清水の前に集まる人々は四人の写真を見てまた言う。

「ああ、この制服ってな」

「あの高校だよな」

「あんたの高校の女の子の制服じゃないか」

「じゃあやっぱり」

「そうです。ですから僕のクラスでいじめをしていた連中です」

その写真を見ながらさらに話すのだった。

「この連中がです」

「女の子がねえ」

「いじめか」

「そんなことしてるのか」

「ええと、名前まで書いてあるな」

通行人達はその立て板をまじまじと見て話す。

「女同士のいじめってえげつないらしいけれどな」

「相当なことしたんだらうな」

「そうだらうな」

「いじめは許されません」

ここでまた言う岩清水だった。

「だからこそ私はあえてここで皆さんに訴えます」

「いじめを許さないってか」

「そう言うんだな」

「それでここにいるのか」

「はい、そうです」

まさにその通りだというのである。

「皆さん、この四人を見つけたら容赦なく糾弾して下さい！」

「ああ、この顔かあ」

「ふんふん、名前メモしておくか」

「そうするか」

中には携帯で記録してメールで他人に送る者もいた。それを一部始終見ていた四人はだ。その場で蒼ざめてしまっていた。

「ちよつと、何あれ」

「私達のことじゃない」

「名前までって」

「何やってんだよあいつ」

何とかして止めたかった。しかし足はすくんだままだ。

それで動けないでいるとだ。通行人が気付いたのだった。

「あれっ、あそこにいる四人って」

「そうだよな」

「この立て板の連中じゃないか」

「だよな、この四人だよな」

「ここにいたのかよ」

「はい、そうです！」

また通行人達に訴える岩清水だった。

「あの四人がです。いじめをしていたのです！」

「へえ、あの連中がね」

「あの連中がいじめグループか」

「まさかこんなところで会うなんてな」

「皆さん！」

岩清水はここぞとばかりに訴える。

「いじめは許されません！」

「いじめなんて最低だよ」

「絶対に許せないからな」

「そんなことはな」

「だからこそです。いじめを糾弾しましょう!」

「ああ、そうだな!」

そうしてだった。通行人達はだ。口々に立ちすくむ四人に対して言うのだった。そこには怒りと嫌悪に満ちた糾弾のみがあった。

「御前等最低だよ!」

「生きていて恥ずかしくないのか!」

「親からどんな教育受けてきたんだ!」

「とつとと死んで罪を償え!」

「どっかに消えろ!」

そうしてだった。四人の方に迫って来た。

「皆さん、いいでしょうか」

岩清水は拡声器を持ったまま通行人達を導いていく。

「暴力はいけません」

「暴力はか」

「それは」

「そうです、暴力はいけません」

それはだというのである。

第七話 地獄のはじまりその九

「それをすれば彼女等と同じになります」

「けれどじゃあどうするんだ？」

「ここは」

「この連中どうするんだ？」

「暴力は許されません」

またこう言う岩清水だった。

「ですがいじめもまた許されません」

「この連中は許されないんだろ？」

「それじゃあどうするのよ」

「この連中は」

「暴力を振るわなければいいのです」

これが岩清水の言葉だった。策略でもある。

「そう、暴力はです」

「よし、それならだ」

「言葉だ！」

「ああ、言葉だ！」

「言葉がある！」

岩清水はここまで誘導したのだ。彼はあえてそれを出さずにだ。通行人達に言葉での糾弾を選ばせた。そうしてそのうえで、であった。

「いじめっ子に報いを！」

「報いを！」

「どっかに消えろ！」

「学校辞めろ！」

「死ね！」

四人を完全に取り囲んでだ。そのうえで指差してそうして責める。
「いじめを許すな！」

「いじめっ子を許すな！」

「容赦するな！」

四人は固まり身動き一つできなかった。ただ四人で身を寄り添え合ってそのうえで蒼白になった顔で立っているだけだった。何もできなかった。

岩清水は次の日もだった。朝は学校の校門で、そして放課後は駅前でだ。四人の写真は顔まで出してである。そのうえで訴え続けた。いた。

それによつて四人は学校でも外でもだった。名前も過去も知られ糾弾されていった。部活も辞めさせられ完全に孤立した。

「まだ学校に来てるのかよ」

「もう辞めるよ」

「退学しろよ」

わざわざ他のクラスから来てだ。四人に憎しみを向ける者までいた。

「いても仕方ないからな」

「そうよね、よく来られるわよね」

「無神経にも程があるわ」

わざと四人に聞こえるように言う。それは次第にエスカレートしていった。

そうしてだ。如月の下駄箱がだ。

滅茶苦茶に荒らされていた。扉は完全に破壊され床に落ちていた。そしてその扉も中も落書きだらけでゴミが詰められてだ。靴は何処にもなかった。

「靴、私の靴が……」

「うちのもだよ」

「私のも」

「私の靴も」

そしてそれは他の三人も同じだった。靴がなくなっていたのだ。

「何処にあるんだよ」

「誰か隠したの？」

「まさか」

「若しかして」

ここであった。如月がふと察したのである。

「ある場所は」

「えっ、何処だよ」

「何処なの？」

長月と文月が如月に問う。

「何処にあるんだよ、うち等の靴」

「一体」

「焼却場じゃないかしら」

そこではないかというのである。

「そこに捨てられてるのかも」

「えっ、じゃあ早く行こう」

如月のその言葉を受けてだった。霜月が蒼白になりながらも驚いた顔で言った。

「早く行かないと燃やされるわよ」

「あ、ああ」

「それじゃあ」

こうして四人で行くとだった。そこにはもう。

「そんな……」

「もう……」

四人が見たものは焼却炉の前で黒焦げになっている自分達の靴だった。何と焼却炉の前にその焼けてしまったものが置かれていたのだ。

第七話 地獄のはじまりその十

「誰がやったのよ……」

「いじめてたから？」

「四人はそう考えを至らせた。」

「それでこんな」

「誰かが」

「椎葉じゃねえよな」

長月は本能的に彼女の可能性を否定した。

「これってやつぱりよ」

「うん、違うわ」

それに如月が答えた。

「あいつこんなことしないから」

「じゃあ誰よ」

「誰がやったのよ、ここまで」

「ひよっとしたら」

そしてであった。如月は文月と霜月の言葉に応えてだ。あの男のことを脳裏に思い浮かべた。そうしてそのうえで三人に答えたのだ。つた。

「岩清水かも」

「あいつが」

「こんなことを」

「おい、じゃあどうするんだよ」

長月がここでまた言った。

「こんなことされたらよ」

「けれど。今何かしたら」

「特にあいつには」

しかしであった。皆わかっていた。ここで自分達が何かを、それも特に岩清水に何かをすればだ。その時はさらに酷いことになるこ

とがわかっていたのだ。

「そうよね、だから」

「何もできない……」

「このまま」

「うん、今は何もできないよ」

「このことを言う如月だった。」

「だから今はね」

「我慢するしかないのね」

「こんなことされても」

文月と霜月が苦く沈んだ顔で呟くように言った。

「どうしようもないって」

「そうなのね、今は」

「じゃあこの靴のことはどうしようもないんだな」

長月もこのことを認めるしかなかった。

「それでこれからもこんなことが続いても」

「うん、今はどうしようもないから」

如月はまた言った。

「耐えよう、終わるまで」

「終わって欲しいよ、もう」

「こんな状況……」

四人は焼却炉の前のその無惨な燃えカスを見て落胆するしかなかった。しかしである。四人への攻撃はこれで終わりではなかった。

教室に行けば机も椅子もロツカもだ。滅茶苦茶に落書きされあちこちが壊され黒板には彼女達を誹謗中傷することが一面に書かれていた。そうして四人のいる場所にゴミ箱がそのままぶちまけられていた。

そしてクラスメイト達はだ。それを一切無視していた。そして四人が自分達のところに行くのだ。

「いじめには報いだ！」

待っていたとばかりに岩清水が叫んだ。

「報いがあつて当然だ！」

「ああ、そうだよ」

「そうよね」

「椎葉さんにやってきたんだからね」

「同じ報い受けないとね」

「いじめを許すな！」

また叫ぶ岩清水だった。

「絶対にだ！」

「ほら、自分で何とかしろよ」

「汚れてるでしょ」

「ちゃんとしなさいよ」

そしてであつた。クラスメイト達の冷たい言葉がぶつけられる。

「御前等が今までやってきたんだからな」

「今度はあんた達がしないよ」

「早くしないと授業がはじまるだろ」

こう言つて一切何もしようとしな。弥生も顔を背けている。

四人は仕方なくまずは黒板を消そうとした。しかしだった。

黒板消しがなかった。そのことに戸惑ってしまった。

「えっ……」

「ないって……」

「そんな……」

「ほら、貸してやるよ！」

「使いなさいよ！」

ここで黒板消しが投げ付けられた。同時にゴミもだ。

第七話 地獄のはじまりその十一

「椎葉さんにやってきたことだろうがよ！」

「そのまま受けて当然でしょ！」

「そんな……」

「これって……」

いじめだと言おうとした。しかしであった。

岩清水がまたしても言うのであった。

「悪には報いがあるべきだ！」

四人の言葉を遮ったのであった。

「この程度でいいのか！」

「いや、よくないだろ」

「そうよ」

「あんなことしてきたんだからね」

「他のクラスの人にも来てもらおう」

そうしてだった。岩清水はこう提案するのだった。

「それで今のこの連中を見てもらおう」

「ああ、それいいな」

「そうよね。晒し者にしましょう」

「そうしないとな」

こう言っただけであった。すぐにそれぞれの面々が携帯で他のクラスの面々を呼ぶ。すると瞬く間に他のクラスの面々も来たのであった。

「これがいじめへの報いだ！」

岩清水は彼等にも叫んだ。

「しかしこれだけじゃない！」

「ああ、そうだよな」

「こんな連中な」

「この程度で終わると思うなよ」

誰もが憎しみに満ちた目で四人を見据えて言う。

「ほら、さつさと消せよ」

「授業はじまるだろうが」

「何とろとろやってるんだよ」

「黒板消しが足りないな」

岩清水がまた皆を煽る。

「それなら」

「ああ、そうだよな」

「消すものがないとね」

「それじゃあな」

「ほら、使えよ」

ここぞだ。四人に黒板消しが投げ付けられた。それは四人に当たって跳ね返りそうして。床に転がり落ちて彼女達の足元で止まった。

「さつさとね」

「それで消せよ」

「消しなさいよ」

「うう……」

四人はこの仕打ちに泣きそうになった。しかしだった。

「泣いて許されるものじゃないよね」

「ああ、そうだよな」

「そうよね」

「あれだけのことをやったんだしな」

ここでまた、だった。岩清水が言って周りがそれに続く。

「ほら、消せつつつてんだよ！」

「泣いても許さないぞ！」

「自分達で始末しなさいよ！」

「早くな！」

「そんな……」

「もう、こんな……」

四人は遂に泣き出した。その場でぼろぼろと涙を流す。

だがそれでもだ。岩清水はその四人に対してだ。尚も仕掛けた。

「だからさ。消したら!」

「そんな、もうこんな……」

「私達もうこんなことしてないし……」

「それなのに」

「過去は絶対なんだよ」

岩清水の言葉は冷たかった。

「人間は何で決まるか。過去で決まるんだよ」

「過去でって……」

「昔のことで……」

「そうだよ、決まるんだよ」

こう四人に言うのである。

「過去は絶対に変えられない。それをわかるんだね」

「御前等の過去が今の御前等をこうしたんだろっが!」

「自業自得よ!」

「そうだそうだ!」

「黒板だけじゃないぞ!」

皆も四人をさらに糾弾する。泣いて動けなくなってもだ。

「早く消せ!」

「机やロッカーもちゃんとしろ!」

「自分達でな!」

「何ならな!」

誰かがだ。何処からかバケツを持って来た。

そしてそれをだ。四人に対して思いきりかけたのだった。

空になったバケツは如月にぶつけてだ。そのうえで告げた。

「水もやったからな!これで消せ!」

「何ならもつと持って来てやるぞ!」

「まだ消さないっていうの!」

「わ、わかったから……」

バケツをぶつけられた如月が泣きながら応える。涙はかけられた水のせいで見えなくなっている。しかしそれでも流れ続けていた。

「消すから」

「うちもやるから」

「もうしないでよ……」

「御願いだから」

「じゃあさっさと消したら？」

岩清水はここでも四人に冷たく告げる。

「まだやることあるんだし」

「だからわかったから」

また応える如月だった。

「もうしないで。本当に」

「今はね」

岩清水はその如月にこう返した。

「じゃあ消すんだね」

「うん……」

「これで終わりじゃねえぞ！」

「まだやってやるからな！」

「覚悟しなさいよ！」

こうして四人は周りの冷たい目と罵声の中で黒板を消して机や口ツカも何とかした。四人への糾弾はさらに続くのであった。

第七話 完

第八話 生徒集会その一

第八話 生徒集会

岩清水に煽られた周囲の攻撃と糾弾はだ。終わることがなかった。
「学校に来るな！」

「辞めろ！」

「中退しろ！」

「消えろ！」

四人を見ればだ。誰もがこう罵った。

そしてだ。机もロッカーも常に荒らされた。体育をすればジャージが皆がわざわざ四人から奪ってだ。そのうえでまずはこう言うのだった。

「あんだ達椎葉さんのジャージ隠したりしてたわよね」

「制服だつて」

「そうでしょ？」

「え、ええ」

四人は沈みきった顔で周りを取り囲む女子のクラスメイト達の言葉に応える。ついこの前まで彼女達に笑顔を向けていた娘ばかりだ。

「そうだけれど」

「それは」

「じゃあ同じことしてやるわよ」

「あんだ達への報いよ」

「ほら、こうしてね」

誰かがカッターを出してだ。そのうえで引き裂いていく。四人のジャージはだ。四人の目の前で無惨な姿に変わり果てた。

そうして床の上に落とされた。そこからまた言われる。

「掃除しなさいよね」

「あんだ達のなんだから」

「いいわよね」

「うん……」

四人は俯いて頷くことしかできなくなっていた。こうしたことが続いていた。当然弥生は何も言わない。顔を背けるだけだ。

部活も辞めさせられ学校の帰りではいつも岩清水が駅前で頑張っている。下校中も他の学校の生徒にだ。電車やバスの中でひそひそと話される。

「あいつだよ」

「へえ、あいつがねえ」

「いじめしてたんだ」

「最低だよな」

冷たい嫌悪に満ちた視線での話だった。

「いじめする奴なんて」

「全くだよな」

「このバスに乗るなよな」

「どっかに行けよ」

こんな話を聞こえるように言われる。それは行きも帰りもだった。もう四人の居場所は家しなくなっていた。他にはなくなっていた。その家ではだ。沈みきつた如月に家族が声をかけた。

「ねえ」

「どうしたの？」

「大丈夫か？」

「大丈夫って」

夕食の時にだ。両親と弟に声をかけられたのである。

「本当に？」

「あまりそうは見えないけれど」

「顔色が」

「大丈夫だから」

またこう言いはする。

「心配しないで」

「だったらいいけれどね」

睦月もかなり心配な顔で姉に言う。

「お姉ちゃん最近暗いし」

「部活は行ってるの？」

母は部活のことを尋ねた。

「そちらは」

「え、ええ」

一応こう返しはした。辞めさせられたことはとても言えないでいたのだ。

「行ってるから」

「最近朝遅いけれど」

「あつ、ちよつとそれは」

「それは？」

「最近部活の練習のやり方が変わったのよ」

こう言って取り繕うのだった。

「それでなの」

「練習のやり方が変わったの」

「朝はそれぞれで練習してね」

思いつくことを話した。こう話して事実を隠すことにしたのである。

「それで夕方はね」

「皆でやるのね」

「そうなったから」

「こういうことにしてしまった。」

「それでなの」

「そうだったの」

「うん、そうだったの」

事実を何とか隠してだ。母にも父にも弟にもだ。偽りを話した。

第八話 生徒集会その二

「だから朝遅いの」

「だったらいいけれどね」

母は娘のその言葉に一応は納得した。

「部活では何も無いわよね」

「だから何も無いわよ」

今度も事実を隠したのだった。

「別に何も」

「だといいいけれど。それじゃあね」

「食べたらずくに行くね」

部活に行くと話したのだった。

「それじゃあね」

「部活もいいけれどな」

何も知らない父は娘の言うことを完全に信じて話した。

「それでもな」

「それでも？」

「身支度はきちんとするようにな」

こう言うだけだった。まさか勘付かれたのかと内心びくりとなっ

た如月だが今の父の言葉にだ。心の中で胸を撫で下ろしたのだった。

「それはな」

「うん、そうね」

如月は微笑みを作って父のその言葉に頷いた。

「じゃあ歯を磨いて顔も洗ってね」

「それは絶対に忘れたら駄目よ」

母もこのことはよく言ってきた。

「女の子なんだし」

「わかってるわ、お母さん」

「それは忘れないでね。それじゃあね」

「うん、行つて来ます」

こう話してだ。作り笑顔で家を出る。しかし家を出ればだ。すぐに沈みきった顔になった。その重い足取りで学校に向かう。バスに乗るともうそこからだ。地獄がはじまるのだった。

「また乗つてるよ」

「まだ学校来るのね」

「本当に図太い奴だな」

「そうよね」

こうだ。彼女の学校の生徒達があえて彼女に聞こえるようにして陰口を言う。それはそのまま矢となつて彼女に突き刺さる。

そしてだ。矢は次から次に突き刺さる。

他の学校の生徒達もだ。岩清水の喧伝から話を知った彼等もまた彼女を見てだ。そうしてそのうえで聞こえるようにして言ってきた。

「あいつがねえ」

「あの最低女の一人か」

「平気な顔してよく外歩けるよ」

「どんな人間なのかしら」

そんな声と冷たい視線を浴びながら学校に向かう。四人一緒になるがそれでもだ。学校の中に入ると視線はさらに冷たいものになった。声もだ。

ラクロス部の前を通つてもだ。練習する彼女達は無視するか聞こえるように陰口を言うかだ。皐月は神無を守りながら言う。

「また何かあつたらだけれど」

「は、はい」

「遠慮なく私に言つて」

俯いて生気のない顔で歩く四人を睨み据えながらの言葉であった。

「いいわね」

「今はもう」

「今じゃなくてもいいから」

時間はそれに止まらなかつた。

「これからもよ。何かあつたらね」

「その時はですか」

「もう絶対にいじめさせないから」

正義感が強く生真面目な彼女らしい言葉だった。

「だから。安心して」

「部長がいてくれるから」

「今まで気付かなくて御免なさい」

その良心のまま謝罪もした。

「お陰で貴女が」

「すいません」

「謝ることはないわ」

神無の今の言葉はいいとした。

「どうして貴女が謝るの？そんな必要はない筈よ」

「そうなんですか」

「謝るべきなのは」

そしてだ。まだ目の前にいる四人をまた睨んで言った。

第八話 生徒集会その三

「あの娘達を。謝るべきはね」

「謝る」

「謝るって……」

皐月の言葉は四人の心にそのまま突き刺さっていた。そうしてである。彼女達は教室に入るとまずはトイレに入ってた。そこで話すのだった。

「謝ればいいのかしら」

「それで」

まずは文月と霜月が言った。

「今のこの状況が終わるの？」

「こんな状況が」

「っていつかもう沢山だよ」

長月は泣きそうな顔になっている。

「こんなこともう終わって欲しいよ」

「そうよね、終わればね」

「楽になりたいから」

文月と霜月は長月のその言葉に応えた。

「とりあえず謝れば」

「それで助かるなら」

「うん、そうよね」

如月も三人の話に頷いた。

「とりあえず謝ろう」

「もうそれしかねえよ」

長月はまた泣きそうな顔になった。

「こんなこと続いたらうち等も」

「あいつに謝るのは癪だけだね」

「それでもね」

「仕方ねえよ」

三人はこうした本音も喋ってしまった。誰もいないと思っていたからだ。

「こんなこと続いたら」

「とにかく謝ろう」

如月はこれを結論とした。

「謝ればもうそれで終わりだから」

「それで何処で謝るの？」

文月は場所を問題にした。

「問題はそれだけだよ」

「クラスなんてどうだよ」

長月が言った。

「そこでな。ホームルームの時間で」

「それでも駄目じゃないかしら」

霜月が難しい顔でこう述べた。

「クラスじゃ」

「えっ、何でだよ」

「どうして？」

「だって。もうクラスだけの話じゃなくなってるからだからだよ。だからだというのがね。」

「学校全体に拡がってるじゃない。他の学校の子達だって言うてるし」

「じゃあどうするんだ？」

「何処で謝るのよ」

「思い切ったことしなければ駄目なんじゃないかしら」

「ここでこう言った霜月だった。」

「もう。そうまでしないと収まらないんじゃない？」

「そうね。じゃあ」

如月がまた口を開いた。

「それだったら」

「ああ、如月は何処がいいんだよ」

「何処だとこの話終わらせられるの？」

「今度生徒集会あるけれど」

その時だというのである。

「その時にね。話をしよう」

「その時にかよ」

「謝るのね」

「うん、そうしよう」

如月は難しく沈んだ顔でこう三人に言うのだった。

「もうそれしかないから」

「だよな。そこまでやったらな」

「皆も矛を収めてくれるわよね」

「そうよね」

三人も如月のその言葉に頷いた。そうしてであった。この場には四人の中には誰もいなかった。しかしだ。何か仕掛けられている、その可能性については考えていなかったのだった。

四人は職員室で担任の先生にだ。こう願ひ出るのだった。

第八話 生徒集会その四

「あの、今度の生徒集会ですけれど」

「いいですか？」

「私達ちよつと学校の皆に言いたいことがあります」

「それで」

「あのことだな」

先生は四人の言葉を聞いてだ。自分の席から彼女達を見た。

「それでか」

「はい、それでなんです」

「あの、もう反省してます」

「ですからそれで」

「その時間に学校の皆に」

「そうだな。それがいいな」

先生は目は冷たい。だがそれでもこう四人に言うのだった。

「君達もこのままずっと過ごしていてもよくないな」

「それじゃあいいんですね」

「生徒集会に」

「その時に皆に」

「それで」

「そうするといいい。校長先生には先生から言っておく」

助け舟を出した形になっていた。

「それじゃあ。今度の生徒集会だな」

「はい」

「御願います」

四人は先生の今の言葉を聞いて久し振りに明るい笑顔になった。

そうしてであった。四人はそれでこの話を終わらせようとしたのだ。つた。

ところがだ。岩清水もまた。四人が願いだたのと同じ、つまり自

分の担任の先生に対してだ。こんなことを申し出たのである。

「先生、今度の生徒集会ですけれど」

「どうしたんだ、一体」

「少し器具を使わせてもらっていいでしょうか」

「器具を？」

「はい、映像のです」

それだというのだ。

「集会がある体育館の映画用の幕を下ろさせてもらっていいでしょうか」

「それをなのか」

「はい、それをです」

こう先生に願ひ出るのだった。

「その他のものはこちらで用意しますので」

「何かあるのかい？映像って」

「学校の皆に是非見てもらいたくて」

それだというのだ。

「それでなんですけれど」

「うづむ、それでか」

「はい、それでです」

また言う岩清水だった。

「御願ひできますか」

「それで何を映すんだい？」

「その時にわかります。別に猥褻なものではないです」

「そんなのを映すとは流石に思わないがな」

先生もそれはわかっていて。岩清水はそうしたこととはしない人間ということだ。だがそれ以上に危うい男だということはわかっていなかった。

「そうだな。ここは」

「いいでしょうか」

「よし、いいだろう」

先生は許可を出した。

「このことも校長に話しておくか」

「このことも？」

「ああ、何でもないよ」

四人からの申し出の話は彼にはしなかった。こうしたことはその時まで生徒達には内密にしておいた方がいい、こう判断したからだ。

「別にね」

「そうですか」

「とにかく話はわかった」

それはだというのである。

「じゃあ話はしておくよ」

「はい、御願います」

こうして彼の話も決まった。岩清水はそれを許可してもらった時にだ。残忍な笑みを浮かべた。そうしてそのうえで準備するのであった。

その中でだ。また従兄と彼の部屋で話す。

「いよいよだよ」

「いよいよだね」

「うん、映像を流すよ」

こう従兄に話すのだった。

「これからね」

「よし、これで相手を一気に追い詰めることになる」

従兄はこのことを確信して笑っていた。

第八話 生徒集会その五

「映像の効果は凄いよ」

「それを学校で流すだけじゃなくて」

「そうだよ。いつも通りしたらいいよ」

「そう、いつも通りだよね」

「だからわかってるね」

「勿論ね」

こう従兄に返す。

「いつもやってるしね」

「それならいいね。後はタイミングだよ」

従兄はそれこそが大事だというのである。

「何時それを出すかね」

「切り札は出すタイミングってことだね」

「それもわかってると思うけれど」

「うん」

岩清水は従兄の今の言葉にも頷いたのだった。

「それじゃあね。仕掛けるよ」

「それを出したら相手はもうどうしようもなくなるけれど」

「そこからさらにだね」

「うん、さらにね」

そうしろというのである。従兄はだ。

「相手がどうなっても墓場まで壊すんだ」

「兄さんがいつも言っているようにね」

「君もいつもそうしているしね」

「よし、じゃあ」

こうしてだった。彼等はここでも何かを企んでいた。そしてその企みを密かに動かしていた。既に岩清水の中では全てが決まっていた。

そしてだ。その生徒集会の日になった。

四人は集会の前にだ。あれこれと話をしていた。

「それじゃあだけれど」

「うん」

「行こう」

四人で言い合う。

「謝ったら皆許してくれるよね」

「少なくとも今よりずっとましになるよな」

「そうよね、謝ったら」

「やっぱり」

四人はとにかく今のこの状況を何とかしたいだけだった。

「だから謝りに行こう」

「そうだよ、そうしようぜ」

「何とか。こんな状況」

「変えよう」

こう話してそのうえで向かうのであった。

そしてである。生徒集会がはじまった。ここで四人や岩清水の担任の先生が体育館の壇上に出て来てだ。マイクで言うのだった。

「皆さんにお話したい人達がいいます」

「何だ？」

「何なんだ？」

皆それを聞いてだ。まずは怪訝な顔になった。

「話って何だ？」

「一体何かしら」

「それでは」

先生はまた言う。

「さあ、こっちに来てくれ」

「あつ、あれって」

「あいつ等じゃないか」

壇上にだ。四人が出て来たのだ。学校の生徒達も教師達もだ。そ

の彼女達を見てまずは驚きの声をあげた。弥生も葉月でもある。

「どういうことかな」

「謝るとかじゃないかしら」

弥生はすぐにこのことを察した。

「それで出て来たんじゃないかしら」

「それだな。若しそうだったらただけれど」

「そうだったら？」

「もう許してあげてもいいんじゃないかな」

葉月はこう弥生に話す。

「これでね」

「あの四人を？」

「もう四人共かなりの目に遭ってるし」

葉月はこのことを話した。

第八話 生徒集会その六

「だから。もうそろそろね」

「許してあげるの」

「君だつてずっと絶交したままつてどうなのかな」

弥生が如月達に言った言葉のことも話した。

「それつて」

「けれど」

「まだ許せない？四人のこと」

「椎葉さんをいじめていたのは事実だから」

この事実は忘れたことはない。だからこそ許せないのだ。

「だからね」

「それはわかるよ。僕だつてね」

「やっぱり許せないわよね」

「今はね」

話を限定してみせた。

「今は許せないよ」

「今はなの」

「けれどもここで謝つたらね」

「許せるのね」

「若しかしたらね。少なくとも気持ちは少しは変わるだろうね」

彼自身こう予想していた。自分自身のことをだ。

「今みたいに頑ななままじゃないと思う」

「そうなのね」

「だから。君も変わるんじゃないかな」

「変わればいいわね」

弥生は自然にこう答えた。答えることができた。

「じゃあ」

「とにかく。話を聞こう」

「ええ」

こうしてであった。二人はその四人を見るのだった。その四人はマイクを手に話をはじめた。壇上に四人横一列に並んで座っている。「私達、同じクラスの椎葉神無さんをいじめていました」「ずっといじめていました」

こうマイクで学校の人間全てに話す。

「酷いことをしてきました」

「そのことを皆さんにお話します」

こう話してであった。

「悪いことをしていました」

「すいません」

ここで四人一斉に頭を下げた。

「このことを皆さんに、椎葉さんに謝ります」

「もうしません」

「絶対にしません」

こう言うのであった。それを聞いた学校の面々は。

「謝ったしいいんじゃないか？」

「そうよね」

「確かに悪い奴等だけれど」

「もうこれでいい？」

「許してあげる？」

そしてだ。葉月も言った。

「もうこれでいいよね」

「いいのね」

「僕はそう思うよ」

こう弥生にも話した。

「そう思うけれど。どうかな」

「そうね」

弥生もだ。ここで頷いた。

「じゃあもう」

「そうしようか」

二人は許す方に傾きかけた。しかしであった。ここでだ。体育館が急に暗くなった。

「えっ、カーテンが」

「閉まった？」

「それに灯りも」

この学校の体育館のカーテンはボタン一つで自動で全て閉じられる。そしてである。カーテンが閉じられても灯りは点けられなかった。

それで体育館の中は必然的に真っ暗になった。

そして壇上にだ。映画用の幕が出て来た。

「何か映画するの？」

「だとしたら何？」

「一体何を上映するの？」

「っていつか」

皆首を傾げざるを得なかった。

第八話 生徒集会その七

「何でここで映画なんだよ」

「まだ四人喋るんだろ？」

「それで何で？」

「誰が動かしてるんだよ」

皆次々に言う。四人もだ。

「えっ、何？」

「何で幕が」

「どういうことよ、これ」

「私達まだ」

四人も何故こんなことが起こっているのか理解不能だった。その中でもだ。何かが動いていた。そしてそれは止まらなかった。

やがて何かが聞こえてきた。それは。

四人がトイレで話していたことだ。この生徒集会での謝罪を決める時の話だ。

「おい、これって」

「ああ、あいつ等の声だよな」

「何でこんなのが放送されるの？」

「しかもこの内容って」

四人が今の状況から逃げる為に謝罪するということを知り、四人自身も話していることをそのまま放送していた。それを聞くとだった。

皆はすぐに態度を変えた。そうしてであった。

「この連中それでか」

「糾弾から逃げる為に今あそこにいるのか」

「何て奴等なの」

「反省してないんだな」

「とんでもない奴等だな」

こう言ってまたそれぞれ険しい目でその四人を見据える。四人も

だ。

壇上で狼狽してだ。あたふたとしていた。

「な、何であの時の話が」

「ここで流れるんだよ」

「どうして？あの時あのトイレには私達しかいなかったのに」

「どうしてなのよ」

壇上で誰が見てもはつきりとわかる狼狽を見せていた。さらにだ。その幕に何かが映った。それは。

四人が校舎裏で神無をいじめている時の映像が映ったのだった。

「お、おいあれ！」

「あの四人じゃない」

「それであれって椎葉さん？」

「うわ、酷いなこれ」

四人で神無を殴り蹴ってだ。そのうえで彼女をゴミを入れる倉庫に蹴り込む場面まで映される。そしてそれだけに止まらなかった。

四人がトイレで彼女をいじめていた場面も映される。弁当をトイレの床にぶちまけて無理に食わせる場面もモップで攻撃する場面もだ。当然殴ったり蹴ったりする場面も水をかける場面もだ。全て映された。

しかもそのうえ教室や部室で神無のロッカーや机に落書きをしたり花瓶を置いたりゴミを入れる場面もだ。その時の醜い顔と合わせて映されていた。

皆それを見てだ。まずは啞然となった。

「あいつ等ここまでするのかよ」

「何よこれ、酷過ぎるわよ」

「これが人間のすることかよ」

「最低」

「もう人間じゃないな」

「こんなことするなんて」

その啞然としたものが怒りになるには然程時間がかからなかった。

そしてだ。壇上で自分達の姿を見せられて呆然となる四人にだ。激しい罵倒を浴びせるのだった。

「死ね！」

「地獄に落ちろ！」

「もう二度と学校に来るな！」

「そこから消えろ！」

「何なら引き摺り下ろしてやるぞ！」

何処からかものが飛んできた。それが最初だった。

四人に罵声だけでなくものも浴びせられる。壇上にかかる者達もいたが流石にそれは先生達が止めていた。

「おい、止めろ！」

「壇上に登るな！」

「落ち着け！」

「これが落ち着いていられるか！」

「こいつ等、許せねえ！」

体育館のあちこちで騒動が起こっていた。

最早どうしようもないまでに騒然となっていた。そしてだ。

四人は蒼白になりただそこに立ちつくすだけになっていた。彼女達にはもう何もできなくなっていた。

「そんな………」

「何でばれてたんだよ………」

「見えないようにしていたのに………」

「それに………」

目の前にある自分達への罵倒と激しい怒りはだ。四人をさらに追い詰めていた。

「も、もう………」

「終わりだようち等………」

そしてその場にしゃがみ込んでしまった。へなへなと崩れ落ちる。もう彼女達には何もできなくなった。激しい糾弾と憎悪の中で。

弥生もだ。顔を顰めさせて言った。

「もう無理ね」

「そうだね」

葉月も冷たい声を出す。

「絶対に許せない」

「僕もだよ」

「ここまでしていたなんて」

「思ってた？」

「いいえ」

弥生は葉月の言葉に首を横に振った。

「思ってたなかったわ。とてもね」

「そうだよ。ここまで酷いなんてね」

「もう絶対に許さないわ」

弥生は決めてしまった。

「あの四人がどうなっても知らないわ」

「うん。もう放っておこう」

「あそこまでやったら報いがあつて当然よ」

弥生は冷たく言い放った。

「どんな報いでもね」

「うん、僕もそう思うよ」

葉月はまた弥生の言葉に同意した。

「自業自得だよ」

「本当にそうね」

誰もが四人に激しい憎悪を向けていた。先生達も義務で生徒達を止めているだけだ。

しかしその中でだ。一人だけ違っていている者がいた。

「これでよしだね」

岩清水だった。彼は体育館の放送の場から四人と糾弾の罵声を聞いてほくそ笑んでいた。そうしてそのうえで、であった。

彼は一人その場を去った。四人はまだ糾弾を受けていた。遂にその場で泣き崩れたがそれでもだった。糾弾の声は止まらなかった。

「死ね！」

「泣いても許さないぞ！」

「地獄に落ちろ！」

その罵声が止まることはなかった。体育館に何時までも響いていた。

第八話 完

2010・9・1

第九話 全てを壊されその一

第九話 全てを壊され

四人への糾弾はだ。最早止まらなかつた。学校に来ればだ。そこからもうであつた。

「まだ来てるのかよ！」

「辞める！」

「とつと消えろ！」

こつした罵声が轟く。そしてだつた。

四人の机も椅子もロッカーも常に荒らされた。落書きやゴミで埋め尽くされていた。時には花瓶すら置かれてることさえあつた。

「死ねばいいのよ」

「本当にね」

「あんなことしたんだから」

かつては笑顔を向けていた友人達もだ。憎悪に満ちた声で言ってきた。

「それで学校来るの？」

「信じられない」

「辞めれば？」

「もういても仕方ないでしょ」

こんな有様だつた。そしてだ。

時には岩清水がだ。例によつて周囲を扇動して叫んだ。

「あの場所に行かない？」

「あの場所？」

「あの場所つて？」

「だから。あの醜いことが行われた場所だよ」

自分達の机で沈み込んで座っている四人を見ながらの言葉だつた。

「そこでね」

「行くつて？」

「そこになの」

「あの行いを忘れない為にね」

この提案にはだ。流石にこう言う者もいた。

「そこまですることないんじゃないかしら」

「そうだよね」

こう言っただけで岩清水には賛同しようとしなかった。

「別にそういうところ行かなくても」

「そうじゃないかな」

「いや、そういうわけにはいかないよ」

しかし岩清水の方が一枚も二枚も上手である。それでだ。自分の携帯を取り出してだ。そうしてそのうえであの映像を見せるのだった。

「どう思う？」

「うっ、それは」

「確かに酷いね」

「だからだよ。行こう」

映像を見せたうえでのあらためての言葉だった。

「あそこだね」

「そうね、わかったわ」

「行くべきだね」

四人が神無を攻撃していたぶっている姿を見ればだ。怒りがこみ上げってくる。そうして賛同しようとしなない彼等を抱き込んだのであった。

「やっぱりね」

「絶対に許したらいけないし」

「そう。それに」

岩清水はまた四人の方を見て言う。

「やってきた人間も連れて行かないと駄目じゃないかな」

「あいつ等かよ」

「あいつ等をなの」

「うん、連れて行こう」

また提案する岩清水だった。

「是非ね」

「ああ、来い！」

「とつとと来い！」

「こつちにな！」

「あつ……」

四人はそれぞれ手を掴まれて立ち上がさせられてだ。皆に囲まれてそのうえでその場所に引き摺って連れて行かれるのだった。

四人もだ。何とか抵抗しようとする。

「い、行きたくないよ」

「もう許してよ……」

「二度としないから……」

「こんなことをして言うのかな」

岩清水はここでも携帯のその映像を見せる。四人に見えるようにだ。

「まだ」

「けれど……」

「それでも、もう……」

「来い！」

「御前等がやったんだろうが！」

「絶対に許さないからね！」

しかし岩清水に煽られた周りにはあまりにも無慈悲であった。そんな四人を引き摺ってだ。そのうえでまずはあのトイレに連れて行くのだった。

第九話 全てを壊されその二

「ここだよ」

「そうよね、ここよね」

「ここでやったんだよね、この連中」

「皆、忘れたらいけないよ」

四人を囲んでそのトイレの前にいる皆に対してだった。また言うのだった。

「ここで行われたことはね」

「そうだよな、絶対に忘れないからな！」

「許さないからね！」

「何があってもね！」

皆ここでまた四人を囲んで糾弾する。それからゴミ捨て場や体育館裏に連れて行ってだ。そこでも同じことをする。四人は俯いたまま立ってだ。何も言えなかった。

昼食の時にはだ。また岩清水が煽った。

「食べ物だってそうだったね」

「ああ、そうだよな」

「あれも酷かったよね」

「最悪だったよな」

皆ここでも彼に煽られる。岩清水は彼等のいじめを憎む良心を熟知していた。そうしてそのうえで煽り続けているのであった。

「じゃあ今度はな」

「この連中に食わせてやろう」

「あれをね」

「ああ、待って」

ここであった。岩清水はまた策略を仕掛けたのだった。

「食べ物を粗末にしたらいけないよ」

「そうだよな、それはな」

「こんな最低最悪の連中と同じことしたら駄目だよな」

「そうよね、それじゃあ」

「この連中の弁当は取り上げてな」

実際にだ。四人の鞆や机の中を引き出してそのうえで教科書やノートを辺りにぶちまけて四人の目の前で踏み付いたり引き裂いたり落書きをしてだ。ゴミ箱に放り込んでからそのうえで弁当は自分達の手によった。

そしてそれは男連中が食べてしまう。それからだった。

またゴミやら何やらを四人の机の上にぶちまけてだ。男連中が四人の頭を掴んでそのゴミに顔をぶつけようとする。

「ほら、食べよ！」

「御馳走してやるよ！」

「椎葉さんにやっただみたいにね！」

「さあ、皆で食べさせてあげようよ」

岩清水の言葉はこのうえなく冷酷なものだった。

「この御馳走をね」

「さっさと食べ！」

「食わないならな！」

「こっしてやるわよ！」

何としても頭を下げようとしなない四人に対してだ。皆はその両手を掴んで動けないようにした。そのうえでだ。口をこじ開けさせてだ。

それぞれゴミを手にしてその口に詰め込む。吐き出そうとするのを口を塞いでだ。そうして無理に食べさせようとする。

「う、うぐっ……」

「あぐっ……」

四人は目から涙を流した。それで思わず吐いてしまった。そのゴミだけでなくだ。胃液等まで全て吐いてしまった。

「きったねえな！」

「御前等何吐いてんだよ！」

「掃除しておきなさいよ！」

「自分達でな！」

ここでそのゴミの中に蹴り倒される。そんな有様だった。四人にとってはまさに地獄だった。しかもそれで終わりではなかった。

ネットでだ。恐ろしいことが起こっていたのだ。

たまたまサイトを見ていた長月がだ。それを見てすぐに三人に連絡した。

携帯でメールを送ってであった。

『サイト開いてみるよ』

『えっ、どのサイト？』

『何処なの？』

『ここだよ』

長月はそのサイトのアドレスを三人に送った。するとだった。

『な、何これ！？』

『私達の映像じゃない！』

『あの時の』

『ああ、そつだよ』

まさにそれだった。あのいじめの場面がだ。ネットに流出していたのだ。

調べたらあの裏サイトにもあった。そしてだ。

第九話 全てを壊されその三

あるいじめサイトにも流れていた。ある巨大掲示板にもだ。それを見た人間達から怒涛の如く怒りの書き込みが殺到していた。

「何だこの連中！」

「こんなこと許されるのかよ！」

「おい、この学校何処だ！」

「それでどの連中だ！」

そうしてその怒りの声が四人の個人情報の調査への書き込みになっていた。四人はこのことにも震え上がることになった。

「ど、どうしよう・・・・・・」

「私達の個人情報までばれたら」

「家に誰か来る？」

「来るよな、絶対」

こう話してだ。ある喫茶店の隅で震えあがっていた。

「このままだと」

「どうしよう、そうになったら」

「そんな、家までって」

「学校だけじゃなくて」

「そんなの絶対に耐えられない・・・・・・」

四人共頭を抱えるしかなかった。もうどうしていいかわからなかった。

岩清水はそれを自分のサイトにも貼っていた。従兄と共有しているいじめ糾弾のサイトにだ。そのうえでまた従兄と話していた。

「いい感じだよ」

「皆かなり怒ってるんだね」

「うん、凄い勢いだよ」

満面の笑顔で従兄に話していた。

「この調子でいけばもうね」

「順調にいけるね」

「うん、順調だよ」

満面の笑顔でまた従兄に話す。

「さて、この後は」

「どうするんだい？」

「いつも通りやるよ」

こう話すのであった。

「いつも通りね」

「そうかい。いつも通りなんだね」

「そうしていい頃合いだよね」

「うん、それでいいよ」

従兄も満面の笑顔で彼に話す。

「ここではそうする時だよ」

「そうだね。それじゃあね」

こうしてだった。岩清水はまた動いたのであった。

ある日だ。如月が家に帰るとだ。いきなり弟に言われた。

「姉ちゃんなんか最低だ！」

「えっ、睦月どうしたの？」

「学校に人が来たんだ、校門のところで拡声器で言っていたんだ！」

姉を指差してそれで責めるのだった。

「姉ちゃんが学校で何をしていたかって。いじめなんてしていたんだね」

「そんな。あんたのところに来て」

「そうだよ。僕のお姉ちゃんがいじめをしていたってね！」

それを彼の学校まで来て言っていたというのだ。

「それで僕まで言われたんだ。いじめっ子の弟だってね！」

「あんたまで……そんな……」

「それで僕クラスの皆にいじめっ子の弟だって言われたんだ！全部

お姉ちゃんのせいだ！」

「あの、それは……」

「あの、それは……」

「姉ちゃんなんか大嫌いだ！」
遂にこう言われた。

「姉ちゃんのせいでこうなったんだ！姉ちゃんなんか最低だ！」
まずは弟からだった。そしてだ。

母のパート先のスーパーでもだ。拡声器を持った岩清水が来たのだ。
だ。

そしてだ。拡声器でこう叫ぶのだった。

「城崎さんの娘さんはです」

「ああ、パートの」

「あの人？」

「あの子の娘さん？」

見せの者は彼のその話を聞いてそれぞれ言った。

「あの子がどうしたんだろう」

「一体」

「こんなことをしていました！」

ここでだ。写真を出した。そしていじめの現場の録音も流した。
声だけがそれは確かに店にまで聞こえるように流れた。

「これは何でしょうか！」

「えっ、これってまさか」

「ああ、そうだよな」

「間違いないよな」

「まさか」

それは紛れもなくいじめのものだった。誰もがわかるものだった。

第九話 全てを壊されその四

「この様なことをする娘さんを持つている城崎さんの教育はどうなっているのでしょうか！一体どうした母親なのでしょうか！」

「ふうん、あんな娘さんだったんだ」

「娘さんがいるとは聞いてたけれど」

「とんでもない娘さんだね」

「最低だよな」

幸い今日母は休みだった。しかし岩清水は店の者だけでなく客にまで訴えるのであった。

「こつした娘さんを持つている人がこのお店にいるのです」

「おい、それって」

「なあ。もうここ来ない方がいいんじゃないのか？」

「そうよね。感じ悪いわよね」

「全くよ」

客達も眉をしかめさせる。そうしてだった。実際に何も買わずに店を出て行く人間が次々と出て来たのであった。

そして店員達もだ。如月の母に拭えない悪感情を持った。その結果だ。

母もだった。彼女を責めるのだった。

「あんた学校で同級生の娘いじめていたのね」

「えっ、何でそのことを」

「やっぱりそうなのね」

母は娘の驚く言葉を聞いて確信した。

「していたのね」

「それは……」

「パート先でそれを言う人がいたのよ」

このことを娘に話す。

「それでよ。お母さんパートクビになったのよ」

「嘘、そんな……」

「嘘じゃないわよ」

母は怒った声で娘に告げる。

「あんたのせいよ。あんたのせいでクビになったのよ」

「御免なさい……」

「謝って済む問題じゃないわよ」

「そうだ、御前のことは会社でも話になってるんだぞ」

父もここで俯いてしまった娘に言ってきた。

「電話とかファックスがかかってきてな」

「嘘、そんな……」

「いじめをしている写真も送られてきたぞ」

それもだというのだ。

「御前とんでもないことをしていたな」

「それは……」

「お陰でお父さんも責任を取られそうになっているんだ」

娘を糾弾する言葉だった。

「どうしてくれるんだ、会社をクビになったら」

「パート別の場所探すのもよ」

「ここでまた母が言う」

「今のこの不況で」

「全部姉ちゃんのせいだ」

弟もだった。

「姉ちゃんのせいでこうなったんだ」

「そうよ、あんたのせいよ」

「御前のせいで全てが駄目になったんだ」

こう言って家族の中でも責められていった。そうしてだった。

如月は家族の中でも冷たい扱いを受けることになった。話し掛けられることはなく一緒に食事を摂ってもただ前に食べ物が置かれて
いるだけだ。そして挨拶もされなくなった。

それはだ。三人も同じだった。

「どうしよう、お兄ちゃんのお店に電話かかってきて
文月が言うのだった。」

「お店クビになったのよ」

「あのことよね」

「うん」

沈みきった顔で霜月の言葉に頷く。

「そうなの」

「うちもよ」

霜月もなのだという。

「お父さんの会社にもお母さんのパート先にもあいつが来てよ」

「それでなのね」

「うん、それで」

「うちの姉貴の大学とか妹の中学校にも来たんだよ」

長月もだった。

「それでいじめの話してよ。姉貴と妹が」

「どうなったの？」

「それで」

「学校で友達いなくなったとかいじめられたりとかしてるんだよ」

「それでなのよね」

「家族も私達を」

「ああ、そうだよ」

まさにであった。三人は如月と同じ目に遭っていた。

第九話 全てを壊されその五

「親父の会社にも来るしよ」

「電話とかでもね」

「張り紙とかしてくるし」

とにかくだ。四人の家族の学校や職場にまで来てそれでだ。岩清水は四人がやってきたことを喧伝しているのであった。

「どうなるの？お父さんが会社クビになったら」

「うちも。お母さんパート行かれなくなっただし」

ここで経済的な問題が加わっていた。

「もう。うちは」

「終わりよ、本当に」

「学校でもな」

長月も泣きそうな顔になっている。

「今みたいな状況だし」

「ネットでも私達のこと流れてるし」

「もう嫌……………」

霜月が遂に涙を落とした。

「死にたい……………。こんな目に遭うなんて」

「うん……………」

如月もだった。霜月のその言葉に頷いた。

「こんなのが一生続くんだっただらずっと……………」

「せめて学校にはもう来たくないよ」

「うん、部屋にずっといたい」

「外に出たくねえ……………」

四人はもう限界に達していた。周囲の糾弾は続いていた。その中でだ。岩清水はこんなことも言うのであった。

「悪事を行った人間は絶対に許してはいけないけれど」

「それで？」

「どうなの？」

「死んでからも許しちゃいけないんだ」
皆に言うのであった。

「絶対にね」

「死んでからも」

「それからも」

「そう、それからもだよ」

こう主張してまたしても煽る。

「例えお墓に入ってもそのお墓の前でね」

「そうだよな。悪い奴等は許したらいけないよな」

「そうよね」

「お葬式場で宴会してやろうよ」

あからさまに四人に対しての言葉だった。もうクラスの端でくまらだけしかできない四人を見ながら実際に話していた。

「死んだらそれを祝ってね」

「そうだよな。早く死ねよ」

「死んだら宴会してあげるからね」

「どうだよ、楽しみだろ！」

「さつさと死んだら!？」

「死んだ姿はネットで流してやるからな！」

誰かが言った言葉にだ。岩清水が言った。

「ああ、自殺とかしたらその時の姿はね」

「そうだよな。撮ってネットで流したらな」

「いいわよね、それって」

皆ここでまた岩清水に乘せられる。気付かないうちにだ。

「それじゃあその時はね」

「そうしてやるか」

こんなことを四人に直接言うのだった。それを聞かされた四人は。

「そんな、死んでもって」

「死んでもそうされるの……」

「そんなの嫌だよ……」

「許してよ……」

四人は死んでも救われないことがわかった。最後の最後の逃げ道もだ。これで完全に潰されてしまったのである。

岩清水が煽る糾弾はこうしたものだ。殆どの人間がそれにおかしなものを感じてはいなかった。岩清水に感じさせられなかった。しかしである。

葉月と弥生はだ。食堂で昼食を食べながら話していた。その時だった。

葉月がだ。オムライスを食べながら弥生に言ってきたのだ。

「今の四人だけれどさ」

「どうしたの？」

「あまりにも酷くない？」

「こう弥生に問うた。」

「ちよつとね」

「そういえば家族のところにも行ってるそうね」

「うん、そうなんだ」

「それって捕まらないの？」

弥生はまずはこのことを不思議に思った。

第九話 全てを壊されその六

「それで」

「どうもね。岩清水君って警察が手出しできないっぽいんだよ」

「どうしてなの？」

「何か抗議の前に警察に電話してから行くらしいんだ」
そうしているというのだ。

「それも警察だけじゃなくて相手の会社や学校に同時に集中豪雨みたいな抗議の電話が来て動けなくなるらしいんだ」

「それって誰か支援団体でもあるの？」

「みたいだね。どうやらね」

従兄が関係していることは二人は知らなかった。

「それでそういうことができるみたいなんだ」

「じゃあ岩清水君って」

「相当やばいかも知れないよ」

ここで葉月の顔が顰められた。

「ひよっとしたらだけれど」

「そうなの。そういう人かも知れないのね」

「うん、それに」

葉月は弥生にさらに話す。

「四人のことだけれどね」

「ええ」

「幾ら何でももう充分じゃないかな」

こう話すのだった。

「どう思う？いや、僕達も絶交したけれどさ」

「そうね。もう友達じゃないわ」

この言葉には頑ななものがあった。

「ただ」

「ただ？」

「あれつてもう糾弾じゃないわよね」

岩清水が皆を煽りそのうえでさせていることを指し示しての言葉だ。

「もう。それどころじゃないわよね」

「四人が椎葉さんにしてきたことは確かに酷過ぎるよ」

「ええ」

「けれどあれは」

葉月はここでまた顔を顰めさせた。そのうえで言うのだった。

「それ以上だよ」

「そうよね。もうあれはね」

「いじめなんてものじゃない」

彼は今言った。

「そう、あれはね」

「あれは？」

「虐待とか。それでも済まないかな」

「もっと酷いものなのね」

「家族まで巻き込むなんて有り得ないよ」

彼が問題にしているのはこのことだった。

「本人達に対してやっていることもね」

「椎葉さんにしてきたことよりもね」

「ずっと酷いよ。死んでも許さないとか有り得ない」

葉月の考えではそうであった。彼はそこまで執念深くも極端でもない。死体に鞭打つということは彼の考えの中には存在しないのだ。

「そう思わない？」

「けれど」

「そうだよ、誰かがそれを言おうとしたら」

「そうなのよ」

弥生は俯いた顔で話す。

「岩清水君あの動画とか。如月達が過去に何をやってたか言うから」

「それで怒りが湧き起こってね」
「どうしても」

彼女も思考を止めてしまふのだった。しかしである。思考を止めるだけで済ませている彼女はまだましなのであった。他の者はだ。

「また怒りを爆発させる子も多いわよね」

「そう、あの動画がネットでも流れていてね」

「そうらしいわね」

「もう四人への怒りの声がネット中でも沸き起こっているんだ」

無論それをわかつての岩清水の行動である。

「どうやら彼はそれで皆の怒りをその都度引き起こしているみたい
なだけけれど」

「じゃあ如月達はこのまま」

「そう、死んでもね」

「確かに許せないけれど」

それでもだつた。弥生は葉月の言葉を聞くうちに考えを次第に変えていつていた。

「幾ら何でも」

「僕も四人は許せないよ」

それは彼も同じだつた。

第九話 全てを壊されその七

「けれどね」

「そうよね。あんなことを続けたら」

「やり過ぎだよ。どうにかしないといけないかもね」

「そうね」

二人はこんな話をした。しかしである。岩清水の四人への攻撃はさらに続きだ。今度はネットを使ってあることを仕掛けたのである。

「もうこの段階だよ」

「うん、いい頃合いだね」

従兄は満足した顔で彼の言葉に頷いていた。また従兄の部屋で話をしている。

「ここでそれをしてもらいいよ」

「よし、こうして」

調べた四人の住所をだ。自分達のサイトに書き込んでいた。

そのうえでだ。さらに書き込む。

「集合場所と時間はこれでいいよね」

「そうだね、そこでもいいね」

「そうしてね。警察やお役所には電話で動けなくして」

「事前にそうしたメンバーも集めておく」

「いつも通りだよ」

「そう、いつも通りすればいいよ」

従兄は彼の言葉に平然として返す。

「さて、家族の絆も壊したし後は」

「家にまで攻め込んでね」

「後はこのまま攻めればいいよ」

「これであの四人も終わりだね」

岩清水はドス黒い笑顔を浮かべて話す。

「いよいよね」

「若し病院に入ってもね」

「うん、わかってるよ」

今度は彼が平然として返した。

「その病院でもね」

「全部わかってるね。見事だね」

「健一郎兄ちゃんに教えてもらったから」

再びドス黒い、人のものとは思えないまでに邪な笑顔で話した。

「だからだよ」

「言うね。じゃあそのお手並みをね」

「見てもらうよ」

「楽しみにしているよ」

こう話してであった。彼は四人の住所を公開したうえでさらにメルやメッセでも人を密かに集め話し合ってた。そのうえで準備を進めるのであった。

四人はもう休日でも明るくはなれなかった。家族の絆は崩壊し家でもそれぞれ一人になっていた。四人共暗く沈んだ顔で家に引き籠もるようになっていた。本当は学校にも行きたくなかった。

だが家族にその時間になると常に追い出される。鞆を外に捨てられたことすらあった。

「早く行きなさい」

「そんな……」

「あんたが悪いんでしょ」

そしていつも冷たく言われた。

「自業自得よ。早く行きなさい」

「そんな、学校に行ったら……」

「お母さんあんたのせいでパートをクビになったのよ」

忌々しげにこのことを言われる。

「睦月だって学校でいじめられてるしお父さんだって左遷させられたのよ」

「けれど今は」

「あんたがやったせいだよ」
もう反論も許されなかった。

「全部こうなったのよ。早く行きなさい」
「う、うん……」

「学校に行かなかつたら許さないわよ」

途中で何処かに逃げることも封じられた。

「家追い出すからね」

「そんな、お家もって……」

「置いてやつてるのよ」

最早愛情なぞ完全に消えていた。それが露わになった言葉だった。

「それをわかりなさい」

「じゃあ……」

「早く行きなさい」

娘に対して忌々しげに告げる。

「さつさとね」

「ええ……」

如月は力なく頷くしかできなかった。そのうえで捨てられた鞆を手に取ってだ。とぼとぼと学校に向かうのだった。その足取りはかつての様に元気のいいものではなかった。死に行くかの様だった。そしてだ。校門に着くとだ。

脚がすくむ。それだけではない。

吐き気が来た。それで校門に吐きそうになる。しかしだった。

「おい、何してんだよ」

「こんなところで吐くつもり？」

後ろから冷たい声が出た。

「とつとと行けよ」

「学校にね」

「逃げるのを許すな！」

そしてまた岩清水が煽るのだった。

第九話 全てを壊されその八

「永遠に糾弾するべきだ！」

「そうだよな。さっさと来いよ」

「クラスにね」

「い、嫌……」

如月はクラスと聞いてだ。身体の震えを止められなかった。

「もう許して、お願いだから……」

「何甘えたこと言ってるんだよ」

「そうよ」

「許してたまるか」

「許されないことした癖に」

「何でもするから……」

蒼白になった顔でまた言った。

「だから。もう……」

「土下座しようが許すな！」

ここでも言う岩清水だった。

「これだけのことをした人間が許されるのか！」

「ああ、許されるか！」

「絶対に許さないからね！」

「だから来い！」

「クラスにね！」

「も、もう嫌……」

如月はうずくまろうとするがここで両手をそれぞれ後ろから掴まれた。そしてであった。

引き摺ってそのまま下駄箱に連れて行かれる。下駄箱は男子の一人が開けた。

それから上履きを彼女の顔に投げ付ける。右の靴が頭に、左の靴が右の頬に当たる。それが当てられてからまた言われた。

「履けよ」

「さっさとね」

「それでクラスに来いよ」

「いつも通りしてやるからな」

こうして無理に教室に入れられてだ。また糾弾を放課後までされる。他の三人もだ。もう逃げ場所は何処にもなかった。

それで終わらなかった。家に帰ればだ。

まず玄関を見てだ。啞然とした。

「な、何これ……」

二十人はいた。その彼等がだ。

「出て来い！」

「いじめを許すな！」

「いじめっ子を糾弾しろ！」

「いじめ反対！」

それぞれが家にものを投げ壁に落書きしプラカードを持ってだ。そのうえでデモをしていたのである。如月の家の前だ。

そしてそこに。あの男もいた。

「ご近所の皆さん」

拡声器を持ってそれで周囲に訴えていた。

「この家の娘さんは学校でいじめをしていました」

「そうだそうだ！」

「証拠もあるぞ！」

「この映像だ！」

そのデモをしている面々がここで言う。そしてそれぞれの携帯にある映像を見せる。またあの時の一連の映像だった。

「こんなことをしていたんだ！」

「絶対に許すな！」

「こんな奴等！」

「何があっても！」

「皆さんはいじめについてどう思われるでしょうか」

岩清水の訴えは続く。

「許せるでしょうか」

「許せる筈がない！」

「いじめは最低の行為だ！」

「絶対に許すな！」

「何があっても！」

デモ隊は彼の言葉に続く。

「いじめ撲滅だ！」

「この世から消せ！」

「そしていじめをやる奴は最低だ！」

「人間の屑だ！」

「僕達はいじめは絶対に許しません」

岩清水の言葉は続く。

「その為ここにいます」

「皆さんも協力して下さい！」

「いじめを撲滅しましょう！」

「皆の力で！」

「いじめは一人の力ではなくなりません」

岩清水はここでは正論をあえて出した。

第九話 全てを壊されその九

「皆の力でなくすものです」

「だからです！」

「ご近所の皆さん協力して下さい！」

「いじめ反対！」

「いじめ撲滅！」

「何でお家にまで来てるの……」

「ここでも顔が蒼白になり脚がたがたと震える如月だった。

「どうしてなのよ……」

「あいつだ！」

「間違いない！」

「あいつだ！」

「ここで見つかってしまった。

「あいつが家に帰って来たぞ！」

「よく帰って来たな！」

「そのいじめっ子だ！」

「そうです、彼女がです」

岩清水の言葉が来た。

「彼女がそのいじめをしていた人間です」

「よく来たな！」

「帰って来るのを待っていたぞ！」

「来い！許さないからな！」

「地獄に落ちろ！」

「死んでも許さないからな！」

「そう、いじめは絶対に許されない行為です」

岩清水は周囲だけでなく近所にも聞こえるように訴える。

「ですからここは」

「いじめをした奴を許すな！」

「あいつを許すな！」

「絶対にだ！」

そして如月を取り囲んでだった。怒り狂った顔で糾弾しはじめた。「どうしていじめをやった！」

「言え！」

「言っても言わないでも許さないぞ！」

「ずっとこうしてやる！」

「も、もう駄目……」

如月は怒り狂った彼等に取り囲まれる中でしゃがみ込んでしまった。

「もう無理。誰か私を殺して……」

こう言ってその場に泣き崩れる。しかしだった。

「皆さん！」

「!？」

「何ですか、一体」

「この言葉を聞いて下さい」

まただった。岩清水は携帯を出していた。そしてだ。

そこから聞こえてくるのは如月達の言葉だった。何処かで録音したその言葉はだ。彼女達が神無に対して話しているものだった。

そこでだ。如月が言っていた。神無を死ぬまで追い詰めてやる、と。

それを周囲に聞かせたのだ。ここでだ。

そのうえで岩清水はだ。同志達に問うた。

「どう思われますか」

「殺してやる！」

「地獄に落としてやる！」

「絶対にそうしてやる！」

「いえ、殺すとかそういうのはいけません」

岩清水はまた良識の仮面を被った。

「それはこの連中と同じです」

「じゃあどうするんですか？」

「一体」

「いじめは許しませんよね」

「はい、絶対に許してはなりません」

岩清水はこれは当然だというのだった。

「しかしです」

「しかしとは」

「じゃあ何を」

「どうするんですか？」

「死ねばそれで終わりでしょうか」

岩清水が言うのはこのことだった。

第九話 全てを壊されその十

「相手が死ねばそれで終わりでしょうか」

「いや、終わっては駄目でしょう」

「そうですよ」

「それは駄目ですよね」

「それで終わったら」

「はい、そうです」

また同志達の言葉に頷いてであった。

「ですからここは」

「ここは」

「どうされますか」

「死んでも許してはなりません」

厳然たる裁きの言葉だった。

「そう、死んでも屍を晒し墓を攻撃しましょう」

「そしてその死んだ姿をですね」

「ネットに流して」

「そうです、罪は絶対に消えないのです」

また言う岩清水だった。

「ですから、いいですね」

「はい、わかりました」

「それでは」

「殺してはなりません」

法律に基づく言葉ではなかった。断じてだ。

「死んでも糾弾しましょう」

「そうだ、死んでも許すか！」

「何があっても許さないからな！」

「死んでそれで逃げられると思うな！」

「ずっとやってやる！」

「そんな、死んでもって……」

如月は彼等の言葉に絶望するしかなかった。そしてだった。岩清水はだ。ここでも同志達に話した。

「では皆さん」

「はい」

「今度は何をしますか？」

「悪はその全てを許してはなりません」

自分自身を善、そして如月を悪と置いての言葉に他ならなかった。

「ですからここはです」

「はい、ここは」

「どうぞされますか」

「この家の中に入りそのうえで悪の全てを破壊しましょう」
そうするといふのであった。

「今から。いいですね」

「はい、それでは」

「今から」

「さあ、行きましょう！」

同志達にここぞとばかりに声をかけた。

「そして悪を！」

「悪を許すな！」

「全てを壊してやれ！」

「何もかもだ！」

如月を取り囲むのを止めてだ。彼等は家に雪崩れ込んだ。

ここで母が戻って来た。それで慌てて彼等を止めようとする。

「あの、何ですか貴方達は」

「いじめっ子の母親です」

岩清水はここでその彼女を指し示して同志達に話した。

「悪を生んだ存在です」

「御前の教育が悪いからだ！」

「それでこうなったんだぞ！」

「悪いと思わないのか！」

「責任を取れ！」

「そんな、あんなの娘じゃないわよ」

ここでだった。母は忌々しげに言い捨てた。

「あの娘のせいで家族も酷いことになってるのに。あんなの娘の筈がないじゃない」

「そんな……」

母の今の言葉にだ。如月はまた絶望に襲われた。

「お母さん……」

「私は知らないわよ、あんなの娘じゃないわよ」

「娘じゃない。私が……」

これには愕然となつてしまった。ようやく立ち上がったその時にだった。母が自分を指差してこう彼等に言い捨てたのである。

幼い頃からの記憶が蘇る。いつも優しい笑顔を向けて愛情で包んでくれた。遠足や運動会の時のお弁当も授業参観の時に来てくれたことも。家で勉強している時にも励ましの言葉をかけてくれておやつも出してくれた。服を買ってくれて怪我をしたらすぐに手当てをしてくれた。そんな母だった。

しかしその母がだ。今こう言ったのだ。如月の中で母との思い出が全て割れてしまったのだった。

「そんなことつて……」

「私達は関係ないわ。知らないわよ」

「知らない筈があるか！」

「生んだのはあんだだ！」

「あなた以外に誰がいるんだ！」

「いえいえ、皆さん」

岩清水はここで再び動いた。

「今はそれよりもです」

「悪いですか」

「それを」

「はい、悪の全てを壊す方が先です」

こう話して彼等の矛先を他に向けさせるのだった。

「そちらに」

「わかりました。それじゃあ」

「家の中に入って」

「それで」

「全てをです」

こう言うのであった。

「いいですね」

「よし、行きましょう!」

「それじゃあ今から」

「絶対に許すか!」

彼等は家の中に雪崩れ込みだった。そして中から凄まじい音を出させていた。それが暫く続いてた。彼等は誇らしげにそこから出て来た。

「よし、今日はこれ位でいいですよね」

「そうですね、岩清水さん」

「これで」

「他にも三人います」

岩清水は如月だけを見ているのではなかった。他の三人もであった。

「ですから」

「よし、次はそつちだ!」

「そつちに行くぞ!」

「悪はまだいるんだ!」

「悪は逃すな!見逃すな!」

「何があつてもな!」

こんなことを叫びながら何処かへと消える。如月は今は取り残されていた。

しかしここでだ。糾弾や母の言葉で朦朧となっている頭にだ。不

吉なものが走った。

「まさか……」

それに捉われ慌てて家の中に入る。そうして見るとだ。

家の中は徹底的に破壊されていた。テレビも食器も何もかも。家具もあらかた破壊され特にだ。彼女の部屋は酷いものだった。

机も椅子もベッドも本棚も。何もかもが潰されていた。あちこちに糾弾する落書きがありそして。

アルバムもあの写真も全て引き出されそのうえで引き裂かれていた。そこには千切れた自分自身の笑顔と。弥生達がいた。

「そんな、そんな……」

その目がゆつくりと滲んできて。それから。

涙が溢れてくる。もうそれを止めることができなかった。

「全部、皆なくなるなんて……」

千切れた写真の側のアルバムは。幼稚園のものも小学校のものも中学校のものもあつた。彼女のこれまでの全てが。

その何もかもが引き裂かれそうして踏み躪られていた。それを見てどうしようもなくなり。その場に崩れ落ちてしまった。

そのまま泣き崩れる。後ろから母が自分を責める声がある。だがもうそれを聞くこともできず。ただただ泣き崩れるだけであった。

第九話 完

2010・9・7

第十話 襲撃の後でその一

第十話 襲撃の後で

神無は家だ。大柄で精悍な顔の青年に声をかけられていた。彼女の兄である椎葉極月だ。大学では柔道部のエースである。その彼がだ。強張った顔で妹に問うていた。その手には携帯がある。

「おい、これは何だ」

「えっ、これって……」

「これ御前だな」

彼女がトイレでいじめられているその現場の映像だ。無論岩清水が流したものである。それを兄も見ってしまったのであった。

「御前で間違いないな」

「それは……」

「それでこいつ等か」

極月は今度は怒りに満ちた顔になっていた。

「こいつ等が御前をか」

「それは。その」

「言わなくてもいい」

妹にこれ以上は言わせなかった。

「この連中の名前や住所はもう書いてある。何とでもなるぞ」

「兄さん……」

「この連中絶対に許さないからな」

声もまた同じだった。怒りに満ちていた。

「何があってもな」

「……」

彼女の兄も知ったのだった。そしてだ。四人は相変わらず学校で糾弾を受け続けていた。家に帰ればそこにデモ隊がいる。そうして連日連夜責められ続けていた。

その学校でだ。今日も岩清水が叫んでいた。

「皆、悪はまだ残っている」

「そうね」

「まだ学校に来てるのかよ」

「登校拒否になれよ！」

「それでも引き摺り出してここまで連れて来てあげるわよ！」

皆四人を笑顔で友達と言っていた。しかし今ではだ。四人を憎しみと怒りに満ちた顔で見据えてだ。机を蹴ったりものを投げ付けてきたりしながらそのうえで責める。四人は自分達の机に座ってうずくまるだけだがそれでも容赦されることはなかった。

そしてだ。岩清水は言うのだった。

「皆、もう悪は学校に来なくてもね」

「そうだよね」

「糾弾できるし」

「さっさと学校に来なくなればいいのに」

「来るなつてのよ」

「じゃあこうしよう」

ここでまた言うのであった。そしてだ。

如月の机の目の前、彼女の目の前にだ。わざと花瓶を置いてみせたのだった。その落書きとゴミに満ちた机の上いだ。

「もう悪は消えたよ」

「ああ、いなくなつたよな」

「この学校からね」

「二度とね」

「わからないようだったらわからせてあげればいいし
今度の言葉はこうしたものだった。」

「そうすればいいしね」

「わからせる？」

「どうやって？」

「どうやってするの？」

「まずは席を立ってもらって」

彼がこう言うのだった。男子のうちで最も身体が大きいのが出て来てだ。いきなり如月達を次々に横から蹴飛ばした。そのうえで席から出させる。四人は机や椅子ごと吹き飛びその場に叩き付けられる。だがもう何も抵抗せず何も言うことができなくなっていた。花瓶は岩清水が事前に取りついていた。何が起るのかを待っていた様だ。

岩清水はその有様を平然と見ながらだ。皆に四人がかつて神無をいじめていた場面を携帯で見せながらそのうえで言うのだった。

「それでね。こうして」

「机と椅子は元に戻すの」

「そうなの」

「うん、こうしてね」

自分から四人の机や椅子を元に戻してであった。そして。

そこに接着剤を塗っていく。そうするのだった。

「こうしてね」

「ああ、それ椎葉にやってたしな」

「やったことは自分も受けないとね」

「じゃあそこに座らせるか」

「そうよね」

その接着剤の場面を携帯にも流す。それで皆の怒りを増幅させる。そのうえでやっていきであった。

第十話 襲撃の後でその二

皆にだ。また言った。

「座ってもらおう」

「ああ、座れよ」

「座らせてやりましょうよ」

「ほら、立てよ」

四人と取り囲んでその腕や髪の毛を掴んだ。無理に座らせる。

その中で如月が俯きながら言った。

「嫌……」

小さな声だった。だが確かに言った。

「もう、嫌……」

「ああ！？嫌じゃねえんだよ」

「あんた達がやってきたことじゃない」

「早く座れよ」

「さっさとね」

皆その彼女に冷酷に言い放ってだ。そうして四人共座らせたのだ。つた。

当然接着剤で動けなくなる。岩清水はその四人の頭や身体に今度にはかわをかけていく。そのうえで皆をまた煽る。

「これで何でもくつつくよ」

「ほら、飾ってやるよ」

「いじめっ子は死ねってね」

「もうクラスメイトじゃねえよ、御前等」

「学校来なくていいから」

皆こう言いながら紙に糾弾する言葉を書きそれを四人の身体や頭に貼り付けていく。ゴミも投げ付けてくつつかせる。

そしてだ。岩清水はさらに仕掛けた。

「学校の皆にも見てもらおうよ」

「ああ、いじめっ子がどうなるかな」

「丁度いいみせしめよね」

「それじゃあ」

「いじめは絶対に許したらいけない」

岩清水は正義を振りかざすことも忘れない。

「それを皆に知ってもらおうよ」

「ああ、じゃあ二年や三年の人も呼んでな」

「見てもらいましょう」

こうして四人は全校の晒し者になった。岩清水はそのうえ彼女達を校内で引き回しにさせた。そうしてその最後にだった。

グラウンドの真ん中に四人をやった。拡声器で訴える。彼と四人の周りには引き回しについて来た全校の生徒が集まっている。

彼等を前にしてだ。岩清水は訴える。

「皆さん！」

「ああ」

「何だ？」

「どうしたの？」

「この四人は今まで自分から反省したと言ったでしょうか」
「こう周囲に訴えるのである。」

「あれだけのことをしてです。それでもしたでしょうか」

「いや、ないよな」

「そうよね、ないわよね」

「つまり全然反省してないんだな」

「あれだけのことしてね」

また忌々しげに言う彼等だった。

「とんでもない奴等だよな、本当に」

「最低よね」

「全くだよ」

「図太い奴等ね」

俯いて何も言えない四人を見ながら悪し様に罵る。四人はまだ身

体にかわを付けていて貼り紙やゴミもそのまま残っている。

その四人を見ながらだ。岩清水はさらに言う。

「本人達の口から自分達が何をしたか言わせるべきです」

「ああ、言え！」

「言いなさいよ！」

「黙ってても許さないからな！」

「早く言いなさいよ！」

皆四人を四方八方から糾弾する。それを受けてだった。

岩清水がだ。四人に対して言う。

「皆はこう言ってるよ」

「け、けれど」

「もう、そんな……」

生氣も気力も完全になくしている四人にはだ。とても言えないことだった。しかしである。皆はその彼女達を容赦することはなかった。

「言え！」

「言えよ！」

「自分達の口でね！」

「自分で言いなさいよ！」

「え、ええ……」

四人は糾弾を受けて頷いてだ。そうしてだった。

岩清水はマイクを出してきた。周りの一人がそれを受け取るとすぐに如月に投げ付けた。マイクは彼女の胸に当たりそれでグラウンドに転がった。

第十話 襲撃の後でその三

投げ付けた彼はだ。そのグラウンドに転がっているマイクを見下ろしながらだ。四人に対して言い捨てるのだった。

「拾えよ」

「そうよ、拾いなさいよ」

「それで言いなさいよ」

「自分達でな」

また周りから冷たい声で告げられる。何十人に囲まれてだ。そのうえで言わされていた。

四人はそのマイクを受けてだ。自分達が何をしてきたか細かく言わされた。それは校内にあまねく伝わった。しかしである。

岩清水はここでまた、だった。携帯で四人がやってきたことの映像を流す。そのうえで皆に対して訴えるのだった。

「皆もこれを見て」

「ああ、これだよな」

「これよね」

「いつも見てるよ」

それぞれの携帯にもうその映像はあった。岩清水はその映像を彼等に見るように勧めたのである。そうしてそのうえで、だった。

「こんなことをしてきたんだよね」

「本当に許せないよな」

「こんな連中」

「何を言っても何をしてもね」

こう話してであった。四人を責め続ける。こうしたことが続いていた。

そんな中でだ。葉月は学校の屋上で弥生と話していた。それは如月達についてだった。

「最近だけれど」

「如月達よね」

「もうどうしようもないんじゃないかな
こう弥生に話すのだった。」

「あれじゃあね」

「どうしようもないって?」

「責められ過ぎて。気力とかもうないんじゃないかな」

「やり過ぎよね」

如月は言った。

「やっぱり」

「そう思うよね、やっぱり」

「ええ、確かに四人共許されないことをしてきたけれど」
弥生はまずこう前提して話した。

「けれど。もうあれは」

「糾弾にしても酷過ぎるよ。もう止めた方がいい」

葉月はこう話す。

「幾ら何でも限度があるよ」

「そうよね、もうね」

「何か家までも来ているらしいけれど」

葉月は弥生にこのことも話した。

「それで家の中で暴れ回ったらしいよ」

「そんなことまでしていたの」

「そうみたいだよ。これって」

「家族の人にだって迷惑がかかるし」

困った顔で話す彼等だった。

「もう。そんなことまでしたら」

「絶対にいけないことだよ。どうする?」

「どうするって」

「正直僕はまだ許せないよ」

葉月は深刻な顔で弥生に述べた。フェンスに背をもたれかけさせていたがそこから身体を起こしてだ。そのうえで話すのだった。

「それでも。君はさ」

「ええ、幼稚園の頃からよ」

弥生はこうその葉月に答えた。

「如月のこと知ってるわ」

「親友だったよね」

「ええ」

「今でも許せない？」

「こう彼女に問う。」

「まだ。許せない？」

「それは」

「確かに四人共許されないことをしたよ」

「それはその通りだった。」

「けれどね」

「けれど、なのね」

「救いはあるべきじゃないかな」

葉月は歩きながらこんなことを話した。彼の話の聞く弥生はずっとフェンスに背をもたれかけさせている。そのフェンスの向こうにもう一重フェンスがある。

第十話 襲撃の後でその四

「やっぱりね」

「救いが」

「もう家族の人達も四人を見捨ててるそうだよ」

「家族の人達も」

「彼は家族の人達の勤め先や学校にまで来て訴えてるからね」

葉月はこのことを知っていた。

「それで兄弟の人がいじめに遭ったり勤め先を首になってるそうだよ」

「そんなことまでしているのね」

「もう家庭でも孤立しているらしいから」

「じゃあ今は」

「そう、何かできるとしたらね」

「私しかないの」

「そうなるんだけど」

葉月は弥生を見た。しかし彼女は。

迷っている顔だった。目には拒絶の色もあった。それは容易に消えるものではなかった。

その顔と目を見てだ。葉月はまた言った。

「まだ無理みたいね」

「あの映像とか。そういうの見てきたから」

「許せないっていうんだね」

「ええ、まだ」

その通りだというのだった。

「だから」

「それはわかるよ。僕もだしね」

話は繰り返しになっていった。だが葉月はあえてそれをするのだった。

「けれど。やっぱり物ごとには限度があるよね」

「それはそうだけれど」

「じゃあもういいじゃない」

葉月は言った。

「四人共あのままいったら家族の人達も何もかも完全に壊されるよ」

「何もかもが」

「岩清水君は死んでも攻撃するって言ってるし」

葉月はこのことも聞いて知っていた。

「そういうのは幾ら何でも」

「私だってそこまでは」

「思わないよね」

「思えないわ」

これが弥生の答えだった。

「とても」

「だったら。もう」

「けれど」

それでもだというのだった。弥生の言葉にはまだ迷いがあった。

「もう少し考えさせて」

「考えるんだね」

「ええ」

そうするというのだった。

「もう少しだけね」

「そうしようか。それにしても」

葉月は歩き回りながら腕を組んでいた。そうして深く考える顔になってた。こんなことを言ってみせたのである。

「椎葉さんは今の状況どう思ってるのかな」

「今の状況を？」

「そう。確かに四人共椎葉さんをいじめていたし」

「椎葉さんはその被害者で」

「けれど今は被害者は放っておかれてるよね」

皆岩清水の言葉に乗せられて四人への糾弾と攻撃に忙しい。神無のことはもう殆ど誰も忘れてしまっているのである。そうになっていた。

「もうね」

「そういえば誰も椎葉さんには声をかけないわ」

「いじめについてはね」

「そうなってるわね」

「ふと思っただ」

また話す葉月だった。

「それでなんだけれど」

「私椎葉さんとずっと一緒にいるけれど」

「このことに何か言ってる?」

「いいえ」

首を横に振ったの返事だった。弥生も何時の間にか俯いている。

「このことは何も」

「そうなんだ」

「あまり覚えていたくないらしいから」

「自分がいじめられていたからだね」

「多分」

「それわかるよ」

葉月は何故神無がそうしているのかは何となくだがわかった。それは人間の感情というものについて考えそこからであった。

第十話 襲撃の後でその五

「やっぱり。辛い過去は自分からはね」

「椎葉さんは言えない人なのね」

「そうだと思う。ましてやつい最近のことなら余計にね」

「そういうことなのね」

「だから」

葉月の言葉は続く。

「言えないんだと思うよ」

「そつとしておくべきじゃないかしら」

「それも考えの一つだね。けれど」

「椎葉さんは今どう思っているか」

「それは一つの問題だと思う」

葉月は真剣な面持ちで話した。

「それはどうかな」

「そうね。それはそうよね」

「うん。とにかくもうあの四人は」

「限界、よね」

「あれ以上やったら壊れるよ」

四人をだ。今は気遣っている葉月だった。

「いや、一人だったらもうとっくに」

「壊れていたわよね」

「絶交したけれど。それでも四人が壊れてもいい？」

「そんな筈ないわ」

弥生は俯いた目で答えた。

「だって。特に如月とは幼稚園の頃からずっと一緒だったのよ」

「親友だったよね」

「実は。今でも持ってるの」

「何を？」

「あの娘と一緒に撮った写真も。プリクラも」

そうしたものを持たないのだ。

「それに思い出のものもね。全部持ってるのよ」

「そうだったんだ」

「捨てようと思ったことなんてないわ。一度も」

「それじゃあ」

「けれどももう少し考えさせて」

それでもだった。今すぐは無理なのだった。

「もう少しだけね」

「わかったよ。それじゃあ」

「あの時は本気で怒って絶交って言ったしどうなっても知らないって思ったけれど」

「今みたいになるとは思わなかったよね」

「如月達は。今どうして欲しいのかしら」

「助けを求めているのは間違いないね」

葉月は言った。

「きつとね」

「そうよね、やっぱり」

「誰も助けてくれないってことはわかっているけれどね」

それでもだというのだ。四人は救いの手を待っているというのだ。

「僕ももう少し考えるよ」

「わかったわ」

こんなことを話す二人だった。二人は如月達のことを考え再び気にかけてきていた。四人はその間もさらに攻撃を受け続けていた。

雨の日の夜だ。如月は一人で家に帰っていた。この日も朝から晩まで攻撃と糾弾を受けてた。その心はもう完全に死んでいた。

虚ろな目と沈んだ顔で傘をさして俯いてとぼとぼと歩く。雨の公園の中を歩いていく。周りには誰もいない。

しかしそこにだ。誰かが来た。

「遂に見つけたぞ」

後ろからだった。剣呑な声がした。

「そこにいたのか。それならだ」

こう言っただった。いきなり後ろから殴り掛かってきた。殴られたその瞬間に鈍い音がした。

そこから前のめりに倒れる。水溜りになっていて公園のアスファルトのところ倒れる。鞆もそこに落ちる。傘もだ。

その彼女の背中を踏みつけ頭を後ろから殴る。殴っているものは鈍器か何かだった。独特の鈍い痛みがしてそこから何か流れた。

横腹を蹴り手も足もその鈍器か何かで殴り回す。そうしてだった。

「妹の仇だ」

こう言い残してだった。何処かに消えた。散々殴られ蹴られた如月はだ。血まみれになってその場に倒れてしまったのだった。

第十話 襲撃の後でその六

雨に自分の血が混じりそれが溜まりとなるその中でだ。彼女は思った。

(これで死ぬのかな、私……)

そう思ったがそれでもだった。もうそれに恐怖やそうだったものは感じなかった。安らぎのようなものさえ感じていたのが今だった。だがそこに偶然人が来てだった。救急車が呼ばれた。だがその時には彼女はもう意識がなかった。深い闇の中に崩れ落ちてしまっていた。

「如月、誰かにね」

「やられたらしいよ」

次の日だ。文月と霜月は沈みきった顔で長月に話していた。

「相手が誰かわからないけれど」

「重傷なんだって」

「そうなのかよ」

長月も死んだ目で二人の話を聞いていた。

「死にそうなのか？あいつ」

「危ないらしいわ」

「それもかなり」

「そうか。じゃあうち等も」

こう考えずにはいられなかった。しかしだった。

「もうそうなりたい」

「そう思う、私も」

二人の目もまた死んでいた。

「けれど楽になっても」

「皆許さないから」

「ああ、そうだよな」

若し死んでも岩清水はまだ攻撃してくる。このことが嫌になる程

わかってる。つまりだ。彼女達は死ぬことすら安らぎではなくな
っていたのだ。

「それにしても如月」

「助かって欲しいけれど」

「だよな」

こう話す三人にだ。また岩清水が攻撃を仕掛ける。

「さて、一人やられたね」

「ああ、誰がやったか知らないけれどな」

「それでも義拳っていうのか？」

「そうよね、正しい行いよ」

「自業自得よ」

クラスの殆どの人間が如月のことを笑っていた。

「それで病院に入院してるって？」

「何処の病院なんだろうな」

「もう死ねばいいのに」

「そうそう」

「それでだけねど」

ここで攻撃の矛先を向けた岩清水だった。

「あと三人いるね」

「ああ、次は御前等だよ」

「何が起こるか楽しみにしているよ」

「その時何があるかな」

「楽しみよね」

「もう学校来るなよ」

こんな風に言われるのだった。それからだった。三人は本当に学
校に来なくなってしまった。だが家には連日連夜岩清水が主導する
デモ隊が来てである。そのうえで責められ続けるのだった。

如月が襲われた話は当然弥生と葉月の耳にも入った。二人は学校
の自動販売機の前にいてだ。そこでそのことを話していた。

「聞いてるよね」

「ええ」

弥生は葉月のその言葉に頷く。飲みものは飲んでおらず手にも取っていない。

「如月よね」

「危ないらしいよ」

まずはこう言う葉月だった。

「身体中、特に頭を何か鈍器で殴られていてね」

「それでなのね」

「出血も酷くて。もう少し発見が遅かったら危なかったらしいよ」

「そんなになの」

「それで意識がまだ戻らないらしいんだ」

葉月はこのことも弥生に話した。

「ひよっとしたらこのまま」

「如月が……」

「どうする？それで」

ここで葉月は弥生の顔を見た。弥生は俯いてた。考える顔になっていた。これまで彼女がしたことがないまでのだ。深く考える顔だった。

第十話 襲撃の後でその七

「彼女のことは」

「行ってみる」

弥生はその思案の末に言った。

「一度」

「何処に？」

「あの娘の家に」

「そこにだというのだ。」

「行つて来るわ」

「病院には？」

「それはまだ」

「それはと答えた。」

「まだ。考えさせて」

「本人には、なんだ」

「ええ、まだにしたいの」

「どうして、それは」

「まだ。そこまで許せないから」

「それが理由だった。」

「だから」

「そう。まだなんだ」

「けれどお家には行つて来るから」

「お家も大変なことになってるみたいだね」

「お家にもデモ隊が来たのね」

「今も来てるらしいよ」

岩清水は事実を話した。

「だからね」

「そうなの。今も」

「それでも行く？行つたらいるかも知れないけれど」

「それでも行くわ」

弥生は決めていた。

「あの娘にお家に」

「わかったよ。それじゃあ」

「室生は行かないの？」

弥生はここで彼の名前を出して問うた。

「あの娘のお家に」

「僕はまだ」

葉月は視線をやや下にやって述べた。

「まだ。行けないね」

「行けないのね」

「まだ許せないから」

それが彼が行けないと言った理由だった。

「だから」

「酷いことをしてきたのは事実だからね」

「だからね。あの映像は見たから」

「私も。それでも」

「行くなって決めただね」

「ええ。やっぱり行くわ」

また言う弥生だった。

「お家にね」

「気をつけてね」

デモ隊を意識しての言葉である。

「それじゃあ」

「わかってるわ。じゃあね」

「うん」

こう話してだった。弥生は如月の家に行くことにした。だがその前にだった。

神無と二人になった。場所はトイレだ。その鏡のところだ。向かい合って話すのだった。

「あの、いいかな」

「あのことよね」

「今のあの娘達どう思う？」

「こう彼女に問うのだった。」

「あの娘達。まだ許せない？」

「ええ」

神無は弥生の問いに沈んだ顔で頷いた。

「あの時死にたかった。今でも思い出すと」

「そうよね。けれど今は如月がね」

「死にそうなの」

「友達だった……いえ、友達だから」

弥生の心が変わった。いや、元に戻った。それが言葉に出たのだ。

「私はあの娘に死んで欲しくない。けれどね」

「けれど？」

「椎葉さんも友達だから」

「こつも言うのだった。」

第十話 襲撃の後でその八

「それで聞きたいの」

「そうなの」

「やっぱり許せない？」

神無のその目を見て問う。

「如月のことは」

「怖かった」

神無の返答はここからだった。

「あの時は」

「そうだったの」

「死にたかったわ。学校に来るのが嫌で仕方がなかったわ」

「やっぱり。それじゃあ」

「けれど今村さんがいてくれて」

弥生を見て彼女の姓を出す。

「それでラクロス部に部長がいてくれたから」

「どうだったの？」

「助かった。けれど今のあの娘達って」

「ええ、誰もいないわ」

弥生は俯いて答えた。

「家族の人も。皆引き裂かれて」

「私も家族はずっといてくれたわ」

「だから救われていたのに」

「特に兄さんが」

兄のことを自然に話に出す。

「いつも私によくしてくれるの」

「そう。お兄さんもいてくれたの」

「けれどあの娘達にはなのね」

「あの時私は絶交したわよね」

弥生はあの屋上の時を思い出していた。その時如月の頬を平手打ちにしてそのうえでだ。絶交を言い渡したのである。その時のことをだ。

「それから。御家族も」

「聞いているわ。岩清水君が」

「お家の人達も巻き込んで動いているから」

岩清水はそこまでしていた。そうして四人を追い詰めていっているのだ。

「だから。それで」

「御家族の人達にも迷惑がかかってるそうだけれど」

「ネットで住所や電話番号公開されてるから」

弥生はこのことも知っていた。

「それで家の前に人が集まっでいて」

「私よりずっと酷いことになってるのね」

「自業自得だけれど」

弥生はこうも思っていたのは事実だった。

「けれどね。それでも」

「酷過ぎるわよね」

「そう思うの？」

「私には今村さんに部長に家族がいてくれたから」

またこのことを話す神無だった。

「何とか救われたの」

「私も」

「正直最初はざまをみるって思ったわ」

神無は弥生に本音も話した。

「それでも。今は」

「思っていないのね」

「おかしいと思う」

俯いてこう述べた。

「今の岩清水君達は。ちょっと」

「そうなの。それじゃあ私」

「どうするの？」

「如月のところに行って来るつもりなの」
「そうするといふのである。」

「あの娘のお家に」

「そうするのね」

「だから。絶交したけれど」

「それでもだといふのだった。」

「友達だから」

「友達だから」

「如月。ずっと酷い目に遭っていて。そりゃ当然自業自得よ」

「このことは認める。自分でもだ。」

「けれどそれでもね」

「友達は。どうしても」

「そう。私あの娘に死んで欲しくない」

「弥生の偽らざる本音だった。」

第十話 襲撃の後でその九

「それにあの娘がこれ以上辛い、酷いことになるのも嫌。幼稚園の頃からずっと一緒に笑ったり泣いたりしてやってきたのよ」

それが二人の関係だった。まさに親友同士なのだ。

「助けてもらってきたし」

「そうだったのね」

「だから。私行つて来る」

また神無に話す。

「そういうことだから」

「わかったわ」

「いいのね」

「まだ夢に見るわ」

神無は顔を俯けさせ暗い顔で話す。

「何かを食べてる時も部屋にいてもおトイレに入っても」

「思い出すのね」

「けれどそれでも」

「まは話すのだった。」

「何度も言うけれど私には貴女達がいてくれたから」

弥生を見ての言葉だった。

「だから助かったから。誰もが助からないと」

「駄目なのね」

「子供の頃誰かに言われたの」

その時だというのだ。

「その時に。人は誰でも助からないといけないうって言われたから」

「じゃあ如月達は」

「許せない、私」

また本音を話した。

「それでも今村さんが行くのなら」

「いいのね」

「私に止める資格はないわ」

神無は言った。

「だから」

「有り難う」

弥生は神無に対してこくりと頷いた。

「じゃあ今から」

「ええ」

こうしてであった。弥生はその日の放課後如月の家に向かった。

彼女にとっては昔から。それこそ物心ついた時から通っている馴染みの場所である。しかし今は。

「え・・・・・・・・」

変わり果てたその家を見て啞然となる。庭もガレージも荒らされ壁は落書きがペンチやチョークで書き殴られている。実に酷い有様だった。

話には聞いていた。しかしだった。

「ここまでなんて・・・・・・・・」

彼女が知っている場所ではもうなくなっていた。しかしであった。それでも家のチャイムを鳴らした。だが返事はなかった。

「いないのかしら」

しかし扉は微かに開いていた。家の出入り口のその扉がだ。

「おばさんいるのかしら」

如月の母も彼女にとっては非常に馴染みの人である。彼女にとっては親戚も同じだ。その人がいるかと思って家の中に入るとだった。
「・・・・・・・・何これ」

そこはより無惨な有様だった。何もかもが荒れ果てており人が住んでいないかの如きであった。掃除はされておらず家具も何もかもが壊されてだ。まさに廃墟であった。

その奥で誰かを呪う言葉が聞こえてきた。二人いた。

「お姉ちゃんのせいだ」

「そうよ、あの娘のせいよ」

この声は弥生もよく知っている声だった。それは。

「おばさんに睦月君？」

その通りだった。彼等であった。

二人はだ。弥生が入って来たことに気付かずさらにそこで話していた。

「僕もう学校でいじめられてばかりだし」

「お母さんもうパートの勤め先も」

「そう、二人共」

弥生はあらためて如月の家族まで受けている災厄のことを考えさせられた。

「如月のことで。あの」

「えっ!？」

「誰なの!？」

「私です」

驚きの声をあげる二人に言った。

「私ですけど」

「弥生さん？」

「弥生ちゃんなの」

「はい」

こう二人に返す。

第十話 襲撃の後でその十

「そうです。あの」

「よく来てくれたわね」

如月の母が出迎えてくれた。かなり疲れ憔悴しきった顔であった。やつれそのうえで肌は荒れ髪も乱れている。目の下にはクマまである。

「いらっしやい」

「は、はい」

「それで何の用かしら」

彼女はそのやつれきった顔で如月に言ってきた。

「あの娘なら」

「あの、部屋に」

「部屋？」

「如月の部屋に行つていいですか？」

「こつ母に話すのだった。」

「用事がありました」

「用事？」

「そうなんです。貸してる本がありました」

「こついう風に理由をつけたのである。」

「それでなんですけれど」

「それでなの」

「はい、それでなんです」

「また話すのだった。」

「中に入つていいでしょうか」

「ええ、いいわよ」

如月の母は弥生の申し出をすぐに受けてくれた。

「それじゃあね」

「はい、それじゃあ」

「どうぞ」

疲れきって、無理に笑った感じの顔であった。

「本、持って行って」

「わかりました」

「それでだけねど」

ここでさらに言う如月の母だった。

「あの娘は今はいないわよ」

「はい……」

「それでもいいのね」

「はい、御願います」

こう話してからだった。弥生は如月の部屋に入った。かつてはそこでいつも仲良く遊んでいた。暫く来ていなかったがやっと来たのであった。

しかしだ。その中はだ。

「な、何これ……」

無惨なものだった。部屋の中の全てが壊され荒らされていた。机も椅子もベッドも。無惨に破壊され本もポスターもアルバムも引き裂かれている。

そうしてだ。その中でとりわけ。アルバムが酷いことになっていた。引き裂かれ方が尋常ではなかった。

笑顔で笑う子供の頃の如月の顔が二つになっていた。そこには弥生自身もいた。その笑顔が引き裂かれているのが目に入った。

そして他の場所ではだ。如月が命と同じだけ大切にしていた自分と皆と一緒に映っている数多くの写真も全て引き裂かれていた。そこには無惨な靴跡すらあった。

「如月……。こんなことまで……」

あらためて彼女が陥っている地獄を知ったのだった。そのあまりもの無惨さにその場で立ち尽くす。言葉さえ失うまでであった。

第十話

完

2
0
1
0
・
9
・
1
3

第十一話 迎えその一

第十一話 迎え

入院した如月は暫く意識を失っていた。しかしである。

入院して三日後に目を覚ました。目を覚ましたその場所は白い病室だった。何もかもが白くその中央に彼女がいるベッドが置かれている。

その中で目を覚ましてだ。最初に思ったことは。

「……………生きてるのね」

このことに気付いたのである。そしてだった。

起き上がろうとする。だが。

すると全身に鈍いが強い痛みが走った。特に後頭部にだ。

「痛っ……………」

この時に何が起こったのか思い出した。雨の夜の公園で襲撃を受けたその時のことをだ。思い出したのだ。

「あの時……………」

その痛みで自分のことにも思いを巡らせてだ。そして呟いた。

「死んでれば」

こう思わざるを得なかった。もう生きていることに疲れていた。

その彼女のところだ。誰かが来た。

白いナース服の看護士だった。若い女だ。黒髪を後ろで束ねアツプにしている。細くはつきりとした眉に優しい目をしており唇はやや大きい。背は高くすらりとしている。その彼女が如月が今いる部屋に来たのだ。

そしてだ。ベッドから何とか起き上がっている彼女を見て言った。

「あら、目を覚ましたのね」

「ここ、病院ですよね」

「ええ、そうよ」

その通りだとの返答だった。

「貴女入院しているのよ」

「そうなんですか」

「それにしてもよかったわね」

看護師はにこりと笑って如月にまた言った。

「目を覚まして」

「そうですか……」

如月はその看護師の言葉に俯いて力なく応えた。

「目を覚まして」

「生きていても」

「生きていればいいことがあるわよ」

看護師は如月にそれ以上言わせなかった。

「絶対にね」

「はあ」

「それだけねどね」

「それで……」

「お粥持って来るわね」

次に話したのはこれだった。

「お粥をね」

「食べ物ですか」

「だって。三日間ずっと意識を失っていたのよ」

看護師もまたこのことを話すのだった。

「点滴は打ってたけれどね」

「これですか」

言われてはじめて気付いた。今自分の右手に点滴がある。そして

そこから何かを送られてきている。それを見ながら看護師に話す。

「そうなんですか」

「そうよ。食べるのが一番よ」

「食べたら」

「勿論元気になるわ」

まずはこう言う看護師だった。

「それで起きれるようになるし」
「起きれるように」
「早く退院しましょう」
看護士の声だけが明るい。沈みきっている如月とは対象的に。
「そうしましょう」
「退院しても」
「そんなこと言わないでね。そうね」
「はい……」
「他に何かいるかしら」
今度はこんなことを言ってきたのである。
「それで」
「別に」
如月は俯いて返した。
「何もいりません」
「いらないのね」
「あの」
俯いて顔を向けないが。それでも問うた。
「私、一体どうなったんですか」
「入院してるんだけれど」
看護士が答えたのはこういうものだった。
「それがどうかしたの？」
「あの時公園で襲われて」
「凄い怪我だったのよ。もうね」
「そうなんですか」
「けれど幸い命に別状はなかったわ」
「それはだというのだ。」

第十一話 迎えその二

「心配されたけれどね」

「心配、ですか」

「ええ。先生や私がね」

そうしたというのである。

「まあ暫くは入院ね」

「そうですか」

「ゆつくりしなさいよ。何かあつたらすぐ呼んで」

「別に」

如月の返答は虚ろなものだった。

「それは」

「それは？」

「何もしてくれなくていいですから」

これが今の如月の返事だった。

「本当に」

「そんな訳にはいかないわよ。貴女怪我してるじゃない」

「それでもです」

また看護師に告げた。

「してくれなくていいですから」

「だからそういう訳にはいかないの。怪我は決して軽くはないのよ」

「それでも」

「はいはい、そんなこと言わない」

如月がどうしてもそう言うので話を打ち切ってきた。

「とにかくね。何かあつたら呼んで」

「何かあつたらですか」

「そう。すぐに来るから」

顔を見てはいなかった。だがその声が笑っていることはわかった。それは耳でだ。だがその耳にだ。急に痛みが走ったのであった。

「痛っ……」

「あちこち殴られたり蹴られたりしたから」

看護師はその痛みを感じた彼女に対して言ってきた。

「時々痛むわよ」

「耳もですか」

「後遺症はないわ。けれどね」

「そうなんですか」

「無理は禁物よ」

それはだというのだった。

「骨折も何箇所かしてるし。歩けたりはするけれど」

「命に別状はなくてもですね」

「三日も起きなかつたのよ」

「このことも話された。」

「軽くはないわよ」

「わかりました」

「だから何かあつたらすぐに呼んで」

また言ってきた看護師だった。

「ナースコールでね」

「ナースコール」

「枕元にあるから」

こう言われてその枕元を見るとだった。確かにあつた。

赤く小さなボタンだ。気付いてみると目立つ。白い部屋の中に――
つだけある赤。それが目立たない筈がなかった。だからである。

「それをね」

「付けばいいんですね」

「わかったわね。じゃあそうしてね」

「はい」

看護師の言葉にこくりと頷く。

そしてだ。看護師は今度はこう言ってきたのだった。

「それでね」

「それで？」

「私の名前言っておくわね」

気さくな感じでの返事だった。

「いいかしら」

「御名前ですか」

「ええ。城崎如月さんよね」

「はい」

名前はもう知られていた。如月はどうして知られているのかは入院した時に調べられたからだ。頭の中で考えてそれで納得した。

「そうです」

「そうよね。私はね」

「私は？」

「山崎っていうの」

まずは名字からだった。

「山崎水無っていうの」

「山崎さんですか」

「水無でいいわよ」

また声がにこりと笑っているのがわかった。

「それでね」

「御名前でいいんですか」

「ええ、いいわよ」

「わかりました」

その言葉に頷いた如月だった。

第十一話 迎えその三

「それじゃあ。水無さん」

「ええ。じゃあ私も名前で呼ばせてもらうわね」

こう話してだった。実際に読んできたのだった。

「如月さん」

「はい」

その場所に頷いてだった。そうしてであった。

水無は如月といつもいるようになった。彼女以外にもだ。

背が高く髪が半ば白くなっている医師もいた。白衣がまさに彼が医師であることを知らしめていた。その彼もまた如月に名乗ってきたのだった。

「谷崎です」

「谷崎さんですか」

「はい、谷崎師走です」

こう名乗るのだった。

「宜しく御願いたしますね」

「いえ、こちらこそ」

力のない顔で応える如月だった。

「それじゃあ」

「はい、それでは何かあつたら来ますので」

「いいんですか、それで」

「構いません。私か山崎さんどちらかがいつも病院にいますから師走は微笑んでこう話してきた。

「コールでいつも呼んで下さい」

「いつもですか」

「はい、そうです」

また話してきた。そしてだ。

二人は本当に何かあれば如月のところに来るようになった。本当

に病院にはいつもどちらかがいてくれた。

歩けはするのでトイレ等は一人で行く。如月が今いる場所もわかった。

病棟が幾つもある病院だがその中でもかなり外れにある病棟の中の病室だった。そこにはあまり病人はいなかった。彼女がいるのは二階の端だった。

人と会うこともない。とにかく寂しい場所だった。

そしてたまに行き交う看護師や医師と会うとだった。こうひそひそと言われた。

「あの娘なのね」

「そうよ、いじめのね」

「話には聞いてたけれどね」

「自業自得よね、ああなつたのも」

「そうよね」

そしてだ。こう言われるのだった。

「死ねばよかつたのにね」

「そうよね、本当にね」

「何でまだ生きてるのよ」

「さつさと死ねばいいのにね」

この言葉は如月の耳にも入った。そしてだった。

遠くからだ。あの声が聞こえてきたのだ。

「いじめを許すな！」

「何処にいる！」

「何処までも追いかけてやるぞ！」

「ここにまで……」

如月はその声を聞いてまた黙ってしまった。そしてだった。

一人で自分の病室に入ろうとする。しかしここで。

水無が来てだった。彼女に笑顔を向けてくれたのだ。

「おかえり」

「あの、今来たんですか」

「そうよ。ちよつとね」

「ちよつと?」

「果物食べる?」

「こつ笑顔で言つてきたのである。」

「林檎好きかしら」

「はい」

果物は何でも好きだ。昔は家族皆で食べた。弥生ともいつも食べていた。しかし今はだ。家族も弥生も離れもうそんなこともなくなつてしまつたのだ。

「だが今だ。水無がだ。その林檎をどうかと言つてきたのだ。」

「好きですけれど」

「それじゃあね。一緒に食べましょう」

水無はまた笑顔で言つてきた。

「サンつがるね」

「それなんですか」

「それとジュースもね」

「ジュースもですな」

「そう、アップルジュースよ」

「こちらも林檎だつた。」

第十一話 迎えその四

「それがあつたから」

「アップルジュースですか」

「果汁百パーセントだから身体にもいいし」

「それもだというのだ。」

「早く食べましょう」

「わかりました」

「林檎は栄養の塊だから」

よく言われていることである。林檎はビタミンは非常に豊富なのだ。それでドイツでは医者いらずとさえ呼ばれている程なのである。

「ビタミンを摂るとね」

「何かあるんですか」

「それだけカルシウムの吸収がよくなって怪我の回復も早くなるから」

「怪我の」

「そうよ。怪我がなおるのよ」

「そうだといいなのである。」

「だから早くね」

「怪我がなおっても」

「怪我がなおっても？」

「それでも。もう」

「こう言う如月だった。」

「私、もう……」

「食べましょう」

水無は如月の言葉を遮ってきた。

「林檎ね。アップルジュースも」

「けれど」

「美味しいわよ。だからね」

やはり先は言わせないのだった。そしてだ。

如月を病室の中に入れてそうしてだ。そのうえで二人で食べる。

水無は皮を剥かない。ベッドの中に入った如月の傍に座ってそのうえで林檎を切つてだ。そのうえで差し出すだけであった。その理由も話した。

「林檎の栄養とか美味しさはね」

「美味しさもですか」

「そうよ。皮にあるのよ」

だからだというのだ。

「正確に言えば皮のすぐ下にね」

「それは聞いたことがあります」

「皮もなのよ」

そして皮もであった。

「皮も美味しいのよ。それは知ってるわよね」

「はい」

水無のその言葉にこくりと頷く。

「それは」

「それを食べて欲しいからなの」

「有り難うございます」

「それとジュースだけれど」

ジュースの話もしてきた。

「味はどうかしら」

「美味しいです」

一杯飲んでからだ。そうしてからの言葉だった。

「甘くて。この甘さは」

「だから果汁百パーセントよ」

「だからこの味なんですか」

「味、いいでしょ」

「優しい味ですね」

実際に口の中はだ。果物のジュースを飲んだ後独特の甘ったるさ

を感じていた。しかしその甘さはだ。彼女にとってもとても優しいものだった。

「このジュース」

「そうでしょ。飲んでね」

「あの」

「あの？」

「どうしてなんですか？」

ジュースを飲む手を止めてだ。水無に問うた。

「どうして私にこんな」

「こんなって」

「病院にも来てるじゃないですか」

言葉を出す顔は虚ろだった。その声もだ。感情が消えてどうにもならなくなっていた。

「私が何をしてきたか」

「あれね」

「病室からは聞こえませんが」

それでもだった。

第十一話 迎えその五

「それでも。今も来てましたし」

「そうね」

「病院の中でも私を見てひそひそ言ってますし」

「ええ」

「皆知ってますし、私のこと」

「こつ話すのだった。」

「けれど。看護師さんは」

「その時の貴女だったらね」

「その時ですか」

「ええ、その時の貴女だったら私も許さなかったわ」

水無は微笑んだ。如月にこつ話したのだ。

「けれど今はね」

「今は」

「その時の貴女じゃないでしょ」

如月に話すのだった。

「今の貴女は」

「その時の」

「傷ついてるわよね」

それはその通りだった。今の彼女はだ。身体だけではなかった。

その心もであった。傷つき最早ぼろぼろになってしまっていたのである。

「そうよね」

「はい、それは」

「今は癒したらいいわ」

優しい微笑みと共の言葉だった。

「ゆっくりとね」

「ゆっくりとですか」

「そう、ゆっくりとね」
「こう言ってまた微笑むのだった。」
「今の貴女はね」
「どうしてそこまで」
如月は水無のその言葉を聞いて呟いた。
「言ってくれるんですか。私に」
「だから。今の貴女はね」
「今の私は」
「そうしないといけないと思うから」
「そうしないと」
「誰でも過ちは犯すわ」
それはだというのだ。
「けれど。そこからどうするかなのよ」
「そこからですか」
「そう、。貴女は報いを受けたわ」
このことも話す。その報いのこともだった。
「それもかなり酷くね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「今の貴女を見ればわかることだから」
「そうだとするのである。」
「身体だけでなく心も傷ついているわね」
「それは」
「話も聞いてるし」
彼女のその事情もだという。聞いているというのだ。
「貴女が何をしてきたか。何を受けてきたか」
「そういうこともですか」
「聞いたわ。貴女は確かに酷いことをしてきたわ」
それはだというのだ。
「けれどそれ以上にね」
「それ以上に」

「酷い目に遭って来たわね。その傷は癒されるべきなのよ」

「酷いことをしてきてもですか」

「さっきも言っただけねど人は過ちを犯すものよ」

そうしたものだというのだ。

「だからね」

「だから私は」

「そう。今はゆっくりとね」

こう話すのであった。

「それでね」

「わかりました」

こんな話をしてだった。水無は如月の傍にいつもいるのだった。そしてだ。医師の師走もだ。時間があれば彼女の傍にいてくれた。いた。

この日はだ。岩清水達がいらないのを見計らってた。如月を外に出した。そうしてそのうえで水無と共に彼女に病院の庭を歩くのだった。

病院の庭は晴れていて白い光に満ちている。緑の芝生は晩秋でも枯れようとしている。だが緑が残りまだ美しさが残っていた。

その中を歩きながらだ。如月に言うのだった。

「どうかな、うちの病院の庭は」

「ここですか」

「うん、ずっと病室にいてもよくないからね」

如月にこう声をかけるのだった。

第十一話 迎えその六

如月はこの日も俯いたままだ。顔をあげることはここでもなかった。

「だからね。こうしてね」

「外も」

「日に当たるのはいいことだよ」

こう言っただけであった。

「だからね」

「お外にですか」

「そう。さあ、次は何処に行きたいのかな」

「何処にですか」

「うん。好きな場所に行つていいよ」

俯いたまま歩く如月に対して優しい声をかける。

「何処にでもね」

「私は」

だが、だった。如月は言うのだった。

「特に」

「特に？」

「ないです」

そうだとするのである。

「別に。行きたい場所は」

「ないんだ」

「はい、ありません」

そうだとしたのであった。

「悪いですけど」

「いや、悪くはないよ」

それはいいといたのであった。

「それだったらね」

「それだったら？」

「このままお庭を歩こうか」

「そうですね」

水無も笑顔で師走の言葉に頷く。

「暫くここを歩くのもいいですよね」

「そうだよ。それじゃあね」

「はい、じゃあ」

「ここを歩こうか」

「わかりました」

二人でこう話してだった。それで如月と共に三人で歩く。しかしだった。

庭に出ている患者や病院の者達がだ。その如月を見てここでもひそひそと囁くのだった。

「あの娘がねえ」

「とんでもない娘よね」

「あんな酷いいじめをしてきて」

「最低よね」

わざと彼女に聞こえるようにして囁く。視線も後ろや横から感じる。

如月はそれを受けるだけだった。ただ受けるだけだった。しかしだった。

「ここだ。師走がその彼女に言った。

「他の場所に行こうか」

「他のですか」

「お庭の他にもいい場所はあるしね」

穏やかな声を如月に向けた。

「だからね」

「何処ですか、そこは」

「このこと同じで日が見える場所だよ」

そうした場所なのだという。

「そこに行こうか」

「そこは一体」

「すぐにわかるよ」

今はそこが何処か言おうとしなかった。

「それじゃあね」

「わかりました」

如月はその言葉に頷くだけだった。表情は沈んだままである。しかしそれでもだ。師走のその優しい言葉に頷くのがあった。そうしてだった。

師走と水無に連れられて共に来た場所はだ。病院の屋上だった。

そこは四方をフェンスに囲まれている。そして誰もいない。そこに入ってであった。師走は如月に対してこう話してきたのである。

「どうか、ここは」

「この屋上ですか」

「うん。いい場所だよ」

上を見上げてだ。笑顔で話してきた。

「ここはね」

「お日様があるからですか」

「光はいいものだよ」

「光、ですか」

「誰が見てもいいものだしね」

師走はその太陽を見上げて如月に話す。

「そう、誰でもね」

「誰でも……」

「見ないのかい？」

今度は如月に顔を向けて問うた。

第十一話 迎えその七

「このお日様を」

「私は」

見ることはできない、こう思っていた。

しかしであった。その如月に水無が言った。

「今も辛い？」

「はい……」

水無のその問いにくくりと頷く。

「とても」

「生きていたくないのに」

「思ってます」

実際にそうだというのだった。今の彼女はだ。

「もう、誰もいないし……」

弥生も家族も他の友達もだ。全て失ってしまった。

「それに何も」

命と同じだけ大切にしていた写真も自分の部屋にある思い出のものもだ。全て岩清水達に壊され引き裂かれてしまった。本当に何もなくなっていた。

「ですから」

「何もなくなっちゃって言うんだね」

師走は如月のその言葉にも応えた。

「そう」

「本当に。もう」

「いや、まだあるよ」

「何がですか。本当に何もなくなったのに」

「光があるよ」

それがだというのである。

「光がね」

「光……」

「そう、光がだよ」

また如月に話した。

「この光がね」

「光ですか」

如月はここで上を見上げた。ようやくだった。

その光は彼女を照らしていた。その蒼白になりやつれてしまった姿をだ。その彼女も照らしていたのだった。

「この光が」

「そうだよ。それでどうかな」

師走は穏やかな顔でまた如月に問うた。

「今は。昔みたいにできるかな」

「昔……」

「そう、こう言ったら何だけれど」

一呼吸置いてからであった。こう話した。

「君がかつてしてきたことは。できるかな」

「あれを……」

つまりいじめである。師走が言うのはこのことだった。

「あれをですか」

「そう。できるかな」

こう彼女に問うのであった。

「今は」

「いえ」

師走のその問いにだ。首を横に振った。力なく静かな動きである。しかしそれでもだった。

「とても。だから今みたいになって」

「もう絶対にしないね」

「はい……」

「できないね」

「できません」

力ない言葉だが確かに言った。

「いじめは。もう」

「君を糾弾している彼等は」

師走は岩清水達についても話した。

「同じなんだ」

「同じ……」

「いや、もっと酷いかもね」

そうだというのだ。

「あれはね。いじめはいじめでも」

「そうですね」

水無も師走のその言葉に応えた。

「あまりにも惨いものです」

「そう。そしてわかった筈だよ」

師走は水無と話してからだ。また如月に香を向けて述べた。

「いじめられるのが。どれだけ辛いかね」

「わかってました」

如月は今度はだ。かつての自分をまた思い出した。部活の時にいじめられていたことをだ。

第十一話 迎えその八

「それなのに私は……」

「過去は消えないよ」

師走はこうしたことも話した。

「けれどね」

「けれど……」

「未来は変えられる」

そうだとするのである。

「それに過去から人は変えられるんだ」

「私が、ですか」

「僕も思うよ。過去の君は最低だったよ」

そのいじめをしていた頃だ。その頃はというのだ。

「そして今も君はうちひしがれている」

「……」

見るも無惨なままだった。身体だけでなく心もだ。あまりにも惨たらしい有様になっていた。それが今の彼女であった。

「けれど未来の君は」

「これからの私は」

「違うんだ」

如月を見ての言葉だった。

「全くね」

「全くですか」

「そう、違うから」

「それじゃあこれからは」

「歩いていくんだ」

そうしろというのであった。

「いいね」

「歩けばいいんですか」

「そう、前にね」

これが師走が彼女に言うことだった。

「前に。歩いていくんだ」

「誰もいなくて何もなくても」

「光があるから」

「光……」

「そして今は確かに誰もいないかも知れない」

現実であった。今の如月の現実だ。

「そして何もなくても」

「誰も。何もなくても」

「これからは違うよ。誰かが来てくれて何かができるよ」

「そうなんですか」

「だから。歩くんだよ」

こう如月に言うのである。

「立ち止まるのも仕方ないけれど」

「立ち止まるのも」

「そう、時としてはね」

それもいいというのだ。

「いいんだよ」

「そうなんですか」

「歩くのが無理なら。けれど」

「けれど」

「光は常に見るんだ」

「光は」

「そう、光はね」

見るべきだとだ。また如月に話した。

「そこから目を離したらいけないよ」

「そうなんですか」

「そうだよ、いいね」

師走の声は優しい。如月を包み込むものだった。

それは彼だけではなくだ。水無もであった。

彼女はここだ。如月にこう話すのであった。

「それでね」

「それで」

「お日様を満足するまで見たらね」

「はい」

「そうしたら病室に帰りましょう」

「病室にですか」

「ケーキ。好きかしら」

水無はそれを話に出してきた。

「それはどうかしら」

「ケーキですか」

如月はケーキと聞いてだった。幼い頃の誕生日のことを思い出した。

母が自分で作ってくれたデコレーションケーキを食べた。弥生も一緒だ。二人で笑顔でそのケーキを食べた。そのことを思い出したのである。

そのうえでだ。こう水無に答えた。

「好きでした」

「今はどうかしら」

「今は」

過去を思い出して今を思い浮かべてだ。また俯く如月だった。

第十一話 迎えその九

「少し」

「けれど好きだったのね」

「はい」

「それならね」

「ここでまた話す水無だった。」

「また好きにならない？」

「ケーキをですか」

「そう、またね」

水無は優しい声で如月にたずねる。

「好きになっただらどうかしら」

「私は」

「まだ無理かしら」

「いえ」

水無のその優しい言葉に安心してだった。それでだった。

「何とか」

「やってみるのね」

「やってみます」

そうするというのがあった。

「じゃあ」

「ええ。じゃあ行きましょう」

「わかりました」

如月のその言葉に頷いてであった。そうしてだ。

病室に戻って水無のそのケーキを食べることになった。そのケーキはだ。チーズケーキだった。ブラウンの外側と白い内側のコントラストが映えている。

水無はそれを如月に見せたうえでだ。話すのであった。

「じゃあ城崎さんはね」

「はい」

「これを食べて」

一際大きな一切れを差し出してきてからの言葉だった。

「どうぞ」

「これをですか」

「ええ、どうぞ」

そうすればというのである。

「好きなだけ食べて」

「好きなだけですか」

「食べられるだけね」

水無はこつも言い換えてきた。

「食べて」

「いいんですか？」

水無のその優しさに思わず問い返した。

「あの、本当に」

「そうよ。いいから」

「そうですか」

「だから食べて」

「それじゃあ」

如月は彼女のその言葉を受けてであった。チーズケーキを食べる。するとだった。

久し振りの感覚だった。それを感じ取れた。

「美味しい……」

「美味しい？」

「はい、美味しいです」

こつ水無にも述べた。

「とてもです」

「そう、美味しいのね」

「何か。久し振りです」

チーズケーキのその穏やかな甘さを感じながら。こつ話した。

「美味しいのって」

「忘れていたのね」

「忘れていたんですか」

「そうよ、忘れていたのよ」

「そうだったというのだ。」

「貴女は。ずっとね」

「忘れていたんですか。美味しいという感覚を」

「辛かったわよね、ずっと」

「はい」

また糾弾され続けていたことを思い出す。その中ではだ。何を食べても味を感じなかったのだ。

家では家族の敵意と憎しみに満ちた言葉と表情に迎えられてだ。

味なぞ確かめることすらできなかった。そして学校でもそれは同じだった。

ゴミや残飯を糾弾と称して口の中に入れられ吐く日々だった。そうした中ではとてもだ。味わうことなぞできはしなかったのである。

それで美味しいという感覚をだ。久し振りに感じられたのだ。

「美味しいです……」

「味わって」

水無は包み込む声だった。

第十一話 迎えその十

「ゆっくりとね」

「わかりました」

「幾らでも食べていいから」

如月にこつも話すのだった。

「本当にね」

「幾らでもですか」

「だって。久し振りに美味しいと感じられたのよね」

「はい」

「それならね。その感覚を楽しんで」

だからだというのだ。

「それはとても素晴らしいことだから」

「美味しいと感ずることが」

「そう。今心が落ち着いてるわよね」

「とても」

その通りだった。今の彼女はだ。その心にはつきりとした安らぎも感じていた。その感覚も長い間感じたことのない、忘れていたものだった。

「その通りです」

「だからね。もつとね」

「わかりました。じゃあ」

「そうだよ。美味しいと感ずることは素晴らしいことなんだよ」

師走も言ってきた。彼もケーキを一切れ置いた皿とフォークを持つている。

「とてもね」

「先生はです」

「あれ、僕はどうなんだい？」

「甘いものは控えて下さい」

水無の言葉は彼には厳しかった。

「糖尿病になりますよ」

「おいおい、ここでそんなことを言うのかい」

「ただでさえ日本酒がお好きなのに」

「お酒は百薬の長だよ」

「それでも飲み過ぎたら駄目です」

実によく言われていることである。

「お酒だけでなく甘いものもですし」

「明治天皇だつてそうであられたじゃないか」

「カステラ、羊羹、アンパン、アイスクリームですね」

「僕はどれも好きだよ」

「その結果明治天皇はどうなられました？」

水無の言葉はここでも厳しい。

「一体。どうなられましたか」

「糖尿病に」

師走は少し憮然となって述べた。

「なられたね」

「そういうことです。皇室はそれから糖尿病には気をつけておられます」

皇室の方々の健康管理もまた宮内庁の仕事である。その厳しさには定評がある。少なくとも宮内庁は勤勉な官庁ではある。

「ですから先生も」

「やっぱり厳しいなあ、君は」

「これも先生の為です」

「やれやれ。妻や娘よりも厳しいよ」

こんな言葉を溢しながらも結局そのケーキを食べる師走であった。如月はそんな二人を見ながらケーキを堪能した。そんな中だった。ふとだ。このことに気付いたのだ。病室のベッドから上体を起こして水無と話をしている時に。

「あの、私やっぱり」

「どうしたの？」

「誰も来てくれませんよね」

「ここでも俯いて言った。」

「お見舞いに」

「そうね」

「お父さんもお母さんも」

その絆が壊れてしまっていることは彼女自身がよくわかっていた。もう家族ではないと、母に言われたことはまだ耳にそのまま残っている。

「それに睦月も」

「睦月？」

「弟です」

こう水無に答えた。

「私の」

「そう、弟さんいるのね」

「そうなんです。その家族も来ないし」

俯いたまま話すのだった。

「それに。友達もいなくなっただし」

「そうなのね」

「やっぱり。そうですね」

俯いているその表情はだ。話せば話すだけ暗くなっていった。

第十一話 迎えその十一

「私なんか。誰も」

「卑下したら駄目よ」

水無がここで止めてきた。

「自分をね」

「卑下はですか」

「そう、それは駄目よ」

こう如月に言うのである。

「何にもならないから」

「だからですか」

「そうよ。そのことは考えない方がいいわ」

こう如月に話すのだった。

「それよりもね」

「それよりも」

「テレビ観ましよう」

ここで病室のテレビのリモコンのスイッチを入れた。白い病室の中に一つだけある黒いテレビだ。その画面が着いて中に昼にいつも出演しているサンガラスのタレントが出て来た。

「あっ、タモリ」

「この番組も長いわよね」

「私が生まれる前から放送しているんですよね」

「ええ、そうね」

水無は如月のその歳を考えたらうえで答えた。

「勿論私よりもね」

「看護師さんよりもですか」

「二十三だけね、今」

自分の年齢も如月に話した。

「それよりもね」

「そんなに長く続いてるんですね」

「ごきげんようもそうだったかしら」

「それもではないかというのだ。」

「小堺さんのね」

「そういえばあの番組も長いですよね」

「そうよね。ほら、小堺さんって何かいないと寂しいじゃない」

「あっ、そうですね」

「タモリもお昼にいなかったら不安になるし」

「二人共そうしたタレントだというのだ。」

「そういう人よね」

「そうですね。そういえば」

「そういえば？」

「友達いたんですけれど」

「弥生のことだ。ここで彼女のことを思い出したのである。」

「その娘がいてくれなかったらいつも」

「不安になったのね」

「幼稚園の頃からずっと一緒でした」

「それだけ深い絆があった。それが永遠に続くと思った。だがそれは。」

本来なら如月が入院していれば彼女と家族が真つ先に来てくれる筈だった。実際に如月が小学校の頃盲腸で入院した時には家族と彼女は毎日来てくれた。そして弥生が怪我で入院した時は彼女が。そんな二人だったのだ。

「ずっと」

「そうだったの」

「それはもう」

絶交された。このことも思い出してしまった。

「二度と」

「はい、それまでね」

水無はここでもまた告げたのだった。

「テレビ観ましょう」

「そうですか」

「テレビは番組にもよるけれどいいものよ」

「いいものなんですか」

「観ていれば気が休まったり楽しくなったりするから」

「そうでしたね」

言われて思い出したのはこのこともだった。やはりテレビも長い間観ていなかった。観られるような心境ではなかった。それである。

「そういえば」

「忘れていたのね、そのことも」

「はい」

また暗い顔で頷く。

「そうでした」

「けれどこれで思い出したわね」

「ええ」

何とかである。それができるようになったのだ。

第十一話 迎えその十二

そうしてだ。二人はテレビを観ながら話す。

「タモリも息が長いですね」

「そうよね、本当にね」

「もう六十超えてるんじゃない」

「そうかもね。長い人だから」

そんな話をしながらだった。テレビを観たのだった。

テレビを観るのも久し振りだった。それを楽しむのもだ。楽しみ

そのうえで時間を過ごした。しかしまだ心は暗いままであり続けた、

そしてだ。その間ずっとだ。誰も来なかった。

そのことは如月も気にしていた。しかしである。

弥生はだ。学校で葉月に話した。

「あの娘の家に行ってきたわ」

「どうだった？」

「酷かったわ」

首を横に振つての言葉だった。

「とてもね」

「そんなになんだ」

「もう滅茶苦茶に荒らされて」

「このことも話す。」

「それに」

「それに？」

「写真、如月がずっと大事にしていた写真もアルバムも全部引き裂かれてて」

「それまさか」

「ええ、そうよ」

その通りだというのだった。

「彼等が」

「そうだったんだ」
「また、お家に行つて来るから」
弥生は思いがある顔で述べた。
「今日にでも」
「行くんだ」
「時間があれば行つてるから、最近」
「そうしているというのだ。最近はだ。」
「その写真とかアルバムとか」
「なおしてるんだ」
「絶交つて言つたわ。それでも」
「友達なんだね」
「如月は友達よ」
神無に話したことを葉月にも話した。
「私にとつて。かけがえのない娘なのよ」
「また。そう思えるようになったんだね」
「やっぱり、放っておけない」
目を顰めさせての言葉ではあつた。
「あの娘があのまま。酷いことになり続けるのは見ていられない」
「城崎さんの自業自得でも」
「最初はそう思つていたわ」
また葉月に話した。
「けれど今は」
「違うんだね」
「ええ。もうあのまま放つていられないから」
「だからだというのだった。」
「また行つて来るわ」
「わかつたよ。それじゃあね」
「反対しないのね」
「僕が反対しても行くよね」
その弥生にこう告げたのだった。

「そうするよね、やっぱり」

「ええ」

その通りだった。今の弥生はだ。そう考えていた。迷いもなかった。

「どうしても」

「だからだよ。反対はしないよ」

「有り難う」

「僕はまだ迷ってる」

葉月は俯き気味になり考える顔で述べた。

「まだね。どうするかね」

「そうなのね」

「けれど君はもう迷わないんだね」

「ええ、もうね」

その通りだと話した。

第十一話 迎えその十三

「何があつても」

「じゃあね」

葉月は微笑んだ。その顔で弥生に話した。

「行って来て」

「有り難う」

こうして弥生は如月の家に通うのだった。その間岩清水達は病院、そして他の三人の家の前に同志達を集めデモを繰り返していた。

三人の家も荒らされた。家族の絆も壊れ三人共自分の部屋でもう動けなくなっていた。

「も、もう許して……………」

「何でこんなことに……………」

「死にたい……………」

こう言つてベッドの傍で蹲るだけだった。碌に食べられなくなりだ。がたがたと震えてそのうえで自分の部屋で閉じ籠るだけになっていた。

如月の傷は次第に癒えてきた。その中でだ。

師走は水無に対してあることを話した。

「もうそろそろだね」

「そろそろですか」

「ええ、そろそろ退院の時だね」

「そうだとするのである。」

「だからどうかね、もう」

「それは難しいですね」

「難しいかい」

「はい、難しいです」

「そうだとする水無だった。」

「今退院してもあの娘はまた糾弾されます」

「責められるか」
「あれだけ傷ついていますし。それでこれ以上の目に遭ったら」
「危ないか」
「死んでもおかしくないです」
「精神的にとこのうのだ。」
「それか壊れるか」
「そうだね。今のままではね」
「ですからまだ」
退院には賛成できないというのだった。
「あの娘は病院に」
「じゃあ院長には僕から言っておこうか」
「そうして下さい。あの娘はまだ病院の中にいるべきです」
「院長としてはもう出したいんだ」
「もうですか」
「うん、もうね」
「そうだというのである。」
「理由はね」
「邪魔だからですね」
水無はすぐに察して言葉を返した。
「だからですか」
「糾弾の団体はいつも来るし」
「その岩清水達である。」
「そのせいでね」
「けれどあの娘はまだ」
「退院させられないね」
「はい」
「その通りだという水無だった。」
「もう少し。入院してもらわないと」
「僕もそう思うよ。じゃあね」
「院長先生にお話しますか？」

「するよ。じゃあね」

「御願います」

こうしてだった。二人は何とか如月を入院させた。それが彼女の為になると思っっているからだ。それで如月は病院に止まり続けた。しかし二人の他には誰も近付きはしない。陰口を聞くばかりだった。

そのことが辛くなった時もある。その時だった。

「あの」

「あの？」

ベッドの中に半身を起こしてそこから枕元に座っている水無に対して問うのだった。

「看護師さんも先生も」

「ええ」

「こうして私のお世話をしていて」

「それがどうかしたの？」

「何か言われませんか？」

こう彼女に問うたのだった。

「私、評判悪いですけど」

「そんなことはないわよ」

水無は微笑んで嘘を言った。彼女の為にだ。

「全然ね」

「本当ですか？」

「本当よ」

また嘘を言ってみせた。

第十一話 迎えその十四

「それはね」

「そうなんですか」

「だから何の心配もしなくていいの」

「何もですか」

「そう、何もね」

「そうだといいのである。」

「だから安心して。貴女は怪我をゆっくりとなおして」

「だったらいいんですけれど」

「それでね」

「それで？」

「退屈はしていないかしら」

「こう如月に問い返してきた。」

「どう？それはない？」

「いえ、別に」

「それはないというのだった。」

「それはありません」

「そう、けれどね」

「けれど？」

「はい、これ」

「こう言っただけであつた。あるものを差し出してきた。それは」

「本ですか」

「読む？純文学だけれど」

「純文学。誰のですか？」

「詩人よ。中原中也」

「彼だというのだ。見ればだ。確かにそれは中原の詩集だった。」

「それを出してきてだ。水無はまた言ってきた。」

「これどうかしら」

「汚れちまった悲しみに」

如月は中原の詩集を見ながら呟いた。

「それですよ」

「そうよ。汚れちまった悲しみについていうのはね」

「どんな意味なんですか、それって」

「悪いことをしてそれから来た悲しみなのよ」

それだというのである。

「それなのよ」

「そうなのですか」

「それでどうするの？読むの？」

水無は微笑んだままだった。そのうえで如月に問うのだった。

「この本」

「はい」

如月はその言葉にこくりと頷いた。

「それじゃあお借りしますね」

「あのね、城崎さん」

水無はまた彼女に言ってきた。

「今の貴女は。いえかつての貴女でも」

「かつての私でも、ですか」

「怪我をしていて死にそうな人を見捨てるのはね」

それはだと。話すのであった。

「医師や看護師がしてはいけないことなの」

「してはですか」

「人間としてもね」

「人としても」

「私はそう思うわ。だからね」

「私にここまで」

「悪いことは悪いことよ。それでもね」

こう話してだった。そうしてだった。

彼女の傍にい続けていた。如月は静かに、そして徐々に癒されて

いていた。彼女にとってはかけがえのない時間を過ごせるようになっていた。

そしてその日が来たのだった。

退院の日が来た。しかしである。

師走は水無と二人になってだ。曇った顔で話していた。

「まさかな」

「はい、退院の時までなんて」

「御家族には電話したかい？」

「しました」

その通りだと返す水無だった。

「ちゃんと。ですが」

「それでもか」

「知らないと言っばかりで。迎えには」

「全然なのか」

「来てくれる気配はありません」

そっだというのである。

第十一話 迎えその十五

「他の誰も」

「うづん、これは参ったね」

師走もこれには難しい顔になった。

「せめて。退院の時位は」

「私もそう思いますけれど」

「誰か来て欲しいね」

師走は難しい顔のままと言った。

「本当に」

「呼べればいいんですけれど」

「全くだよ」

こんな話を二人でしていた。そしてその時だった。

師走が座っている席にある電話がだ。鳴った。

「はい」

「あの」

その声は少女の声だった。そうしてであった。

如月の退院は真夜中であった。岩清水達の抗議行動に襲われることを警戒してだ。師走があえてその時間にさせたのである。

真つ暗な病院の中でだ。三人は進む。荷物は師走と水無が持っている。

非常灯が照らすその中を出入り口まで進む。その中だった。

師走はだ。如月に対して声をかけた。

「それで」

「はい」

「もうこんなことにならないようにね」

こう声をかけるのだった。

「こんなことは招かないように」

「はい………」

俯いた顔で頷く如月だった。

「絶対に」

「そうしてね。それで」

「それで」

「外に出ても。安心してね」

「こう話すのだった。」

「きっといいことがあるから」

「いいことですか」

「そう、あるよ」

如月に穏やかな声で話す。

「だから。絶望とかしないで」

「そうなんですか」

「そう、それに何時でもここに来ていいし」

如月にこつこつとも言った。そしてだ。

水無もだ。こつ如月に言ってきた。

「私達がいるから」

「先生や看護師さんが」

「うん、いるよ」

「だから何時でも来て」

如月を気遣つての言葉であるのは言つまでもない。それを今彼女に告げるのである。

「それでいいね」

「私達もいるから」

「有り難うございます」

暗い病院の廊下を歩きながら応える。

「それなら」

「うん、だからね」

「外に出ても元気だね」

「やっていきたいです」

やっていけるかどうかはわからない。しかしそれでもだった。

言った。外には岩清水達がいる。もう友人もいない。家族も守ってはくれない。そうした状況だが。それでも行くしかなくなっていたのだ。

それだった。如月はこう言ったのだ。

そのうえでだ。また二人に対して言う。荷物は二人が持っていてくれている。そのことに感謝しながらそのうえで言ったのである。

「それで」

「うん、それで」

「どうしたのかしら」

「私、何とか歩いていきますから」

だからだというのだった。

「どうなるかわかりませんけれど」

「うん、頑張つてね」

「本当にね。何があっても」

「はい、絶対に」

そんな話をしているうちに出口に来た。ガラスの自動扉である。

足を踏み入れると左右に開く。そうしてその中を潜る。

するとだった。そこにだ。

弥生がいた。彼女は学校の制服、冬服の上にコートとマフラーを着てそのうえでだ。病院を出たそこに一人で立っていたのである。

その彼女を見てだ。如月はまず声を失った。

そうして目を丸くさせてだ。言うのだった。

「どうして……」

「友達だから」

如月のその驚いた顔を見ながらの言葉だった。

第十一話 迎えその十六

「だから」

「待っていてくれたの」

「最後の日になったけれど」

「来てくれたの」

弥生のそのことにだ。如月は驚きを隠せなかった。それで驚いたままだ。弥生に対してさらに言うのだった。そうしてであった。

「あの、もう」

「だから。友達じゃない」

絶交のことはこの言葉に打ち消された。

「そんなのは」

「友達……」

「やっぱり、私如月の友達だから」

つい俯きそうになる。しかし目は如月に向けたままの言葉だった。

「来たの」

「……そうだったの」

「帰ろう」

弥生は優しい声で如月に言ってきた。

「これからね」

「ええ」

如月も弥生のその言葉にこくりと頷いた。

そしてだ。今一步前に出た。

弥生も前に出てだ。そうして。

如月を抱き締めた。そのすっかりやつれてしまった身体をだ。

これまでいつも抱き締めてきていた。だが久し振りに抱き締めたその身体はだ。信じられない程やつれてしまい今にも壊れてしまいそうになっていた。

その身体を感じてだ。如月に言った。

「辛かったわよね」

「……………」

如月はだ。言葉を出せなかった。

「これからは。またずっと一緒だから」

「ずっと……………」

「そう、ずっとよ」

こう如月に言うのである。

「前と同じ。ずっと一緒だから」

「いいの？私は」

「いいわ。もういいのよ」

また如月に言った。

「だから。もうね」

「そう、なの……………」

「帰ろう」

抱き締めながら言ってきた。

「今からね」

「うん……………」

「さあ、荷物は」

また自分から言う弥生だった。

「私が持ちます」

「いいのかな、それで」

「貴女が」

「はい、持ちます」

如月は師走と水無に対しての言葉だ。

「ですから」

「そう、だったら」

「御願いするわね」

「はい。じゃあ弥生」

荷物を受け取って背負って左手に持ってだ。そのうえでまた如月に顔を向けてだ。

利き腕を彼女に差し出してだ。言った。

「帰ろう」

「う、うん」

「ほら、帰ろう」

手を差し出したまま戸惑う如月に言う。

「いいわよね、一緒に」

「うん……」

弥生の言葉にこくりと頷き。そうして。

握り返して。涙を流して言った。

「有り難う……」

言葉を出し終わると二つの目から涙がぼろぼろと落ちてだ。止まらなかつた。

そしてそのまま泣いて。彼女はまた言った。

「来てくれて有り難う……」

「友達じゃない。だから来たのよ」

弥生もだ。涙を流しはじめて返した。

「私達。ずっと友達だって言ってたわよね」

「うん……」

「やっぱり。見捨てられない」

彼女の偽らず心の言葉だった。

「放っておけないから。如月、本当に辛かったわよね」

「けれどそれは」

自分の撒いた種だった、そう言おうとしてもだ。

「いいのよ」

「いいの？」

「そう、やってしまったことは戻らないわ」

「それはだというのだった。」

「けれどね」

「けれど……」

「大事なのはこれからだから。これからね」

「これから……」

「やっていきましよう、一人じゃ辛かったら」

「うん……」

「私もいるから。やっていこう」

「わかったわ。じゃあ」

「お家、帰ろう」

こうしてだった。如月は泣きながら弥生の手を握り返してそのうえであった。自分の家に帰った。暗い夜道は街の灯りで照らされ完全に暗くはなかった。

第十一話 完

第十二話 家族その一

第十二話 家族

如月は弥生に連れられて家に着いた。そうしてだ。

弥生がだ。彼女に声をかけてきた。

「ねえ」

「うん……」

「中に入ろう」

こう彼女に声をかけたのである。

「今からね」

「うん、けれど」

「御家族もなのね」

「お父さんも。お母さんも」

家でずつと言われ続けてきたことを思い出してだった。足が動かなくなった。それでどうしても前に進めなくなってしまったのだ。

言葉だけが出る。その言葉は。

「睦月も」

「皆なの」

「私に言うから。だから」

「大丈夫よ」

しかしだった。ここでまた言う弥生だった。

「それはね」

「大丈夫って……」

「私がいるから」

「弥生が」

「そう、いるから」

こう彼女に声をかけるのだった。

「安心して。中に入ろう」

「けれど弥生……」

「私がいるなら安心できるわよね」

「うん……」

弥生その言葉にこくりと頷いた。

「それじゃあ」

「中に入るう」

また言う弥生だった。

「いいわね、それで」

「ええ」

如月は遂に頷いた。そうしてだった。

また弥生が手を握ってきた。温もりが伝わる。

温もりを感じてからだ。如月は足を前に進めた。

そのうえで家の中に入る。そこは。

綺麗になっていた。掃除されてだ。あの荒れ果てた様子はもうなかった。それを見てだ。如月はまだ半ば虚ろではあるがそれでも言った。

「これも弥生が」

「気にしないで」

自分のこのことはあえて前に出さなかった。

「あがるう」

「う、うん」

気付けばまだ玄関だ。靴を脱いでそうしてだった。

自分の部屋に入る。そこも綺麗になっていた。

あの何もかもが荒らされ壊された無惨な有様もそこにはなかった。全てが綺麗になってだ。元通りとまではいかないまでも綺麗な姿を取り戻していた。

その部屋を見てだ。如月は弥生に言った。

「有り難う……」

「これだけじゃないから」

「これだけじゃないって」

「ほら、これ」

さつと部屋の中の本棚のところに行つてだ。あるものを出してき
た。

それはアルバムだった。卒業アルバムに他のアルバムもある。岩
清水達に破られてしまった筈のそうだったものがだ。そこにあつた。
そのアルバム達を見てだ。如月は確かなものを少し取り戻してだ。
こう弥生に言つた。

「まさかこれも」

「小学校とか中学校に行つて。それに写真のネガも」

「あつたの」

「全部私がつつてたじゃない」

弥生はこのことも話した。

「そうだったから。全部」

「弥生、こんなことまで」

「これもよ」

今度は一枚の写真を出してきた。二人が一緒に写っているその写
真だ。そこでは二人は笑顔になつてだ。写真の中にいたのである。

第十二話 家族その二

「ほら、これも」

「この写真って……」

「如月この写真全部大事にしてたわよね」

「うん……」

「これのネガも全部持ってたから」

「また焼いてくれたの」

「大切にしてくれてたのよね。絶交って言ったその時から」

弥生はここにだ。如月の心を見たのだ。彼女はいつもだ。弥生、

そして他の面々も皆だ。友達と思ひ大切に思っていたのである。

このことがわかったからだ。弥生は今こうしているのだった。

そしてだ。弥生はまた言ってきた。

「今日はもう御家族の人達は寝たのね」

「多分」

「じゃあ私達も寝ましょう」

こう如月に言った。

「お風呂入ってからね」

「けれど弥生は」

「泊まるから」

彼女の傍にいるのだというのだ。

「だからね」

「一緒に」

「いてくれるの」

「一人の方がいい？」

弥生は何かがどうしても信じられないような顔になっている如月の顔を見て尋ね返した。彼女に気を使つての問いなのだった。

「そっちの方が」

「ううん」

如月はその問いに首を横に振って返した。

「やっぱり。今は」

「私が一緒にいていいのね」

「御願いい、一緒にいて」

これが彼女の言葉だった。

「本当に。御願いだから」

「そうなの」

「もう一人は嫌だから」

こう弥生に返した。

「だから」

「わかったわ。それじゃあね」

「うん、じゃあ」

「まずはお風呂にね」

こうしてだった。二人で風呂場に向かった。湯は入っていないかった。だが弥生は栓をして湯を入れてだ。そのうえで脱衣場のところに立っている如月のところに戻った。

そのうえでだ。彼女の服に手をかけた。

「あつ、それ位自分で」

「できる？」

「うん、大丈夫だから」

如月は申し訳ない顔で彼女に返した。

「これ位は」

「そうなの」

「自分で脱ぐから」

如月はまた言った。

「弥生はね。自分の服をね」

「わかったわ。じゃあ」

「ええ」

二人で服を脱ぐ。如月はピンクの、弥生は白の、それぞれの下着姿になる。弥生は如月のその下着から見える白い身体を見てだ。ま

と言った。

「本当に」

「本当に？」

「やつれたのね」

確かにだった。今の彼女の身体はやつれた。その肋骨まではつきりと見えていた。手足もまるで針金の様になってしまっている。

そのやつれた身体を見てだ。言ったのである。

「そこまで……………」

「……………」

「けれど。もうこれからはね」

「これからは」

「また。一緒だから」

こう如月に告げた。

「安心して」

「ええ……………」

下着もそれぞれ脱いで風呂場に入った。そこで二人で身体を洗いあいそして一緒に湯舟の中に入った。そこに入るとだ。如月はその心が急に癒されていくのを感じた。

第十二話 家族その三

その彼女にだ。弥生がまた声をかけてきた。

「ねえ」

「うん」

「子供の頃からよくこうしてお風呂に入ったわよね」

「そうよね」

「覚えてるわよね、このこと」

「忘れる筈がないわ」

如月はまた彼女に答えた。

「だって」

「そうよね。ずっとこうしてきたから」

「ええ。いつもこうして一緒にお風呂に入って」

「いたわよね。幼稚園の時から」

「それで今も」

その今もだった。こうしていることを実感していた。

「こうしてね」

「そうよ。温かいでしょ」

「ええ」

「お風呂も一人で入るよりね」

「二人で」

「そう、その方が温かいから」

だからだというのだった。

「こうしてね」

「そうね。それじゃあ」

「ええ、それじゃあ」

「お風呂からあがったら」

如月はそこからのことをもう考えていた。それで言ったのであった。

「今度は」

「寝ましよう」

「ええ」

「温かい場所から温かい場所にね」

弥生はその温かいという言葉を強調して言った。如月にその温かさを実感してもらおう為にだ。彼女にあえて言ったのである。その心に届くように。

「行こうね」

「うん……」

如月は弥生のその言葉にこくりと頷いた。そうしてだった。

二人で風呂を出て身体を拭き合って服を着て。それからベッドに入る。

二人横に並んで顔を見合わせてベッドの中にいてだ。如月は目の前に、すぐ傍にいる弥生の顔を見ながらそのうえで彼女に問うた。

「ねえ」

「何？」

「退院する日、わかってたの」

「聞いたの」

そうだったというのだった。

「病院の人にね」

「そうしてくれたの」

「だから待ってたのよ」

「ずっと」

「少しね」

この辺りは誤魔化した弥生だった。如月にもこのことはわかった。

「少しだけね」

「そうなの」

如月はあえてそういうことにした。

「有り難う」

「だから御礼はいいのよ」

弥生はその如月に微笑んで返した。

「それはね」

「うん、じゃあ」

「寝よう」

その微笑みをそのままにして如月に言った。

「ゆっくりとね」

「そうね。それじゃあ」

「こうするのも久し振りだけれど」

「一緒に寝るのも。幼稚園の時からだったわよね」

「そうよね。私達本当の姉妹みたいだね」

「けれど姉妹じゃなくて」

如月が言うようになった。弥生が返してきた。

「友達でね」

「うん、友達よね私達」

心で確かめると。余計に嬉しく感じたのだった。

「本当に」

「もう何があっても傍にいるから」

「こう言っていてであつた。」

如月にだ。こつも尋ねてきた。

第十二話 家族その四

「それでだけれど」

「何？」

「わかったわよね。これで」

「今度の言葉はこうしたものだった。」

「いじめが」

「……ええ」

「如月は弥生のその言葉にこくりと頷いた。そしてだった。」

「こう彼女に返した。」

「本当に」

「前にいじめられていたって言っていたの。覚えてる？」

「一学期の時だったわね」

「その時。辛かったわよね」

「このことを弥生に尋ね返した。」

「そうよね」

「ええ、それは」

「その時のことを思い出しながらの返答である。」

「とても」

「それでも。如月は」

「自分が。それを」

「いじめらるのがどんなに辛いかわかってたのに」

「けれどしてしまっ」

「あの時私は思ったの」

「その如月の目を見ながらの言葉だった。今の彼女の目にはもう強い光はない。醜いものも反発するものもだ。そこにはなかった。」

「そしてだ。弥生は言った。」

「責められてる時。自業自得だって」

「いじめは悪いことだから」

「だからね。最初はそう思っていたわ」

「やっぱり。そうなのね」

「ただ」

「ただ？」

「今は違うわ」

「そうだというのである。」

「今はね」

「そうなの」

「ええ、違うわ」

「こつ話してであった。」

「それはね。あまりにも酷かったから」

「それでなの」

「あれも。いじめだから」

「岩清水のその糾弾がだというのである。」

「それもかなり酷い」

「いじめ……」

「いじめという言葉じゃ済まないかも知れない」

「そこまでだというのだった。」

「それどころか。さらに酷いものだったから」

「……」

「最初は絶交したままのつもりだったけれど如月を見捨てられなかったの」

「そうだったと。彼女に話した。」

「それでだったの」

「そうだったの」

「けれど。わかったわよね」

「また如月に尋ねた。」

「もうこれで」

「ええ」

「弥生のその言葉にだ。こくりと頷いた。」

「わかった……」

「誰よりもわかったわよね」

もう一度尋ねる弥生だった。念押しの様いだ。

「そうよね」

「うん……」

また涙を流してだ。そのうえで頷いた。

「いじめられるのがどんなに辛いかわかってたのに私……」

「それがわかったのは私もね」

「弥生も？」

「わかったわ。だって」

如月のそのやつれた顔を見る。そして手もだ。

彼女が知っている如月の手ではなかった。何処までも痩せたものだった。

その手を見てだ。彼女はまた言った。

「こんなになつて。死にたいと思ったわよね」

「ええ」

弥生の今の言葉にも力なく頷いた。

第十二話 家族その五

「本当に。けれどそれもできなくて」

「しなくてよかったわ」

「そうなのね」

「だから今こうしていられるから」

「それでだというのだった。」

「だからね」

「弥生……」

「生きてね、如月」

「生きていいの」

「誰にだって生きる権利はあるから」

「切実な言葉だった。これまで以上に。」

「それに」

「それに」

「光を見ることもね」

「光？」

「希望っていつのかしら」

「少し考えてから述べて出した言葉だった。」

「それはね」

「希望なの」

「ほら、パンドラの箱ってあるじゃない」

「今度はギリシア神話だった。」

「それ、知ってるわよね」

「一応は」

「この世には色々な災厄があるけれど」

「それが入れられていたのがパンドラの箱だ。その女性パンドラは好奇心故にその箱を開けてしまった。この世に様々な災厄を入れてしまった。」

しかしである。それでもなのだった。

その箱には一つだけ残っていた。それこそがだ。

「希望があるじゃない」

「希望が……」

「如月は許されないことをしてしまったけれど」

その許されないことが何かもだ。もう言うまでもなかった。

「それでもね」

「希望は」

「あるから」

「こつ話すのだった。」

「だから。生きて」

「生きる」

「そう、どんなに辛くても苦しくても生きて」

切実な言葉だった。

「御願いな」

「うん、わかったわ」

「そうしてね」

「弥生、本当に有り難う」

如月はベッドの中でも泣きはじめた。涙が流れてくる。

その涙を拭くことなく。弥生に礼を述べたのである。

そしてだ。二人向かい合って。

「寝よう」

「ええ」

こつ言い合って寝るのだった。そしてだ。

翌朝。目覚めるとだった。弥生は自分の制服に着替えながら話した。

「ねえ」

「ねえ？」

「学校はまだよね」

「うん、それは」

「今日は一日家にいるのね」

「そうなの」

「そう、わかったわ」

如月のその言葉を受けてからだった。

「それじゃあね」

「弥生は学校よね」

「ええ、それはね」

「じゃあ。行ってらっしゃい」

自分も起き上がった。パジャマ姿で弥生に告げた。

「楽しくね」

「ええ。それでね」

「それで？」

「学校が終わったら帰って来るから」

こう如月に言うのだった。ベッドの傍に立ってそこでシャツを着てスカートもはいてブレザーも着てだ。最後にネクタイも締めていた。

第十二話 家族その六

そうしながらだ。彼女に言うのであった。

「ねえ」

「ええ」

「それまで待っていてね」

「うん……」

「それから。また」

「また？」

「やることがあるから」

こう俯いて言う弥生だった。

「その時にね」

「やることって？」

「その時にわかるから」

今は言わないのだった。

「それじゃあね」

「うん、じゃあ」

「朝御飯だけねど」

「それは」

「後で持って来るから」

弥生がだというのだ。

「私が来てることは家族の人はね」

「知らないわよね」

「いえ、知ってるわ」

それはだというのだ。知ってるというのである。

「おばさんに携帯でメールしておいたから」

「そうだったの」

「返事はなかったけれど」

それでもだというのである。

「それでもね」

「知ってるのね」

「私だと何も言われないし」

これは弥生だからだ。如月の家族にとっても彼女はもう家族同然の相手なのだ。そこまで深い付き合いがあるということである。

「だからね」

「本当に有り難う」

「如月も。もう反省してるし」

「だから……」

「そう、だからね」

如月にこども話した。

「今は」

「だからなの」

「正直反省してるのがわかってほっとした」

着替え終えてから。彼女を見て話した。

「本当にね」

「ほっとしたの」

「そうよ。ほっとしたわ」

弥生はまた言った。

「だから。帰ってからまたね」

「うん、またね」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

二人は笑顔で挨拶を交えた。暫くして扉の前に朝御飯が置かれた。二枚のトーストとホットミルクである。如月はそれを部屋の中で食べた。

一緒に昼のものも置かれていた。サンドイッチやパンだった。それは昼に食べた。だが家族は誰も来なかった。彼女だけだった。

しかしだ。夕方弥生が帰って来るとだった。

「いいわね」

「それで何をやるの？」

「下に来て」

こう如月に言うのだった。

「下にね」

「下に」

「そう、下にね」

そこにだというのである。

「いいわね」

「わかったわ。それじゃあね」

こうしてだった。二人で下に降りる。するとそこにだ。

家族がいた。三人共。彼等は如何にも嫌そうな顔でリビングのソファーに並んで座ってた。そのうえで弥生に対して言うのであった。

「弥生ちゃん言葉だから聞いたけれど」

「それでも。何でだよ」

「全くだよ」

如月を見ようとししないでだ。そのうえで彼女のことを話す。

如月は家族が集まっているのを見て驚きの表情になった。しかし

それはすぐに消えて俯いてだ。そこから完全に沈黙してしまった。

第十二話 家族その七

その彼女の代わりにだ。弥生が言うのだった。

「ねえ如月はね」

「・・・・・・・・・・」

「私の隣に座って」

そうしてくれというのである。

「いいわね」

「・・・・・・・・・・うん」

「私が話すから」

自分がだというのである。

「だからね」

「わかったわ。それじゃあ」

「じゃあ座って」

如月のその背中に手をやっての言葉だった。

「私の横にね」

「うん・・・・・・・・・・」

頷きただけだった。家族を見ることもできなくなっていた。しかし
だった。

家族はその如月を見てだ。忌々しげに言うのだった。

「何で戻って来た」

「ずっと入院してればよかったのよ」

「大体だよ」

両親も睦月もその如月を見て彼女に言う。目にはこれ以上までに
ない嫌悪がある。

「御前のせいでお父さんも閑職に追い込まれたんだ」

「次のパート先も見つかからないし」

「学校で皆に言われてるんだよ、いじめっ子の弟って」

「あの、それでも」

その三人にだ。弥生は言うのだった。

「家族じゃないですか」

「家族!？」

「何処がよ」

「もう家族でも何でもないよ」

三人はその弥生にも言葉を返した。

「今こんな状況にしておいて」

「家にまだ抗議のデモ隊が来るのよ」

「学校にまで来るし。全部お姉ちゃんのせいじゃないか」

「確かに如月はいじめをしました」

弥生もこのことは認めた。

「ですが」

「ですが？」

「それでどうしたの、弥生ちゃん」

「見て下さい、今の如月」

その如月を見るように言ったのだった。

「この娘、こんなにやつれて。ずっと辛い思いをしてきたんです」

「そんなの自業自得じゃない」

母親の言葉だ。

「この娘がやってきたことが自分にも返って来ただけよ。当然のことよ」

「とよ」

「そうだよ。お姉ちゃんがそういう目に遭うのは当然のことだよ」

睦月もまた言った。

「どうせなら死んだらよかったんだ、あの時」

「そうだ、御前なんかもう娘じゃない」

父もであった。

「どうとでもなれ」

「それなら」

三人の言葉をここまで聞いてだ。弥生はそれでも話した。

「どうしてなんですか？」

「どうして？」

「どうしてって」

「こうして。私の話を聞いてくれるんですか？」

正面からの話を搦め手に変えてきた。

「それはどうしてなんですか？」

「それは」

「その」

「それにこの娘にも会って来てますし」

如月を見てだ。また話すのだった。

「それはどうしてなんですか？」

「そう言われても」

「弥生ちゃんが言うから」

「それだけではないですよね」

如月の両親の今の言葉に返した。

第十二話 家族その八

「やっぱり。如月のことを娘だっと思ってますよね」

「……………」

「家族だつて。だからですよね」

「だからどうしたのよ」

母の口が歪んだ。

「それで」

「あの、御願います」

弥生は身体を投げ出すようにして三人に話した。

「如月を許して下さい」

「許す」

「そうしろというの」

「はい、もう一度優しくしてあげて下さい」

如月の為にだ。心から訴える。その横にいる彼女の為にだ。

「もう二度とあんなことはしませんから」

「二度となんだね」

父がその言葉を聞いて応えた。

「あんなことを二度と」

「はい、ですから」

訴えていた。その彼女の為にだ。

「この娘を。もう一度家族に」

「……………二度としないのね」

母親が言った。

「そうなのね」

「はい、ですから本当に」

「弥生ちゃんはずつとこの家に来てくれてるわね」

母も弥生のことはよく知っている。そしてだった。

彼女を見ながらだ。言うのだった。

「私達にとっては家族と一緒によ」

「有り難うございます」

「弥生ちゃんのこととは本当の娘みたいに思ってるし」

「そこまで深い関係なのだ。そしてそれは信頼しているということでもある。」

それを自分でも感じながらだ。話すのだった。

「その弥生ちゃんの言うことなら」

「そうだな」

父も言った。

「弥生ちゃんが悪いことを言ったことはないしな」

「じゃあ」

「ええ、わかったわ」

「それで」

母も父も言った。

「もう一度」

「家族に」

「有り難うございます……………」

弥生は二人の言葉を聞いてだ。涙を流した。

そしてそのうえで横にいて俯いたままだった如月に顔を向けて。それから彼女を抱き締めてだ。その涙を流しながら言うのだった。

「よかったね、如月……………」

「弥生……………」

「もう一人じゃないからね。家族の人達もいてくれるし」

「弥生も……………」

「いるから。少しずつね」

「少しずつ……………」

「歩きはじめて」

そうしろというのだった。師走や水無が言ったことと同じだった。

「御願いな」

「うん……………」

如月も弥生を抱き締め返した。弱々しい力が入っていないと
さえ言えた。しかしそれでもだ。如月は彼女を抱き締めたのだ。
そしてだ。彼女も涙を流した。

「有り難う……」

「学校、行くわよね」

弥生は今度は学校の話をしてきた。

「また」

「行っていいのね」

「ええ」

弥生はこう答えた。

「勿論よ。私が決めることじゃないわ」

「そうなの」

「貴女が決めることよ」

「私が……」

「そう、如月が」

そっだというのだった。

第十二話 家族その九

「貴女が決めることよ」

「じゃあ……」

「学校、行きたい？」

「このことを実際に彼女に問うた。」

「学校に」

「うん……」

如月はその問いに答えて頷いたのだった。

「やっぱり。それでも」

「わかったわ」

如月の言葉にこくりと頷いた。

そのうえでだ。彼女に話した。

「あのね」

「学校に行けば余計に」

「ええ、皆もう」

ここから先はだ。言うまでもなかった。だから弥生も多くは言わなかった。

言葉と言葉の間にあるものを読んだ。如月はまた言った。

「けれど」

「けれどなのね」

「ええ。私学校に行きたい」

「こう言うのだった。」

「それで」

「それで？」

「……いえ、その前に」

あることに気付いたのだった。

「やっておかないといけないことがあるし」

「やってって？」

「長月達今どうしてるの？」

三人のことを尋ねたのだった。

「あの娘達は」

「.....」

弥生は今の問いにまずは首を横に振った。それからだった。

「学校に来てないわ」

「そうなの」

「家に閉じこもりきりで。多分」

「三人のお家にも来てるのよね」

「そうよ。それで外も中もね」

「私と同じことになってるのね」

「どうするの？あの娘達」

弥生は如月を見て尋ねた。

「何かするつもりなの？」

「三人のお家に行つていい？」

如月は俯き加減ながらも弥生にこう言った。

「三人の」

「あの娘達の」

「多分、いえ絶対に酷いことになってるから」

「だからなのね」

「行つていいかしら、それで」

「そうね」

弥生はここで暫く考えた。そうしてそれからだった。

こう如月に対して言った。

「私も一緒に行つていいかしら」

「来てくれるの？」

「あの娘達ともずっと一緒にいたじゃない」

そしてだ。如月の部屋に置いてある写真を見た。何枚もあった。

小学校の時のものもあれば中学校の時のものもある。そこには笑顔の彼女達がいた。

自分や如月だけでなくその三人もいる。まるで悩みがないかの様に晴れやかな顔で集まっている彼女達だ。その写真達の中にあつた。

その写真を見て。それで言うのだった。

「そうでしょ。友達よね」

「うん……」

「あの娘達も。友達だから」

「来てくれるの」

「あのままにしておけない」

この言葉が今の彼女の本音だった。

「絶対に」

「有り難う……」

「あの娘達も傷ついているし」

言うまでもなかった。これまでの糾弾と孤立によつてだ。果たして何処まで傷ついているのかわからないまでだ。そうになっていることがわかるからだ。

それでだ。弥生は言ったのだった。

第十二話 家族その十

「じゃあ」

「行こう、まずはね」

「それで」

行こうと言った如月にさらに問うた。

「それだけじゃないわよね」

「うん、まだしたいことがあるから」

「わかったわ。それじゃあね」

「それもついて来てくれるのね」

「今の如月を一人にするなんてできないから」

その心も身体もやつれ壊れそうになっている彼女を見てだった。

それはとてもできなかった。今の弥生にはだ。

「行くわ」

「そうしてくれるのね」

「ねえ」

そしてだった。弥生はだ。

如月のところに来てだ。こう言ったのだった。

「あの写真みたいだね」

「あの写真……」

その皆で笑っている写真である。それを指し示しての言葉だった。

「私達また、一緒に笑えるわよね」

「一緒に……」

「そう、一緒にね」

こう言うのだった。写真を指し示して。

「皆で」

「笑いたい……」

如月はその写真を見ながら言った。

「もう、暗くて寂しいのは」

「嫌よね」

「弥生、私馬鹿だった……」

その写真と弥生を見ながらだ。如月はまた涙を流した。顔が崩れてしまいそうになってもだ。それでも泣いていた。

二つの目からぼろぼろと溢れ出てくる。それを止めることができなくなっても。そのうえで泣いてだった。

「いじめられるのがどんなに辛いのがわかってたのに。むかつくっただけでいじめて。それで……」

「許されないことはしたわ」

弥生はその彼女の両肩にそっと手をやって言った。

「けれどね」

「けれど？」

「これからよ」

「こつ言つのだった。」

「これからだから」

「これからのね」

「そう、これからまたね」

言つ言葉は前と同じだった。しかしそれでも言つのだった。

「やっていけばいいから」

「うん……」

「じゃあ」

優しい声をかけてだった。

「お茶飲む？」

「お茶？」

「紅茶淹れるけれど」

それだというのである。

「一緒に飲む？レモンティー好きよね」

「うん」

「久し振りに一緒に飲もう」

その優しい声での言葉だった。

「二人でね」

「うん、じゃあ」

「クッキーもあるし」

如月が好きだとわかって。そのうえで薦めているのである。

「楽しくね」

「楽しく、ね」

「二人で飲みましょう、今からね」

こう言っただけであった。如月を誘って。

「いつも通りね」

「いつも通り？」

「そう、いつも通りね」

こう話すのだった。

「そうしましょう」

「いつも通りなのね」

如月は弥生のその言葉に少し不思議な顔になっていた。

そしてだ。その理由も話すのだった。

「あの、それは」

「友達でしょ、子供の頃から」

これが弥生の今の言葉だった。

「そうでしょ？だからね」

「それでなの」

「絶交したけれど。それでも」

「いつも通りに」

「飲みましょう、それでいいわよね」

「うん」

弥生の言葉に。やっと頷くことができた。

そしてだ。何とか笑おうとした。

しかしそれはまだできなかった。笑顔はまだ作れなかった。

そのことに悲しい思いを感じた。だがここでまた。

弥生がだ。優しい声で言ってくれた。

「そうしなくていいの」
「そうしなくて」
「そう、無理はしなくていいの」
「そうだといいのである。」
「それはね」
「そうなの、無理は」
「自然に笑えるようになるから」
「だからだということである。」
「無理はしなくていいの」
「だから」
「そうよ。無理はしないで」
「わかったわ。じゃあ」
「とにかく飲みましょ」
「弥生はまた促してきた。」
「じゃあいいわね」
「ええ」
こうして如月は弥生と共にその紅茶を飲むのだった。それははじめて飲んだ時の様に温かく、そして甘かった。心の味を感じた。

第十二話 完

2010・9・29

第十三話 贖罪その一

第十三話 贖罪

家を出た如月は。そのままある場所に向かっていた。

一緒にいる弥生がだ。彼女に尋ねた。

「ねえ」

「何？」

「今から行くのね」

「こつ彼女に尋ねるのだった。」

「そつするのね」

「うん」

弥生その言葉に小さい声で頷いた。

「そつなの。まずは」

「まずは？」

「長月のところに」

「こつ言うのだった。」

「そこにね」

「そつ、わかつたわ」

「来てくれるのね」

「前に言った通り」

「三人に会いに」

「多分、いえ絶対私と同じことになってるから」

「そのことはもうわかっていているというのだった。」

「それはね」

「そつね。壊れてなかったらいいけれど」

「このままだと絶対に壊れるし」

「間違いないわね。今例え無事でも」

「けれど」

ここぞだ。如月の顔が曇った。駅に向かう途中でその顔が曇って

いた。

そしてだ。また言うのだった。

「いないわよね」

「岩清水君達ね」

「あの人達がいたら」

その曇ってしまった顔での言葉だ。

「私、その時は」

「大丈夫よ」

「まさか弥生、その時も」

「先に行つて確かめて来るから」

そうするといふのだった。

「若しいたらその時は」

「その時は」

「行くの？それとも帰るの？」

「行きたい」

本音を言った。

「絶対に」

「そうよね。それだったらね」

「けれどいたらと思うだけで」

曇った顔が今度は青くなつた。身体も震えてきている。「これまでの糾弾の記憶がだ。彼女をしてそうさせてしまふのだった。

それでだ。如月は言うのだった。

「怖い………。もうあんなことになるのは」

「それでも行くのね」

「行かないといけないから」

それはわかっているというのだ。

「だから」

「だからなのね」

「ええ、だから」

「それでその時はどうするの？」

「裏手から行ければ」

そこからだというのだった。

「その時は」

「そうね、それがいいわね」

「何があっても行きたいし」

また本音を言う如月だった。

「それは」

「そうね。前の如月に戻ってきてるわね」

「前の私に？」

「そう、私がよく知ってる如月にね」

横にいる彼女の顔を見ての言葉だった。今二人は駅のホームにいた。屋根が陰を作っていてその下にいる。アスファルトにコンクリートと鉄筋の柱や壁、それと線路。殺風景に見えるが何故かそこには生気も感じられる。その中で二人は話していた。

「なってきたわ」

「そうなの」

「ええ、なってきたわ」

こつ話すのだった。

第十三話 贖罪その二

「前のね」

「前の私に」

「あの時の如月はとても醜かったけれど」

いじめをしていた時の彼女のことには他ならない。

「けれど今は」

「戻ってきてるの」

「そう、それがわかるわ」

「弥生……」

「少し待っててね」

もう動きだす弥生だった。

「今から見て来るから」

「うん、有り難う」

こうしてだった。弥生は先に家の方を見ていく。そうしてだった。戻って来てだ。それで言うのだった。

「大丈夫だったわ」

「そうなの」

「今はいないみたい」

こう如月に話す。

「それじゃあいいわね」

「うん、それじゃあ」

こう話してだった。それで行ってだった。

家の外をまず見た。見れば酷いものだった。

生ゴミが投げ込まれそしてスプレーで落書きがされている。あちこちが壊され車も完全に壊されている。如月の家と同じだった。

如月はその有様を見てだ。こう呟いた。

「同じね」

「如月の家とね」

「うん、同じ」
「こう話すのだった。」
「本当に」
「ここまでするなんて」
「弥生もここではじめて言った。」
「ないのよ」
「そう思うの？」
「これはもう犯罪よ」
「そうだったというのだ。」
「警察に集中的に抗議行動をして黙らせてるみたいだけれど」
「それでできてるの」
「私、ずっと自業自得だって思ってた」
「弥生もだ。最初はそう考えていたのだ。」
「けれど。それでも」
「それでもなの」
「こんなに酷いことは」
「駄目って思うの？」
「酷過ぎる。こんなことしたら」
「弥生……」
「如月はもう充分過ぎる程傷ついたから」
「いじめの報いは受けたというのだ。そう言うのだ。」
「だから」
「そうなの」
「もう。終わらないといけないから」
「弥生は今はどう考えていたのだった。そのことを話した。」
「だからね」
「それでなの」
「だから。行きましょう」
「ここまで訴え如月を促してきた。」
「まずは長月ね」

「ええ」

「それに文月と霜月も」

この二人のことも忘れていなかった。

「行こうね」

「うん……」

文月の家も霜月の家も同じだ。何処も荒れ果ててしまっていた。中も同じだった。暴徒達に暴れられてしまった後がはっきりと出ていた。

そしてだ。三人の様子はだ。

長月はベッドの上で涙を流しながらがたがたと震えていた。

文月は部屋の隅にうずくまり死んだ目になっていた。

霜月はベッドにもたれかかってぶつぶつと呟いている。三人共そんな有様だった。

「……」

「やっぱり」

二人は彼女達を見てそれぞれ話す。そうしてだった。

その三人に声をかける。五人で喫茶店に集まって話をするのだった。

マジックという店だった。ダークブラウンの木造の店で全体的にイギリスの趣を感じさせる。五人はその中に座ってだ。それで話すのだった。

第十三話 贖罪その三

弥生がだ。最初に言った。

「ねえ」

「うん……」

「大丈夫じゃないわよね」

こう三人に言うのだった。

「三人共。もうね」

「うん……」

「辛い……」

「死にたい……」

「如月と同じね」

ここで頷くのだった。

「本当に」

「もう嫌……」

「こんなこと……」

「耐えられない……」

「そうね。けれどね」

ここぞだ。その弥生が言うのだった。

「もう大丈夫だから」

「大丈夫なの？」

「本当に」

「もう。私達なんて」

「やつれて。辛かったのね」

弥生はその三人にまた話した。

「もう充分辛い思いしたわよね」

「あいつ等毎日家まで来て……」

「お父さんやお母さんの職場まで来るし」

「妹の学校にも」

このことも同じだった。如月のそれと。
「家族にも見捨てられたし」
「何もかもが潰れて……………」
「もう何も残ってないし……………」
「なおせるものはなおしましょう」
弥生は頂垂れるだけの三人にも言った。
「そしてね」
「そして？」
「それで？」
「また学校行きましょう」
こう三人に話すのだった。
「そうしましょう」
「けれど学校は」
「あいつがいるし」
「皆だって……………」
「大丈夫だから」
また言う弥生だった。
「他の誰もいなくても」
「誰もいなくても？」
「それでもなの？」
「私がいるから」
「こう言うのだった。」
「だからね。安心して」
「弥生、いいの？」
「それで」
「私達と一緒にいても」
「いいのよ」
穏やかな笑顔を浮かべてそれで話した。
「だって。友達じゃない」
「友達……………」

「けれど絶交だって」

「そう言ったのに」

「友達よ」

その言葉がまだ信じられない三人にまた話した。

「だから」

「来てくれたの」

「それで」

「言ったのはね」

弥生は如月の方を見た。自分の左隣にいる彼女をだ。そうしてそのうえでだ。三人に対して静かに話したのである。彼女達も見ながら。

「如月よ」

「如月が？」

「そうだったの」

「ええ、行こうって」

このことを話したのだった。

「それでなの」

「来てくれたの」

「そうだったの」

「友達だって」

弥生の言葉はトーンは低い。しかし確かな声で三人に話していた。

第十三話 贖罪その四

「思い出したし」

「有り難う……」

「そうしてくれて」

三人はその言葉だけで泣きそうになった。

「おかげで私達」

「今こうして」

「嬉しい……」

この言葉も出た。言ったのは霜月だ。

「まだ。友達って思ってくれていて」

「来てくれて」

「それで話も聞いてくれて」

「それでね」

弥生はその泣きそうになっている三人にまた言った。

「いい？」

「え、ええ」

「それでどうしたの？」

「これからだけれど」

話を変えてきた。自然にだ。

「三人共辛かったわよね」

「うん……」

「それは」

その話がされるとだった。三人の顔はまた俯いたのだった。

「もうこんな思いしたくない」

「する位なら本当に」

「生まれなかつたらよかつた」

「他の人をいじめたら」

弥生が話すのはこのことだった。

「どうなるか。わかったわよね」

「ええ……」

「死んでも許してもらえないなんてなって」

「だから……」

また泣きそうな顔になる三人だった。岩清水に見つかってからの
れまで受けてきた仕打ちの中でだ。そのことがわかったのである。

それでだ。今言うのだった。

「こんな思いもうしたくない」

「本当に」

「そうよね。だからね」

弥生は三人にまた言った。

「謝りに行こう」

「あの娘のところに」

「そこになのね」

「行けなかつたらいいけれど」

深く傷ついている三人のことはわかっていた。だから。無理強い
はしなかった。

「それでもね。どうかしら」

「ねえ」

今度は如月が三人に言ってきた。

「三人共悪いと思ってるわよね」

「うん……」

「それは」

「やっぱり」

目を伏せていた。だが言葉は出した。

「自分がここまでやられてわかった」

「こんなに痛いんだって」

「それで辛いんだって」

「だからね。もうこんなことは止めよう」

切実な言葉だった。それで三人に話す。

「絶対に。だから」

「あの娘のところに」

「それでなのね」

「謝りに」

「そうしよう」

如月はまた三人に話した。

「私達。悪いことしたから」

「無闇に謝罪を求める人も世の中にはいるけれど」

そうした輩に限って自分は謝罪しないものである。これまた世の

中の奇怪な摂理である。拳句には責任転嫁や自己弁護に走るのだ。

己のことには。

しかし弥生はそうした人間ではない。だからこそ説得力があった。

「私、それはしないから」

「そうなの」

「だから」

「それで」

「そう、どうかしら」

弥生は三人に言っていく。

「それで」

「少し待って」

文月が言ってきた。

「決めるのは」

「ええ、わかったわ」

弥生は文月のその言葉に頷いた。

第十三話 贖罪その五

「待つわ」

「まだ、決められない」

「うちも」

「私も」

長月と霜月もだった。

「けれど。答えは出すから」

「絶対に」

「うん、待ってるから」

弥生はこう答えて三人を安心させた。

「だからね」

「ええ」

「それじゃあ」

三人は弥生のその言葉にほっとした顔になった。そうしてだ。あらためてだ。彼女に言うのだった。

「連絡は携帯でいいよな」

「まだ私達のこと入れてる？」

「入れてなかったら今から」

「大丈夫よ」

ここでだ。弥生は自分のその携帯を前に出してきた。赤い色の携帯である。ストラップは一つだけあった。赤い蛙のものである。

「消していないから。如月のもね」

「置いてくれたたの」

「ずっと」

「消せなくて」

弥生もここで俯いた。

「それで」

「そうだったの」

「それですつと」
「残しててくれたの」
「絶交つて言ってもそれでも」
弥生は三人だけでなく如月に対しても話した。
「どうしても」
「有り難う」
如月がその弥生に礼を言った。
「そうしてくれて」
「御礼はいいわ。けれど」
「けれど？」
「やっぱり。友達だったのね」
そうだったというのだ。弥生は自分から言った。
「ずっと」
「そうだったのね。絶交は」
「なかったのよ。だからね」
「うん」
「これって絆なのね」
「絆？」
「そう、絆よね」
それだというのだ。
「私達の」
「絆……私達の絆」
「この絆切りたくない」
弥生は言った。
「絶対に。学校に行ったら酷いことになるだろうけれど」
「それでもなの？」
「その、私達を」
「友達だから」
これが弥生の返事だった。
「だから」

「そうなのね」

「うん。それで如月」

弥生は如月に声をかけた。

「それでだけれど」

「ええ。ねえ三人共」

如月は弥生の言葉を受けてそれからだった。三人に対して言った。

三人も彼女のその言葉を受けてだ。顔を向けたのだった。

「いいかしら」

「いいつて」

「何がなの？」

「これから謝りに行こう」

話すのはこのことだった。

第十三話 贖罪その六

「私達、悪いことしたのは事実だから」

「いじめ……」

「そのことよね」

「あのことで」

「あの全校集会でのことは逃げだったから」

糾弾から逃れる為のものだった。如月はこのことを振り返っていた。そしてその結果どうなってしまったのかも。そのことも振り返っていた。

そしてそのうえでだった。彼女は三人に言ったのである。

「だからね」

「それで」

「謝るのね」

「そうするのね」

「それでだけれど」

弥生は四人に対して声をかけた。

「今度はお家に行こう」

「お家って」

「あの娘のところの」

「そう、そこに行こう」

そこだというのだった。

「暫くしたらね」

「あの娘のお家に」

「そこになのね」

「それで謝りに行く」

「そうするのね」

四人は弥生の言葉を受けてだ。考える顔になった。しかしそれでもだった。すぐに彼女に対してこう答えたのだった。

「わかったわ」

「私達、そうしないといけないから」

「やってしまったことは確かだし」

「だから」

そうだとだ。如月も文月も霜月もだ。長月もだ。四人はそれぞれ言った。

そしてだった。あらためて弥生に話した。

「行くわ」

「絶対に」

「有り難う」

弥生は四人の返事を聞いて静かに頷いた。

「それじゃあね」

「うん、それで何時行くの？」

如月が彼女に尋ねた。

「それは何時にするの？」

「時間を見て」

はつきりした時間は今は言わなかった。

「その時にね。行こう」

「ええ、それじゃあ」

「その時なったら連絡するから」

「その時になの」

「そう、その時に」

連絡すると話すのである。

「一緒に行こう」

「弥生も行ってくれるの？」

「一緒になの」

「友達だから」

だからだというのだ。

「今の皆放っておけないから」

「だから来てくれるのね、一緒に」

「そうなの。だから」

「有り難う、本当に」

こう話してであった。そして数日後だった。

弥生が連絡してだ。四人は集まった。

場所は駅前だった。まずはそこだった。

雨が降っていた。しかしそれでもだ。五人はそこにいたのだ。ま

ずは弥生が四人に対して言った。

「それじゃあね」

「ええ、今からよね」

「行くのよね」

「いいわよね、それで」

四人に問うた。

「今から」

「ええ」

最初に頷いたのは如月だった。

第十三話 贖罪その七

「それじゃあ今から」

「許してもらえないだろうけれど」

「けれどそれでも」

「行こう」

そして三人もだった。

「酷いことしてきたから」

「だから」

「行かないといけないよね」

三人もこの結論に至っていた。

「やっぱり」

「それは」

「うん」

「私も行くから」

弥生はここでも四人に言った。

「だからね」

「ええ、有り難う」

「それじゃあ」

こうしてだった。四人は弥生と共に神無の家に向かった。彼女の家の場所は弥生が知っていた。そしてその案内を受けるとだった。

一軒家だった。白い欧風の家である。如月達はここに来たのだ。

その玄関も白い。そこに来てだった。弥生が彼女達に問うた。

「いいわよね」

「ええ」

「いいわ」

これが彼女達の返事だった。

「もうね」

「何時でも」

「それじゃあ呼ぶわね」

弥生は四人に顔を向けながら話した。

「今から」

「いよいよね」

「そうね」

四人は顔を見合わせて話し合った。

「それじゃあ」

「今から」

そうしてだった。弥生がチャイムを鳴らす。すると家の扉が開いてそこからだった。普段着の、パーカーとジーンズの神無が出て来た。

彼女はまず弥生に気付いた。そこでは笑顔になった。

だが四人を見るとだ。その笑顔が急に消えてだ。暗い顔になった。

そしてその暗くなった顔でだ。言うのだった。

「あの、これって」

「あのね」

その弥生が彼女に言う。

「この娘達だけね」

「何で来たの？」

声が震えていた。怯えが見られた。

「何でここに来たの？」

「話したいことがあるから」

それだけだというのだった。

「それでなの」

「話って？」

「うん、椎葉さんにね」

「私になの」

「そう、いいかしら」

こう神無に問う。

「それで」

「何もしないわよね」

「大丈夫よ」

弥生はこのことを保障した。

「いえ、もう絶対にしないから」

「絶対になのね」

「そうよ、絶対にね」

しないというのである。このことを保障したのだ。

「それはないから」

「そうなの」

「椎葉さんと同じ思いをしたから」

しないその理由も話した。

「だから」

「あのことね」

「そう、だからね」

「わかったわ」

神無は俯いてしまっていた。だがそれでも言った。

第十三話 贖罪その八

家から玄関まで階段になっている。神無は弥生達の上にいる。そしてそこからだった。弥生と話をしてその話を聞いているのである。そしてだ。ここでまた話をするのだった。

「それじゃあ」

「この娘達の話聞いてくれるわよね」

「ええ」

神無は弥生のその言葉にこくりと頷いた。

「それじゃあ」

「有り難う、じゃあ聞いてあげてね」

「うん」

こうして玄関のところまで来てだ。玄関を挟んでそのうえで四人と向かい合った。そしてそのうえで彼女達の言葉を聞くのだった。

「お話って」

「あの」

最初に言ったのは如月だった。

「椎葉さんがこの学校に来てからのことだけれど」

「その時からね」

「ずっと。酷いことしてた」

如月が言った。

「むかつくから。そういう理由で」

「うちも」

「私も」

長月と文月も言った。

「たったそれだけの理由で」

「酷いことしてた」

「けれど。自分がやられて」

霜月だった。四人共俯いてしまっている。これまでの自分達のこ

とを思い出してだ。それで俯いてしまっていたのだ。そうやってしまっていた。

「わかった」

「椎葉さんにしてきたこと」

如月はこのことを話した。

「わかったから。私達もいじめられてきたのに」

「それがどんなに辛いのがわかってたのに」

「下らない理由で酷いことしてた」

「ずっと。椎葉さんを傷つけてきた」

そしてだった。四人はゆくつくりと、だが深々と頭を下げた。そうしてだった。

「御免なさい……………」

「もう絶対にしない……………」

こう告げたのだった。謝罪の言葉だった。そして。

その場に崩れ落ちてしまった。そのまま泣き崩れる。四人共そうなっていた。

弥生はその四人のところに来て彼女達の背を抱いた。そうしてそのうえで神無に顔を向けて言った。

「許せないかも知れないけれど」

こう神無に言ったのである。

「けれど。この娘達もわかったから。だから」

「皆やつれたのね」

神無はその崩れ落ちる彼女達を見て言った。

「顔も髪の毛も荒れて」

「うん、それは」

弥生が答える。泣き崩れてしまっただけ何も言えなくなってしまった四人にかわって。

「辛かったから」

「城崎さん達も辛かったのね」

「そうなの。それは見てきたわよね」

「あの時はざまみろって思った」

四人が岩清水達に糾弾されていたその時のことだ。その時を彼女も見ていたのだ。

「けれど今は」

「違うの？」

「私が受けていたのと同じだったのね」

「そうね。それは」

「同じ……それに」

「それに？」

「言葉、聞いたから」

四人を見ながらの言葉だった。

「だから」

「だから？」

「いいよ」

こう言ったのだった。

「もうこれで」

「この娘達、許してくれるのね」

「……」

無言だった。だが、だ。確かに首を縦に振った。それが何よりの証拠だった。

「忘れることはできないけれど。いいわ」

「有り難う……」

弥生もだった。自然に涙を流していた。

「この娘達を許してくれて」

「うん……」

神無は今度は声を出して頷いてみせた。そうしてだった。

まずはだ。弥生に言った。

「私ね」

「ええ」

「本当にずっと辛かった」

「このことはだ。言わずにはいらなかった。」

「それでも。他の人が。私をいじめていた相手でも」

「如月達も？」

「ええ。辛い目に遭うのは駄目だと思うの」

「こう言うのだった。」

第十三話 贖罪その九

「それは同じだから」

「同じね」

「城崎さん達も辛い思いしてきたから」

「そうね。如月達は」

弥生は実際に今四人の身体に上から触れている。その触れている身体はだ。彼女が知っている四人のものよりずっと痩せてしまっていた。

その身体をわかっているからこそだ。弥生は今言うのだった。

「もう。壊れそうだから」

「そうよね。それは同じだから」

「この娘達。許してくれるのね」

「もう泣かなくていいから」

神無の言葉だった。

「もうね」

「ねえ」

ここであった、弥生は四人に声をかけた。

「もう立ち上がるう」

「えっ？」

如月がここで声をあげた。

「弥生？」

「そうよ、私よ」

その泣き崩れる彼女達に答えたのだ。

「もう泣かなくていいから」

「けれど……」

「もう。全部終わったから」

だからだというのだ。

「起きて。何時までも泣いていたら駄目よ」

「私達……」

「許してもらえたの？」

「本当に」

「ええ、そうよ」

その通りだと。また四人に言った弥生だった。

「だからね。起きて、もう」

「……許されるって」

「そんな……」

「酷いことしたのに」

「それでもなの？」

「確かにね」

弥生は起き上がろうとする彼等を見ながら話す。その目も声もこのうえなく優しいものになっている。その優しさの中での言葉だった。

「如月達のしたことは許されないことよ」

「……うん」

「絶対にね。けれどね」

「けれど？」

「それでもなの？」

「そうよ。例えば誰も許せなくても」

それでもだと。話すのだった。

「その人が許してくれたら」

「その人が」

「この場合は椎葉さんね」

神無その人がだというのだ。

「許してくれたらそれでいいのよ」

「それでなの」

「許してくれたら」

「それでいいのよ」

そうだというのであった。弥生はこう四人に話すのだった。

「それに誰かを許す許さないって」

「ええ」

「それは人が決めることよね」

「今度だ。人のことを話すのだった。」

「人がよね」

「人が？」

「人間がなの」

「人が誰も許さなくても。神様が許してくれるわ」

「弥生は今度は神のことを話したのだった。人ではなくだ。」

「本当に悔い改めたなら」

「私達本当にそうできてる？」

「悔い改めてるの？」

「今は」

「そうだったら。いいのだけれど」

「今の貴女達がその証拠よ」

「こう四人に温かい声で話すのだった。」

「その涙も。身体の震えも」

「そうね」

「神無も言った。見ればだ。」

「四人の身体は震えていた。嗚咽の結果だ。そうなっていたのだ。」

第十三話 贖罪その十

その震えを感じ取ってだ。弥生も神無も言ったのである。

「だから。もういいのよ」

「弥生……」

だから立ち上がった

また四人に告げた。この言葉を。

「いいわね、それで」

「う、うん……」

四人は弥生の言葉をようやく受けられた。そうしてだった。

涙をそのままに起き上がった。神無に向かい合ってまた言うのだった。

「本当に……」

「御免なさい……」

また頭を垂れる。だが神無はその四人に言った。

「もう。いいから」

「有り難う……」

「二度としないから……」

「よかったね、皆」

弥生が頭をあげた四人を横から抱き締めた。

「これで。この言葉が言えるのね」

「この言葉って？」

「何なの、それって」

「おかえり」

この言葉をだ。四人にかけたのだった。

「おかえり、皆」

「弥生……」

四人はその言葉を受けてまたその目が滲んできた。そうしてだった。

涙をそのままにしてだ。彼女を抱き締め返した。抱き締められる弥生もだ。何時の間にか泣いていた。

五人共涙をそのまま流れるままにして抱き締め合っていた。こうして彼女達は戻れたのだった。

そうして弥生が四人を連れ帰った。神無も家の中に戻った。するとだった。玄関で声をかけられたのだった。

「おい」

「兄さん？」

「さっきのは何だ？」

極月はこう妹に言ってきた。

「玄関でのあれは」

「あれって」

「あいつ等だったよな」

兄はきつい顔で妹に問う。

「そうだな、御前をいじめてた奴等は」

「ええ……」

師走は兄のその問いにくくりと頷いた。

「そうだけれど」

「何で話なんかしたんだ」

極月は忌々しげな顔で言った。

「あんな奴等と」

「それは」

「それでどうしたんだ」

彼は妹に対してさらに問い返した。

「それはどうしてなんだ」

「どうしてって」

「俺は絶対に許さないからな」

兄の言葉は強い。

「あの時だって」

「あの時って？」

「もう少し徹底してやっていけばな」

妹に対してだ。こんなことを話すのだった。

「それで終わったのにな」

「兄さん、まさか」

「何だ？」

「あの娘を入院させたのって」

如月が雨の日に襲われてそれで入院した時のことをだ。神無は今わかった。その犯人は今も見つかっていない。警察の対応もなおざりだ。

「そうだったのね」

「だったらどうだというんだ」

兄は開き直ったように妹に言い返す。

「それで。御前の為なんだぞ」

「私の為って」

「御前をいじめていた奴をやっつけたんだ」

こう言うのだった。

「その何処が悪いんだ」

「悪いに決まってるじゃない」

神無は兄にすぐに言い返した。

「あんなことして。幾ら私をいじめていた娘にも」

「何で悪いんだ、それが」

「誰かを傷つけるなんて。そんなことは」

「それが御前がやられていたことなんじゃないのか」

「けれどお兄ちゃんがそんなことして何になるのよ」

妹は兄のその険しくなった顔を見て言った。

「それで」

「じゃあ御前はいいのか」

「いいのかって？」

「いじめられていても。それでいいのか」

「確かにいじめられてるのは辛いわ」

背の高い兄を見上げて話す。

第十三話 贖罪その十一

「それは。とても辛かった」

「じゃあ兄として俺があいつ等を叩きのめしてやるんだ」

兄はここぞとばかりにこう主張する。そこに絶対の正義があると
いわんばかりにだ。少なくとも彼はそう思っているのであった。

「妹の仇なんだぞ」

「私が止めてつていつてもやるの？」

「うつ……」

だが神無の今の言葉にだ。極月は口ごもってしまった。

それでも何か言おうとするがだ。それはできなかつた。

「それは……」

「あの娘達も辛い思いをしてきたのよ」

「悪いことをした奴が責められるのは当然だ」

「それでも限度があるわ」

「限度だと？」

「そうよ、限度よ」

神無がここで話にだしたのはこのことだつた。

「あそこまでやることはないのよ。お兄ちゃんも」

「俺もか」

「バットで。殴つたのよね」

事件のことは聞いていた。だからこそ言つのだつた。

「それも何発も何発も」

「ああ、そうだ」

ここでだ。その子とを認めた兄だつた。

「そうしてやつた。あれで死ななかつたんだな」

「あの娘、頭から血を流したし」

神無はこのことから話した。

「それに身体のおちこち骨折したり骨にヒビが入ってたのよ。下手

したら死んでたのよ」

「ああ、殺すつもりでやったんだ」

剥き出しになった怒りと憎しみの顔でだ。彼は言った。

「本当にな」

「じゃああの娘達よりずっと酷いじゃない」

「御前の為にやったんだぞ」

「それでも同じよ。いえ、ずっと酷いわ」

「何処が悪いんだ、それの」

「わからないのね、お兄ちゃんには」

妹もだ。兄のその言葉と表情を聞いて見てきてだ。遂に言った。

「わからないならいいわ」

「いいって何がだ」

「今度あんなことしたら」

その時はといたのであった。

「お兄ちゃんを許さないから」

「許さないっていいのか」

「そうよ、許さないわ」

神無は純粹に強い顔で兄に告げた。

「わかったわね、これで」

「くっ……」

「お兄ちゃんを私が警察に突き出すから」

「御前の為なんだぞ、これは」

「それでもよ。絶対に許さない」

如月達に対したのとは違って変わってきつい口調でだ。兄に告げた。

「わかったわね」

「糞っ、じゃあいい」

兄は妹の剣幕の前に忌々しげに言い捨てた。

「御前の好きなようにしろ」

「何かあったら本当に許さないからね」

妹は念押しでまた言った。

「わかったわね」

「何であんな奴等を許したんだ」

「それが人として当然だからよ」

「当然だと!？」

「そうよ、当然よ」

そっだというのであった。

「だからなのよ」

「やられたらやり返すのが人間だ」

これが彼の主張だった。

「それがな」

「そっかも知れない。けれど」

まだ神無は言う。

「私、そんなことはしない」

「御前が間違ってるんだぞ」

「間違ってるでもいい。けれどしないわ」

こっ兄に返した。

「そんなことは」

「一体何を考えてるんだ」

「私が正しいと思ってることをしているだけよ」

それだけだというのだ。

「だから。私はもういいの」

「俺にもさせないのか」

「ええ」

強い顔で兄を見返しての言葉だった。

「絶対に」

「勝手にしろ」

極月は遂に言い捨てた。

「しかしまた何かあつたらな」

「あつたら?」

「その時は本当に容赦しないからな」

極月は目を怒らせて妹に言った。

「俺はあいつ等を。絶対に」

「それもさせない」

やはりこう言う妹だった。

「その時も。もうお兄ちゃんにはさせない」

「また何かあってもか」

「絶対はない。それに」

「それに。何だ」

「あの娘達も傷ついてきたのよ」

彼女がその目で見た。だからわかったことだった。

「あれから。お兄ちゃんに襲われただけじゃなくて」

「あんな奴等がそうなるのは当たり前だ」

「その考え変わらないのね」

「御前は俺の妹なんだぞ」

これに尽きた。だからこそだ。極月も真剣に言うのである。

「それでいじめられていて何もしないでいられるか」

「その気持ちだけでいいわよ」

「そうか、その考えは変わらないんだな」

「お兄ちゃんと同じよ」

「ああ、そうか」

ここでだ。兄も遂に踵を返した。そうしてだった。

妹に背中を向けて家の置くに入りながらだ。言うのだった。

「じゃあ勝手にしろ」

「そうさせてもらうわ」

こう言い合ってもだった。神無は決めた。この話はこれでいいのだと。そう決意してそのうえで自分の部屋に戻った。もう迷いはなかった。

第十二話

完

2010・10・6

第十四話 戻ってきたものその一

第十四話 戻ってきたもの

「そうなんだ」

「ええ」

弥生は自分の部屋から葉月に携帯で電話をかけていた。淡い赤の部屋でベッドもその色だ。本棚にあるのは参考書や文藝の本である。そうしたもののが置かれ今机に座ってそこから電話をしているのだ。

そうしてだ。葉月に対して言うのだった。

「あの娘、許してくれたわ」

「そう、そうしてくれたんだ」

「四人共心から謝ってくれたし」

弥生は如月達のことも話した。

「だからね。もうね」

「終わる話だね」

「もう終わらせないといけないわ」

こう葉月に言った。

「絶対に」

「そうだね。これ以上責めたりしたら」

「よくないわ。如月達も傷ついたし」

「正直ね」

ここで葉月は言った。電話の向こうで深刻な顔になっていた。

「岩清水君がいつも流す動画あるじゃない」

「あれね」

「あれを観る度に四人を許せないと思ったよ」

「私もよ」

それは弥生も同じだった。彼女もだったのだ。

「それはね」

「けれどそう思ってね」

「ええ」

「四人を責めるけれど」

「それは間違いよね」

「怒るのはいいさ」

葉月はそれはいいとした。

「けれどね。それでもね」

「あそこまでするのは」

「間違ってるよ。本人達が心から謝って」

まずはここからだった。

「それでいじめられていた相手が許してくれたらそれでいいじゃない」

「私もずっとそう考えられなかった」

葉月は自分の机に座りながら沈んだ顔になっていた。そのうえでの言葉だった。

「あの動画とか観る度に。何があっても当然の報いだと思った」

「若しかしてさ」

葉月は話をしながらふと気付いた。

「岩清水君ってさ」

「ええ」

「それをわかっていてやってるのかな」

こう弥生に話すのだった。

「そういうのがわかっていてね。ああして動画を流してるのかな」

「皆の怒りを掻き立ててね。それで」

「そうね」

「その可能性はあるんじゃないかな」

「否定できないわね」

弥生はこれまでのことを思い出しながら話した。

「それって」

「そうだよ。彼の行動は何か違うよ」

「いじめに怒ってるのじゃないわよね」

「むしろいじめを糾弾する為に相手を徹底的に責めてね」
葉月はこう分析しだしていた。
「それを自分の絶対の正義にしているんじゃないかな」
「じゃあ如月達は」
「いじめは確かに最低の行為だよ」
「このことには言を持たなかった。」
「けれどね」
「それでも。あれは」
「うん、何かおかしいよ」
葉月はまた言った。
「どうもね」
「あのままだと如月達は本当に死んじゃったし」
弥生の顔が暗いものになった。
「身体が。もうどうしようもないまでにやつれてて」
「そんなに酷かったの」
「今にも折れそうだったわ」
「そこまでだというのだ。」
「もうね。今にも」
「そうだったんだ」
「だから。もうね」
言葉を一旦切った。それからだった。

第十四話 戻ってきたものその二

「二度とあんなことは」

「ここで止めないと」

「いえ、元々あそこまでする必要なかったのよ」

「そうだとしたのであった。これが弥生の今の考えだった。」

「あんなに。酷いことは」

「いじめは最低だけれど彼がやっていることはね」

「何かおかしい、いえおかしいなんてものじゃないわ」

「そうだとしたのであった。」

「あそこまでするのは」

「うん、実は俺も」

「そう思うのね」

「思うようになったって言うべきかな」

「電話の向こうで考える顔になっていた。」

「そうだね」

「ええ、そうよね」

「それで城崎さん達は」

「何とか。元気になってきてるから」

「そうなんだ」

「ええ、何とかね」

「そうなっているというのだった。」

「安心して、それは」

「うん」

「もう少ししたら四人共学校に戻れるから」

「ああ、そういえばだけれどね」

「あつ、そうだったわね」

「弥生は葉月のその言葉であることを思い出した。それは。」

「あの娘達ね」

「停学になっていたから」

「そうだったわよね、思い出したわ」

「それがもうすぐ終わるから」

「こう弥生に話すのだった。」

「だからいいタイミングだね」

「そうよね、それは」

「ただ」

「ここまで話してだ。葉月の言葉が曇った。」

「学校に来たら」

「岩清水君達がいるから」

「それをどうするかだよ」

「私ね」

「弥生の言葉が意を決するものになった。そうしての言葉だった。」

「考えてるのだけれど」

「四人をだね」

「ええ、守ろうって思うの」

「そうするというのがあった。」

「だって。四人共」

「友達だからだよ」

「だからね」

「それが理由だった。」

「そうしようって。駄目かしら」

「俺が言うことじゃないよ」

「まずはこう言った彼だった。」

「ただ」

「ただ？」

「友達だよ」

「ええ」

「葉月のその言葉に頷いてだった。」

「だから。放っておけないから」

「いいと思うよ」

葉月の言葉は温かいものだった。

「それでね」

「いいのね」

「うん、だって友達だよね」

「ええ、大切な」

「大切な、だからね」

葉月は弥生のその言葉にこそ反応を見せたのだった。

「守るんだね」

「如月、他の娘達も」

「うん」

「ずっと写真やアルバムを持ってたのよ」

「そういったものをだっただ」

「そうなの。私や皆と写っている写真をね」

「そういったものをだと。葉月に話した。」

「持っていてくれたのよ」

「絶交って言われた時も？」

「そうよ。ずっとね」

「あの娘達にとっても大切なんだね」

「写真もアルバムも全部引き裂かれていたけれど」

引き裂いたのは言うまでもなく岩清水と彼の同志達だ。彼等がそ

うしてだ。如月達のその大切なものを壊していったのだ。

第十四話 戻ってきたものその三

「それは全部」

「元に戻してあげたんだ」

「そうなの。写真はネガがあつたし」

「うん」

「アルバムは学校に連絡して」

「そうしてだつたんだ」

「何とかなつたわ」

「こう話すのだった。」

「それもね」

「よかつたね、それは」

「本当にそう思うわ。それで」

「ここまで話してさらにであつた。」

「あの娘達を学校にね」

「その時さ」

「その時？」

「また連絡して」

「葉月はこう弥生に話した。」

「その時にね」

「連絡？」

「そう、電話して」

「こう言うのだった。」

「その時に」

「わかつたわ。じゃあその時ね」

「うん、頼んだよ」

「如月達はもう傷つけさせないから」

「弥生は電話をしながら決意を固めていた。」

「充分過ぎる程報いを受けたから」

「そうだね、本当にね」

「それに反省したから」

「反省してるんだね」

「ええ、だから椎葉さんも許してくれたのよ」

「それでだというのだ。」

「だからよ」

「四人共戻ってきたんだ」

「戻ったって?」

「うん、元にね」

葉月の言葉が今度は微かにだが微笑んできているのがわかった。

葉月にもだ。

「戻ってきてるんだね」

「そうね」

弥生は葉月のその言葉の意味がわかった。それで彼女も微笑みになった。

「元のあの娘達にね」

「許されないことをしたけれどそれでも」

「それでもね」

「戻って来たんだ」

「あの娘達は自分達ができることをやったから」

「後はなんだね」

「足りない、できない部分は私が」

「ここでも強い言葉になる弥生だった。」

「やらせてもらうわ」

「俺もね」

「えっ、今なんて」

「あっ、また連絡して」

葉月は今はここから先はあえて言わなかった。

「学校に行く時にね」

「わかったわ」

葉月の言葉に頷いてそのうえで携帯を切った。しかしまた別の相
手に電話をかけた。その相手は。

「ねえ」

「弥生？」

電話の向こうから如月の声が聞こえてきた。

「どうしたの？」

「もうそろそろね」

「こっその如月に言うのだった。」

「学校だけれど」

「ええ」

如月はいささか沈んだ声で弥生の言葉に答えた。

第十四話 戻ってきたものその四

「そうね」

「やっぱり怖い？」

「こう如月に問うた。」

「今は」

「うん……」

沈んだ声での返事だった。やはりそうになっていた。

「それは」

「あのね、大丈夫だから」

弥生はその沈んでいる如月に寄り添うような声をかけた。

「それはね」

「弥生がいてくれるから？」

「そうよ」

まさにそうだというのだった。

「力になれないかも知れないけれど」

「ううん、それは」

「違つて言ってくれるの？」

「弥生のおかげでここまで来れたから」

電話の向こうで如月が泣きそうになっているのがわかった。

「だから」

「それでなのね」

「そう。だから」

如月はこう話すのだった。

「それは」

「有り難う」

弥生は如月のその言葉を受けて微笑んだ。

「そう言ってくれて」

「弥生……」

「安心して、一人じゃないから」

「一人じゃ・・・」

「そう、一人じゃないから」

「こう言うのだった。」

「うっん、四人だけじゃないから」

「私達だけじゃない」

「私がいるから」

これが今の如月への言葉だった。

「だからね。今はね」

「落ち着いていいのね」

「そうよ。落ち着いて」

また告げた。

「それで安心して。それで学校に行つてね」

「学校に。行つていいのね」

「迎えに行くから」

「そこまでしてくれるの」

「嫌かしら」

このことはしっかりと尋ねた。やはり如月を気遣つてのことである。

「それは」

「うっん、有り難う」

これが如月の返事だった。

「そうしてくれて」

「じゃあそれでいいのね」

「御願ひ。実は私」

如月はさすがのような言葉も出してきた。今の彼女はとても一人では立ってられない。そのことがこの言葉からも出ていたのだ。

「弥生がいてくれるだけで」

「わかつたわ。それじゃあね」

「うん、御願ひ」

如月はまたこう言った。

「それで」

「そういうことだね。学校に行く時にね」

「私の家まで」

「楽しみにしてて」

声をわざと笑みにさせての言葉だった。

「その時ね」

「うん……」

「こんなこと言ったらキザっていかいい格好しいんだけど」

「だけれど？」

「守るから」

弥生は如月にこう告げた。

「如月達はね。私かね」

「守ってくれるの」

「うん、だからね」

「学校に行っているのね」

「そうよ、一緒に行こう」

今度は優しい声をかけた。

第十四話 戻ってきたものその五

「一緒にね」

「わかったわ。それじゃあ」

「そういうことだから」

「その時はね」

「そうよ。一緒に行こう」

如月にはこう告げたのだった。そのうえで他の三人にも声をかけた。彼女はもう後ろには引かなかった。ただ前に向かうだけであった。

そしてだ。クラスではだ。如月達のこと話題になっていた。勿論それを話題にさせているのはあの岩清水であった。

彼はだ。こうクラスの面々に言うのだった。

「戻って来るよ、もうすぐね」

「ちっ、よくまた学校に来る気になったな」

「そうよね、本当に」

「何処まで凶太い奴等なんだよ」

「あそこまでしてやったのに」

岩清水の言葉を聞いたクラスメイト達は忌々しげにこう言っている。

「まだ来るなんてな」

「じゃあ今度こそは」

「完全に潰すか？」

「そうする？」

「悪は許したらいけないよ」

岩清水はここでこう言っただ。また自分の携帯を取り出した。そうしてそれに映し出している映像を周りにいる彼等に見せてだ。そのうえで話すのだった。

「こういうことをする人間は絶対にね」

「ああ、そうだよな」
「何時見ても最低よね」
「むかむかくるな」
「全く」
「そう、だからね」
声は穏やかである。しかしその内容は。
「また来たらね」
「絶対にな」
「潰してやりましょうよ」
「四人共何があっても許してたまるか」
「これまで以上にやってやるよ」
「いじめは最低だよ」
岩清水はその正義を語ってみせた。
「人間として悪だからね」
「悪は潰せ」
「それも容赦なくね」
「何があっても許すものか」
「今度こそ地獄に送ってやるわよ」
こう言って怪気炎をあげていた。だがそれを見てだ。
弥生と葉月はだ。クラスの端で顔を顰めさせて話をするのだった。
「やっぱりね」
「そうよね」
「おかしいね」
「ええ、落ち着いて見たら」
こう話すのだった。
「何か宗教みたいになってるわよね」
「それもカルトだね」
葉月はここまで言った。
「これはね」
「カルト、そうよね」

弥生はここで岩清水を見た。彼が明らかに煽っている。そうしてそのうえでさらに言っていた。その彼を見ての言葉である。

「あれじゃね」

「このまま城崎さん達が登校したら」

「うん、大変なことになるわ」

「けれどやるんだね」

葉月は弥生を見て問うた。

「やっぱり」

「ええ」

弥生は彼のその言葉にこくりと頷いた。

「そのつもりだけれど」

「そうなんだ。そうするんだね」

「決めたわ」

顔を俯けさせているがそれでも言うのだった。

「私、如月達を絶対に」

「わかったよ。それじゃあ」

「それじゃあね。そういうことだね」

「頑張つてね。俺は」

「まだなのね」

「まだね。決断がつかないから」

顔に迷いを見せていた。

第十四話 戻ってきたものその六

「だから」

「わかったわ。仕方ないわよね」

「いいんだね、それで」

「私が自分で決めたことだから」

だからいいというのだった。弥生はそういう考えだった。

「それでね」

「それでだけれど」

葉月からの言葉だった。

「城崎さん達食べてる？」

「食べてるわ」

こう返す弥生だった。

「少しずつ量も増えてるし」

「そう、だったらいいけれどね」

「隊長も元に戻ってきてるわ」

このことは弥生から話した。

「だからそれも安心して」

「やっぱりね。食べないとね」

「ええ」

「生きられないから」

このことは言うまでもなかった。だがあえて話すのだった。

「けれど。食べるのも」

「如月達がしてきたことね」

「トイレでね。あれは酷過ぎたよ」

「覚えてるわ。けれどそれも」

「岩清水君達がね」

また岩清水を見る。その如月達がトイレで神無に無理矢理食べさせている場面を携帯に出してそのうえで周りに話をしていた。

「食べ物粗末にするな！」

「最低ね！」

「こんな奴どうとでもしてしまえ！」

「そうよそうよ！」

「同じだからね」

「いえ、もつと酷かったわ」

弥生は今度は彼等が如月達にゴミ等を無理矢理食べさせていた場面を思い出していた。その時は自業自得と思っていた。しかしだ。今はだ。その考えはなかった。正反対になっていた。

「あの時は」

「ああいうことは絶対に許したらいけないね」

「私、本当に何があっても」

意を決した顔での今の言葉だった。

「如月達守るから」

「応援するよ」

「有り難う」

こうクラスで話をしたのだった。そうしてだ。

如月達が登校する日が来た。彼女はまずは朝食を食べた。

家族と一緒にだ。だが会話は無い。しかしそれでも家族と一緒に食べていた。

ハムエッグとトースト、それに牛乳を食べ終えてだ。そうしてだ。つた。

「行つてきます」

「ええ」

母が彼女の言葉に応えた。そのうえで席を立ててそうしてだ。歯を磨き顔を洗つてだ。それから家を出る。するとそこに彼女がいた。

「おはよう」

「おはよう」

二人で挨拶を交えさせた。それからだった。

「じゃあ行こうね」

「うん」

弥生の言葉に頷く。それからだった。

二人で歩いてそうしてだった。弥生が言ってきた。

「今日からね」

「そうね、また学校にね」

「ねえ、如月」

彼女に顔を向けて。そのうえで言うのだった。周りはいつもの家々だ。だがそれはお互い目に入らずにだ。二人はお互いを見ながら話すのだった。

「何があってもね」

「学校にね」

「行こう。それで元の生活に戻ろう」

「元の生活に」

「そう、元の如月にね。戻ろう」

「戻りたい」

実際にこう言ったのだった。

「本当に。これで」

「わかったわ。じゃあね」

「ええ」

「私もできるだけのことをするから」

弥生の言葉はここでも変わらなかった。心も。

「だからね。元に戻ろう」

「戻りたい」

如月は俯きながら弥生の言葉に答えた。

「私も。あんなことしたくないしされたくない」

「だからよ」

それで元に戻るといふのだった。

第十四話 戻ってきたものその七

「まずは学校に行つてね」

「そうね。あとこれから長月達のところに行くのよね」

「そうよ」

その通りだというのである。

「これからね」

「そうよね、それじゃあ」

「如月も。来るのね」

「勿論よ」

はつきりとした言葉で弥生の言葉に答えた。

「私も。待ったりしないから」

「一緒になのね」

「そうよ、そうするわ」

また弥生に対して答えた。

「だから一緒にね」

「わかったわ。じゃあ行きましょう」

「ただ」

「ただ？」

「若しかして来てるかも」

岩清水達の抗議のことだ。その彼等が来ている場合を考えるとだ。

如月はもうそれだけで吐き気を催した。そこまでの心の傷なのだ。

「そうしたら」

「安心して」

「安心していいの？」

「そうよ、安心して」

「ここでもこう告げる弥生だった。

「私もいるから」

「弥生が」

「だから安心して」
また如月に告げた。
「その時はね。また」
「有り難う……」
「また御礼を言うのね」
「駄目？それは」
「ねえ、如月」
電車が来た。その電車に乗る。電車の中は通学通勤の時間だけあり人で一杯だった。二人はその人の中に自分達も入ってさらに話すのだった。
「あのね」
「あの？」
「私、如月と絶交したじゃない」
「そのこと？」
「あの時は如月を本当に許せなかった」
「そうだったというのである。」
「あの時はね」
「あの時は」
「いいとか悪いとか考えなかった。許せなかった」
「そうだったのね」
「けれど。それは」
「こう言うのだった。さらにだった。」
「間違いだったのね」
「どうしてなの？それは」
「だって。如月がここまで傷ついたから」
如月その心の傷を知ってた。身体だけではなかったのだ。
「だから」
「私が」
「如月だけじゃない。長月達も」
「あの娘達もなの」

「あそこまで傷ついて。もう少しで完全に壊れるところまで行って」
「.....」

「そうなってしまったから」

「だからだとだ。弥生はその電車の中で話していく。」

「そんなことになるんだったら。あの時は」

「けれど私は」

その如月がだ。俯きながら話すのだった。

「私はあの時は」

「それでもよ。絶交するんじゃないかった」

「じゃあどうすればよかったってどういうの？」

「見捨てるべきじゃなかったのよ」

そうだったというのだ。弥生は今になってからそのことに気付いたのである。

「絶交するのは楽なのよ」

「楽.....」

「そう、見捨てることだから」

弥生は今は絶交をそう考えていた。そうなっていたのだ。

「それは楽なの。けれど」

「けれど？」

「叱って。それで支えるのは」

「そのことは楽じゃないのね」

「ええ」

如月の言葉にこくりと頷いて返した。

第十四話 戻ってきたものその八

「そうだったのよ。あの時の如月達は確かに最低だったわ」

「そうよね、あの時の私達は」

「それでも。見捨てるべきじゃなかった」

「叱って支えるべきだったというのね」

「そうだったのよ」

これが弥生が至った考えだった。

「そうしたら。岩清水君達があそこまでしなかったし」

「あそこまでなの」

「そう、それに」

また如月を見る。幾分か戻ったとはいえだ。まだやつれがあった。

そのやつれはそうそう容易には取れそうにはないものだった。

「こんなに傷ついてしまわなかったのに」

「けれどこれは」

「自業自得よ」

それは確かだというのだった。

「けれど。それでも」

「それでも」

「酷過ぎるわ。今考えたら」

「弥生……」

「そういうことまで見てわかったの」

今の如月も見ての言葉だった。

「それでも程度があるのよ」

「程度が」

「本人達が心から反省するようになって」

今の如月達である。

「それに相手が許してくれたら」

「それでいいのね」

「そう思うわ。報いはあっても当然だけれど」

二人で話していく。その二人でだ。

「それでも。あんなことは」

「私が受けてきたようなことは」

「如月達の行動は最低で。同じだけのことがあっても当然だったけれど」

その如月を見ての。そうしての言葉だった。

「それでも。あそこまでは」

「彼、私達を死んでも許さないって言った」

「実際にね。岩清水君達はね」

「ええ」

「相手が死んでもそれでもお葬式や墓場で宴会やったりお祝いとかして」

それは彼の従兄もしていた。そうしていたのだ。

「そうしてたのよ」

「お祝い……」

「ネットのサイトでね。いじめをしていた相手をターゲットにして悪事を全て暴いて如月達にしてきたみたいに徹底的に責めて糾弾して」

「私にしたみたいに」

「ええ、そうだったの」

そのサイトのことをだ。如月に話していく。

「そうしてね。死ぬところまで追い詰めて」

「死んでからは」

「だから。お葬式の場所とかお墓の前でね。宴会やってね」

「酷い、そんな……」

「そうして徹底的にやっていたのよ」

「じゃあ私も」

「そうなっていたわ、間違いなくね」

「死んでからも。そうよね」

「それ、言われてたわよね」

「だから死ねなくて」

実は死にたいとさえ思った。だがそれは死んでからも攻撃し続けるといふ岩清水の言葉によりできなくなっていたのだ。そうだったのである。

「それでだったの」

「そうだったよね。本当に」

「それがやり方だったのね」

「そうよ、岩清水君のね」

「私、もう少しで本当に」

「壊れてそうして死んでね」

それからだというのだった。死んでもそれからというのが岩清水だったのだ。

「晒されてたわ。死体晒すこともしてたし」

「私の死体が」

「そうなっていたわ。ネットで世界中にね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

如月はそれを聞いて絶句した。流石に死んでからもそうなるのだ。彼女にしても絶対に受け入れられなかった。それは全くだった。

第十四話 戻ってきたものその九

それを話してだ。弥生はさらに話す。

「私、そんなの嫌」

「私が晒されることが？」

「如月が死んでそうになってたら私絶対に耐えられなかった」

「弥生……」

「ずっと一緒だったじゃない」

如月を見ての言葉だった。

「だから。友達だから」

「友達だからなのね」

「そう、友達だから」

それが理由だった。理由としての全てだった。

「だから」

「友達だから」

「それでね。如月」

如月にあらためて声をかけてきた。

「もうすぐね」

「そうね。もうすぐね」

「長月のお家ね」

「こつ言ってきたのだ。」

「そうよね」

「そうね、もうすぐね」

如月も弥生のその言葉に頷いた。そうしてだった。

そのうえでだ。如月はまた言うのだった。

「最初は長月よね」

「それでね。文月と霜月もね」

「四人でね」

そして。弥生がここでまた言った。

「私もよ」

「弥生もなのね」

「そうよ、絶対にいるから」

それは絶対だというのだった。それを話すのだった。

「それでいいわよね」

「うん、有り難う」

「それじゃあ」

電車が停まった。ここで。

そうしてだった。また弥生が如月に声をかけた。

「行こう」

「ええ」

如月も頷いてだった。二人で電車を降りてだ。その二人で駅を出てそのうえでだ。長月の家に向かう。そして文月と霜月もだった。

幸い岩清水達は誰の家にもいなかった。そのことは幸いだった。

しかし五人になったところだ。弥生は深刻な顔になって話した。

「学校にね」

「いるのね」

「やっぱり。あそこに」

「あの連中が」

「間違いないわ」

弥生が四人に話していく。

「それはね」

「そうなんだな」

長月はそれを聞いて顔を暗くさせた。

「あの連中、学校で」

「けれどもう」

「行かないと」

文月と霜月は暗くなった顔で話した。

「そうよね、元に戻らないと」

「絶対に」

「うん、一緒に戻ろう」

弥生はその二人の言葉に微笑みで応えた。

「絶対にね」

「元に戻らないと」

「こんな状況は」

「そうよ、戻りましょう」

また言った弥生だった。

「一緒にね」

「弥生、有り難う」

「本当に有り難う」

三人はその弥生に対して礼の言葉を述べた。

「私達にそこまでしてくれて」

「迎えにまで来てくれて」

「当たり前よ。友達じゃない」

言うことは如月に対するのと同じだった。

第十四話 戻ってきたものその十

「だからね」

「それでなの」

「そうして」

「ここにまで」

「今は行こう」

また言った。そしてだった。

学校に向かう。校門に来た。如月が意を決した声を出した。

「いよいよよね」

「行こう」

弥生は彼女に顔を向けて話した。

「それじゃあね」

「ええ」

まずは如月が頷いた。

「それじゃあ今から」

「そうしよう。けれど」

「けれど？」

「怖がる必要はないから」

彼女だけでなくだ。三人にも告げた言葉だった。

「それはね。私もいるから」

「そうよね。だからね」

「だから行こう」

如月の手を持った。何とか元に戻ってきていた。だがまだやつれがある。

「今から」

「うん」

如月が頷いてだった。そうしてだった。

五人で校門に向かう。そこを通り過ぎるとだ。

すぐに罵声が来た。しかも一つや二つではない。

「学校に来るな！」

「帰れ！」

「出て行け！」

こうした言葉がだ。四方八方から浴びせかけられた。

そして岩清水達もだ。同志達を集めてこう叫んでいた。

「皆、いいね」

「ああ！」

「あんな連中許してたまるか！」

「一生報いを与えてやる！」

「地獄に落としてやる！」

「覚悟しろ！」

見ればだ。彼女達のクラスメイト達も大勢いた。彼等は敵意と憎悪に満ちた顔で四人を見据えてだ。そのうえで前から、そしてクラスの窓から叫んでいた。

「よく学校に来れたな！」

「何考えてるんだ！」

「あんなことしていてね！」

「とつとと消える！」

「ああ………」

四人はその罵声の嵐を受けて足を止めてしまった。すくんで動けなくなった。

だがその彼女達にだ。弥生がここでも言ってきた。

「大丈夫だから」

「弥生………」

「前に進んで」

四人にだ。優しい声で囁いたのだった。

「前にね」

「前になの」

「そう、前にね」

その前にだというのである。

「一人じゃないから」

「だからなの」

「言ったわよね。何があっても絶対に傍にいるって」

弥生は四人にこのことを話した。

「だからね。安心して前に進んで」

「前に。じゃあ」

「一歩前に出て」

そうしろというのだった。

「一歩。まずはね」

「それじゃあ今から」

「そうして」

「わかりました」

その言葉にこくりと頷いてだ。そうしてだった。

一歩前に出た。小さいがそれでも確かに前に進んだ。そうしてそのうえで、だった。四人は罵声の嵐の中を進んでいくのだった。

第十四話 戻ってきたものその十一

その罵声の嵐の中を進んでだ。先に行くもどった。

罵声はさらに酷いものになる。しかしだつた。

それでも先に進んでだ。教室に向かうのであつた。

葉月はこの時教室にいた。そこからクラスの窓のところに集まり罵声を浴びせているクラスメイト達を見ていた。彼は自分の席にいた。

そのうえで見ているとだつた。彼は言うのだつた。

「やっぱり。これは」

ただひたすら糾弾し罵声を浴びせかける彼等を見てあることを感じた。そうしてだつた。

意を決した顔で頷いた。一人でだつた。

岩清水達は四人を取り囲んだ。そのうえでだつた。

ここでも携帯を取り出してだ。四人の過去を見せるのだつた。

「皆、こんなこと許せないよね！」

「許せるか！」

「ふざけるな！」

「最低ね！」

「そう、最低だよ」

まさにその通りだとだ。岩清水は定義付けるのだつた。

「こんなこと許せるかな」

「絶対に許せない！」

「何があつてもな！」

「こんな連中何で学校に来るんだ！」

「辞める！」

「帰れ！」

「そう、学校に来たらいけないよ」

まさにそうだというのだつた。そしてだ。

四人が下駄箱のところに来るとだった。その下駄箱は。

前以上に荒らされていた。下駄箱の扉は殴って壊されそのうえで落書きがされてた。中も外も酷いものになっていた。そんな有様だった。

だが四人と一緒にいる弥生はだ。こう彼女達に言うのだった。

「靴はね」

「靴は？」

「それは」

「用意しておいたから」

こう彼女達に言うのだった。

「ちやんとね。あるから」

「あるの」

「そうなの」

「はい、これ」

こう言ってだった。あるものを出してきた。それはだった。

靴だった。上履きを出してきた。それは四足あった。鞆から出てきたのである。

「こんな状況だから」

「用意してくれたの」

「そうだったのね」

「ええ、そうなの」

その通りだというのだった。

「それはね」

「有り難う」

如月が最初に言った。

「こんなことまで」

「行こう」

また如月に話した。

「それじゃあ」

「うん」

如月も三人も頷いてだった。そのうえで弥生が出してきた靴を履き岩清水たちを振り切り切るようにしてクラスに向かった。するとだった。

岩清水達は先回りしていた。そのうえで四人を取り囲もうとする。しかしだった。

葉月は彼等が動き出す前にだ。クラスに入って来た如月達を出迎えてだ。そうしてそれからこう彼女達に言うのだった。

「おかえり」

「えっ……」

「おかえりって」

「そうだよ。おかえり」

微笑んでだ。彼女達に言ったのである。

「よく帰ってきたね」

「出迎えてくれるの？」

「それ以外に見えるかな」

その微笑みはそのままだった。 104

「その他には」

「じゃあ本当に」

「私達を」

「過去は過去だよ」

そしてだった。葉月はこうも言ったのだった。

「大切なのは今だよ」

「今……」

「そしてこれからだよ。だからね」

「ええ……」

「おかえり」

また微笑んでの言葉だった。

「よく帰ってきてくれたね」

「うん……」

如月は葉月のその言葉にもこくりと頷いたのだった。そしてだっ

た。

「さあ、自分の席に着いて」

「行きましよう」

弥生も声をかけてきた。

「そこにね」

「勿論君達もね」

葉月は長月達三人にも声をかけた。

「行こう、席にね」

「あ、ああ」

「じゃあ」

「私達の席に」

こうしてだった。彼女達は自分達の席に向かった。だがその机も椅子も落書きがこれでもかと為されゴミも撒き散らされていた。しかし。

弥生と葉月はだ。まずゴミを払ってだ。それからだった。

ベンゼンと布を出してそれで落書きを拭き取ってだ。あらためて

彼女達に言った。

「大丈夫だからね」

「安心して」

「そこまでしてくれなくても」

「それ位私達が」

「するから」

「そうするの？」

弥生は彼女達の言葉を受けて応えた。

「如月達が」

「自分の席だし」

「だから」

「するわ」

こう言ってだった。弥生達からその布を受け取って自分達でするのだった。そうしてそのうえで自分達の席に着いたのだった。

だがその彼女達にだ。岩清水はまだ仕掛けた。

「絶対に許したらいけないよ」

「こんな連中何があっても」

「許してたまるものですか」

「これで終わりじゃないからな」

「見てなさいよ」

四人を取り囲んで言う。しかしだった。

弥生は彼等と如月達の間に入った。無言でだ。

そして岩清水を見据えるのだった。もう引くつもりはなかった。

第十四話 完

2010・10・14

第十五話 許される心その一

第十五話 許される心

学校での一日が終わった。そしてだった。
下校の時にだ。弥生は如月に言ってきた。

「ねえ」

「うん」

「この後何処に行く？」

「何処って？」

「お腹空かない？」

こう如月に言うのであった。

「何かね」

「お腹が」

「何処かお店に行こう」

また如月に言った。

「お菓子でも食べよう」

「お菓子ね」

「ええ、お菓子よ」

微笑みを作つての言葉だった。

「どうするの？それで」

「それじゃあ」

如月は考える顔になってだ。そのうえで弥生に答えたのだった。

「行こう」

「ええ、行きましょう」

「長月達も呼ぶ？」

如月は携帯を取り出してまた弥生に問うた。

「あの娘達も」

「そうね」

弥生は優しい笑みで如月の言葉に応えた。今二人は校庭を歩いて

いる。かつてはいつも一緒に歩いていたその校庭をである。

そこを歩いてだ。そのうえでだった。二人は話をするのだった。

「いいわね」

「お店は何処がいいかしら」

「マジックね」

弥生が言った。

「そこにしましょう」

「マジック。あそこに行くのも」

「久し振りよね」

「そうね」

如月も弥生のその言葉に頷いて同意した。

「本当にね」

「久し振りだけれど」

それでもだと言う弥生だった。

「いつも一緒に行つてたお店ね」

「あそのマスターいい人だし」

「お菓子も美味しいしね」

「奥さんが作ったお菓子がね」

それがいいというのである。

「いいわよね。だからね」

「一緒にね」

「そうしよう」

こう話してだった。長月達も呼んでそのうえでマジックに入った。

マジックはイギリス調の木造の店だった。天井の柱達が雰囲気を醸

し出している。ダークブラウンのその木が非常に穏やかである。

テーブルや椅子、カウンターもだ。ダークブラウンの木で作られ

ている。そうした中に入つてだ。二人は六人用の席に座つた。

そしてだった。まずは弥生が言った。

「何を注文するの？」

「コーヒーは駄目かな」

「コーヒーね」

「ええ、それ」

如月はそれをだというのだった。

「駄目かしら」

「お腹大丈夫？」

弥生は彼女を気遣って尋ねた。

「コーヒーは強いから」

「多分」

如月の返答はあまり強くはないものだった。

「いけると思うけれど」

「止めた方がいいかもね」

だが、だった。弥生はこう如月に言うのだった。

「それはね」

「そうなの」

「紅茶の方がいいわね」

そちらだというのだった。

「あれはお腹に優しいから」

「そう。それじゃあ」

「それでスイーツはどうするの？」

弥生は今度はそれについて尋ねた。

第十五話 許される心その二

「それは」

「クレープはどうかしら」

如月はメニューを開いてそれを見ながら述べた。

「アイスクリームのクレープ」

「いいと思うわ」

弥生はそれはいいというのだった。

「それでね」

「そう。それじゃあそれにするわ」

「ええ」

こうして二人でそのクレープを頼んだ。程なくして上から白いクリームをかけた黄色いクレープが運ばれてきた。皿は白いものだ。それをフォークとナイフで切るとだ。中にはやはりアイスがあった。

「やっぱりね」

「アイスとクレープってね」

「そうよね。とてもね」

如月は微笑みと共に弥生に対して返した。

「合うわよね」

「ええ。如月昔からクレープとアイス好きよね」

「大好きよ」

その通りだ。如月はまた言葉を返した。

「本当に子供の頃から」

「このお店もね」

「よく二人でね」

「そうよね。来てるわよね」

「そして今も来て」

如月はその微笑みのまま弥生に話した。

「こうしてお喋りして」

「それも昔と同じね」

「そうね。同じよね」

「戻ってきたのね」

そしてだった。弥生はここでこうしたことを言ってきたのだった。

「私達」

「そうなるのね。それで」

「ええ」

「三人も来るわね」

如月はここで三人の名前も出した。

「そうよね」

「そうなるわ。じゃあ三人が来たらね」

「今度は三人でね」

「楽しみましょう。ただね」

弥生も微笑んでいた。彼女はこう言ったのだった。

「あの娘達は何を頼むかしら」

「ケーキじゃないかしら」

如月はこう予想した。クレープとその中のアイスを食べながらだ。アイスはバニラとチョコレートが入っていた。どちらも冷たく実に甘い。

「長月はホットケーキで」

「あの娘ホットケーキ好きだからね」

「シロップたっぷりかけてね」

「あれはかけ過ぎよね」

「そうよね」

こんな話を笑顔でする。そしてだった。

やがて三人も来た。その三人も席に座ってだ。そして長月が頼んだのはやはりそれだった。如月と弥生は彼女がそれを頼むのを聞いて顔を見合わせて笑い合った。

「やっぱりね」

「ホットケーキだったわね」

「何だよ、うちがホットケーキでおかしいのかよ」

長月は口を少し尖らせて二人に言い返した。

「ホットケーキ好きだからいいじゃねえかよ」

「実は何頼むか話してたのよ」

「二人でね」

二人はその長月にこのことを話した。

「そうしたら本当に」

「ホットケーキ頼んだから」

「それがおかしいのかよ」

「おかしくはないわよ」

「ただ。予想通りだったから」

それで笑顔になっていっているというのである。

「それでなのよ」

「別に悪気はないから」

「ちえっ。まあホットケーキ食べるのもな」

長月はそこに話をやった。

「本当に久し振りだしな」

「このお店のケーキもね」

文月が頼んだのはそれだった。チーズケーキである。

第十五話 許される心その三

「何か食べるの久し振り」

「そういえばここってケーキも」

「美味しかったよね」

如月と弥生はこのことも話した。

「それにしてもよかったわね」

「ええ。今度はそれにする？」

「そうね。次にこのお店に来た時はね」

「それにしましょう」

「私はパフェだけけどね」

霜月が頼んだのはそれだった。

「この苺パフェって量も多いし。大好きなのよ」

「それ以上食ったらまたでかくなるぜ」

長月は彼女の長身について話した。

「それでもいいのかな」

「パフェ食べて大きくなるの？」

「なるだろ。クリームに牛乳一杯入ってるからよ」

「そういうもののなの」

「そうだよ。霜月って昔から牛乳好きだろ」

「ええ」

霜月は長月のその言葉に頷いた。それはその通りだった。

「もうパンの時はね。絶対にね」

「だからだよ。大きくなるんだよ」

「しかも霜月って」

文月もここで話してきた。

「あれよね。すらつとしてるし」

「すらつと？」

「スタイルいいし」

「それ昔から羨ましいと思ってたわ」
「今言つたのは如月だった。」
「背は高いしスタイルいいし」
「そうだったの」
「そんな風になりたいなつて」
「如月はこんなことも言つた。」
「今も思つてるわ」
「今もなの」
「私霜月みたいにすらりとしてないし」
「まずは彼女のことだった。」
「文月みたいに胸大きくないし」
「私もなの」
「長月みたいに脚綺麗じゃないし」
「そんなに綺麗か？」
「綺麗よ。私なんて何も無いのよ」
「困つた顔での言葉だった。」
「だからね。三人共それが羨ましくて」
「そんなの気にする必要ないわよ」
「かしだった。ここで彼女に言ってきたのは弥生だった。」
「別にね」
「そうなの」
「そうよ。如月には如月のよさがあるし」
「具体的には何処が？」
「聞かすにはいられずだ。本当に聞いたのだった。」
「私いいのよ。何処がなのよ」
「笑顔よ」
「それだと。口を尖らせている彼女に告げた弥生だった。」
「それがね。いいのよ」
「笑顔なの」
「私如月のその笑顔大好きだから」

「こう言ったのである。」

「だからね」

「そうだったの」

「だからもつと笑ってね」

「こつも言うのだった。」

「いいわね」

「ええ」

如月は弥生のその言葉に頷いた。そうしてだった。

そのうえでだ。こつ言うのだった。

「笑うわ、本当にね」

「笑えばね」

「笑えば？」

「幸せになれるから」

弥生はこのことも話したのだった。

第十五話 許される心その四

「だからね」

「幸せになの」

「そう、幸せにね」

弥生はまた如月に話した。

「幸せになれるから」

「なつていいの？」

如月は笑みを消して弥生に問うた。

「私が。幸せに」

「なつていいわよ」

弥生の返答は当然とといったものだった。

「そんなの。当たり前じゃない」

「当たり前なの」

「そう、当然よ」

そうだというのである。

「それはね」

「そうなのね」

「何度も言っけれど」

弥生はこう前置きしてから話す。その目は如月だけでなく。他の三人も見ていた。丁度彼女達のところにもお菓子 came たところだった。

「誰だつてね」

「誰だつて？」

「そうよ、誰だつて幸せになる義務があるのよ」

「幸せになる義務が」

「そう、それがあるのよ」

こう話すのだった。

「だからね。如月だつて」

「私も」

「長月も文月も霜月も」

三人に対しても言った。

「同じよ。幸せになる権利があるのよ」

「けれど」

「ねえ」

「それは」

しかしだった。ここで長月達は顔を伏せさせて言うのだった。お菓子を前にしてもだ。それは今は手がつけられていなかった。

「うち等のしたことは」

「だから。それがあるから」

「幸せなんて」

「許されないことだったわ」

それは確かだ。弥生も否定しない。

「けれどそれも言ったわよね」

「ああ」

「確かに」

「その人が許してくれたら」

「いいのよ、それで」

ここでは神無のことである。彼女が四人の謝罪を受け入れてくれたことを話すのだった。それを話してからまた四人を見て言うのだった。

「人が人を許さないとか言うのも」

「それも？」

「おかしいの？」

「私、そうも思うようになってきた」

そうだといいのだった。

「そういうのができるのって」

「ええ」

「誰なのかしら」

「それは」

「神様だと思うの」

神のこともだ。話に出た。

「神様だけがねそういうことができるのよ」

「神様が」

「それを」

「その神様だって。今の如月達は許してくれるわよ」

今の彼女達ならというのだった。

「そこまで傷ついて。反省してるから」

「そうなの」

「今のうち等は」

「許してもらえるのね」

「それで幸せも」

「胸を張っていいのよ」

弥生はまた四人に告げた。

「充分にね」

「それならいいけれど」

如月はまだ俯いていた。だがこう弥生に言ったのだった。

「幸せに。なつていいのね」

「ならないと駄目なのよ」

弥生の言葉には切実なものすらあった。

「絶対にね」

「絶対になの」

「そう、絶対に」

また言った弥生だった。

第十五話 許される心その五

「幸せにならないと駄目だから」

「そうなの」

「私達は」

「幸せに」

「そうよ。だから今はね」

弥生は微笑みを戻した。そのうえで四人にまた言った。

「食べよう」

「あつ、お菓子を」

「それをよね」

「ええ、そうよ」

その通りだというのだった。

「だからね。食べましょう」

「ええ」

「それじゃあ」

「今から」

四人も頷いてだ。そのうえで食べるのだった。彼女達が好きなそれのお菓子をだ。だがその味はだ。不思議になことに甘くなかった。

「おかしいね」

「何が？」

「甘くない」

如月はこう弥生に言ったのだった。

「甘くない。急に甘くなくなったけれど」

「そうなの」

「何か塩の味がするね」

その味になつていているというのだ。

「どうしてかしら」

「うちも」

「私も」

「私のも」

三人もだった。同じだった。

「甘くないよ」

「段々塩の味がきつくなつて」

「おかしいよね。これって」

「うん、おかしくないわ」

弥生の微笑みが優しいものになっていた。そのうえでの言葉だった。

「それはね」

「おかしくないの？」

「拭いて」

こう告げた如月だった。

「今はね」

「拭いてって」

「目を拭いて」

こう四人に言った。

「さもないともっと甘くなくなるわよ」

「え、ええ」

「じゃあ」

「目を」

「お菓子は甘いものよ」

弥生はこうも告げた。

「だからね。目を拭いてね」

「うん、それからまた」

「食べるから」

四人は何か目を拭いてそのうえでまた食べるのだった。そしてその姿をだ。ある人が見ていた。それからだった。

次の日だ。登校するとまた岩清水が仕掛けてきた。しかし四人の

ところには弥生がいた。葉月も見守っていて何かあると動こうとしていた。

その二人を見てだ。クラスメイト達の何割かは動きを止めていた。そのうえで話すのだった。

「あの二人がいると」

「ちよつとなあ」

「何かしにくいし」

「そっだよね」

「ちよつと」

こう言っただった。踏み止まるのだった。

そして神無も何も言わない。最初から何も言わなかった彼女だ。だ。このこともここで次第に皆に見えてきていたのだ。

「椎葉さんが動かないし」

「それなら何か」

「もういいんじゃない」

「そっよね」

こんな声が広まりだしたのだ。クラスでも次第に何かが変わってきていた。

そしてその日の放課後。弥生が家に帰ろうとする四人に声をかけた。

「ちよつと」

「えっ」

「どうしたの？弥生」

「ちよつといいかしら」

こう四人に言ってきたのである。

第十五話 許される心その六

「今からね」

「今から？」

「何かあるの？」

「会いたいつて人がいるけれど」

「こう四人に言ってきたのである。」

「いいかしら」

「会いたい人って」

「誰よ」

「誰なんだよ」

しかしだった。四人はそう聞いて急に怯えだした。まるで岩清水から攻撃を受ける時の様になってだ。そうなってしまうたのである。

「それって」

「まさかと思うけれど」

「安心して」

弥生はその四人にまずはこう告げた。

「それはね。おかしな人じゃないから」

「そ、そうよね」

「弥生が言ってるんだし」

「それならな」

「違うわよね」

四人は弥生の言葉にすぐに落ち着きを取り戻した。そうしてだった。

あらためてだ。ほっとした顔になって弥生に尋ねた。

「それで誰なの？」

「その人って」

「一体」

「屋上に来て」

弥生はここでは誰とは言わなかった。

「私も一緒だからな」

「そうなの、一緒に来てくれるのね」

「そうしてくれるのね」

「そうよ、一緒だから」

四人を気遣ったの言葉であった。

「だからね。安心して来て」

「ええ、それじゃあ」

「今から」

こう話してだった。四人は弥生の言葉に頷いた。そうしてだった。

弥生に付き添われて屋上に向かった。そしてそこに出るとだ。

懐かしい後姿があった。その姿は。

「まさか」

「そんな……」

「あの、先輩」

弥生はここでは驚く四人を横目にその後姿に声をかけた。

「如月達。来てくれました」

「そう、悪いわね」

彼女は振り向いてきた。そうしてその顔を四人に見せた。それは。

皇月だった。身体も完全に向けてきてだ。そうして言ってきたのだった。

「呼んでもらってね」

「いえ、いいです」

弥生はその皇月に対してにこりと笑って話した。

「それは」

「そう。いいのね」

「それよりもですけれど」

弥生からだった。言うのだった。

「あの、本当にいいのですか？」

「いっていうと？」

「この娘達と」

「ええ、いいわよ」

皇月は微笑んでそのうえで答えたのだった。

「勿論ね」

「そうなんですか」

「だから来てもらったんだし」

「そうですか。それじゃあ」

「そういうことだね。じゃあ」

皇月は弥生との話を終えてだ。そうしてだった。

四人に顔を向けてだ。こう言ってきたのだった。

「昨日だけれどね」

「昨日……」

「昨日っていいますと」

「話、聞いたわ」

この言葉と共にだった。ゆっくりと前に歩いてきた。そうしながら四人の方に来るのだった。そのうえで話をしていくのだった。

第十五話 許される心その七

「喫茶店のね」

「あの時にですか」

「じゃああの時先輩も」

「マジックに」

「ええ、いたわ」

その通りだというのだった。

「実はね」

「そうだったんですか」

「あの時お店におられたんですか」

「それで私達の話を」

「盗み聞きするつもりはなかったけれど」

このことも断った。

「それでもね。聞かせてもらったわ」

「あの、それで」

如月は怯える目でだ。臯月に問い返した。

「私達に話つて。何ですか？」

「私達もう部活は」

霜月も如月と同じ目で話す。

「ですから」

「貴女達の今を聞いたのよ」

臯月は四人のすぐ前まで来ていた。そしてそこで立ち止まって話

すのだった。

「それをね」

「今つていいいますと」

「私も。許せないと思ってたわ」

このことは弥生と同じだった。それはだ。

「けれど今はね」

「今は」

「いいわ」

微笑んだのだった。

「もう。貴女達も苦しんで。辛い思いをしたわね」

「・・・・・・・・・・」

「顔を見てもわかるわ」

その四人の顔をとも言った。

「部活にいた頃は。そんな悲しい顔をしていなかったから」

「・・・・・・・・・・」

「いじめられるのがどれだけ辛いかはわかっていたわよね」

かつて三年生の部長にされていたことも話した。

「そうだったわよね」

「・・・・・・・・・・はい」

「それは」

このことは確かにわかっていていたことだった。四人は沈黙から戻ってだ。小さい声で頷いたのだった。首も小さいが確かに動いた。

「わかってました」

「けれど」

「それで椎葉さんをいじめて。糾弾されて」

臯月はこのことも話した。

「辛い思いしたわよね。心も身体も攻撃されて停学にもなって」

「それは」

「私達が」

「ええ、悪いことをしたわ」

それは間違いないとも言っていた。

「許されないことをね」

「・・・・・・・・・・はい」

「あの娘にとっても酷いことをしてきたわ」

「ですから」

「それは」

「罪は罪よ」

臯月の言葉は厳しいものだった。

「報いはあつて当然よ」

「ですから」

「けれどね。それでも限度があるのよ」

弥生と同じことをだ。臯月も言つたのだつた。

「それがね。あるのよ」

「そうですね」

弥生も臯月のその言葉に頷いた。

「それはやつぱり」

「そうよ。見ていたわ」

「御覧になられてたんですか」

「ええ、見えるものだから」

それだけだというのだつた。

「だからね」

「それで先輩も思われたんですか？」

「あれはもう糾弾ではないわ」

その域を超えているというのだ。そうした見方をしているという意味においてだ。臯月もまた弥生と同じ考えを持っているのだつた。

第十五話 許される心その八

そしてだ。さらに言うのだった。

「あれはね。もうね」

「何ていったらいいんでしょうか」

「地獄ね」

皐月はそれだと定義した。

「もうね。地獄ね」

「地獄なんですか」

「糾弾ではなくて。地獄を生み出しているのよ」

「そしてそれをこの娘達に」

「人間のすることじゃないわ。岩清水君だったかしら」

「はい」

弥生は皐月の出したその名前に対して頷いた。岩清水の名前に他ならない。

「そうです」

「彼はね、この娘達なんて比べ物にならない位」

「比べ物にですよね」

「許されない、いえ人間の行いを超えてるわ」

「人間の……」

「邪悪っていうのかしら」

この言葉をだ。皐月は出した。

「彼はね」

「邪悪ですか」

「私はそうとしか思えないわ」

真剣な顔で語る皐月だった。

「あそこまでいくとね」

「そうですか」

「そう思うわ。貴女はどうかしら」

「私は」

皐月の言葉を受けてだ。弥生は少し俯いて考える顔になった。そうしてそのうえでだ。彼女は顔をあげてそのうえで皐月に答えた。

「岩清水君が邪悪かどうかはまだわかりません」

「まだなのね」

「ただ。彼がやっていることは」

「ええ」

「如月達を、私の友達を傷つけるものです」

それだというのである。

「それは。絶対に許せません」

「それが貴女の考えなのね」

「はい」

今度はだ。しっかりとした声で答える弥生だった。

「それは間違ってるでしょうか」

「いえ、間違いじゃないわ」

皐月は弥生のその言葉を受け入れてみせた。

「正しいわ。貴女はね」

「そうですか」

「ええ、この娘達に今必要なのは」

四人を見てだ。また話すのだった。

「友達、そして支えだから」

「それがですか」

「貴女が必要なのよ」

「私が」

「そうよ、必要よ」

弥生を見てだ。そのうえでの言葉だった。

「絶対にね」

「わかりました。それじゃあ」

「それと。貴女達だけね」

今度は如月達を見ての言葉だった。

「いいかしら」

「はい」

「何が」

「私はまだ貴女達を完全に許せないけれど
言葉はまだ厳しいものだった。」

「あの娘、椎葉さんは許してくれたのよね」

「はい、そうです」

四人に代わって弥生が答えた。

「椎葉さん、この娘達の謝罪を受け入れてくれました」

「そう。それならいいわ」

弥生のその言葉を聞いてだ。皐月はこくりと頷いた。それからだ
った。

「それでね」

「いいんですか」

「部活のこともね。あの娘が許してくれたのなら」

この前置きからだ。また話すのだった。

第十五話 許される心その九

「もう少し落ち着いたら戻ってきていいわよ」

「えっ、それって」

「本当ですか!？」

「私達が」

「部活に」

「私が嘘を言ったことがあるかしら」

驚く四人にだ。こう返す弥生だった。

「そんなことがあったかしら」

「いえ、それは」

「一度も」

「そうよね。なかったわね」

皐月は強い声で四人に話す。

「誰かが何を言ってもその時は気にしないで」

「ですが」

「それは」

「戻ってきたくなかったらそれでいいわ」

その時はともいうのだった。

「けれど戻ってきたら」

「その時は」

「その、何が」

「私はいじめとかそういう陰湿なことは許さないわ
きっぱりとした断言だった。

「それは誰についても同じよ」

「誰についてもですか」

「だから私達も」

「誰がするのもされるのもね」

落ち込もうとする四人への言葉だった。

「言っておくけれどね」
「えっ」
「それって」
「ええ、そうよ」⁸
また言う臯月だった。
「貴女達がされるのもね。許さないわ」
「そうなんですか」
「それが先輩の」
「考えよ。だからいいわね」
臯月の言葉は続く。
「そういうことはね」
「また。部活に」
「戻っても」
「その時はもう絶対にいじめはしないこと」
条件も出してきた。
「とはいってももうできないわね」
「痛いですから」
如月が俯いて言った。
「とても」
「痛かったのね」
「こんなに痛かったのははじめてです」
「そうだというのだった。」
「ですから」
「だから二度としないのね」
「はい」
臯月の言葉に対してこくりと頷いてみせたのだった。
「何があっても」
「そうしなさい。それじゃあね」
「部活に」
「貴女達が決めるといいわ」

臯月はだ。優しい顔になっていた。

「いいわね。それじゃあね」

「はい」

「若し戻ったら」

「その時は。ですね」

「いじめは許さないからね」

これが臯月が四人に告げる言葉だった。四人は臯月の言葉を受けてそのうえで自然と涙を流していた。それは傍にいる弥生も同じだった。

その夜だ。極月はこっそり家を出ようとした。手には何か如何にも重そうで細長いものを持っている。それを持って家を出ようとする。

しかしだ。玄関の扉を開けたところでだ。後ろから声がしてきた。

「何処に行くの？」

「何だ？」

「今から何処に行くの？」

神無だった。彼女が兄の背に声をかけてきたのだ。

第十五話 許される心その十

「一体」

「少しな」

「少しって？」

「コンビニに行く」

妹に背を向けたまま言うのだった。

「今からな」

「本当に？」

「何が言いたいんだ？」

「コンビニに行くのよね」

神無が問うのはこのことだった。

「そうなのよね」

「ああ、そうだ」

「それだったら」

怪訝な顔でだ。兄にさらに問う。

「その手にあるものは何なの？」

「何でもない」

「それよね」

だが、だった。神無は咎める目でまた兄に問うた。

「それで城崎さんを」

「知らないな」

「今度は誰なの？また城崎さん？それとも」

「御前には関係のないことだ」

「関係ないことないわよ」

妹は強い言葉で兄を咎めた。

「そんなこと。ないわよ」

「御前をいじめた連中だぞ」

兄はここで後ろを振り向いた。そうしてだった。

妹に対してだ。強い目で見据えて言葉を返すのだった。

「そんな連中をあのままにしているのか」

「もうそれはいいのよ」

「いい訳ないだろ」

「お兄ちゃん見てたじゃない。あの娘達が私に謝るところ」

「謝って済む話か」

これが兄の言い分だった。

「あんなことをしてきたな」

「私はもういいのよ」

「だからいい訳ないだろ」

「あの娘達お兄ちゃんに何かしたの？」

「御前にした」

「だから私はもういいの」

神無も引かなかった。何があるうともという感じだった。

「それを言ってるじゃない」

「じゃああの連中があのまま何もなくていいの」

「お兄ちゃんあの娘をそれで入院させたじゃない」

「死ねばよかつたんだよ」

憎悪に満ちた言葉だった。

「あのままな」

「それでまたなの」

「御前の為なんだぞ」

「それでもよ。私はもういいのよ」

「よくない、御前を傷つけた奴等は絶対に許さないからな」

兄としての絶対の言葉だった。

「昔からそうだったな」

「それであの娘達を」

「今度こそな」

「どうしてもって言うのね」

「ああ、そうだ」

さらに強い、憎悪そのものの光を目に宿していた。

「何があってもだ」

「それならね」

神無は兄の今の言葉にだ。怒ってだった。

「私だってお兄ちゃんを絶対に止めるわ」

「何だ、警察位で俺はだ」

「警察じゃないわよ」

「じゃあ何だ」

「私が。お兄ちゃんに何かしてでも」

今にもその何かを出さんばかりになつての言葉だった。

「それでもよ」

「止めるのか」

「お兄ちゃんがどうしてもって言うのなら」

神無はまた言った。

「私だつて」

「そう言うか」

「ええ、絶対によ」

「くっ……」

妹のその強い言葉にだ。兄は止まった。

そしてだった。身体も完全に振り向いてだ。玄関からあがったのだった。

そのうえで神無の方を進んでだ。言うのだった。

「勝手にしろ」

「誰でも」

神無は顔を向けない。言葉だけだった。

だがその言葉でだ。兄に言うのだった。

「もう。あんなことしたらいけないから」

「悪い奴でもか」

「誰だつて悪くなったりよくなったりするから」

これが神無の考えだった。

「だから」

「悪い奴はどこまでも悪いんだよ」

だが極月は言い返した。ここでもだ。

「そういうものなんだよ」

「そんな筈ないから」

二人の言葉は交差した。そしてそれは決して交わるものではなかった。それが今の二人の言葉だった。それは心もだった。

だがそれでも神無は決めた。そのままに動くのだった。

第十五話

完

2010・10・20

第十六話 向かうものその一

第十六話 向かうもの

如月は今はだ。自分の部屋にいた。そうしてである。元に戻ったベッドに座ってだ。そこから弥生に電話をかけていた。そうしてだ。彼女は言うのだった。

「明日だけれど」

「明日？」

「そう、明日」

その明日だというのである。

「明日だけれどね」

「明日土曜だったわよね」

「ええ」

こう弥生に対して答えた。

「そうよ」

「学校お休みよ」

「学校じゃなくてね」

「そこじゃないの？」

「別の場所に行きたいの」

そうだというのだった。このことをだ。弥生に対して話すのだった。

「少しね」

「何処になの？」

「病院に」

そこにだというのだ。

「病院にね。行こうって思ってるのよ」

「病院なの」

「私が入院していたその病院にね」

「ああ、あそこね」

「そう、あそこ」

そこにだというのである。

「行こうと思ってるけれど」

「そう。じゃあ」

「一緒に来てくれるの？」

「当たり前じゃない」

それは当然だとだ。弥生は答えた。

「それはね」

「有り難う」

如月はその弥生に対して素直に礼を述べた。

「また一緒に来てくれるのね」

「当然よ。如月を一人になんてできないから」

だからだというのがだ。弥生の言葉だった。

「一緒に行くわ」

「悪いわね、いつも」

「そうするわ。それでね」

「それで？」

「あの人達に会うのね」

「ええ」

弥生の言葉にこくりと頷く。

「そうするわ。ただ」

「ただ？」

「いないわよね」

如月の声に怯えるものが宿った。そのうえでの言葉だった。

「もう」

「岩清水君達ね」

「いないわよね」

「ええ、いないと思うわ」

それは大丈夫だと答える。弥生には確証はなかった。しかしだった。今彼女はだ。如月をあえて安心させる為にこう言ったのである。

そしてだ。彼はまた言うのだった。

「だから安心して」

「そう、安心していいのね」

「ええ、そうして」

これが弥生の言葉だった。

「それに私もいるから」

「弥生……」

「だから安心していいの」

それでだというのだった。

「私もいるから。何があってもね」

「じゃあ私も」

「如月も？」

「いるわ」

今度はだ。如月が弥生に言ったのである。

「絶対に」

「私の傍に」

「そう。今は私が助けてもらってるけれど」

それでもだというのである。

第十六話 向かうものその二

「それでもね。弥生に何かあったら」

「その時はなの」

「そう、絶対に傍にいるから」

「いてくれるの」

「弥生がいてくれるから。だから」

「待つて」

しかしだった。ここで弥生は電話の向こうの如月に言ってきた。彼女を一旦止めてそれから。じっくりと話す言葉になっていた。

その言葉でだ。弥生は如月にこう話すのだった。

「それはね」

「それは？」

「前からじゃない」

「そうだというのだった。」

「前からじゃない」

「前からって」

「そう、前から」

弥生はまたこう如月に告げた。

「子供の頃から」

「そうだったのね」

「そうよ。あの頃からずっと友達だったじゃない」

「ええ」

「だからよ。私だって」

その子供の頃からのことも思い出してだ。言うのだった。

「如月に何度助けてもらったか」

「そうだったかしら」

「そうよ。助けてもらったわ」

「そうだったというのである。」

「だから今度はね。私が如月をなの」
「助けてくれているの」

「そうなるわ。だから気にしないで」
優しい声でだ。如月に告げた。

「それじゃあ明日ね」

「ええ、明日」

「明日行きましょう」

こう話してだった。その次の日である土曜日に二人でその病院に行つたのだった。昼前にそこに行くことだった。すぐに水無が出て来た。

「いらつしゃい」

「はい」

如月は水無に対して挨拶をした。それからだった。

あらためてだ。彼女に言うのだった。

「それでなのですが」

「今日はどうしてここに来たのかしら」

「あの、私」

少し俯いてだ。そのうえで返答だった。

「私今学校に通つてます」

「そうしてるのね」

「はい、そうしています」

そうだとだ。弥生に話すのだった。

「今は」

「そうね。そういえば」

水無はその如月の顔を見た。そうして言うのだった。

「少しよくなつたわね」

「よく、ですが」

「ええ、顔がよくなつたわ」

そうだったというのである。

「少しだけねど」

「そうですか」

「いいことよ。それでね」

今度はだ。弥生を見てそうしてまた言うのだった。

「貴女も来てくれたのね」

「はい」

弥生もまた水無の言葉に頷くのだった。

「そうです」

「この娘の傍にいてくれるのね」

「友達ですから」

だからだと。弥生は水無に対しても答えた。

第十六話 向かうものその三

「ですから」

「そうね。友達だからね」

「それでいいですよね」

「正しいことよ」

それはだと。弥生に話す水無だった。

「それはね」

「正しいですか」

「ええ、いいことよ」

こつも言ってみせる水無だった。

「貴女その行動がね。この娘を救うから」

「如月を」

「そう、救うから」

そつだというのである。

「だからね。貴女はこのまま進んで」

「そつしてですね」

「ええ、それでよ」

こつ言つてであった。

「この娘といつても一緒にいてあげてね」

「そのつもりです」

弥生の返答は確かなものだった。その言葉で言つてだった。

「本当にこの娘とずつと」

「ええ。それで」

水無は今度は如月を見てだ。彼女にも言つたのだつた。

「貴女はね」

「私は」

「立ち止まらないでね」

彼女にはそうしろというのだった。

「絶対にね」

「立ち止まらない」

「そう、立ち止まらないで」

そうしてくれというのであった。

「貴女はそうして」

「ええ」

その言葉に頷いてだった。如月は顔をあげた。

そうしてだ。また言う彼女だった。

「じゃあ私は」

「何かあつたら何時でも来て」

こつも言う水無だった。

「ここにね」

「来ていいんですね」

「ええ」

その通りだとだ。返すのだった。

「何時でもね。来てね」

「そうだよ。何時でもいいんだよ」

師走もだ。優しい声で彼女に言ってきた。

「ここに来てね」

「私達がいるから」

「何時でもですか」

「そうだよ、何時でもだよ」

師走は顔もだった。優しい笑みになっていた。そのうえでの言葉
だった。

「来ていいからね」

「はい」

如月は彼のその言葉にも頷いてだ。そうして受けたのだった。

受けてからだ。彼女は師走にも話した。

「そう言ってくれたら」

「嬉しいんだね」

「はい、嬉しいです」

少しだけだ。笑顔になった如月だった。

「じゃあ本当に」

「何時でもね。いいからね」

「それでだけれど」

ここで水無はこう言ってきた。

「これからね」

「これから？」

「お茶を飲まない？」

如月と弥生を見ての言葉だった。

「これからね。二人共ね」

「お茶ですか」

「今から」

「ええ、そうよ」

優しい笑みでの言葉だった。

第十六話 向かうものその四

「これからね。どうかしら」

「それもいいんですか」

「今からですか」

二人は水無のその言葉に問い返した。少し気兼ねした感じだ。

「私達も」

「いいんですね」

「ええ、いいわ」

「お菓子もあるからね」

水無だけでなく師走も言ってきた。

「お抹茶ね」

「それと和菓子だよ」

「抹茶と和菓子」

「どう？如月」

弥生は自分よりもだ。如月を気遣って彼女に尋ねたのだった。

「如月はどうするの？」

「私は」

「ええ。どうするの？」

「よかったら」

如月はだ。こう前置きしてから答えるのだった。

「そうしていいですか？」

「ええ、いいわよ」

「だから声をかけてるんだよ」

水無と師走は如月の問いにこう返すのだった。

「一緒にね」

「食べよう」

「有り難うございます」

如月はこくりと頷いてから答えた。

「それじゃあ」

「そうね。ここは貰うべきね」

弥生は如月が頷いたのを見て笑顔で言った。

「御好意はね。ちゃんとね」

「こつしたことを受けられるようにもなるのにもね」

「心が必要だから」

水無と師走はこんなことも言った。

「貴女は。これまでそれができなくなっていたわよね」

「あのことから」

「はい……」

その通りだった。岩清水達の糾弾を受けてだ。心が壊れそうになっていたのだ。人から責められている者がだ。その人からの好意を受けられるかということだった。

それもわかってだ。如月は頷いたのだった。そして弥生に言うのだった。

「弥生も」

「私もいていいのね」

「いつも一緒にいてくれるって言ったじゃない」

「ここを出したのはこの言葉だった。」

「違う?」

「いえ、その通りよ」

「だから。一緒にいて」

「こつ弥生に言うのだった。」

「御願いだから」

「わかったわ」

弥生は如月のその言葉ににこりと笑って応えた。それからだった。如月の手に自分の手をやって。それから囁く。

「行きましよう」

「ええ」

如月も弥生の言葉に応えた。そうしてだった。

二人は師走と水無のお茶とお菓子をこ馳走になった。彼女達、とりわけ如月にとっては非常に幸せな時間を過ごすことができたのである。

そんな時間も過ごせるようになっていた。そしてだ。

また学校に行った。当然長月達も一緒だ。この日もだ。

四人はブーイングの嵐の中で登校する。しかしだ。

弥生はその四人の傍から離れない。決してだ。そのうえで四人に言うのだ。

「ねえ」

「うん」

「クラスに入ったらね」

あえてだ。今のブーイングのことには言及しない彼女だった。

「宿題だけねど」

「それもうやったわ」

「うちも」

「私も」

それについてはすぐにこう答える四人だった。全員がである。

「弥生もよね」

「それは」

「ええ、そうよ。ってどうか」

弥生は四人の今の返答にだ。少し苦笑いになってこう返すのだった。

第十六話 向かうものその五

「四人共もう終わってたの」

「ええ、そうなの」

「昨日時間あったからな」

「だからね。それで」

「やったのよ」

四人共時間があるからできたというのだった。

「それでなんだけれど」

「そう、それならいいわ」

弥生は素直な笑顔になって述べた。

「やっっちゃったのなら」

「けれど」

しかしだった。如月はここで弥生に言うのだった。

「それでもね」

「それでもって？」

「答え合わせしない？」

如月はこう提案したのだった。

「お互いの宿題のね。それはどうかしら」

「あっ、いいわね」

「それもね」

文月と霜月が如月のその提案に頷いた。

「それじゃあクラスに入ったらね」

「そうしよう」

「実はさ」

長月は弥生のそれとはまた違う、困った感じの苦笑いを浮かべて
である。「ここでこう言ってきたのだった。」

「あまり自信ないんだよな」

「ないの」

「結構間違えてると思うんだよな」

自分でそれを感じての言葉だった。宿題はやったがそれだけではないというのだ。内容については自信がないというのである。

「それでだ。こう話すのだった。」

「だからな」

「そうよね。それじゃあ」

「確かめ合おう」

如月と弥生が言った。そんな話をしながらだった。

五人はそのまま下駄箱に向かう。また弥生が靴を出してくれた。

そうして四人はその靴を履いてクラスに入るとだった。ここでもだった。

岩清水がだ。叫ぶのだった。

「来たぞ！」

この言葉にだ。クラスの面々が反応する。

そしてそのうえで集まってだ。四人を責めるのだった。

「何時まで学校に来るんだ！」

「さっさと辞めろ！」

「二度と来るな！」

「中退しろ！」

「この世からいなくなれ！」

「そうだそうだ！」

こう叫んでいた。そしてだ。

岩清水はだ。彼等にこう言うのだった。ここでも煽るのだった。

「それだけでけれど」

「ああ、それで」

「何だ？」

「どつするんだ？」

「悪は許したらいけないからね」

こう言うのだった。

「そう、消毒しないとね」

「消毒？」

「消毒って？」

「そう、汚い悪を消毒するんだ」

これが彼の今の煽動だった。四人をその汚い悪と断定したうえでだ。そうして周りを煽って動かしているのである。そうしているのだ。

「それでいいかな」

「具体的にはどうするんだ？」

「それで」

「一体？」

「そう、これで」

言いながらだ。何処からか洗剤を出してきた彼だった。

「これをかけてね。モップで洗ってやればいいんだよ」

「この連中がトイレでやったみたいだ」

「そうやって消毒か」

「そうするのね」

「そう、そうするんだ」

岩清水はどす黒い笑みで話す。

「それでどうかな」

「ああ、それいいな」

「そうだよな」

「この連中には相応しいわよね」

「確かにね」

「悪は永遠に糾弾して許したら駄目なんだ」

岩清水はまたしても携帯を出してだ。そうして如月達のその時の映像を周りに見せる。四人の醜かったその過去をである。

第十六話 向かうものその六

「だからね。消毒しよう」

「ああ、消毒だ！」

「汚い奴等を消毒しろ！」

「絶対に許すな！」

「どす黒い奴等を消毒してやれ！」

四人を囲んで糾弾していく。四人は恐怖のあまり足がすくんで動けない。そして言葉もだ。出せなくなってしまうていたのだ。

そのモップが来た。岩清水からそれぞれの手に渡される。それだった。

「じゃあ今から」

「消毒だ！」

「徹底的にやってやるからな！」

「覚悟しろ！」

「そ、そんな……」

足がすくんで動けない如月はだ。周りからの言葉と目に見えるその状況にだ。蒼白になってしまっている。当然他の三人も同じだ。

「このままだと」

「まずいよ、これ」

「どうしよう」

「あ、足がどうしても動かないけれど」

四人共がたがた震えるだけである。どうしようもなくなっていた。しかし弥生がいてくれた。その彼女がだ。

四人に対してだ。こう言うのだった。

「安心して」

「ここでも？」

「そうなの？」

「そう、安心して」

こう四人に言うのである。

「そんなことさせないから」

「けれど」

「皆もう」

四人はだ。震える声で彼女に言葉を返す。

「こんな状況だと」

「それでもよ」

弥生の言葉は四人のそれとは正反対に毅然としていた。そうして言うのだった。

「言ったわよね、何度も」

「何度も？」

「そう、守るって」

こう告げたのである。

「四人共ね」

「弥生……」

「だから任せて」

ここでもまた言う弥生だった。

「ここはね」

「有り難う……」

今の四人にはその心が何よりも嬉しかった。しかしである。

岩清水はだ。その弥生に対してだ。こう言うのだった。

「関係ないじゃない」

「関係ないって？」

「そう、今村さんには関係ないじゃない」

弥生の名字を言うての言葉だった。

「この四人とはね。だからどいて欲しいんだけれど」

「関係あるわ」

弥生はその岩清水を見据えてぴしゃりとした口調で返した。

「私はね。関係あるわ」

「あるって？どうして？」

「友達だからよ」

岩清水を見据えたまま。また言う彼女だった。

「だからよ。関係あるわ」

「友達つて」

「如月も。他の娘達も」

弥生はさらに言った。

「友達よ。関係なくはないわ」

「変なこと言うね。その四人が何をしたのか知ってるよね」

「ええ、知ってるわ」

「じゃあどうしてそんなことを言うのかな」

岩清水は冷静そのものの表情で言う。だが、だった。弥生はその顔、とりわけ目の奥にだ。普通の者が持てないまでの残虐で邪なものがあるのを見た。それは最早人の域を超えているものだった。

第十六話 向かうものその七

それに気付いて内心恐怖を覚えもした。しかしだった。

弥生は引かずにだ。また岩清水に言うのだった。

「また言うけれど友達だからよ」

「友達つて。友達だったら」

「だったら？」

「過去にしてきたことを責めるべきじゃない」

これが岩清水の理屈だった。

「悪いことをしてきたらちゃんと。それが友達なんじゃないの？」

「ええ、そうね」

弥生は岩清水のその言葉は認めた。こくりと頷きさえする。

「それはその通りね」

「じゃあどうしてそれをしないのかな」

「もう充分だからよ」

「充分？」

「この娘達は充分過ぎる程報いを受けたわ」

こう岩清水に対して言う。

「もう。これ以上は」

「違うね、いじめは最低の行為じゃない」

いじめをだ。絶対の悪と定義したうえでの言葉だった。

「だったらそれをした人間はね」

「絶対に許さないっていうのね」

「許したらまた同じことをするよ」

己の正義をだ。弥生に対して言ってみせるのだった。その奥に弥生が見たものを見せながら。

「だから。徹底的に、何時までもやるんだよ」

「そうしろっていうのね」

「そうだよ。いじめは絶対に許したら駄目なんだよ」

「だから如月達を」

「やるよ。何時までも何処までも」

岩清水の言葉に誰も持ち得ないどす黒さが宿った。それは最早人
のものではなかった。

「そんな最低な人間には何をしてもいいじゃない。最低なんだから」
「確かにね」

弥生はだ。岩清水の言葉に一旦は頷いてみせた。そのうえでこう
言うのだった。

「いじめは最低の行為よ」

「そうだね」

「それをしたら責められるべきよ」

「わかってるじゃない。それじゃあ」

「けれど」

しかし、なのだった。弥生はここで言った。

「限度があるわ」

「限度？」

「この娘達はもう充分過ぎる程報いを受けたわ。心も身体も傷つけ
られて大切なものを壊されて」

「当然じゃない。最低の行いをした人間は何をされても文句は言え
ないんだよ」

「それじゃあ同じじゃない」

「同じ？」

「そう、同じよ」

岩清水の邪悪さに引き下がりがりそうにもなる。だが如月達を後ろに
してだ。弥生は一步も引かずに言うのだった。

「この娘達がしてきたのと同じじゃない。いえ、もっと酷いじゃな
い」

「酷いって。何処がかな」

「責めるとか裁くとかで。死んでも責め抜いてって」

「だからそれでも当然なんだよ」

岩清水の正義は変わらない。彼にとってそれは最早絶対のものだった。

その絶対の正義をだ。彼は言うのだった。

「悪いことをしたらね」

「だからそれには限度があるわ。この娘達はもう充分過ぎるだけ報いを受けたわ」

「限度なんてないんだよ。悪は絶対に許されないんだよ」

「違うわ、絶対なんてないわ」

弥生の声だ。さらに毅然としたものになった。

「そんなの。絶対じゃないわ」

「絶対につて」

「如月達はもう傷つけさせない」

弥生は言った。その毅然とした声で。

「これ以上は。友達だから」

「あくまでそう言うんだね」

「絶対に。ここはどかないわ」

如月達の前に立ってだ。言い切った。

「何があっても」

「言うね。まあ僕はいじめをしていない人には何もしなないけれど」

弥生には構わないというのだ。しかしだった。

「それでもね」

「まだ如月達に何かするのね」

「勿論だよ。絶対に許されない娘達だからね」

罪をだ。そのまま人に重ね合わせていた。

第十六話 向かうものその八

「それじゃあね」

「絶対にさせないから」

弥生は踏み止まろうとした。だが周りはその彼女の後ろにいる如月達に迫ろうとする。ここで、だった。

葉月が出て来てだ。言うのだった。

「あれ、室生？」

「何だよ」

「何かあるの？」

「皆、もういいんじゃないかな」

葉月はいぶかしむクラスメイト達にこう告げるのだった。

「もうね。いいんじゃないかな」

「いいって」

「まさか御前も」

「止めるの？」

「そうだよ。皆ずっと城崎さん達責めてきたじゃない」

「それが悪いのかよ」

「そうだ、何処が悪いんだよ」

クラスメイト達はその彼の言葉に反論する。

「こんな奴等に何やってもな」

「当然のことじゃない」

「俺もそう思ってたよ」

葉月は彼等の言葉をこう受け止めもした。

「確かにね。一時期はね」

「じゃあ何で今そんなこと言うんだよ」

「それじゃあおかしいじゃない」

「いや、おかしくないよ」

そしてだ。毅然として告げたのだった。

「気付いたんだよ」

「気付いたって何がだよ」

「何になのよ」

「間違ってる。もう城崎さん達は充分過ぎるだけ、いや酷過ぎる報いを受けたよ」

これまでの四人が受けてきたことをだ。この様に表現したのだつた。

「それに」

「それに？」

「それに。何なのよ」

「もう反省してるよ」

このことも話したのだった。

「じゃあもういいじゃない。それで」

「それは違うよ」

岩清水がまた出て来た。そのうえで葉月に話すのだった。

「反省していようがしていなかつても罪は罪だよ」

「裁かれるべきだっていうんだね」

「永遠にね。何度生まれ変わってもね」

そうだと。岩清水は己の主張を口にしてみせた。

「そうあるべきなんだよ」

「それも間違ってるよ」

「そう言うと思ったよ、報いを受けたからだね」

「そうだよ。だからもういいじゃないか」

葉月は岩清水に対しても同じだった。こう話したのだった。

「これでね」

「いや、何があろうと許したらいけない」

岩清水もだ。全く引かない。

「いじめは最低の行為だからね。それをやった人はね」

「それを口実に自分の正義を振りかざすことはどうなのかな」

「何だって？」

「だから。自分の正義を振りかざして相手をどこまでも責め苛むのはどうなのかな」

葉月は岩清水の目を見ながら話す。彼もまた弥生が見たものと同じものを彼の目の中に見たのだった。そのどす黒いものをだ。

「それはね。どうなのかな」

「何が言いたいのかな、今度は」

「言ったままだよ。それはいじめ以上に間違ってる」

指差しはしない。だが言葉でそうしていた。

「俺はそう思うよ」

「この世に正義があるから成り立ってるんだよ」

「正義がね」

「いじめは悪じゃないか。それを糾弾することこそ」

「正義だっていうんだね」

「そう、僕達は今正義を行ってるんだ」

岩清水は自分と同志達を正義と定義していた。そして同時に悪もだった。

「だからだよ。その何処がね」

「正義を行う人間が常に正しいとは限らないよ」

「今度はそう言うんだね」

「うん。間違ってる」

また言う葉月だった。

第十六話 向かうものその九

「君達のやることはね」

「おかしなことを言い続けるね。意味がわからないよ」

「いえ、わかるわ」

しかしだった。ここでまた一人だった。

神無だった。そのいじめの被害者だった彼女もだ。出て来たのである。

そしてだ。そのうえで如月達の前に来てだ。岩清水に対して言うのであった。

「もういいじゃない」

「えっ、椎葉!？」

「何で椎葉があつちに行くんだよ」

「どうしてなのよ」

皆この事態にだ。首を傾げさせながら言うことになった。

「あいつがいじめられていた本人なのに」

「どうしてなんだよ」

「何であつちに?」

「向こうについて」

「私、この娘達に謝ってもらったから」

その神無が岩清水と彼の周りにいる面々に告げた。

「もういいから。この娘達二度とあんなことしないから」

「絶対に言えるのかな」

「言えるから」

岩清水に対しても言葉を返す。

「本当に。言えるからね」

「そんなことがあるわけじゃない」

岩清水は嘲笑するような顔で神無のその言葉を否定した。

「有り得ないね」

「いえ、あるわ。この娘達は私よりずっと酷い目に遭ってわかったから」

だからだというのだった。

「絶対に。二度としないわ」

「それでどうだったというのかな」

岩清水はその嘲笑したような顔のまま神無に対して言ってみせた。

「僕達のこの糾弾にどうするのかな」

「そんなことさせない」

そうだというのである。

「何があっても。させない」

「そうよ、もういいじゃない」

「これで終わりにしよう」

弥生と葉月もここでまた話した。

「そうしよう、もう充分よ」

「これ以上は。許さないから」

「私、皆がこれ以上するのなら」

最後にだ。神無が皆に告げた。

「絶対に許さない。何があっても」

「なあ」

「そうだよな」

「こうなったら」

周りはだ。そんな神無を見てだ。こころ話をするのだった。

第十六話 向かうものその十

「椎葉がああ言ってるし」

「実際にいじめられていた相手が言っただったら」

「いいんじゃないのか？」

「そうよね」

「もう」

こうしてだった。何人かが岩清水の周りから離れたのだった。そしてさらに何人かがだった。

何と如月達のところに来た。そのうえで言うのだった。

「やっぱり。これ以上は」

「もう止めよう」

「いいじゃない、もうね」

「やることないわよ」

「何でかな」

岩清水はそんな彼等に対しても言うのだった。顔はにこやかだがやはりそこには何かがあった。

その顔でだ。今は神無を見ていた。そうしてである。

「あんなことをされてそれでも言えるって」

「言えるわ」

はつきりと返す神無だった。

「見ていたから」

「やたれたんじゃないかな、見ていたんじゃないわ」

「いえ、見ていたわ」

またこう言う神無だった。

「この娘達がやられていたことを」

「その前にやられていたじゃない」

「私がこの娘達にやられていたことよりもずっと酷いことをやられていたのを見ていたわ」

今度はこう言う神無だった。

「ずっと」

「そんなの当然じゃない」

「いじめをしていたから？」

「そうだよ。本当にそう言うのがわからないんだけれどね」

「わからなくていいわ」

それならばと。神無はまた話した。

「それでも私は」

「そうだよ。もう」

「いいじゃない」

「ねえ」

「これで」

彼女の方に来た面々はだ。神無のその言葉に頷く。

そしてだ。そのうえでまた話すのだった。

「責めるのは止めよう」

「幾ら何でもこれ以上はね」

「しなくていいじゃない」

「止めようよ」

だが岩清水の周りに残っている面々もだ。言うのだった。

「何でだよ」

「こんな奴等何で庇うんだよ」

「そうよ、徹底的にやればいいじゃない」

「とことんまでね」

「そうだよね」

岩清水は彼等の言葉を受けたうえでだ。それをバツクにしてまだ残る。

そしてである。また言うのであった。

「絶対に許したらね。いけないから」

「貴方がそう言っても私はもういいわ」

神無は岩清水と対峙していた。もう彼女は引かなかった。

そしてだった。弥生はだ。何時の間にか涙を流していた、他の三人と同じくそうなっていた如月の横に来て彼女に告げた。

「あのね」

「あの？」

「そう、私だけじゃなくなったから」

「皆が」

「戻ってきてくれたからね」

こう彼女に優しく囁くのだった。

「これまでみたいなのはなくなるから」

「そうなの」

「だから行こう」

「行くの」

「そう、行こう」

また如月に囁く。

「いいわね、それで」

「うん」

「長月達もね」

如月だけでなくだ。三人にも声をかけたのだった。

「これからだから」

こう言っただった。彼女達を導くのだった。四人は今ようやく自分達が壊してしまったものを元に戻しはじめていた。これが始まりだった。

第十六話 完

2010・10・25

エピソードその一

エピソード

二人の大人の女性がだ。マジックの中にいた。

そのこの二人用の席に向かい合って座ってだ。コーヒーを飲みながら話をしていた。

「そう、その娘は上手くいったのね」

「ええ」

見ればだった。如月だった。大人びた雰囲気になっている彼女がだ。同じく美しく成長した弥生に対してだ。静かに答えていた。二人共あの時の髪型のままだ。顔立ちも残っている。しかしさらに優しい顔になってだ。服もそれぞれスーツになっている。どちらも白っぽい穏やかな色のスーツだった。

「何とか。立ち直れたわ」

「よかったわね。あんなに落ち込んでいたのに」

「不登校になってね」

「それでも。学校に戻れたのね」

「ええ。かなり傷ついたけれど」

それでもだというのだった。

「また登校しだしたわ」

「よかったわ。それに如月も」

「私も？」

「頑張ってるのね」

その成長した如月に対しての言葉だった。

「そうなのね」

「頑張ってるのかしら」

「頑張ってるわ。とてもね」

弥生は優しい声で如月に話す。

「カウンセラーとしてね」

「そうなの。だったらいいけれど」

「何か私も」

そしてだ。ここで弥生は自分自身のことを言うのだった。

「そういうの見てたらね」

「見てたら？」

「頑張らないとね。そう思えるわ」

「そうなの」

そして如月もだ。その弥生に対して言う。

「小学校の先生って辛いつて聞いたけれど」

「やりがいのある仕事よ」

それだとだ。彼女は笑顔で話すのだった。

「とてもね」

「そう。だったらいいけれど」

「ええ。それでね」

また弥生から話してきた。

「葉月君はね」

「彼はどうしてるの？」

「会社で頑張ってるわ」

そうだとするのである。

「彼もね」

「そうなの」

「ええ。元気よ」

「そう、よかったわ」

「長月達はどうしてるの？」

弥生は今度は彼女達のことを如月に尋ねた。

「あの娘達は」

「あれ、この前一緒に飲んだじゃない」

如月は弥生の今の言葉にはきよとんとなって返した。

「私も一緒だったじゃない」

「それはそうだけれど」

「知ってるでしょ。元気にやってるわよ」

「長月は看護師になったのよね」

「そうよ」

彼女はそれだった。

「それで文月は教育学部に残って」

「そこで研究員になってるわ」

「霜月は幼稚園の先生になって」

「皆元気だから」

そうだというのであった。

「三人共ね」

「そう、皆元気なのね」

「だからそれ知ってるんじゃない」

「ううん、それでもね」

「それでも？」

「確かめたかったっていうか」

何故聞いたのかだ。その理由を自分から話す弥生だった。

「聞いたかったのよ」

「それでなの」

「そうなの。やっぱりね」

ここでこうも言う弥生だった。

「三人共。幼稚園の頃からの付き合いだし」

「そうよね。長いわよね」

「ええ、本当にね」

こう話すのだった。

エピソードその二

「とてもね」

「だからだったの。そういえば」

「ここで如月は言った。」

「あの娘達も今ね」

「今？」

「彼氏がいるらしいよ」

「三人共なの」

「そう、三人共ね」

「こう弥生に話す如月だった。」

「文月は結婚も考えているそうよ」

「そうなの」

「私はまだだけれどね」

「如月は自分のことには苦笑いだった。」

「それはね」

「そのうち見つかるわよ」

「弥生は笑顔で如月の今の苦笑いを打ち消した。」

「だから焦らないでね」

「焦らないでいいのね」

「こういうことは縁だからね」

「だからだというのである。」

「だから。気にしないでね」

「そうなの」

「そうよ。気にしないでいいのよ」

「わかったわ。それじゃあね」

「私もまだだし」

「今度は弥生が苦笑いになった。そうしてそのうえでの言葉だった。彼氏とか結婚とかは」

「あれっ、葉月君は」

「彼氏っていつのかしら」

「違うの？ずっとそうだって思ってたけれど」

「まあそう言うのならそうかしら」

今度はだ。弥生が如月の言葉に考える顔になった。言われて気付いたことだった。

「葉月君がね」

「付き合ったら？この際ね」

微笑んでまた言う如月だった。

「いい人だしね」

「そうね。ずっと一緒にいられる相手よね」

「だからね。考えてみればいいわ」

「ええ、わかったわ」

如月の言葉に対して頷く。そしてだった。

弥生はそのうえでだ。如月に対して言うのだった。

「それでね」

「それで？」

「この前先輩に飲みに誘われたのよ」

「臯月先輩ね」

「そうなの。ほら、私と先輩って同じ学校に勤めてるでしょ」

「そうよね」

「それでなの。お誘い受けたの」

「そうだと話すのだった。」

「それで一緒に飲んだけれど」

「先輩お酒強いでしょ」

「凄いわね。どんどん飲んでいってね」

「場所は何処？」

「白鯨よ」

その店だというのだ。

「そこで飲み放題やってるから行ってね」

「それでなの」

「いや、本当に凄かったわよ」

弥生の言葉は少し呆れた感じになっていた。

「あの飲みっぷりはね」

「ううん、そこまでなの」

「体育教師だけあってね。もう飲んで飲んで」

「楽しかったみたいね」

「実際楽しかったわ」

笑顔で話す弥生だった。

「今度如月も一緒にどうかしら」

「そうね。じゃあ今度のお休みの時に」

「そうしたわいいわ。白鯨って飲み放題があつてお料理も美味しいね」

「あそこはいいわよね」

「そうでしょ。だからね」

「わかったわ。それじゃあね」

「それと」

また弥生が言ってきた。

エピソードその三

「病院だけれど」

「病院？八条病院ね」

「椎葉さんその勤務になったのよ」

「そうなの」

ここで、だった。如月の顔は喜んだような、それでいて何処か辛いような。そうした顔になってそのうえで弥生に言葉を返すのだ。た。

「あそこなのね」

「師走さんや水無さんと一緒に勤務してるのよ」

「あの人達と一緒になのね」

「忙しいけれど楽しくやってるそうよ」

「そうだとだ。弥生は話すのだった。」

「とてもね」

「そう。よかったわ」

「如月、あの娘とは」

「.....」

如月はここでは俯いてしまった。そのうえで沈黙してしまった。

そしてだ。一呼吸置いてから言うのだった。

「何とかね」

「何とか？」

「許してもらえても」

「積極的にお話とかは」

「できないままなのね」

「難しいわね」

また言う彼女だった。

「それはどうしても」

「そうね。ただ」

「ただ？」
「もう終わったことだから」
弥生は優しい声で如月に話した。
「忘れられなくてもね。そんなに後ろめたく思わなくてもいいから」
「そうなの」
「そうよ。お兄さんはまだ許してくれないでしょうけれど」
「あの人は今どうしてるの？」
「普通に会社員をされてるわ」
「そっだというのである。」
「別におかしなところはないわよ」
「そうなの。特になの」
「そうよ。それでね」
「ええ」
「岩清水君は相変わらずらしいわ」
弥生は今度は苦い顔になった。その眉が歪んでいた。
「彼はね」
「そうなの。相変わらずなの」
「話は聞いてるわ」
「こう如月に話すのだった。」
「それはね」
「そうなのね」
「同じよ。というか」
「というか？」
「そうして。もう何人もね」
俯いた顔で如月に話していく。
「死んでも追い詰めているわ」
「そうなの。本当に同じなのね」
「如月達はあの時本当によかったわ」
「弥生は思い出す顔になった。そのうえで言葉だった。」
「彼がすぐに転校して」

「そうよね。本当に」

「若しあのまま続いていたら」

「ええ」

如月もだ。辛い顔で弥生の言葉に頷く。

「危なかつたわね」

「私も。守りきれたか」

「葉月君もいてくれて。彼が言ってくれてからすぐにね」

「転校したからね」

「そうね。お家の事情で」

それだだというのだった。彼が如月達の前からいなくなったのはだ。

「いなくなったからね」

「彼は何をどうしても如月達を死んでも追い詰めるつもりだったから」

「そうね。私達を」

「あのまま私も葉月君も何処までもやるつもりだったけれど」

決意をしていたからこそだ。それで如月を守ろうとしたのがあの時だったのだ。その決意を固めてそのうえでのことであつたのだ。

エピソードその四

「あの時はね」

「そうよね。あの時は」

「椎葉さんも来てくれたから」

「あの時は信じられなかったわ」

如月はまた俯いていた。そのうえでの言葉だった。

「まさか。あの娘までなんて」

「そうね。私もあの時はね」

「信じられなかったのね」

「ええ」

その通りだというのである。

「とても」

「そうよね。けれどあれで彼が怯んで」

「ええ」

「すぐにそのお家の事情が重なって」

それもだというのだ。そうした意味で如月達は非常に幸運だったのである。彼女達はその幸運により助けられた一面もあるのだ。

「それでだったから」

「本当に運がよかったのね」

「そうなるわね」

「そうね。ところでね」

ここで、だった。如月は話を変えてきた。

弥生の顔を見てだ。彼女に問うのだった。

「その。椎葉さんは」

「彼女ね」

「元気にしてるの？」

弥生にこのことを問うのだった。

「それで。どうなの？」

「ええ、元気よ」

そうだと。弥生はすぐに答えた。

「楽しくやっってるから」

「そう。だったらね」

「安心して。お医者さんとして頑張ってるから」

「よかった」

「お兄さんと一緒にね」

「そうなのね」

彼女のことをあらためて知ってだ。如月はほっとした顔になった。

そのうえで自分の前のコーヒーを見詰めながらだ。言うのだった。

「それなら」

「如月達のしたことはね」

弥生はその如月を見ながら彼女に話す。

「絶対に許されないことだったわ」

「ええ」

如月もその言葉にくくりと頷く。

「そうよね。いじめは」

「けれどね」

「救われるものなのね」

「そう。許されなくても」

それでもだと。弥生は話すのだった。

「救われるものだから」

「ええ。だから私も」

「お仕事はそれにしたのよね」

「私、忘れられない」

「忘れないのではなかった。忘れられないとだ。如月は確かに言った。」

「何があっても。だから」

「そうね。だからね」

「いじめられている子もいじめている子も」

「お話を聞いたりしてね」

「それで助けない」

「こう言うのだった。」

「いじめられることは凄く辛くて」

「それもわかっていてね」

「いじめるってことがどんなことか」

このことを言うのだ。無意識に唇を噛み締めてしまった。そのう
えでの言葉だった。今も自分のその忘れられないことを思い出して
いた。

「わかったから」

「そういうことね」

「そうよ。それでね」

「それでなのね」

「私、この仕事で頑張っていくから」

「こう弥生に話すのだった。」

「誰にも私みたいになって欲しくないから」

「頑張ってるね。じゃあ」

「ええ」

「これから何処に行こうかしら」

「穏やかな笑みでだ。如月に言うのだった。」

エピソードその五

「何か予定あるの？」

「ええと、今はね」

「ええ。あるのかしら」

「ないのよ」

こう話す如月だった。少し苦笑いになってだ。

「彼氏とデートとかそういうことはね」

「そう。だったらね」

「何処に行くの？これから」

「カラオケでもどうかしら」

「こう提案してきたのだった。」

「カラオケね。どうかしら」

「カラオケなの」

「そう、スタープラチナね」

今度は店の名前を出してきたのだった。

「そこね。それでどうかしら」

「そうね。あそこならね」

「お酒も飲み放題だし食べ物も美味しいし」

「カラオケの種類も色々揃ってるしね」

あらゆる意味でいい店だというのである。

「いいわね。あそこならね」

「そうですよ。だからね」

にこりとした笑みになった如月にだ。彼女と同じ笑みで告げる弥生だった。

「行きましよう、今からね」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「他の皆も呼ばない？」

如月はこう弥生に提案した。

「他の皆もね」

「長月達もなのね」

「メールで連絡して。都合ついてたらね」

「そうね。それがいいわね」

弥生もそのにこりとした笑顔で如月の言葉に頷いた。

「皆でね」

「そうよね、皆でね」

「それでだけれど」

如月はこんなことも言った。

「あのね」

「あのつて？」

「帰りにケーキ買おうと思ってるの」

「ケーキをなの」

「そう、それね」

こう弥生に話すのだった。

「それでそれをお母さんになって思ってるけれど」

「いいことね、それは」

弥生は如月のその考えをよしとして返した。

「おばさん達も喜んでくれるわ」

「そうよね、やっぱり」

「そういえばおばさん達も元気？」

「ええ、元気よ」

その通りだと答える如月だった。純真な笑顔でだ。

「とてもね」

「睦月も今は」

「元気に学校行ってるわ」

「確か今大阪の学校よね」

「そうよ。家から通ってるのよ」

「何か最近如月の家に行ってないけれど」

ふとだ。このことに気付いたのだった。話している最中にだ。

「また時間があればね」

「何時でも来て。お父さんも元気だし」

「皆仲良くやってるのね」

「ええ」

穏やかだが。少しだけ寂しさが入った笑みだった。

「皆ね。元気にやってるわ」

「そっちも完全に元に戻ってよかったわね」

「うん。弥生がいてくれたから」

「私は何もしてないわ」

彼女はだというのだ。何もだというのである。

「如月達がね。頑張ってくれたから」

「それでなのね」

「そうよ。それでケーキはね」

「ええ。ケーキは」

「何がいいかしらね」

笑顔でだ。話すのだった。

「それで」

「そうね。チョコレートね」

「チョコレート？」

「そう、チョコレートケーキはどう？」

こう如月に提案した。

「それね。どう？」

「チョコレートケーキね」

「おばさんも睦月君も好きよね」

「ええ。お父さんも」

「だからね。どうかしら」

また如月に話す。

「それで」

「わかったわ。それじゃあね」

「それにするのね」

「ええ。デコレーションで買ってね」

それにすると答えてだ。そうしてだ。

二人は席を立った。そして笑顔で店を出る。

外は晴れ渡っていた。雲一つない。その青空の下で長月達と待ち合わせる。そこに来た彼女達も笑顔だった。今は悩みも苦しみもなかった。忘れたわけではない。だがそれはもう過去のものになっていたのだ。

エピソード 完

許されない罪、救われる心 完

2010・10・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322n/>

許されない罪、救われる心

2010年12月29日14時25分発行